

深谷市

上敷免遺跡

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

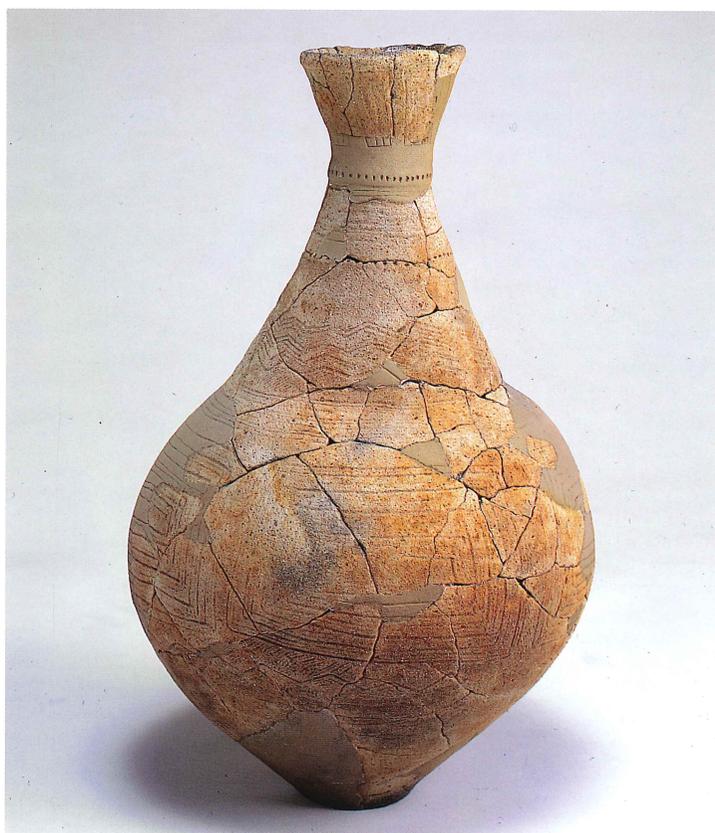
— V —

(第1分冊)

1993



Y-3号住居跡出土壺形土器



Y-4号住居跡出土壺形土器

序

近年、都心への通勤圏がますます広がり、近県の人口は増加の一途を辿っています。埼玉県でも高い人口増加率を示し、これに対応して交通網の整備が急務となっております。

一般国道17号深谷バイパスは埼玉県北部の政治・経済・文化を支える交通網整備の一環として計画され、熊谷市玉井を起点とし、深谷市を経て大里郡岡部町四十坂にかけて建設されたものであります。

このバイパス建設に関連して、深谷市内では10箇所の遺跡が発掘調査され、多大な成果をあげています。本書は、これらのうち上敷免遺跡の発掘調査報告書であります。古墳時代を中心とする280軒余りの住居跡が発掘され、また縄文時代終末の土器もまとめて出土しています。これらは当時の生活を考える上で貴重な資料を提供してくれました。豊富な出土遺物のなかには子持勾玉や土製模造鏡等の重要な資料も発見されました。

本書が埋蔵文化財の保護、あるいは学術研究の基礎資料として、また教育の場において広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査について諸調整をしていただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書の刊行に至るまで多大な御支援と御協力を賜りました建設省大宮国道工事事務所・同熊谷出張所、深谷市教育委員会ならびに地元関係各位、発掘・整理作業に携われた方々に対し、厚く感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例 言

1 本書は埼玉県深谷市大字上敷免字入枝742番地他に所在する上敷免遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、昭和62年5月18日付け委保第5の611号である。遺跡番号は60-6、遺跡名の略号はJSKMNである。発掘調査時、深谷バイパスA区としていたが、上敷免遺跡と改めた。上敷免遺跡に関する文献は下記のもので発表されているが、内容等に関しては本書が優先するものである。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団『年報6・7・8』1986・1987・1988

2 発掘調査は一般国道17号深谷バイパス建設に先立つ事前調査であり、埼玉県教育局指導部文化財保護課（当時）の調整を経て、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成作業も引き続き財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は昭和60年4月1日～昭和62年12月9日まで、整理・報告書作成作業は平成3年4月1日～平成5年3月31日まで実施した。

一般国道17号深谷バイパス建設に関わる既刊発掘調査報告書は、4冊が刊行されている。既刊の4冊は以下のとおりである。

『新ヶ谷戸』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第9集	1982
『新田裏・明戸東・原遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第85集	1989
『樋詰・砂田前』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第102集	1991
『新屋敷東・本郷前東』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第111集	1992

4 発掘調査は磯崎一・立石盛詞・金子直行・西口正純・栗島義明・岩瀬譲・瀧瀬芳之・赤熊浩一・田中広明・奥野麦生・山本靖が行なった。整理・報告書作成は瀧瀬・山本が実施し、岡本千里・東海林早苗の補助を得、金子・磯崎・剣持和夫・西井幸雄・村田章人・三浦佳代・植木智子の協力を得た。発掘調査および整理・報告書作成作業の組織は第I章に示した。

5 第1図周辺の遺跡は国土地理院1:50,000地形図「深谷」・「高崎」から転載した。遺跡の基準点測量ならびに航空写真は中央航業株式会社、土器の胎土分析は株式会社第四紀研究所に委託した。分析結果については報告に基づいて山本が編集し、第VIII章に掲載した。

6 本書に使用した発掘調査時の写真は立石・岩瀬・赤熊・奥野・瀧瀬・磯崎・田中・栗島・山本・金子・西口が、遺物写真は瀧瀬・山本が撮影した。巻頭写真は折原基久氏に委託した。

7 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IIIを金子・磯崎の協力のもと瀧瀬、IV-1・2の一部を村田が、ほかは瀧瀬、VI-3を瀧瀬・山本、IV-3、V-1、VI-4～9を瀧瀬、I-2～4、II、VI-1・2・10、VIIを山本、IV-4、V-3を西井、V-2を三浦が担当した。

8 本書の編集は資料部資料整理第2課の瀧瀬・山本が行なった。

9 本書にかかる資料は、平成5年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

10 遠賀川式土器の胎土分析に関しては、奈良教育大学三辻利一氏からご教示を得た。

墨書土器の釈読に関しては埼玉県立博物館宮瀧交二氏のご指導を得た。

11 本書を作成するにあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

(敬省略)

大塚達朗 柿沼幹夫 斎藤 弘 酒井清治 澤出晃越 設楽博己 鈴木加津子 鈴木徳雄
鈴木正博 芹澤清八 田代 隆 徳江秀夫 中沢道彦 中島洋一 中村倉司 新倉明彦
橋口達也 宮小路賀宏 横田義章 渡辺 一

凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図、遺物観察表の指示は以下のとおりである。

1 遺構番号は、現地調査が発掘区域を便宜的に東・西地区に分割して行なわれ、それぞれ番号を振っていたため、整理・報告書刊行作業時に改めて発掘区域の東側から振り直した。第Ⅰ章末に新旧対照表を付した。

2 遺構の表記記号は次のとおりである。

SJ：住居跡	SB：掘立柱建物跡	SE：井戸跡	SK：土 坑
SD：溝 跡	ST：古墳跡	SR：周溝墓	SC：集 石
P：ピット			

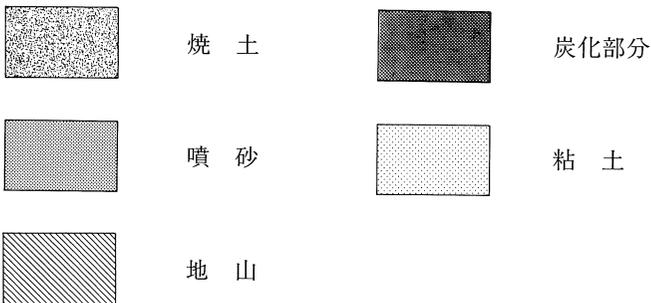
3 X、Yの座標表示は国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示す。

4 グリッドの名称は南東隅の杭名称を用い、東西（イロハ…）－南北（1・2・3…）の順で表示している。

5 実測図の縮尺は原則として次のとおりであり、それ以外は個別に示している。

遺跡	遺構分布	1／800	全測	1／1200
遺構	住居跡、井戸跡、土坑	1／60	掘立柱建物跡、溝跡	1／80・1／60
	周溝墓	1／80		
遺物	土器	1／4	断面・拓影図	1／3・1／2
	石製品	1／2・1／1	石器類	1／3
			土製品	1／2
			鉄製品	1／3

6 遺構挿図におけるスクリーントーンの部分は次のことを示す。



7 復元実測の場合には、口縁を直線で結ばず、中心線の両側を若干開けた。

8 遺物挿図における網部は、20%が焼けムラ、30%が赤彩、50%が黒色の範囲を示す。

9 土器の断面は、須恵器が塗りつぶし、施釉陶器が網部40%、他は白抜きで表現している。

10 土器観察表の凡例は次のとおりである。

• 大きさは cm を単位とし、()は推定である。

- 胎土は肉眼で観察した範囲で確認された混入鉱物を記載した。Bは黒色、Rは赤色、Wは白色、W'は白色透明なもので、「片」は片岩、「針」は白色針状物質である。また、量の「多」・「少」は相対的なものである。
- 色調は『新版標準土色帖 12版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1992）による。
- 残存率は5%単位とする。
- 備考の注Noは発掘調査時にとりあげた番号で、遺物に直接注記したものである。

目次

序
例言
凡例

(第1分冊)

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査および整理・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査および整理・報告書作成作業の経過	3
4	発掘調査の方法	4
II	遺跡の立地と環境	6
III	縄文・弥生時代の遺構と遺物	13
1	縄文時代の遺構と遺物	16
2	弥生時代の遺構と遺物	16
IV	谷及びグリッドの出土遺物	38
1	谷	38
2	グリッド	85
3	土製品・玉類	103
4	石器	105
V	縄文・弥生時代のまとめ	115
1	土器について	115
2	底部圧痕について	147
3	石器について	158

(第2分冊)

VI	古墳時代以降の遺構と遺物	175
1	第1発掘区	175
2	第2発掘区	405

(第3分冊)

3	第3発掘区	639
4	第4発掘区	813

(第4分冊)

5	第5発掘区	897
6	第6発掘区	1097
7	石製品	1153
8	土製品	1167
9	鉄製品	1175
10	表採遺物	1181
VII	まとめ	1182
VIII	附篇	1207

挿 図 目 次

【第1分冊】	
第1図 周辺の遺跡……………	8・9
第2図 遺跡周辺の地形……………	10・11
第3図 縄文・弥生時代遺構位置図……………	15
第4図 土坑と出土遺物……………	17
第5図 Y-1号住居跡……………	18
第6図 Y-1号住居跡出土遺物……………	19
第7図 Y-2号住居跡……………	20
第8図 Y-2号住居跡出土遺物……………	21
第9図 Y-3号住居跡……………	22
第10図 Y-3号住居跡遺物出土状況……………	23
第11図 Y-3号住居跡出土遺物(1)……………	24
第12図 Y-3号住居跡出土遺物(2)……………	25
第13図 Y-3号住居跡出土遺物(3)……………	26
第14図 Y-4号住居跡……………	27
第15図 Y-4号住居跡遺物出土状況……………	28
第16図 Y-4号住居跡出土遺物(1)……………	29
第17図 Y-4号住居跡出土遺物(2)……………	30
第18図 Y-4号住居跡出土遺物(3)……………	31
第19図 第8号方形周溝墓内 弥生土器出土状況……………	33
第20図 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(1)……………	34
第21図 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(2)……………	35
第22図 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(3)……………	36
第23図 土坑と出土遺物……………	37
第24図 第5発掘区谷……………	38
第25図 谷発掘区……………	40
第26図 谷包含層土層断面図……………	41
第27図 谷出土遺物(1)……………	43
第28図 谷出土遺物(2)……………	44
第29図 谷出土遺物(3)……………	45
第30図 谷出土遺物(4)……………	46
第31図 谷出土遺物(5)……………	47
第32図 谷出土遺物(6)……………	48
第33図 谷出土遺物(7)……………	49
第34図 谷出土遺物(8)……………	50
第35図 谷出土遺物(9)……………	51
第36図 谷出土遺物(10)……………	52
第37図 谷出土遺物(11)……………	53
第38図 谷出土遺物(12)……………	54
第39図 谷出土遺物(13)……………	55
第40図 谷出土遺物(14)……………	56
第41図 谷出土遺物(15)……………	57
第42図 谷出土遺物(16)……………	58
第43図 谷出土遺物(17)……………	59
第44図 谷出土遺物(18)……………	60
第45図 谷出土遺物(19)……………	61
第46図 谷出土遺物(20)……………	62
第47図 谷出土遺物(21)……………	63
第48図 谷出土遺物(22)……………	64
第49図 谷出土遺物(23)……………	65
第50図 谷出土遺物(24)……………	66
第51図 谷出土遺物(25)……………	67
第52図 谷出土遺物(26)……………	68
第53図 谷出土遺物(27)……………	69
第54図 谷出土遺物(28)……………	70
第55図 谷出土遺物(29)……………	71
第56図 谷出土遺物(30)……………	72
第57図 谷出土遺物(31)……………	73
第58図 谷出土遺物(32)……………	74
第59図 谷出土遺物(33)……………	75
第60図 谷出土遺物(34)……………	76
第61図 谷出土遺物(35)……………	77
第62図 谷出土遺物(36)……………	78
第63図 谷出土遺物(37)……………	79
第64図 谷出土遺物(38)……………	80
第65図 谷出土遺物(39)……………	81
第66図 谷出土遺物(40)……………	82
第67図 グリッド出土遺物(1)……………	87
第68図 グリッド出土遺物(2)……………	88
第69図 グリッド出土遺物(3)……………	89
第70図 グリッド出土遺物(4)……………	90
第71図 グリッド出土遺物(5)……………	91
第72図 グリッド出土遺物(6)……………	92
第73図 グリッド出土遺物(7)……………	93
第74図 グリッド出土遺物(8)……………	94

第152図	第7号住居跡(1)……………	197	第192図	第15号住居跡出土遺物(3)……………	245
第153図	第7号住居跡出土遺物(1)……………	198	第193図	第16号住居跡遺物出土状況……………	247
第154図	第7号住居跡(2)・出土遺物(2)……………	199	第194図	第16号住居跡……………	248
第155図	第8号住居跡(1)……………	201	第195図	第16号住居跡出土遺物(1)……………	249
第156図	第8号住居跡(2)……………	202	第196図	第16号住居跡出土遺物(2)……………	250
第157図	第8号住居跡出土遺物(1)……………	203	第197図	第17号住居跡……………	252
第158図	第8号住居跡出土遺物(2)……………	204	第198図	第17号住居跡出土遺物……………	253
第159図	第8号住居跡出土遺物(3)……………	205	第199図	第18号住居跡……………	255
第160図	第9・10号住居跡(1)……………	208	第200図	第18号住居跡出土遺物(1)……………	256
第161図	第9・10号住居跡(2)……………	209	第201図	第18号住居跡出土遺物(2)……………	257
第162図	第9号住居跡出土遺物(1)……………	210	第202図	第19号住居跡 カマド周辺遺物出土状況……………	257
第163図	第9号住居跡出土遺物(2)……………	211	第203図	第19号住居跡(1)……………	259・260
第164図	第9号住居跡出土遺物(3)……………	212	第204図	第19号住居跡(2)……………	261
第165図	第9号住居跡出土遺物(4)……………	213	第205図	第19号住居跡出土遺物(1)……………	262
第166図	第10号住居跡出土遺物……………	213	第206図	第19号住居跡出土遺物(2)……………	263
第167図	第11号住居跡……………	216	第207図	第19号住居跡出土遺物(3)……………	264
第168図	第11号住居跡出土遺物……………	217	第208図	第19号住居跡出土遺物(4)……………	265
第169図	第12・13号住居跡(1)……………	218	第209図	第19号住居跡出土遺物(5)……………	266
第170図	第12・13号住居跡(2)……………	219	第210図	第19号住居跡出土遺物(6)……………	267
第171図	第12・13号住居跡(3)……………	220	第211図	第19号住居跡出土遺物(7)……………	268
第172図	第12号住居跡出土遺物(1)……………	221	第212図	第19号住居跡出土遺物(8)……………	269
第173図	第12号住居跡出土遺物(2)……………	222	第213図	第20号住居跡(1)……………	275
第174図	第12号住居跡出土遺物(3)……………	223	第214図	第20号住居跡(2)……………	276
第175図	第12号住居跡出土遺物(4)……………	224	第215図	第20号住居跡出土遺物……………	277
第176図	第12号住居跡出土遺物(5)……………	225	第216図	第21号住居跡(1)……………	279
第177図	第12号住居跡出土遺物(6)……………	226	第217図	第21号住居跡(2)……………	280
第178図	第12号住居跡出土遺物(7)……………	227	第218図	第21号住居跡出土遺物……………	281
第179図	第12号住居跡出土遺物(8)……………	228	第219図	第22号住居跡(1)……………	282
第180図	第12号住居跡出土遺物(9)……………	229	第220図	第22号住居跡(2)……………	283
第181図	第12号住居跡出土遺物(10)……………	230	第221図	第22号住居跡出土遺物(1)……………	284
第182図	第12号住居跡出土遺物(11)……………	231	第222図	第22号住居跡出土遺物(2)……………	285
第183図	第9～13号住居跡近景……………	235	第223図	第22号住居跡出土遺物(3)……………	286
第184図	第14号住居跡……………	236	第224図	第22号住居跡出土遺物(4)……………	287
第185図	第14号住居跡出土遺物(1)……………	237	第225図	第22号住居跡出土遺物(5)……………	288
第186図	第14号住居跡出土遺物(2)……………	238	第226図	第23・24号住居跡……………	292・293
第187図	第15号住居跡(1)……………	240	第227図	第23号住居跡出土遺物(1)……………	294
第188図	第15号住居跡(2)……………	241	第228図	第23号住居跡出土遺物(2)……………	295
第189図	第15号住居跡(3)……………	242	第229図	第23号住居跡出土遺物(3)・ 第24号住居跡出土遺物……………	296
第190図	第15号住居跡出土遺物(1)……………	243			
第191図	第15号住居跡出土遺物(2)……………	244			

第230図	第25号住居跡(1)……………	298	第270図	第39・40号住居跡……………	347
第231図	第25号住居跡(2)・出土遺物……………	299	第271図	第39号住居跡出土遺物(1)……………	348
第232図	第26号住居跡……………	301	第272図	第39号住居跡出土遺物(2)……………	349
第233図	第26号住居跡出土遺物……………	302	第273図	第42号住居跡遺物出土状況……………	349
第234図	第27号住居跡……………	303	第274図	第40号住居跡出土遺物(1)……………	350
第235図	第27号住居跡出土遺物……………	304	第275図	第40号住居跡出土遺物(2)……………	351
第236図	第29号住居跡(1)……………	306	第276図	第40号住居跡出土遺物(3)……………	352
第237図	第29号住居跡(2)……………	307	第277図	第40号住居跡出土遺物(4)……………	353
第238図	第29号住居跡出土遺物(1)……………	308	第278図	第41・42号住居跡(1)……………	357
第239図	第29号住居跡出土遺物(2)……………	309	第279図	第41号住居跡(2)……………	358
第240図	第29号住居跡出土遺物(3)……………	310	第280図	第41号住居跡出土遺物(1)……………	359
第241図	第30号住居跡……………	311	第281図	第41号住居跡出土遺物(2)……………	360
第242図	第30号住居跡出土遺物……………	312	第282図	第41号住居跡出土遺物(3)……………	361
第243図	第28号住居跡・出土遺物……………	313	第283図	第42号住居跡出土遺物(1)……………	362
第244図	第31号住居跡遺物出土状況……………	314	第284図	第42号住居跡出土遺物(2)……………	363
第245図	第31号住居跡小鍛冶跡……………	314	第285図	第42号住居跡出土遺物(3)……………	364
第246図	第31号住居跡(1)……………	315・316	第286図	第41号住居跡出土遺物(4)……………	364
第247図	第31号住居跡(2)……………	317	第287図	第43・44・45・46号住居跡……………	368
第248図	第31号住居跡出土遺物(1)……………	318	第288図	第43号住居跡……………	369
第249図	第31号住居跡出土遺物(2)……………	319	第289図	第44号住居跡……………	370
第250図	第31号住居跡出土遺物(3)……………	320	第290図	第45号住居跡……………	371
第251図	第31号住居跡出土遺物(4)……………	321	第291図	第44号住居跡出土遺物……………	371
第252図	第32号住居跡(1)……………	325	第292図	第46号住居跡……………	372
第253図	第32号住居跡(2)……………	326	第293図	第43号住居跡出土遺物……………	373
第254図	第32号住居跡出土遺物……………	327	第294図	第45号住居跡出土遺物……………	374
第255図	第34号住居跡……………	329・330	第295図	第46号住居跡出土遺物(1)……………	375
第256図	第34号住居跡出土遺物(1)……………	331	第296図	第46号住居跡出土遺物(2)……………	376
第257図	第34号住居跡出土遺物(2)……………	332	第297図	第46号住居跡出土遺物(3)……………	377
第258図	第34号住居跡出土遺物(3)……………	333	第298図	第43・44・45・46号住居跡全景……………	379
第259図	第34号住居跡遺物出土状況……………	335	第299図	第47号住居跡(1)……………	380
第260図	第33号住居跡・出土遺物……………	336	第300図	第47号住居跡(2)……………	381
第261図	第35号住居跡・出土遺物……………	337	第301図	第47号住居跡出土遺物……………	382
第262図	第36号住居跡(1)・第48号住居跡……………	338	第302図	第148号住居跡……………	384
第263図	第36号住居跡(2)……………	339	第303図	第148号住居跡出土遺物(1)……………	385
第264図	第36号住居跡出土遺物……………	340	第304図	第148号住居跡出土遺物(2)……………	386
第265図	第37号住居跡……………	342	第305図	第148号住居跡出土遺物(3)……………	387
第266図	第37号住居跡出土遺物……………	343	第306図	第149号住居跡……………	390
第267図	第38号住居跡……………	345	第307図	第149号住居跡出土遺物……………	391
第268図	第37号住居跡カマド……………	345	第308図	第150号住居跡・出土遺物……………	392
第269図	第38号住居跡出土遺物……………	346	第309図	第151・152号住居跡……………	

	第151号住居跡出土遺物	393	第349図	第57号住居跡出土遺物(4)	437
第310図	第153・155号住居跡	394	第350図	第58号住居跡	439
第311図	第153号住居跡出土遺物	395	第351図	第58号住居跡出土遺物(1)	440
第312図	第155号住居跡出土遺物	395	第352図	第58号住居跡出土遺物(2)	441
第313図	第23・148～155号住居跡近景	397	第353図	第59・76号住居跡	442・443
第314図	第154号住居跡	398	第354図	第59号住居跡出土遺物(1)	444
第315図	第1号井戸跡遺物出土状況	398	第355図	第59号住居跡出土遺物(2)	445
第316図	第1号井戸・出土遺物	399	第356図	第76号住居跡出土遺物	447
第317図	第1号発掘区土坑	400	第357図	第60号住居跡	448
第318図	第8号土坑・出土遺物	401	第358図	第60号住居跡出土遺物	449
第319図	第1号溝	402	第359図	第61号住居跡(1)	450
第320図	第1号発掘区谷部・出土遺物	403	第360図	第61号住居跡(2)	451
第321図	第1号発掘区グリッド出土遺物	404	第361図	第61号住居跡出土遺物(1)	452
第322図	第2号発掘区全測図	406	第362図	第61号住居跡出土遺物(2)	453
第323図	第49号住居跡	407	第363図	第61号住居跡出土遺物(3)	454
第324図	第50号住居跡	408	第364図	第61号住居跡出土遺物(4)	455
第325図	第50号住居跡出土遺物	409	第365図	第61号住居跡出土遺物(5)	456
第326図	第51号住居跡	410	第366図	第61号住居跡出土遺物(6)	457
第327図	第51号住居跡出土遺物(1)	411	第367図	第62・63号住居跡	460
第328図	第51号住居跡出土遺物(2)	412	第368図	第62号住居跡出土遺物(1)	461
第329図	第51号住居跡出土遺物(3)	413	第369図	第62号住居跡出土遺物(2)	462
第330図	第52号住居跡・出土遺物	415	第370図	第63号住居跡出土遺物	462
第331図	第53号住居跡	416	第371図	第64号住居跡	464
第332図	第53号住居跡出土遺物(1)	417	第372図	第64号住居跡出土遺物(1)	465
第333図	第53号住居跡出土遺物(2)	418	第373図	第64号住居跡出土遺物(2)	466
第334図	第53号住居跡出土遺物(3)	419	第374図	第64号住居跡出土遺物(3)	467
第335図	第54号住居跡	421	第375図	第65号住居跡	469
第336図	第54号住居跡出土遺物(1)	422	第376図	第65号住居跡出土遺物	470
第337図	第54号住居跡出土遺物(2)	423	第377図	第66号住居跡	471
第338図	第55号住居跡	425	第378図	第66号住居跡出土遺物(1)	473
第339図	第55号住居跡出土遺物(1)	426	第379図	第66号住居跡出土遺物(2)	474
第340図	第55号住居跡出土遺物(2)	427	第380図	第66号住居跡出土遺物(3)	475
第341図	第56号住居跡	429	第381図	第66号住居跡出土遺物(4)	476
第342図	第56号住居跡出土遺物(1)	430	第382図	第66号住居跡出土遺物(5)	477
第343図	第56号住居跡出土遺物(2)	431	第383図	第66号住居跡出土遺物(6)	478
第344図	第57号住居跡(1)	432	第384図	第66号住居跡出土遺物(7)	479
第345図	第57号住居跡(2)	433	第385図	第66号住居跡出土遺物(8)	480
第346図	第57号住居跡出土遺物(1)	434	第386図	第67号住居跡	486
第347図	第57号住居跡出土遺物(2)	435	第387図	第67号住居跡出土遺物	487
第348図	第57号住居跡出土遺物(3)	436	第388図	第68・69号住居跡	489

第389図	第68号住居跡出土遺物	490	第429図	第80号住居跡出土遺物	545
第390図	第70号住居跡遺物出土状況	490	第430図	第92号住居跡出土遺物	545
第391図	第70号住居跡(1)	491	第431図	第81号住居跡	547
第392図	第70号住居跡(2)	492	第432図	第81号住居跡出土遺物	548
第393図	第70号住居跡出土遺物(1)	493	第433図	第82号住居跡	550・551
第394図	第70号住居跡出土遺物(2)	494	第434図	第82号住居跡出土遺物	552
第395図	第70号住居跡出土遺物(3)	495	第435図	第83・99号住居跡	553
第396図	第71号住居跡(1)	498	第436図	第99号住居跡出土遺物(1)	554
第397図	第71号住居跡(2)	499	第437図	第99号住居跡出土遺物(2)	555
第398図	第71号住居跡出土遺物	500	第438図	第83号住居跡出土遺物	555
第399図	第72号住居跡付近の噴砂	500	第439図	第84号住居跡	557・558
第400図	第72号住居跡	502・503	第440図	第84号住居跡出土遺物(1)	559
第401図	第72号住居跡出土遺物	504	第441図	第84号住居跡出土遺物(2)	560
第402図	第73号住居跡(1)	506	第442図	第85号住居跡	563
第403図	第73号住居跡(2)	507	第443図	第85号住居跡出土遺物(1)	564
第404図	第73号住居跡出土遺物(1)	508	第444図	第85号住居跡出土遺物(2)	565
第405図	第73号住居跡出土遺物(2)	509	第445図	第86号住居跡	567
第406図	第74号住居跡	511・512	第446図	第86号住居跡出土遺物	568
第407図	第74号住居跡出土遺物(1)	513	第447図	第87号住居跡	569
第408図	第74号住居跡出土遺物(2)	514	第448図	第87号住居跡出土遺物(1)	570
第409図	第74号住居跡出土遺物(3)	515	第449図	第87号住居跡出土遺物(2)	571
第410図	第75号住居跡(1)	519	第450図	第88号住居跡	572
第411図	第75号住居跡(2)	520	第451図	第88号住居跡出土遺物(1)	573
第412図	第75号住居跡出土遺物(1)	521	第452図	第88号住居跡出土遺物(2)	574
第413図	第75号住居跡出土遺物(2)	522	第453図	第89号住居跡・出土遺物	576
第414図	第75号住居跡出土遺物(3)	523	第454図	第90号住居跡	578
第415図	第75号住居跡出土遺物(4)	524	第455図	第90号住居跡出土遺物	579
第416図	第75号住居跡出土遺物(5)	525	第456図	第91号住居跡	580
第417図	第75号住居跡出土遺物(6)	526	第457図	第91号住居跡出土遺物	581
第418図	第77号住居跡	530	第458図	第93号住居跡	582
第419図	第77号住居跡出土遺物	531	第459図	第93号住居跡出土遺物(1)	583
第420図	第78号住居跡	533	第460図	第93号住居跡出土遺物(2)	584
第421図	第78号住居跡出土遺物(1)	534	第461図	第94号住居跡カマド周辺	584
第422図	第78号住居跡出土遺物(2)	535	第462図	第94号住居跡	586
第423図	第78号住居跡出土遺物(3)	536	第463図	第94号住居跡出土遺物	587
第424図	第78号住居跡出土遺物(4)	537	第464図	第95号住居跡・出土遺物	589
第425図	第79号住居跡	541	第465図	第96・97号住居跡	590
第426図	第79号住居跡出土遺物(1)	542	第466図	第96号住居跡出土遺物(1)	591
第427図	第79号住居跡出土遺物(2)	543	第467図	第96号住居跡出土遺物(2)	592
第428図	第80・92号住居跡	544	第468図	第96号住居跡出土遺物(3)	593

第469図	第97号住居跡遺物出土状況	595	第508図	第103号住居跡	648
第470図	第97号住居跡出土遺物	596	第509図	第103号住居跡出土遺物	649
第471図	第98号住居跡	598	第510図	第104号住居跡	651
第472図	第98号住居跡出土遺物(1)	599	第511図	第104号住居跡出土遺物	652
第473図	第98号住居跡出土遺物(2)	600	第512図	第105号住居跡カマド全景	652
第474図	第100号住居跡出土遺物	602	第513図	第105号住居跡	653
第475図	第100号住居跡	603	第514図	第105号住居跡出土遺物	654
第476図	第1号掘立柱建物跡	604	第515図	第106号住居跡・出土遺物	656
第477図	第2号掘立柱建物跡	605	第516図	第107号住居跡・出土遺物	657
第478図	第3号掘立柱建物跡	606	第517図	第108号住居跡	658
第479図	第4号掘立柱建物跡	607	第518図	第108号住居跡出土遺物(1)	659
第480図	第5号掘立柱建物跡	608	第519図	第108号住居跡出土遺物(2)	660
第481図	掘立柱建物跡出土遺物	609	第520図	第109号住居跡	662
第482図	第2・3号井戸	612	第521図	第109号住居跡出土遺物	663
第483図	第4号井戸	613	第522図	第110号住居跡	665
第484図	第2号井戸出土遺物(1)	614	第523図	第110号住居跡出土遺物	666
第485図	第2号井戸出土遺物(2)	615	第524図	第114号住居跡カマド全景	666
第486図	第3・4号井戸出土遺物	618	第525図	第111号住居跡・出土遺物	667
第487図	第2号掘区土坑(1)	619	第526図	第112号住居跡・出土遺物	668
第488図	第2号掘区土坑(2)	620	第527図	第113号住居跡・出土遺物	669
第489図	第2号掘区土坑(3)	621	第528図	第114・115号住居跡	670
第490図	第2号掘区土坑(4)	622	第529図	第114号住居跡出土遺物(1)	671
第491図	第2号掘区土坑出土遺物(1)	623	第530図	第114号住居跡出土遺物(2)	672
第492図	第2号掘区土坑出土遺物(2)	624	第531図	第115号住居跡出土遺物	673
第493図	第2号掘区土坑出土遺物(3)	625	第532図	第116号住居跡	674
第494図	第19号土坑出土遺物(1)	626	第533図	第116号住居跡出土遺物(1)	675
第495図	第19号土坑出土遺物(2)	627	第534図	第116号住居跡出土遺物(2)	676
第496図	第2号溝	632	第535図	第117号住居跡	677
第497図	第3号溝	633	第536図	第117号住居跡出土遺物	678
第498図	第4号溝	634	第537図	第118号住居跡	680
第499図	第5・6・7・8・9号溝	635	第538図	第119号住居跡	681
第500図	第2号掘区溝出土遺物	636	第539図	第119号住居跡出土遺物	682
第501図	第2号掘区ピット出土遺物	637	第540図	第120号住居跡	684
【第3分冊】					
第502図	第3号掘区全測図	640	第541図	第120号住居跡出土遺物(1)	685
第503図	第101号住居跡	641	第542図	第120号住居跡出土遺物(2)	686
第504図	第101号住居跡出土遺物(1)	642	第543図	第120号住居跡出土遺物(3)	687
第505図	第101号住居跡出土遺物(2)	643	第544図	第121号住居跡・出土遺物	690
第506図	第102号住居跡	646	第545図	第122・123号住居跡	691
第507図	第102号住居跡出土遺物	647	第546図	第122号住居跡出土遺物	692
			第547図	第124号住居跡	692

第548图	第125号住居跡……………	693	第588图	第144·147号住居跡出土遺物(2)……………	741
第549图	第125号住居跡出土遺物……………	694	第589图	第144·147号住居跡出土遺物(3)……………	742
第550图	第126·127号住居跡……………	695	第590图	第146号住居跡出土遺物……………	743
第551图	第126号住居跡出土遺物……………	696	第591图	第156号住居跡……………	744
第552图	第127号住居跡出土遺物……………	697	第592图	第156号住居跡出土遺物……………	745
第553图	第128号住居跡·出土遺物……………	699	第593图	第157·158号住居跡……………	746
第554图	第129号住居跡……………	700	第594图	第157·158号住居跡出土遺物……………	747
第555图	第130号住居跡……………	701	第595图	第159号住居跡……………	748
第556图	第130号住居跡出土遺物……………	702	第596图	第159号住居跡出土遺物……………	749
第557图	第131号住居跡(1)……………	704	第597图	第160号住居跡·出土遺物……………	751
第558图	第131号住居跡(2)……………	705	第598图	第161号住居跡……………	752·753
第559图	第131号住居跡出土遺物(1)……………	706	第599图	第161号住居跡出土遺物(1)……………	754
第560图	第131号住居跡出土遺物(2)……………	707	第600图	第161号住居跡出土遺物(2)· 第162号住居跡出土遺物……………	755
第561图	第132·133号住居跡……………	708	第601图	第162号住居跡……………	757
第562图	第132号住居跡出土遺物(1)……………	710	第602图	第163号住居跡……………	758
第563图	第132号住居跡出土遺物(2)……………	711	第603图	第163号住居跡出土遺物……………	759
第564图	第133号住居跡出土遺物……………	712	第604图	第164号住居跡……………	760·761
第565图	第134号住居跡·出土遺物……………	714	第605图	第164号住居跡出土遺物(1)……………	762
第566图	第135号住居跡·出土遺物……………	715	第606图	第164号住居跡出土遺物(2)……………	763
第567图	第136号住居跡……………	716	第607图	第164号住居跡出土遺物(3)……………	764
第568图	第137号住居跡……………	717	第608图	第165·166号住居跡……………	767
第569图	第138号住居跡(1)……………	718	第609图	第165·166号住居跡出土遺物……………	768
第570图	第138号住居跡(2)·出土遺物……………	719	第610图	第167号住居跡……………	770·771
第571图	第139号住居跡·出土遺物……………	720	第611图	第167号住居跡出土遺物(1)……………	772
第572图	第146·147号住居跡遺物出土狀況……………	721	第612图	第167号住居跡出土遺物(2)……………	773
第573图	第140·145号住居跡(1)……………	722	第613图	第167号住居跡出土遺物(3)……………	774
第574图	第140·145号住居跡(2)……………	723	第614图	第167号住居跡出土遺物(4)……………	775
第575图	第145号住居跡出土遺物……………	724	第615图	第168号住居跡……………	780
第576图	第141号住居跡……………	725	第616图	第168号住居跡出土遺物……………	781
第577图	第141号住居跡出土遺物(1)……………	726	第617图	第169号住居跡(1)……………	782·783
第578图	第141号住居跡出土遺物(2)……………	727	第618图	第169号住居跡(2)……………	784
第579图	第141号住居跡出土遺物(3)……………	728	第619图	第169号住居跡出土遺物(1)……………	785
第580图	第141号住居跡出土遺物(4)……………	729	第620图	第169号住居跡出土遺物(2)……………	786
第581图	第142号住居跡……………	732	第621图	第169号住居跡出土遺物(3)……………	787
第582图	第142号住居跡出土遺物……………	733	第622图	第169号住居跡出土遺物(4)……………	788
第583图	第143号住居跡……………	735	第623图	第169号住居跡出土遺物(5)……………	789
第584图	第143号住居跡出土遺物(1)……………	736	第624图	第169号住居跡出土遺物(6)……………	790
第585图	第143号住居跡出土遺物(2)……………	737	第625图	第170号住居跡……………	796
第586图	第144·146·147号住居跡……………	739	第626图	第170号住居跡出土遺物……………	797
第587图	第144·147号住居跡出土遺物(1)……………	740			

第627図	第171号住居跡	799
第628図	第171号住居跡出土遺物	800
第629図	第5・6号井戸・ 第6号井戸出土遺物	801
第630図	第3発掘区土坑(1)	802
第631図	第3発掘区土坑(2)	803
第632図	第3発掘区土坑(3)	804
第633図	第3発掘区土坑(4)	805
第634図	第3発掘区土坑出土遺物	806
第635図	第11号溝・ 第10・11・13号溝出土遺物	808
第636図	第12・13号溝	809
第637図	第14号溝・第14・15号溝出土遺物	810
第638図	第15号溝	811
第639図	第3発掘区ピット出土遺物	812
第640図	第4発掘区全測図	814
第641図	第172号住居跡および出土遺物	815
第642図	第173・174号住居跡および 第173・175号住居跡出土遺物	817
第643図	第175・176号住居跡	819
第644図	第177・178号住居跡	820・821
第645図	第178号住居跡出土遺物	822
第646図	第179号住居跡カマド	824・825
第647図	第179号住居跡	826・827
第648図	第179号住居跡出土遺物	828
第649図	第179号住居跡カマド遺物出土状況	829
第650図	第180号住居跡	830
第651図	第180号住居跡出土遺物	831
第652図	第181・182号住居跡	832
第653図	第182号住居跡出土遺物	833
第654図	第181号住居跡出土遺物	834
第655図	第183号住居跡カマド	836
第656図	第183号住居跡	837
第657図	第183号住居跡出土遺物(1)	838
第658図	第183号住居跡出土遺物(2)	839
第659図	第183号住居跡出土遺物(3)	840
第660図	第184・185号住居跡	844
第661図	第184・185号住居跡出土遺物	845
第662図	第186号住居跡	846
第663図	第186号住居跡出土遺物	847

第664図	第187・188・189号住居跡	848・849
第665図	第187号住居跡出土遺物	850
第666図	第188号住居跡出土遺物(1)	852
第667図	第188号住居跡出土遺物(2)	853
第668図	第189号住居跡出土遺物	855
第669図	第190号住居跡	857
第670図	第191号住居跡および出土遺物	858
第671図	第192・193号住居跡	859
第672図	第192号住居跡出土遺物	860
第673図	第193号住居跡遺物出土状況	861
第674図	第193号住居跡出土遺物(1)	862
第675図	第193号住居跡出土遺物(2)	863
第676図	第193号住居跡出土遺物(3)	864
第677図	第193号住居跡出土遺物(4)	865
第678図	第193号住居跡出土遺物(5)	866
第679図	第194・195号住居跡	872
第680図	第195号住居跡カマド	873
第681図	第194号住居跡出土遺物	874
第682図	第195号住居跡出土遺物	876
第683図	第196号住居跡	877
第684図	第196号住居跡出土遺物	878
第685図	第197号住居跡	880
第686図	第197号住居跡出土遺物	881
第687図	第198・199号住居跡	882
第688図	第198・199号住居跡出土遺物	883
第689図	第200・201・202号住居跡	885
第690図	第200・201・ 202号住居跡出土遺物(1)	886
第691図	第200・201・ 202号住居跡出土遺物(2)	887
第692図	第200・201・ 202号住居跡出土遺物(3)	888
第693図	第203号住居跡	891
第694図	第204号住居跡	891
第695図	第205・206号住居跡および 第206号住居跡出土遺物	892
第696図	第4発掘区土坑・井戸	894
第697図	第16号溝および出土遺物	895
第698図	第4発掘区グリッド出土遺物	896

第699図	第5区発掘区全測図……………	898	第736図	第223号住居跡……………	948
第700図	第207号住居跡……………	899	第737図	第223号住居跡出土遺物……………	949
第701図	第207号住居跡出土遺物(1)……………	900	第738図	第224号住居跡……………	950・951
第702図	第207号住居跡出土遺物(2) および遺物出土状況……………	901	第739図	第224号住居跡出土遺物……………	952
第703図	第208号住居跡および出土遺物……………	903	第740図	第225号住居跡……………	954
第704図	第209号住居跡……………	904	第741図	第225号住居跡出土遺物……………	955
第705図	第210・211号住居跡および 第210号住居跡出土遺物……………	905	第742図	第226号住居跡……………	956
第706図	第211号住居跡出土遺物……………	906	第743図	第226号住居跡出土遺物……………	957
第707図	第212号住居跡および出土遺物……………	907	第744図	第227・228号住居跡および 第228号住居跡出土遺物……………	959
第708図	第213号住居跡……………	908・909	第745図	第229・230号住居跡……………	960・961
第709図	第213号住居跡出土遺物……………	910	第746図	第229号住居跡出土遺物(1)……………	962
第710図	第213号住居跡カマド(上) および編み物石出土状況(下)……………	912	第747図	第229号住居跡出土遺物(2)……………	963
第711図	第214号住居跡および出土遺物……………	913	第748図	第230号住居跡出土遺物(1)……………	965
第712図	第215号住居跡および出土遺物……………	914	第749図	第230号住居跡出土遺物(2)……………	966
第713図	第216・217号住居跡……………	915	第750図	第230号住居跡出土遺物(3)……………	967
第714図	第216号住居跡出土遺物……………	916	第751図	第230号住居跡貯蔵穴……………	970
第715図	第217号住居跡出土遺物(1)……………	917	第752図	第231号住居跡……………	971
第716図	第217号住居跡出土遺物(2)……………	918	第753図	第231号住居跡出土遺物(1)……………	972
第717図	第218号住居跡……………	921	第754図	第231号住居跡出土遺物(2)……………	973
第718図	第218号住居跡出土遺物(1)……………	922	第755図	第232号住居跡カマド……………	975
第719図	第218号住居跡出土遺物(2)……………	923	第756図	第232号住居跡……………	976・977
第720図	第219号住居跡カマド……………	925	第757図	第232号住居跡出土遺物(1)……………	978
第721図	第219号住居跡……………	926	第758図	第232号住居跡出土遺物(2)……………	979
第722図	第219号住居跡出土遺物……………	927	第759図	第232号住居跡出土遺物(3)……………	980
第723図	第220号住居跡……………	929	第760図	第232号住居跡出土遺物(4)……………	981
第724図	第220号住居跡出土遺物(1)……………	930	第761図	第232号住居跡出土遺物(5)……………	982
第725図	第220号住居跡出土遺物(2)……………	931	第762図	第232号住居跡出土遺物(6)……………	983
第726図	第220号住居跡出土遺物(3)……………	932	第763図	第232号住居跡出土遺物(7)……………	984
第727図	第220号住居跡出土遺物(4)……………	933	第764図	第233号住居跡および出土遺物……………	989
第728図	第221号住居跡カマド……………	937	第765図	第234・235号住居跡出土遺物……………	990
第729図	第221号住居跡……………	938	第766図	第234・235・236号住居跡……………	992・993
第730図	第221号住居跡出土遺物(1)……………	939	第767図	第236号住居跡出土遺物……………	994
第731図	第221号住居跡出土遺物(2)……………	940	第768図	第237・238号住居跡……………	995
第732図	第222号住居跡……………	942	第769図	第237・238号住居跡出土遺物……………	996
第733図	第222号住居跡出土遺物(1)……………	943	第770図	第239号住居跡……………	998
第734図	第222号住居跡出土遺物(2)……………	944	第771図	第239号住居跡出土遺物(1)……………	999
第735図	第222号住居跡出土遺物(3)……………	945	第772図	第239号住居跡出土遺物(2)……………	1000
			第773図	第240号住居跡および出土遺物……………	1002
			第774図	第241号住居跡……………	1004

第775図	第241号住居跡出土遺物	1005	第815図	第6号掘立柱建物跡	1061
第776図	第242・243号住居跡	1006・1007	第816図	第5発掘区土坑(1)	1062
第777図	第242号住居跡出土遺物(1)	1008	第817図	第5発掘区土坑(2)	1063
第778図	第242号住居跡出土遺物(2)	1009	第818図	第5発掘区土坑(3)	1064
第779図	第242号住居跡出土遺物(3)	1010	第819図	第5発掘区土坑(4)・ピット	1065
第780図	第243号住居跡出土遺物(1)	1013	第820図	第5発掘区土坑出土遺物(1)	1066
第781図	第243号住居跡出土遺物(2)	1014	第821図	第5発掘区土坑出土遺物(2)	1067
第782図	第244号住居跡	1016・1017	第822図	第5発掘区土坑出土遺物(3)	1068
第783図	第244号住居跡出土遺物(1)	1018	第823図	第5発掘区ピット出土遺物	1071
第784図	第244号住居跡出土遺物(2)	1019	第824図	第17～19号溝	
第785図	第244号住居跡出土遺物(3)	1020		および第19号溝出土遺物	1072
第786図	第244号住居跡出土遺物(4)	1021	第825図	第20・21号溝	1073
第787図	第244号住居跡出土遺物(5)	1022	第826図	第20号溝出土遺物	1074
第788図	第245号住居跡	1027	第827図	第22・23号溝	1075
第789図	第245号住居跡出土遺物	1028	第828図	第22・23号溝出土遺物	1076
第790図	第246号住居跡	1031	第829図	第24号溝	1077
第791図	第246号住居跡出土遺物	1032	第830図	第25～27号溝	1078
第792図	第247号住居跡	1034・1035	第831図	第25～27号溝出土遺物	1079
第793図	第247号住居跡出土遺物	1036	第832図	谷出土遺物(1)	1080
第794図	第248号住居跡	1037	第833図	谷出土遺物(2)	1081
第795図	第248号住居跡出土遺物	1038	第834図	谷出土遺物(3)	1082
第796図	第249号住居跡および出土遺物	1040	第835図	谷出土遺物(4)	1083
第797図	第250号住居跡	1041	第836図	谷出土遺物(5)	1084
第798図	第250号住居跡出土遺物	1042	第837図	谷出土遺物(6)	1085
第799図	第251号住居跡	1042	第838図	谷出土遺物(7)	1086
第800図	第252号住居跡	1043	第839図	谷出土遺物(8)	1087
第801図	第252号住居跡炭化物出土状況	1044	第840図	谷出土遺物(9)	1088
第802図	第252号住居跡出土遺物	1045	第841図	第5発掘区グリッド出土遺物	1095
第803図	第253号住居跡および出土遺物	1046	第842図	第6発掘区全測図	1098
第804図	第254号住居跡および出土遺物	1047	第843図	第1号古墳跡	1099
第805図	第255号住居跡および出土遺物	1048	第844図	第1号古墳跡出土遺物	1100
第806図	第256号住居跡および出土遺物	1049	第845図	第1号方形周溝墓	1101
第807図	第257号住居跡	1050・1051	第846図	第2号方形周溝墓	1102
第808図	第257号住居跡出土遺物(1)	1052	第847図	第2号方形周溝墓出土遺物	1103
第809図	第257号住居跡出土遺物(2)	1053	第848図	第3号方形周溝墓	1104
第810図	第258号住居跡	1055	第849図	第3号方形周溝墓出土遺物	1105
第811図	第258号住居跡出土遺物	1056	第850図	第4号方形周溝墓	
第812図	第259号住居跡	1057		および出土遺物	1106
第813図	第259号住居跡出土遺物	1058	第851図	第5号方形周溝墓	1108
第814図	第260号住居跡および出土遺物	1059	第852図	第6号方形周溝墓	1109

第853図	第7号方形周溝墓 および出土遺物……………1110	第891図	第31号溝および出土遺物……………1149
第854図	第8号方形周溝墓出土遺物……………1111	第892図	第6発掘区全景……………1150
第855図	第8号方形周溝墓……………1112・1113	第893図	第6発掘区グリッド出土遺物……………1151
第856図	第9号方形周溝墓……………1114	第894図	板碑……………1152
第857図	第261号住居跡……………1115	第895図	石製品(1) 模造品……………1154
第858図	第262号住居跡……………1115	第896図	石製品(2) 未製品……………1155
第859図	第263号住居跡……………1116	第897図	石製品(3) 玉類……………1156
第860図	第263号住居跡出土遺物……………1117	第898図	石製品(4) 白玉……………1157
第861図	第264号住居跡……………1118	第899図	石製品(5) 紡錘車・石錘……………1158
第862図	第265号住居跡……………1119	第900図	石製品(6) 砥石……………1159
第863図	第265号住居跡出土遺物……………1120	第901図	石製品(7) 砥石・すり石……………1160
第864図	第266号住居跡および出土遺物……………1121	第902図	土製品(1) 模造品……………1167
第865図	第267号住居跡……………1122・1123	第903図	土製品(2) 土錘……………1168
第866図	第267号住居跡出土遺物……………1124	第904図	土製品(3) 土錘・その他……………1169
第867図	第268号住居跡……………1125	第905図	土製品(4) 紡錘車……………1170
第868図	第268号住居跡出土遺物……………1126	第906図	土製品(5) 貝巢穴痕泥岩……………1171
第869図	第269号住居跡……………1127	第907図	鉄製品(1) 刀子……………1176
第870図	第269号住居跡出土遺物……………1128	第908図	鉄製品(2) 鎌・その他……………1177
第871図	第270号住居跡……………1129	第909図	表採遺物(1)……………1179
第872図	第271号住居跡……………1129	第910図	表採遺物(2)……………1180
第873図	第272号住居跡……………1130	第911図	古墳時代前期の上敷免遺跡……………1184
第874図	第272号住居跡出土遺物……………1131	第912図	古墳時代中期前半の上敷免遺跡……………1185
第875図	第273号住居跡および出土遺物……………1132	第913図	古墳時代中期後半の上敷免遺跡……………1186
第876図	第274号住居跡……………1133	第914図	古墳時代後期前半の上敷免遺跡……………1187
第877図	第7号掘立柱建物跡……………1134	第915図	古墳時代後期後半の上敷免遺跡……………1188
第878図	第8号掘立柱建物跡……………1135	第916図	7世紀前半の上敷免遺跡……………1189
第879図	第9号掘立柱建物跡……………1136	第917図	7世紀後半の上敷免遺跡……………1190
第880図	第10号掘立柱建物跡……………1137	第918図	8世紀前半の上敷免遺跡……………1191
第881図	第7・9・10号 掘立柱建物跡出土遺物……………1138	第919図	8世紀後半の上敷免遺跡……………1192
第882図	第128号土坑遺物出土状況……………1139	第920図	9世紀前半の上敷免遺跡……………1193
第883図	第6発掘区土坑(1)……………1140	第921図	9世紀後半の上敷免遺跡……………1194
第884図	第6発掘区土坑(2)……………1141	第922図	10世紀代の上敷免遺跡……………1195
第885図	第6発掘区土坑(3)……………1142	付 図	上敷免遺跡全測図
第886図	第6発掘区井戸……………1143		
第887図	第6発掘区土坑・井戸出土遺物……………1144		
第888図	第28号溝……………1146		
第889図	第29号溝……………1147		
第890図	第30号溝……………1148		

図版目次

【第1分冊】

巻頭図版1 Y-3号住居跡出土壺形土器

Y-4号住居跡出土壺形土器

図版1 第1号集石

J-1号土坑・第1号集石出土遺物

図版2 Y-1号住居跡

Y-2号住居跡

図版3 Y-3号住居跡

Y-4号住居跡

図版4 Y-1号住居跡出土遺物

Y-2号住居跡出土遺物

図版5 Y-3号住居跡出土遺物(1)

Y-4号住居跡出土遺物(1)

図版6 Y-3号住居跡出土遺物(2)

図版7 Y-3号住居跡出土遺物(3)

Y-4号住居跡出土遺物(2)

図版8 Y-4号住居跡出土遺物(3)

図版9 Y-4号住居跡出土遺物(4)

図版10 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(1)

図版11 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(2)

図版12 Y-1号土坑出土遺物

Y-2号土坑出土遺物

図版13 谷全景

谷炭化物出土状況

図版14 谷出土遺物(1)

図版15 谷出土遺物(2)

図版16 谷出土遺物(3)

図版17 谷出土遺物(4)

図版18 谷出土遺物(5)

図版19 谷出土遺物(6)

図版20 谷出土遺物(7)

図版21 谷出土遺物(8)

図版22 谷出土遺物(9)

図版23 谷出土遺物(10)

図版24 谷出土遺物(11)

図版25 谷出土遺物(12)

図版26 谷出土遺物(13)

図版27 谷出土遺物(14)

図版28 谷出土遺物(15)

図版29 谷出土遺物(16)

図版30 谷出土遺物(17)

図版31 谷出土遺物(18)

図版32 グリッド出土遺物(1)

図版33 グリッド出土遺物(2)

図版34 グリッド出土遺物(3)

図版35 グリッド出土遺物(4)

図版36 グリッド出土遺物(5)

図版37 グリッド出土遺物(6)

図版38 グリッド出土遺物(7)

図版39 グリッド出土遺物(8)

図版40 グリッド出土遺物(9)

図版41 グリッド出土遺物(10)

図版42 グリッド出土遺物(11)

図版43 グリッド出土遺物(12)

図版44 グリッド出土遺物(13)

図版45 グリッド出土遺物(14)

図版46 底部圧痕(1)

図版47 底部圧痕(2)

図版48 底部圧痕(3)

図版49 底部圧痕(4)

図版50 底部圧痕(5)

図版51 底部圧痕(6)

図版52 底部圧痕(7)

図版53 土製品(1)

図版54 土製品(2)

石製品 石器(1)

図版55 石器(2)

図版56 石器(3)

図版57 石器(4)

図版58 石器(5)

図版59 石器(6)

図版60 石器(7)

図版61 石器(8)

【第2分冊】

巻頭図版2 第72号住居跡

第19号住居跡出土遺物

- 卷頭図版3 第66号住居跡出土遺物
第75号住居跡出土遺物
- 図版62 第1発掘区航空写真(1)
第1発掘区航空写真(2)
- 図版63 第1発掘区全景
第1号住居跡
第1号住居跡カマド
第2号住居跡
第3号住居跡
- 図版64 第4号住居跡
第4号住居跡カマド
第5号住居跡
第6号住居跡
第7号住居跡
第7号住居跡カマド
第8号住居跡
第8号住居跡カマド
- 図版65 第8号住居跡貯蔵穴
第10号住居跡
第12・13号住居跡
第12・13号住居跡遺物出土状況
第14号住居跡
第14号住居跡遺物出土状況
第11号住居跡
第15号住居跡
- 図版66 第15号住居跡カマド
第15号住居跡貯蔵穴A
第15号住居跡貯蔵穴B
第16号住居跡
第17号住居跡
第18号住居跡
第18号住居跡遺物出土状況
第19号住居跡
- 図版67 第19号住居跡
第19号住居跡遺物出土状況
第20号住居跡
第21号住居跡
第22号住居跡
第22号住居跡遺物出土状況
第23号住居跡
- 図版68 第25号住居跡
第26号住居跡
第27号住居跡
第28号住居跡
第29号住居跡
第29号住居跡遺物出土状況
第30号住居跡
第30号住居跡遺物出土状況
- 図版69 第31号住居跡
第32号住居跡
第33号住居跡
第34号住居跡
第35号住居跡
第36号住居跡
第37号住居跡
第38号住居跡
- 図版70 第39号住居跡
第40号住居跡
第40号住居跡貯蔵穴
第41号住居跡
第41号住居跡遺物出土状況
第42号住居跡
第42号住居跡貯蔵穴
第43号住居跡
- 図版71 第44号住居跡
第45号住居跡
第46号住居跡
第47号住居跡
第148号住居跡
第148号住居跡貯蔵穴
第149号住居跡
第1号井戸
- 図版72 第1発掘区 土師器 坏類(1)
- 図版73 第1発掘区 土師器 坏類(2)
- 図版74 第1発掘区 土師器 坏類(3)
- 図版75 第1発掘区 土師器 坏類(4)
- 図版76 第1発掘区 土師器 坏類(5)
- 図版77 第1発掘区 土師器 高坏(1)
- 図版78 第1発掘区 土師器 高坏(2)
- 図版79 第1発掘区 土師器 高坏(3)

図版80	第1発掘区	土師器 高坏(4)・甕類(1)・鉢他	第65号住居跡
			第66号住居跡
図版81	第1発掘区	土師器 他・須恵器類	第66号住居跡遺物出土状況
図版82	第1発掘区	土師器 鉢・甕類(2)他	第67号住居跡
図版83	第1発掘区	土師器 甕類(3)	第68号住居跡
図版84	第1発掘区	土師器 甕類(4)他	図版99 第70号住居跡
図版85	第1発掘区	土師器 甕類(5)	第71号住居跡
図版86	第1発掘区	土師器 甕類(6)	第72号住居跡
図版87	第1発掘区	土師器 甕類(7)	第73号住居跡
図版88	第1発掘区	土師器 甕類(8)	第73号住居跡カマド
図版89	第1発掘区	土師器 甕類(9)	第73号住居跡貯蔵穴
図版90	第1発掘区	土師器 甕類(10)	第75号住居跡
図版91	第1発掘区	土師器 甕類(11)	第75号住居跡貯蔵穴
図版92	第1発掘区	土師器 甕類(12)	図版100 第77号住居跡
図版93	第1発掘区	土師器 甕類(13)	第78号住居跡
図版94	第1発掘区	土師器 甗・支脚	第78号住居跡遺物出土状況
図版95	第2発掘区全景		第78号住居跡カマド
	第49号住居跡		第78号住居跡貯蔵穴
	第50号住居跡		第79号住居跡
	第51号住居跡		第79号住居跡貯蔵穴
	第51号住居跡遺物出土状況		第81号住居跡
図版96	第52号住居跡		図版101 第82号住居跡
	第53号住居跡		第82号住居跡カマド
	第53号住居跡遺物出土状況		第84号住居跡カマド
	第53号住居跡貯蔵穴		第84号住居跡子持勾玉出土状況
	第54号住居跡		第85号住居跡
	第55号住居跡		第85号住居跡カマド
	第56号住居跡		第87号住居跡
	第56号住居跡遺物出土状況		第87号住居跡カマド
図版97	第57号住居跡		図版102 第87号住居跡編物石出土状況
	第57号住居跡遺物出土状況		第88号住居跡
	第58号住居跡		第88号住居跡カマド
	第59号住居跡		第90号住居跡
	第59号住居跡遺物出土状況		第91号住居跡
	第60号住居跡		第93号住居跡
	第61号住居跡		第94号住居跡
	第61号住居跡遺物出土状況		第94号住居跡カマド
図版98	第62・63号住居跡		図版103 第94号住居跡貯蔵穴
	第64号住居跡		第96・97号住居跡
	第64号住居跡遺物出土状況		第97号住居跡

第167号住居跡遺物出土状況
第168号住居跡
第168号住居跡カマド
第169号住居跡
第169号住居跡遺物出土状況
第170号住居跡
第171号住居跡
図版135 第3発掘区 土師器 坏(1)
図版136 第3発掘区 土師器 坏(2)
図版137 第3発掘区 土師器 坏(3)
図版138 第3発掘区 土師器 坏(4)
須恵器 坏類(1)
図版139 第3発掘区 土師器 盤
須恵器 坏類(2)
図版140 第3発掘区 土師器 高坏・蓋
須恵器 蓋
図版141 第3発掘区 土師器 埴・甗・鉢・壺
図版142 第3発掘区 土師器 ミニチュア他
図版143 第3発掘区 土師器 甗類(1)
図版144 第3発掘区 土師器 甗(1)・甗類(2)
図版145 第3発掘区 土師器 甗類(3)
図版146 第3発掘区 土師器 甗類(4)
図版147 第3発掘区 土師器 甗類(5)・甗(2)
図版148 第3発掘区 土師器 甗(3)
図版149 第3発掘区 土師器 支脚
図版150 第172号住居跡
第173号住居跡
第178号住居跡
第179号住居跡
第180号住居跡
第181・182号住居跡
第183号住居跡
第184号住居跡
図版151 第185号住居跡
第186号住居跡
第188号住居跡
第188号住居跡遺物出土状況
第190号住居跡
第191号住居跡
第192・193号住居跡

第194号住居跡
図版152 第195号住居跡カマド
第196号住居跡貯蔵穴A
第197号住居跡
第197号住居跡貯蔵穴
第198・199号住居跡
第200号住居跡
第201・202号住居跡
第202号住居跡遺物出土状況
図版153 第4発掘区 土師器 坏(1)
図版154 第4発掘区 土師器 坏(2)・須恵器皿
図版155 第4発掘区 土師器 高坏・碗他
図版156 第4発掘区 土師器 甗(1)
図版157 第4発掘区 土師器 甗(2)・鉢・甗(1)
図版158 第4発掘区 土師器 甗(3)
図版159 第4発掘区 土師器 甗(4)・甗(2)他
須恵器 甗

【第4分冊】

巻頭図版4 第2号方形周溝墓出土壺形土器
上敷免遺跡出土石製品

図版160 第5発掘区谷全景
第5発掘区遺構群
図版161 第207号住居跡
第207号住居跡カマド
第210・211・212号住居跡
第213号住居跡
第214号住居跡
第215号住居跡
第217号住居跡
第218号住居跡
図版162 第219号住居跡
第220号住居跡
第221号住居跡
第222号住居跡
第223号住居跡
第224号住居跡
第225号住居跡
第226号住居跡
図版163 第227・228号住居跡
第229・230号住居跡

- 第231号住居跡
 第232・233号住居跡
 第232号住居跡
 第232号住居跡カマド
 第234・235・236号住居跡
- 図版164 第237・238号住居跡
 第239号住居跡
 第241号住居跡
 第242・243号住居跡
 第244号住居跡
 第245号住居跡
 第246号住居跡
 第247号住居跡
- 図版165 第248号住居跡
 第249号住居跡
 第251号住居跡
 第252号住居跡
 第252号住居跡炭化物出土状況
 第257号住居跡
 第258号住居跡
 第259号住居跡
- 図版166 第260号住居跡
 第72号土坑
 第73号土坑
 第77号土坑
 第78号土坑
 第101号土坑
 第102号土坑
 第128号土坑
- 図版167 第5発掘区 土師器 坏(1)
 図版168 第5発掘区 土師器 坏(2)
 図版169 第5発掘区 土師器 坏(3)
 図版170 第5発掘区 土師器 坏(4)
 図版171 第5発掘区 土師器 坏(5)
 図版172 第5発掘区 土師器 坏(6)・蓋
 図版173 第5発掘区 須恵器 坏類
 図版174 第5発掘区 土師器 椀
 図版175 第5発掘区 土師器 鉢他・須恵器 甗
 図版176 第5発掘区 土師器 甕類(1)
 図版177 第5発掘区 土師器 甕類(2)・甗
- 図版178 第5発掘区 土師器 甕類(3)
 図版179 第5発掘区 土師器 甕類(4)
 図版180 第5発掘区 土師器 甗・支脚
 図版181 第6発掘区遺構群
 第6区発掘区方形周溝墓群
- 図版182 第1号古墳跡
 第1号方形周溝墓
 第2号方形周溝墓
 第2号方形周溝墓遺物出土状況
 第3号方形周溝墓遺物出土状況
 第4号方形周溝墓
 第5号方形周溝墓
 第8号方形周溝墓
- 図版183 第9号方形周溝墓
 第263号住居跡
 第265号住居跡
 第267号住居跡
 第268号住居跡
 第269号住居跡
 第272・273号住居跡
 第7号掘立柱建物跡
- 図版184 第6発掘区出土遺物(1)
 図版185 第6発掘区出土遺物(2)
 図版186 石製模造品
 石製模造品(未製品)
 図版187 石製玉類
 石製紡錘車・石錘
- 図版188 石錘・砥石
 土製品
- 図版189 土錘
 土製紡錘車
- 図版190 鉄製品(刀子)
 鉄製品(鎌その他)
- 図版191 鉄製品X線写真

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

一般国道17号は、東京から新潟に至る幹線道路で、増大する交通量に対処するため、建設省では昭和37年以来、各種バイパスを建設している。深谷バイパスもその一環として計画された。

埼玉県教育委員会では、この事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、昭和45年に国庫補助を得て分布調査を実施してきた。

昭和46年、深谷バイパスの計画にあたり、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から文化財保護室長（当時）あて、昭和46年11月25日付け大國調第146号をもって、「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパスおよび一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について（依頼）」があり、分布調査の結果とを照合し、深谷バイパス線路上に数箇所の遺跡が確認されているため、即日、教文第854号をもって埋蔵文化財が所在する旨回答した。

昭和48年7月30日付け大國調151号をもって、調査費用等について協議があり、調査機関、時期、経費の明細等については改めて協議するよう回答した。昭和55年財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、実施機関は事業団とし、昭和55年10月、新ヶ谷戸遺跡から発掘調査は開始された。これについては昭和57年3月に報告書が刊行された。

工事区間の延長にともなって、昭和57年12月16日付け大國調167号をもって、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、「一般国道17号深谷バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財の所在について（照会）」があり、昭和58年11月8日付け教文第755号をもって、上敷免遺跡ほか4遺跡が所在する旨回答した。また、これにともない、昭和59年3月14日付け大國調第27号で発掘調査について協議があり、昭和59年3月16日付け教文第1163号で、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に依頼して実施するのが適当と思われる旨の回答した。これらの遺跡の調査は、昭和55年4月から実施された。

さらに、工事区間が岡部町方面に延長するにともない、その区間の埋蔵文化財の所在について、昭和60年10月9日付け大國調第147号で照会があり、昭和60年10月21日付け教文第699号をもって四十坂下遺跡のほか2遺跡が所在する旨回答した。これについては、埋蔵文化財包蔵地の範囲を明確にするため予備調査を実施し、実施については文化財保護課と協議して欲しい旨付け加えた。

この回答をもとに、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、昭和62年3月3日付け大國調第17号をもって「一般国道17号（深谷バイパス）改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（協議）」があり、昭和62年3月23日付け教文第1127号で、その後新たに発見された明戸上敷免遺跡を加え、先に回答をした四十坂下遺跡、矢島遺跡、戸森遺跡の4遺跡が発掘調査を実施する必要がある、実施機関を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にする旨の回答をした。これらの遺跡は昭和62年4月から発掘調査が開始された。

（埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課）

2 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

1 発掘調査 (昭和60・61・62年度)

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 長 井 五 郎
副 理 事 長 岩 田 明 (60・61)
百 瀬 陽 二 (62)
常 務 理 事
兼 管 理 部 長 町 田 勝 義 (60・61)
常 務 理 事
兼 調 査 研 究 部 長 早 川 智 明 (62)
庶 務 経 理
理 事 兼 管 理 部 長 原 田 家 次 (62)
主 査 関 野 栄 一
主 事 江 田 和 美
主 事 岡 野 美 智 子
主 事 福 田 浩
主 事 本 庄 朗 人
発 掘 調 査
調 査 研 究 部 長 中 島 利 治 (60・61)
調 査 研 究 部 副 部 長
兼 調 査 研 究 第 五 課 長 小 川 良 祐 (60・61)
調 査 研 究 部 副 部 長 塩 野 博 (62)
調 査 研 究 第 一 課 長 今 泉 泰 之
調 査 員 磯 崎 一 (61)
調 査 員 立 石 盛 詞 (60)
調 査 員 金 子 直 行 (62)
調 査 員 西 口 正 純 (62)
調 査 員 栗 島 義 明 (61)
調 査 員 岩 瀬 讓 (60・61)
調 査 員 瀧 瀬 芳 之 (61・62)
調 査 員 赤 熊 浩 一 (61)
調 査 員 田 中 広 明 (61)
調 査 員 奥 野 麦 生 (61)
調 査 員 山 本 靖 (62)

2 整理・報告書刊行事業 (平成3・4年度)

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 荒 井 修 二
副 理 事 長 早 川 智 明
常 務 理 事 兼 管 理 部 長 倉 持 悦 夫
庶 務 経 理
庶 務 課 長 高 田 弘 義 (3)
庶 務 課 長 萩 原 和 夫 (4)
主 査 松 本 晋 (3)
主 査 贅 田 清 (4)
主 事 長 瀧 美 智 子 (3)
主 事 菊 池 久 (4)
経 理 課 長 関 野 栄 一
主 任 江 田 和 美
主 事 長 瀧 美 智 子 (4)
主 事 福 田 昭 美
主 事 腰 塚 雄 二
主 事 菊 池 久 (3)
整 理 ・ 報 告 書 作 成
資 料 部 長 中 島 利 治
資 料 部 副 部 長
兼 資 料 整 理 第 一 課 長 増 田 逸 朗
資 料 整 理 第 二 課 長 石 岡 憲 雄 (3)
専 門 調 査 員
兼 資 料 整 理 第 二 課 長 小 久 保 徹
主 任 調 査 員 瀧 瀬 芳 之
調 査 員 山 本 靖

3 調査の経過

発掘調査は昭和60(1985)年4月1日から昭和62(1987)年12月9日まで行なわれた。発掘調査対象面積は39,400m²である。

昭和60年度は唐沢川の東側2000m²の調査を行なった。大溝状のものが検出され、隣接する皿沼城との関係が注目された。しかし調査の結果、自然の流路と判明した。また6世紀初頭に噴火したとされている榛名山二ッ岳の火山灰層 (FA) が検出された。これと前後する時期の土器が少量出土しているが、遺構は検出されていない。

昭和61年度は調査区域中央を流れる水路を境にして、東西2区域に分割して調査を行なった。便宜的に東側を上敷免遺跡東(深谷バイパスA区東)、西側を上敷免遺跡西(深谷バイパスA区西)と呼称した。昭和60年度の調査区域は上敷免遺跡西の範囲内である。発掘調査は調査員を4名に増員し、2人1組でそれぞれの区域を担当した。整理・報告書作成作業も東西に分割して行なった。また遺構番号はそれぞれの区域で1番から付けているために、整理作業時において東側から新たに振り直し、特に西側の地区は大幅に変更している。

昭和61年度は東西あわせて24,300m²の調査を実施した。上敷免遺跡は水田下より発見され、周辺の現状は水田である。そのため6月下旬から9月にかけての水稻耕作の時期には、調査区域は涌水が激しく、一時は完全に水没することもしばしばであった。周辺に側溝を掘りポンプによって強制的に排水を行ないながら、水分を含んだ重い土を掘り進んだ。一方、冬季には降霜や遺構確認面・遺構の乾燥、また『赤城おろし』といわれる強い北風による土埃に悩まされた。乾燥や土埃を抑えるために水を撒きながら、移植ごとの菌がやっと立つような固い土を調査した。そのため遺構確認面の状況が非常に悪く、遺構および重複関係の平面確認は困難をきたした。

昭和62年度は引き続き、残る13,100m²を対象に東・西両区域において調査を実施した。最終的には発掘区域を分ける水路を挟んで相対することとなった。近年まれにみる水不足の年で、世間の心配をよそに、あまり涌水にも悩まされずに調査を進行することができた。しかし9月には台風の影響により、一時ではあるが調査区域が水没する憂き目にあった。また工事の関係から、現道下の調査を西区域では10月から、東区域では11月から期間を限定されて行なった。12月には東・西両区域ともすべての発掘調査が終了し、器材撤収を行なった。引渡しは、発掘調査が終了した発掘区域から順次行なわれた。

整理・報告書作成作業は平成3(1991)年4月1日から平成5(1993)年3月31日まで実施した。平成3年度は、遺物の水洗・注記および接合・復元を行ない、併行して図面整理、発掘調査時の写真(遺構写真)の整理、遺物の実測を行なった。平成4年度は遺物の接合・復元および実測が終了した後、遺構・遺物のトレース、版組、割り付け、遺物の写真撮影を行なった。9月からは原稿の執筆を開始し、3月に報告書を刊行した。

4 調査の方法

発掘調査は、一般国道17号深谷バイパスにかかる本線下り車線および北側補償道路部分に限り、対象調査区となった。そのため路線の中央部分は、調査対象外ということとなり、現状のまま保存されている。

また調査区域内に、水田等の用排水路や道路・構造物がある場合は、遺構の性格等を考慮して、関係部分についてはできる限り調査区の拡張の処置を講じた。

グリッドの設定方法は、平面直角座標第Ⅸ系に基づき、イー1グリッドが、 $X=+22,294.0\text{m}$ 、 $Y=-45,522.0\text{m}$ にあたる。これより $6\times 6\text{m}$ グリッドで、北へイ・ロ・ハ…い・ろ・は…、西へ1・2・3…の順に深谷バイパス関連の遺跡のなかで最南東に位置する原遺跡から順次グリッドを設定した。南東隅の杭を用いて $6\times 6\text{m}$ の範囲を示すこととした。上敷免遺跡において最南東に位置するグリッドはメー356で $X=+23.050\text{m}$ 、 $Y=-47.652\text{m}$ 、最北西に位置するグリッドはむー492で $X=+23.236\text{m}$ 、 $Y=-48.468\text{m}$ にあたる。また30mおきに太杭を用い、標準視準高とした。

遺構の実測は、グリッド杭を基準に、地山1m間隔の方眼を水糸で作成し、簡易遣り方によって実測を行なった。湧水が激しいため、空中写真測量は行わず、空中写真撮影を適宜実施した。

【住居跡 SJ】

新番号	旧番号
Y-1号	西79号
Y-2号	西28号
Y-3号	西31号
Y-4号	西29号
第1~155	東1~155
第156号	西81号
第157号	西82号
第158号	西83号
第159号	西84号
第160号	西89号
第161号	西90号
第162号	西91号
第163号	西92号
第164号	西88号
第165号	西86号
第166号	西87号
第167号	西85号
第168号	西80号
第169号	西122号
第170号	西不明
第171号	西77号
第172号	西70号
第173号	西69号
第174号	西68号
第175号	西75号
第176号	西74号
第177号	西76号
第178号	西67号
第179号	西66号
第180号	西71号
第181号	西72号
第182号	西73号
第183号	西65号
第184号	西62号
第185号	西61号
第186号	西96号
第187号	西63号
第188号	西59号
第189号	西64号
第190号	西58号
第191号	西57号
第192号	西52号

第193号	西53号
第194号	西54号
第195号	西55号
第196号	西56号
第197号	西46-A号
第198号	西50号
第199号	西51号
第200号	西48号
第201号	西49号
第202号	西47号
第203号	西45号
第204号	西46-B号
第205号	西44号
第206号	西43号
第207号	西112号
第208号	西39-113
第209号	西40号
第210号	西37号
第211号	西38号
第212号	西36号
第213号	西123号
第214号	西122号
第215号	西114号
第216号	西119号
第217号	西118号
第218号	西115号
第219号	西117号
第220号	西121号
第221号	西116号
第222号	西127号
第223号	西124号
第224号	西128号
第225号	西120号
第226号	西129号
第227号	西98号
第228号	西95号
第229号	西94号
第230号	西93号
第231号	西96号
第232号	西99号
第233号	西100号
第234号	西102号
第235号	西104号
第236号	西103号
第237号	西105号

第238号	西130号
第239号	西125号
第240号	西126号
第241号	西106号
第242号	西108号
第243号	西111号
第244号	西110号
第245号	西109号
第246号	西97号
第247号	西101号
第248号	西107号
第249号	西35号
第250号	西33号
第251号	西32号
第252号	西10号
第253号	西16号
第254号	西15号
第255号	西12号
第256号	西14号
第257号	西11号
第258号	西9号
第259号	西8号
第260号	西13号
第261号	西27号
第262号	西4号
第263号	西2号
第264号	西26号
第265号	西1号
第266号	西3号
第267号	西17号
第268号	西18号
第269号	西19号
第270号	西22号
第271号	西23号
第272号	西20号
第273号	西21号
第274号	西25号

【土坑 SK】

新番号	旧番号
J-1号	西76号
Y-1号	西13号
Y-2号	西99号

第1~57	東1~57
第58号	西138号
第59号	西137号
第60号	西139号
第61号	西145号
第62号	西143号
第63号	西144号
第64号	西142号
第65号	西141号
第66号	西140号
第67号	西135号
第68号	西136号
第69号	西134号
第70号	西162号
第71号	西158-A
第72号	西159号
第73号	西163号
第74号	西160号
第75号	西161号
第76号	西157号
第77号	西150号
第78号	西149号
第79号	西154号
第80号	西155号
第81号	西156号
第82号	西158-B
第83号	西153号
第84号	西152号
第85号	西151号
第86号	西132号
第87号	西131号
第88号	西126号
第89号	西130号
第90号	西128号
第91号	西124号
第92号	西125号
第93号	西123号
第94号	西119号
第95号	西120号
第96号	西114号
第97号	西115号
第98号	西116号
第99号	西117号
第100号	西118号
第101号	西103号

第102号	西104号
第103号	西102号
第104号	西112号
第105号	西111号
第106号	西110号
第107号	西108号
第108号	西106号
第109号	西105号
第110号	西121号
第111号	西107号
第112号	西109号
第113号	西113号
第114号	西122号
第115号	西133号
第116号	西18号
第117号	西17号
第118号	西16号
第119号	西15号
第120号	西14号
第121号	西19号
第122号	西10号
第123号	西9号
第124号	西11号
第125号	西12号
第126号	西2号
第127号	西5号
第128号	西4号
第129号	西3号
第130号	西6号
第131号	西7号
第132号	西8号
第133号	西1号
第134号	西100号
第135号	西89号
第136号	西73号
第137号	西75号
第138号	西64号
第139号	西65号
第140号	西88号
第141号	西80号
第142号	西79号
第143号	西81号
第144号	西82号
第145号	西77号
第146号	西26号

第147号	西27号
第148号	西28号
第149号	西25号
第150号	西24号
第151号	西93号
第152号	西94号
第153号	西92号
第154号	西63号
第155号	西62号
第156号	西61号
第157号	西60号
第158号	西55号
第159号	西58号
第160号	西56号
第161号	西57号
第162号	西59号
第163号	西86号
第164号	西87号
第165号	西98号
第166号	西96号
第167号	西97号
第168号	西101号

【井戸 SE】

新番号	旧番号
第1~6	東1~6
第7号	西8-A号
第8号	西10号
第9号	西9号
第10号	西5号
第11号	西4号
第12号	西3号
第13号	西8-A号
第14号	西7号
第15号	西6号

【集石 SC】

新番号	旧番号
第1号	東1号

【古墳 ST】

新番号	旧番号
第1号	西1号

【方形周溝墓 SL-SR】

新番号	旧番号
第1号	西2号
第2号	西1号
第3号	西3号
第4号	西5号
第5号	西4号
第6号	西7号
第7号	西8号
第8号	西30号住
第9号	西6号

【溝 SD】

新番号	旧番号
第1~15	東1~15
第16号	西8号
第17号	西16号
第18号	西17号
第19号	西15号
第20号	西9号
第21号	西12号
第22号	西10号
第23号	西7号
第24号	西11号
第25号	西6号
第26号	西2~5
第27号	西2~5
第28号	西20号
第29号	西1号
第30号	西2号
第31号	西3号

【掘立柱建物跡 SB】

新番号	旧番号
第1~5	東1~5
第6号	西5号
第7号	西1号
第8号	西2号
P-2	西72号土
P-3	西74号土
P-4	西71号土
P-5	西68号土
P-6	西67号土
P-7	西66号土
P-8	西70号土
P-9	西69号土
第9号	西3号
P-1	西48号土
P-2	西34号土
P-3	西30-33土
P-4	西78号土
P-5	西31号土
P-6	西42号土
P-7	西29号土
P-8	西41号土
P-9	西40号土
P-10	西39号土
第10号	西4号
P-1	西43号土
P-2	西45号土
P-3	西44号土
P-4	西49号土
P-5	西54号土
P-6	西53号土
P-7	西85号土
P-8	西38号土
P-9	西90-91土
P-10	西46号土
P-11	西52号土
P-12	西50号土
P-13	西47号土

Ⅱ 遺跡の立地と環境

上敷免遺跡はJR高崎線深谷駅から北北東約2.4km離れた、深谷市上敷免字入枝742番地他に所在している。北緯36°12'26"、東経139°18'00"付近に位置し、利根川の支流の小山川と福川に挟まれた自然堤防上に立地している。

深谷市は江戸時代には中山道の宿駅として栄え、室町時代には深谷上杉の根拠地でもあった。近代には金融・産業・教育に多大な業績を残した渋沢栄一を輩出している。明治20(1887)年、大寄村(現深谷市)上敷免にわが国最初の洋式レンガ工場である日本煉瓦製造株式会社が設立され、明治28(1895)年には製品輸送用の専用鉄道が日本鉄道深谷駅まで敷設されている。ここは古くから瓦の産地として知られ、利根川によって堆積された良質の土砂を原料としている。上敷免遺跡はこれらの土砂採掘の影響を受け、専用鉄道が南北に縦断していた。近年は深谷ネギの産地として知られている。また工業団地の発展や地価高騰による通勤圏の拡大などによって宅地が増加し、都市化が進展している。

深谷市は利根川と荒川が最も近接する地域に位置し、ほぼ東西に走るJR高崎線によって櫛挽台地と妻沼低地に分けられる。櫛挽台地は荒川によって形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる洪積扇状地である。現在の唐沢川付近を境にして西側の櫛挽面(標高50~80m)と東側の寄居面(標高35~65m)に分けられる。妻沼低地は利根川的作用により形成された沖積低地で、利根川やその支流によって自然堤防と後背湿地が発達している。「島」地名(大塚島・矢島・内ヶ島・血洗島等)が多いことから自然堤防の発達が推定されるが、その多くは水田化が進められ、現在は平坦な田園風景を醸し出している。上敷免遺跡は利根川の支流である小山川と福川に挟まれた自然堤防上の微高地上に立地しているものの、水田下より検出されている。

深谷市では昭和56・57年度に遺跡詳細分布調査が行なわれ、総計240ヶ所におよぶ遺跡の存在が確認されている。櫛挽台地には上唐沢川・押切川・唐沢川・戸田川などによって開析された谷筋に密集している。櫛挽面では河川が発する扇央部から扇端部にかけて遺跡が密に存在し、寄居面では扇央部に遺跡が散在しているものの、妻沼低地と接する扇端部に密集している。妻沼低地では利根川およびその支流の自然堤防と推定される微高地上に分布している。

深谷市内では旧石器時代の遺跡は未確認で、また縄文時代草創期も櫛挽台地扇端部の深谷市東方城跡から尖頭器が検出されているのみである。縄文時代早期から前期の遺跡は若干数であるのに対して、中期から後期前半にかけては遺跡数が飛躍的に増加している。これらの遺跡は主に櫛挽台地の扇央部から扇端部に集中し、扇端湧水や河川の水産資源の確保等と関連しているものと理解されている。

縄文時代後期後半になると遺跡数が激減し、櫛挽台地と妻沼低地の境界付近や妻沼低地の自然堤防上に立地している。深谷市深谷町遺跡(20)・深谷市本郷前東遺跡(11)・深谷市原遺跡(16)・深谷市前遺跡(33)などがある。縄文時代晩期も後期後半と同様で、深谷市新屋敷東遺跡(12)などがある。また利根川に近い沼尻地区でも縄文時代後・晩期の遺跡の存在が確認されている。上敷免遺跡からは第5発掘区谷部の包含層から縄文時代後・晩期の土器がまとめて出土している。

弥生時代になると、水稻耕作にともなって低地への進出が目覚ましくなる。弥生時代（特に古墳時代後期）以降の遺跡は妻沼低地の微高地上および低地に臨む台地先端部に多く存在している。生産様式とその基盤に結びついた居住あるいは生業の場の選択の状況を窺うことができる。

弥生時代中期の著名なものとして行田市小敷田遺跡があり、ほかには深谷市皿沼城跡周辺、深谷市上野台坂東付近で遺跡が確認され、岡部町樋詰遺跡（5）からは土器片が出土している。また熊谷市横間栗遺跡（36）・妻沼町飯塚南遺跡・岡部町四十坂遺跡（19）などで須和田式期の再葬墓が検出されている。上敷免遺跡（10）からは住居跡4軒、再葬墓2基が発掘されている。

弥生時代後期には深谷市明戸東遺跡（14）・熊谷市東沢遺跡・行田市池守遺跡から吉ヶ谷式土器が出土している。特に明戸東遺跡では二軒屋式系の土器が相伴している。これは本庄市薬師寺遺跡や群馬県境町三ッ木遺跡などでも確認され、地域間の交流関係が窺われる。

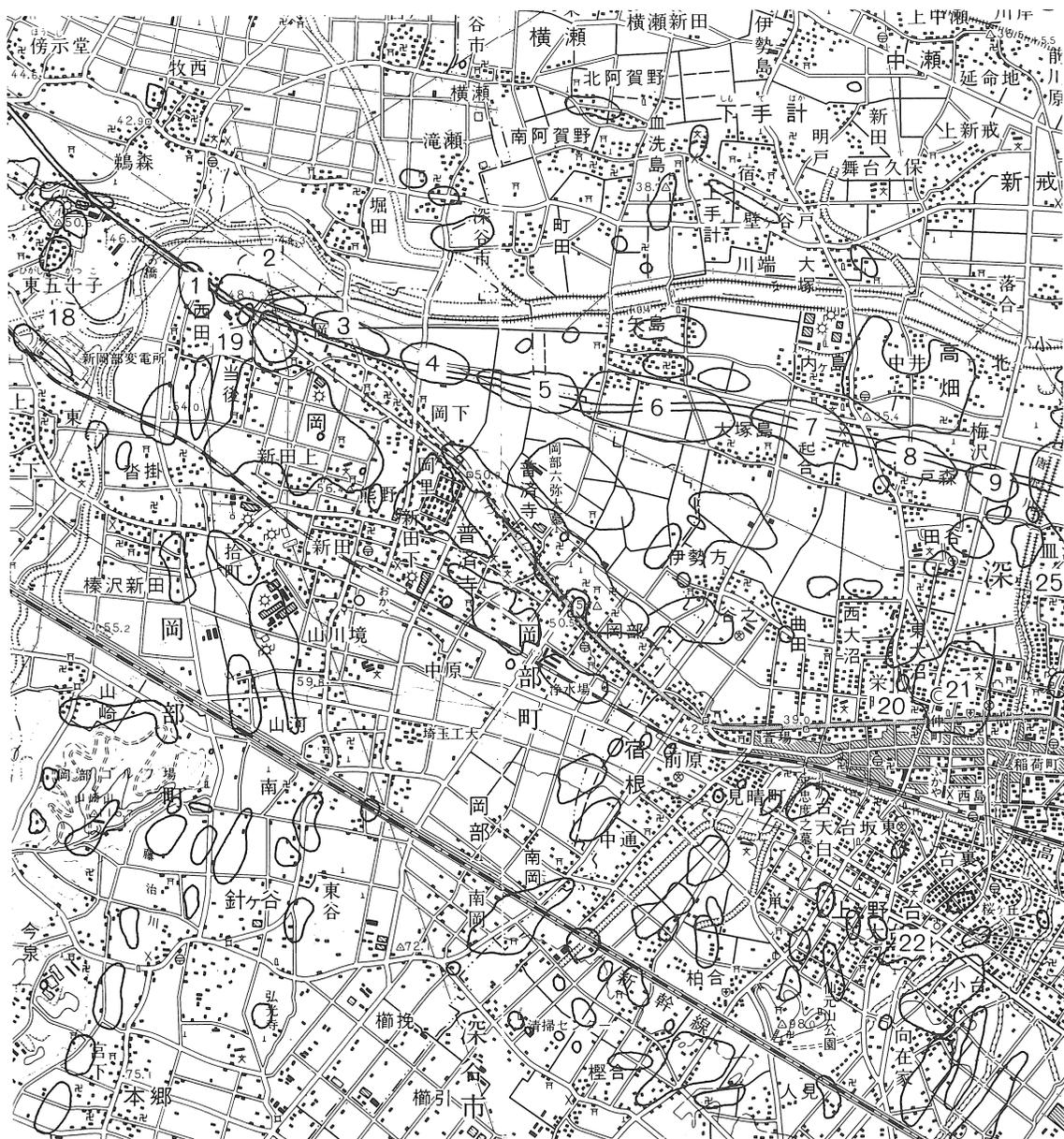
古墳時代の前期には集落の大規模な展開をみることはできないものの、一方では東海系土器に代表される外来系土器の出土が認められる。この時期の遺跡として深谷市起会遺跡（7）・深谷市森下遺跡（9）・本郷前東遺跡・明戸東遺跡・深谷市宮ヶ谷戸遺跡（15）・深谷市清水上遺跡・熊谷市根絡遺跡（35）・妻沼町弥藤吾新田遺跡などがあげられる。また深谷市戸森松原遺跡（8）・深谷市東川端遺跡（27）などでは方形周溝墓、さらに深谷市清水上遺跡（34）では畠状遺構が調査されている。上敷免遺跡では住居跡5軒、方形周溝墓9基、古墳跡（円墳）が発掘されているが、この時期の古墳はほかには確認されていない。

妻沼低地において、集落が大規模に展開するのは古墳時代中期後半以降である。この段階に急激に遺跡数が増加しており、低地の開発が飛躍的に進展したことが窺われる。古墳時代後期を中心とする遺跡は、岡部町砂田前遺跡（4）・岡部町六反田遺跡（18）・本郷前東遺跡・新屋敷東遺跡・原遺跡・東川端遺跡・深谷市居立遺跡（32）・深谷市城北遺跡（31）・深谷市柳町遺跡（30）・深谷市砂田遺跡（29）などがあげられる。上敷免遺跡もこの時期を中心に展開している。さらに多くの滑石製の玉類や模造品が出土し、これらの工房跡も検出されている。

一方、この地域には大型前方後円墳が築造されていないことは特筆される。5世紀末の帆立貝形前方後円墳の熊谷市横塚山古墳（38）を除き、数十基単位の古墳群が櫛挽台地の先端部や自然堤防上に造営されているのみである。櫛挽台地上の深谷市木の本古墳群（23）、妻沼低地の自然堤防上の深谷市上増田古墳群（17）などが、6世紀から8世紀初頭にかけて形成されている。これらの古墳群から埴輪が採集されており、櫛挽台地上の深谷市割山埴輪窯跡群（22）などとの関連が目される。

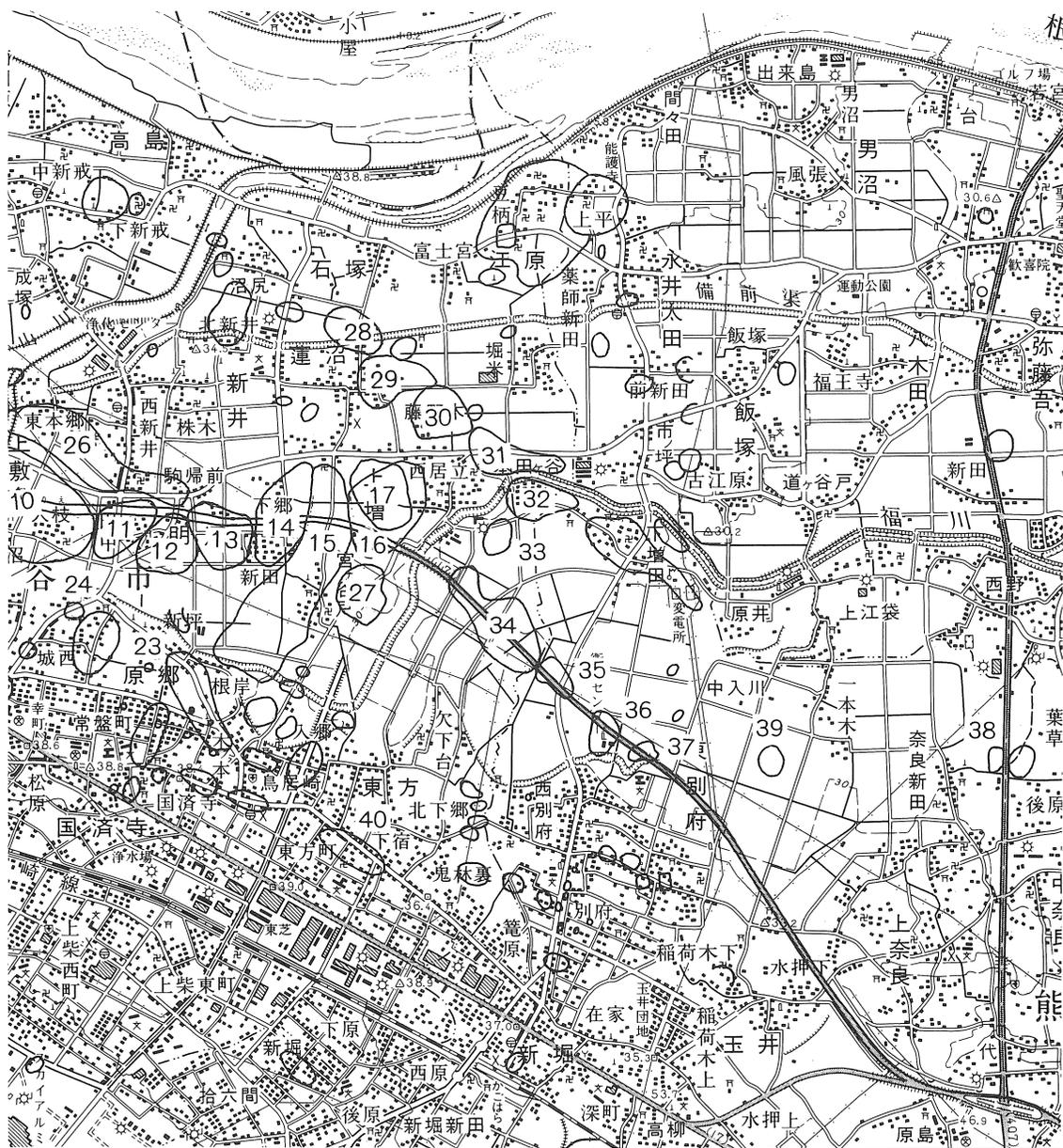
古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、伸縮しながらも奈良・平安時代へ継続されている。前代以来の竪穴式住居を主体に少数の掘立柱建物によって構成されている。砂田前遺跡・新屋敷東遺跡・明戸東遺跡などがあげられ、東川端遺跡からは伝世された6世紀前葉の馬鐸が奈良時代の溝より出土している。上敷免遺跡も継続して集落が営まれ、掘立柱建物跡や井戸跡、土器焼成坑なども発掘されている。また上敷免遺跡と埋没谷を挟んだ北側には、深谷市上敷免北遺跡（26）が所在する。深谷市教育委員会の調査により、10世紀頃の集落が確認されている。

この地域も奈良時代になると律令制に組み込まれていく。熊谷市別府条理遺跡（39）などが調査



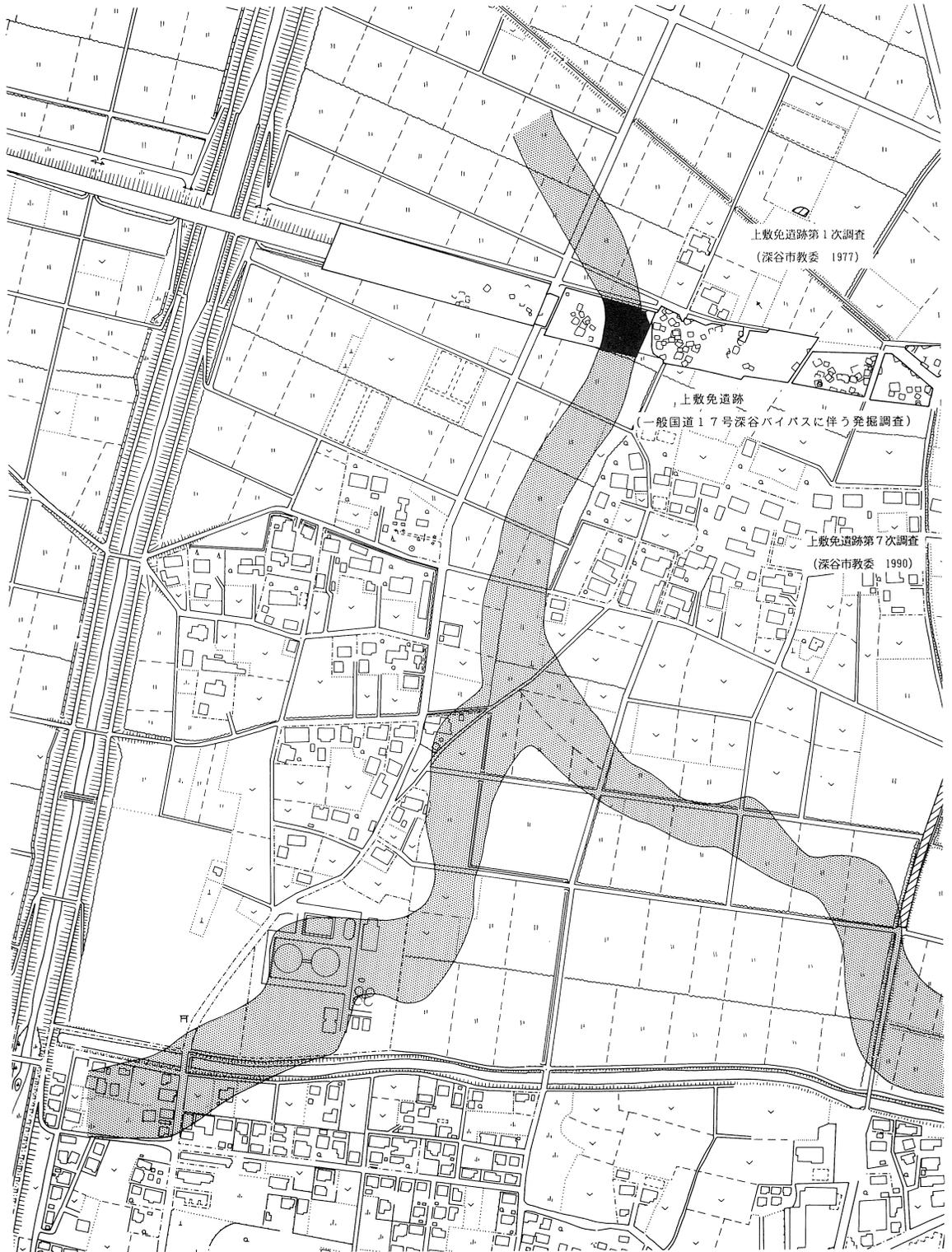
第1図 周辺の遺跡

- | | | |
|----------|-----------|--------------|
| 1 岡遺跡 | 8 戸森松原遺跡 | 15 宮ヶ谷戸堀ノ内遺跡 |
| 2 原ヶ谷戸遺跡 | 9 森下遺跡 | 16 原遺跡 |
| 3 滝下遺跡 | 10 上敷免遺跡 | 17 上増田古墳群 |
| 4 砂田前遺跡 | 11 本郷前東遺跡 | 18 六反田遺跡 |
| 5 樋詰遺跡 | 12 新屋敷東遺跡 | 19 四十坂遺跡 |
| 6 矢島南遺跡 | 13 新田裏遺跡 | 20 深谷町遺跡 |
| 7 起会遺跡 | 14 明戸東遺跡 | 21 深谷城跡 |

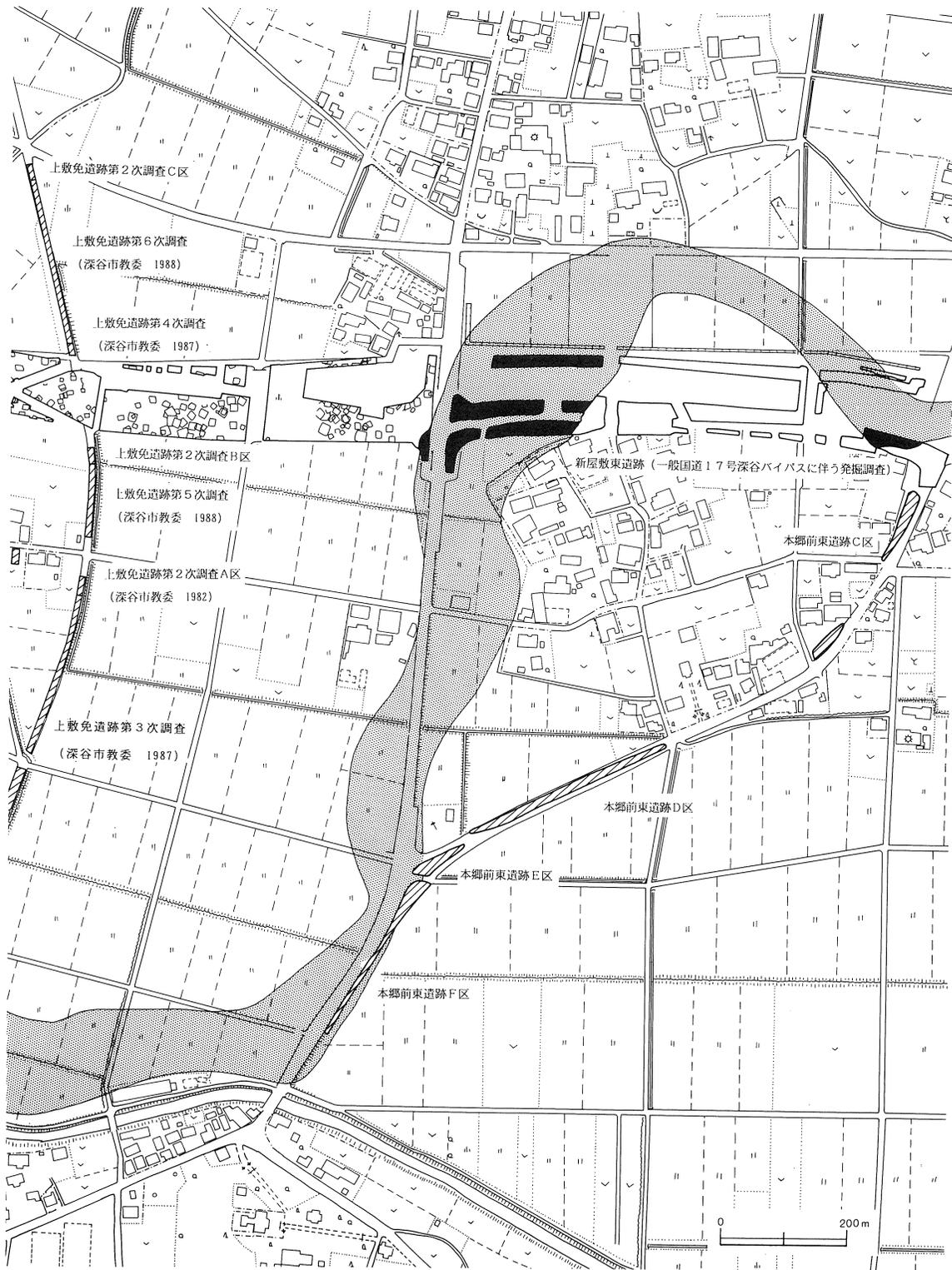


(1/50,000)

- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 22 割田埴輪窯跡群 | 29 砂田遺跡 | 36 横間栗遺跡 |
| 23 本の木古墳群 | 30 柳町遺跡 | 37 関下遺跡 |
| 24 幡羅太郎館跡 | 31 城北遺跡 | 38 横塚山古墳 |
| 25 皿沼城跡 | 32 居立遺跡 | 39 別府条里遺跡 |
| 26 上敷免北遺跡 | 33 前遺跡 | 40 中宿遺跡 |
| 27 東川端遺跡 | 34 清水上遺跡 | |
| 28 ウツギ内遺跡 | 35 根絡遺跡 | |



第2図 遺跡周辺の地形



(1/5,000)

されている。特に上敷免遺跡の地域は古代の幡羅郡と榛沢郡の境界付近と推定されている。上敷免遺跡の南端から約300mに位置している延喜式内社楡山神社は幡羅郡の最西部にあたとされている。古代の行政区画にあてはまるものではないが、江戸時代には上敷免村は榛沢郡に属している。また幡羅郡と榛沢郡との郡界は旧唐沢川の流路であった可能性を指摘されており、この流路は深谷バイパスの発掘調査で確認された新屋敷東遺跡（西端）と上敷免遺跡（東端）とを分割している埋没谷に想定されてもいる。この埋没谷が広範囲にわたって調査されなければ明確ではないが、幡羅郡と榛沢郡との郡界がここに求められる可能性も高いのではないだろうか。さらに1991年に岡部町教育委員会によって中宿遺跡（40）が調査され、7世紀末から8世紀代の掘立柱建物跡群が検出されている。これは榛沢郡の正倉と推定され、古代の郡衙遺跡の解明が期待される。

上敷免遺跡では、「噴砂」の痕跡が確認されている。噴砂とは大地震の際の大きな振動によって地下の砂層が液状化し、これが地盤の割れ目にそって地表へ噴出するもので、地表面のズレや地盤沈下を引き起こしている。近年の大地震においてもみられ、建造物の倒壊などの大きな被害を与えている。発掘調査においては土層断面では縦方向の砂層、平面的には地割れ状に走る砂層として観察でき、多くの遺構に影響が及んでいる。中には形状が大きく歪められているものもある。噴砂は埼玉県北部の深谷市・岡部町・熊谷市・行田市などの遺跡発掘調査でも確認されており、大規模な地震災害に見舞われていることが窺われる。この大地震の年代はまだ確定されていない。上敷免遺跡では10世紀後半の住居跡が噴砂を掘り込んで造られていることから、これ以前とすることができる。古記録によると、『類聚国史』では弘仁9（818）年、『日本三代実録』では元慶2（878）年に地震災害が武蔵国を襲っている。このどちらかの大地震による可能性もあるが、古記録に残っていない地震を想定する必要もあろう。また複数の地震による被害も考える必要もあろう。今後、考古学的に年代を確定することができれば、地質学・地震学における意義は大きい。

平安時代末以降、中世武士団の武蔵七党に象徴される。この地域には中世城郭や在地武士の居館等が構築され、深谷市深谷城跡（21）や深谷市皿沼城跡（25）、深谷市幡羅太郎館跡（24）など、多くの中世の遺跡が残されている。

Ⅲ 縄文・弥生時代の遺構と遺物

上敷免遺跡から検出された縄文時代の遺構は土坑1基（SKJ-1）と集石1基（SC-1）である。土坑は第6発掘区から、集石は第1発掘区からともに単独で存在している。出土遺物から、土坑の時期は後期初頭の称名寺式期、集石は中期中葉の加曾利EⅢ式期と考えられる。

弥生時代の遺構は住居跡4軒と土坑2基がある。住居跡のうち3軒、Y-2～4号住居跡は第6発掘区西部に近接しているが、Y-1号住居跡は第3発掘区、土坑（SKY-1）は第4発掘区から単独で検出された。すべて弥生中期に属する遺構で、Y-3・4号住居跡からは土器が豊富に出土している。なお、Y-2～4号住居跡に囲まれるように位置している第8号方形周溝墓の覆土からも多量の弥生土器が検出され、住居跡出土資料と接合している。

遺構として確認されたのは以上であるが、その他にも第5発掘区において検出された、南北に延びる谷部に堆積した包含層から、後晩期の無文土器を中心とした縄文土器が大量に出土しており、土偶や耳栓などの土製品や石器類・玉類なども出土している。

また、本遺跡で調査された古墳時代以降の遺構、270軒余の住居跡やその他のおびただしい遺構の覆土から、縄文後期～弥生中期に属する土器片や石器類が相当量検出されている。これらは発掘調査時における認識をはるかに越えた量であり、なかには縄文晩期最終末～弥生時代初頭に属する土器など注目すべき遺物も多く含まれていた。そこで、これらを住居跡等の混入遺物として処理するのはあまりにも不適切と考え、上敷免遺跡におけるグリッド出土の遺物として一括して整理、報告することにした。

出土土器の記載に関しては、遺構出土の土器も含め、以下のように類別して行うことにする。

I群 縄文中・後期の土器

- 1類 加曾利E式
- 2類 称名寺式
- 3類 堀之内式
- 4類 加曾利B式
- 5類 曾谷式
- 6類 瘤付土器

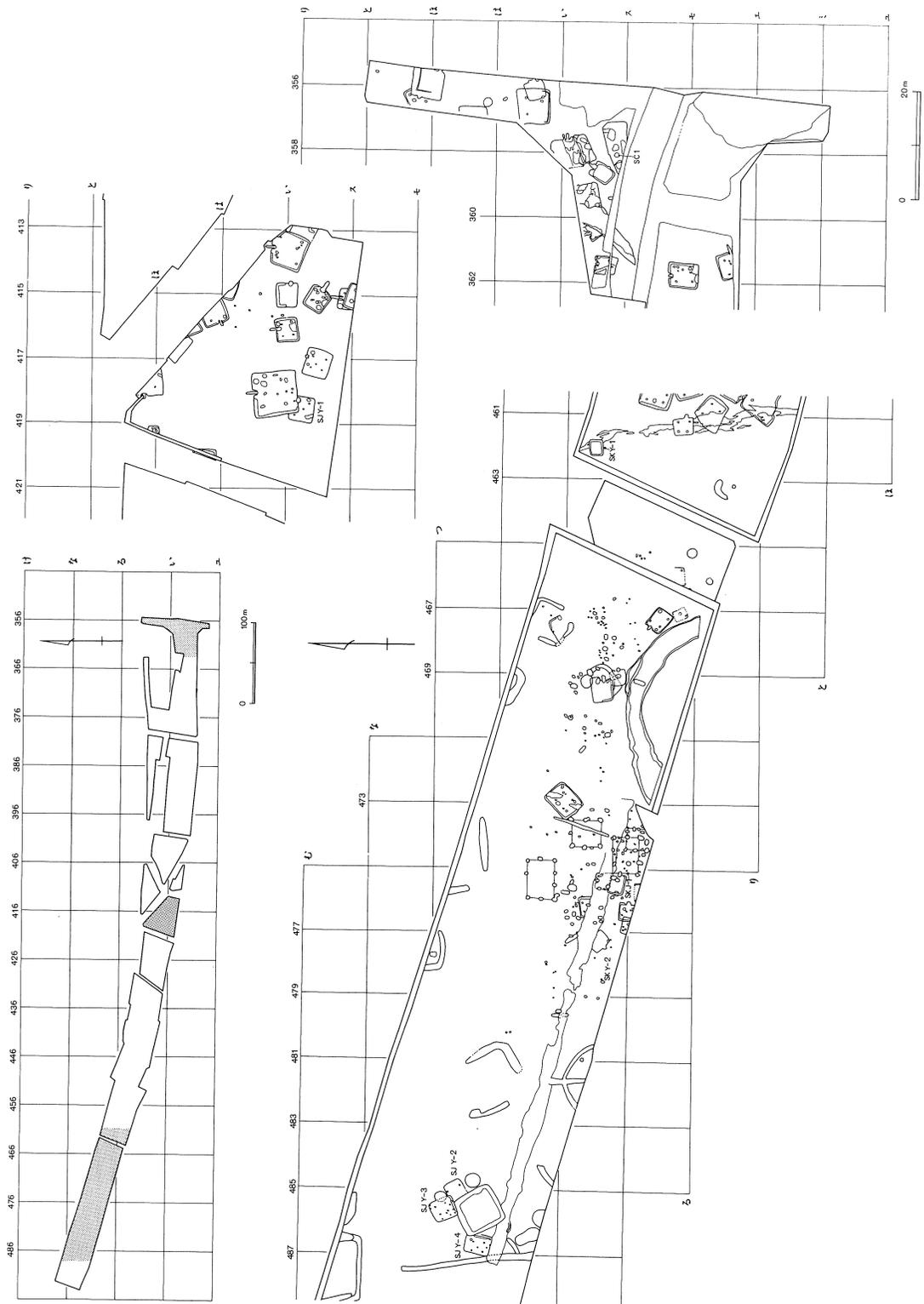
II群 安行精製系

- 1類 安行1式
- 2類 安行2式
- 3類 安行3a式
- 4類 安行3b式
- 5類 安行3c式
- 6類 東北系

III群 紐線文系

- 1類 安行1式

- 2類 安行2式
- 3類 安行3a式
- IV群 無文土器口縁部に隆帯を貼付する系統のもの
 - 1類 口縁部の隆帯が1段のもの
 - 2類 口縁部の隆帯が2段のもの
 - 3類 口縁部の隆帯が多段のもの
 - 4類 口縁部に沈線をもつもの
- V群 無文土器
 - 1類 口縁部に装飾をもたないもの
 - 2類 口縁部に装飾をもつもの
 - 3類 甕形土器
 - 4類 壺形土器
- VI群 浮線文・沈線文系土器
 - 1類 浮線文系の浅鉢形土器
 - 2類 浮線文系の甕形土器
 - 3類 沈線文を主体とするもの
- VII群 口縁に突帯文を有する土器
- VIII群 条痕文施文土器
 - 1類 条痕文を有する粗製土器
 - 2類 水神平式系統の土器
- IX群 撚糸文施文土器
- X群 縄文施文土器
- XI群 底部
 - 1類 安行式
 - 2類 無文
 - 3類 条痕文施文
 - 4類 撚糸文施文
- XII群 弥生初頭の土器
 - 1類 遠賀川式
 - 2類 口縁部に沈線を巡らすもの
- XIII群 弥生中期の土器
 - 1類 須和田式
 - 2類 栗林式
 - 3類 東北系
 - 4類 縄文施文の甕形土器



第3図 縄文・弥生時代遺構位置図 (1/1,200)

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土坑

J-1号土坑 (第4図)

第6発掘区、わー475Gridに位置する。掘立柱建物跡のピット群に交じって検出された。規模は47×44cm、深さは28cmで、方形に近い形を呈している。掘り込みは急である。

覆土から縄文土器が数点出土している。すべてI群2類称名寺式土器の深鉢である。1はスパード状文が配される胴くびれ部直下の部分、2は胴部「J」字状文の先端部と解される。

(2) 集石

第1号集石 (第4図)

第1発掘区、スー358Grid、発掘区東端の谷部近くに位置する。規模は85×83cmで、ほぼ正円形に近い。深さは18cmで、掘り込みはゆるやかである。覆土には大小の礫がまばらに混在していた。

土器はわずかに1点、覆土1層上面から出土した。縦方向に隆帯を配する深鉢胴部破片である。I群1類加曾利EⅢ式と推定される。

2 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

Y-1号住居跡 (第5図)

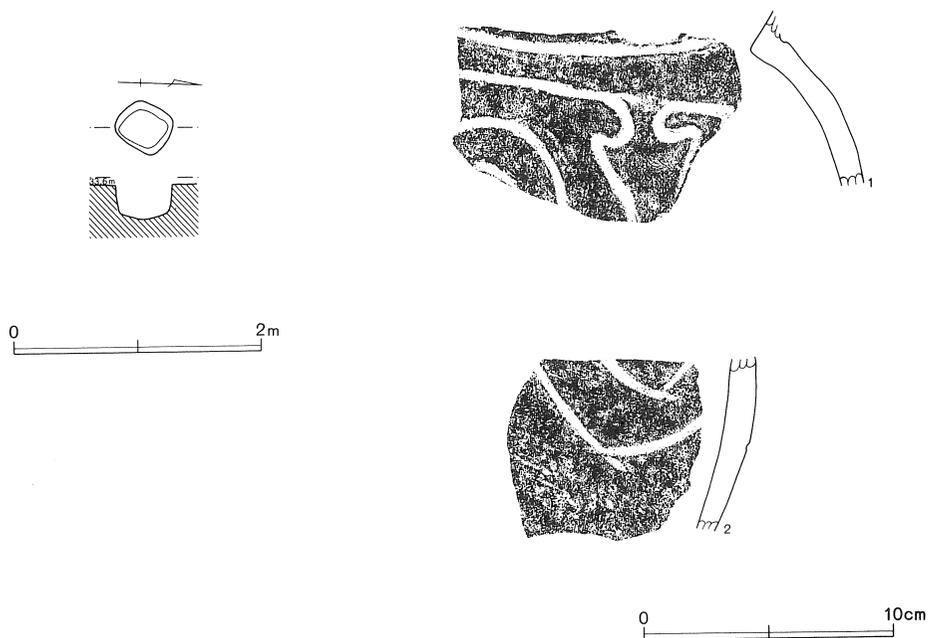
第3発掘区、いー418Gridに位置し、北東部を第169号住居跡に切られている。長軸4.5m、短軸4.4mの不整長方形を呈し、北方向にやや狭まっている。長軸の傾きはN-6°-E、床面までの深さは28cmである。

炉は住居のほぼ中央やや南寄りに設けられている。径26cmの円形プランで、10cm程掘り込まれており、底面および壁面は硬く焼けている。柱穴は4基検出された。ピット2は浅いが、その他は50cm前後の掘り込みがある。また、東壁際に沿って2基の土坑が検出されたが、本住居跡にともなう確証はない。

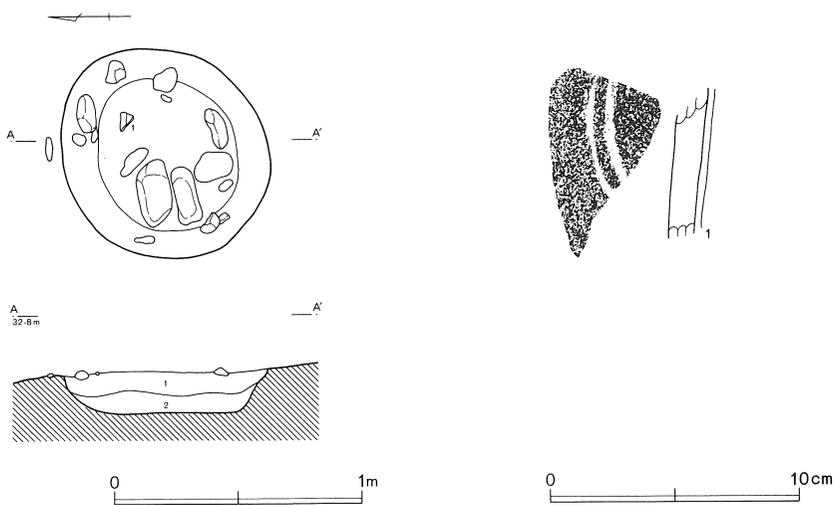
覆土から出土した遺物の量は少なく、それも切り合う住居跡のものであろう土師器が主体であったが、その中にはかろうじて3点の弥生土器が含まれていた。

Y-1号住居跡出土遺物 (第6図)

1は平行する沈線が施文されるものである。2と3は同一個体の壺形土器の胴部と考えられ、横走る沈線と波状文の間に刺突を充填している。地文はいずれも縄文LRである。Ⅲ群1類。



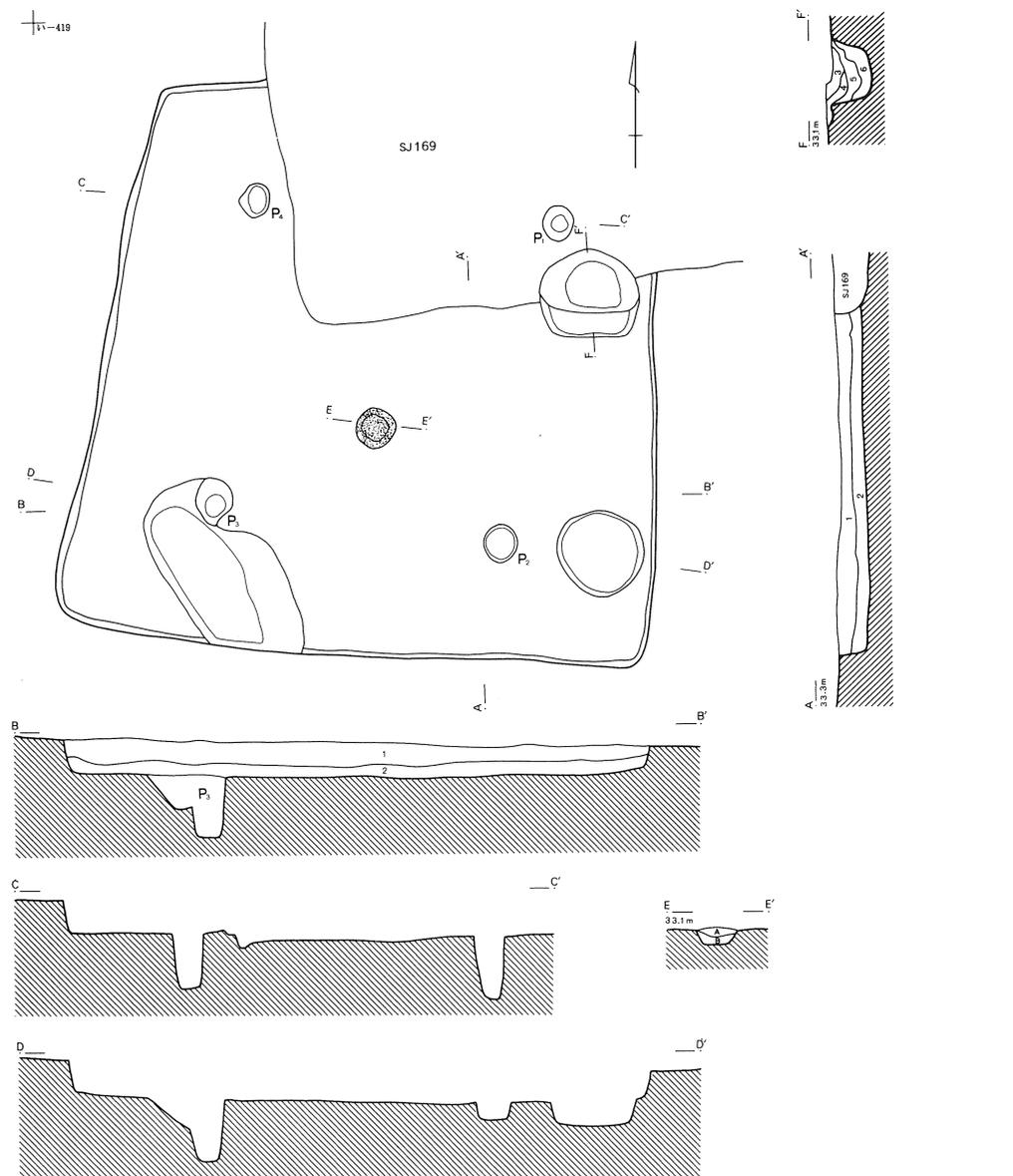
SC-1



第1号集石土坑

1. 黄褐色土 焼土・炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ややあり。
2. 黄褐色土 きめ細かく、ローム粒子・ローム土主体とする。しまり・粘性強い。若干の炭化物粒子を含む。

第4図 土坑と出土遺物

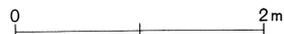


Y-1号住居跡

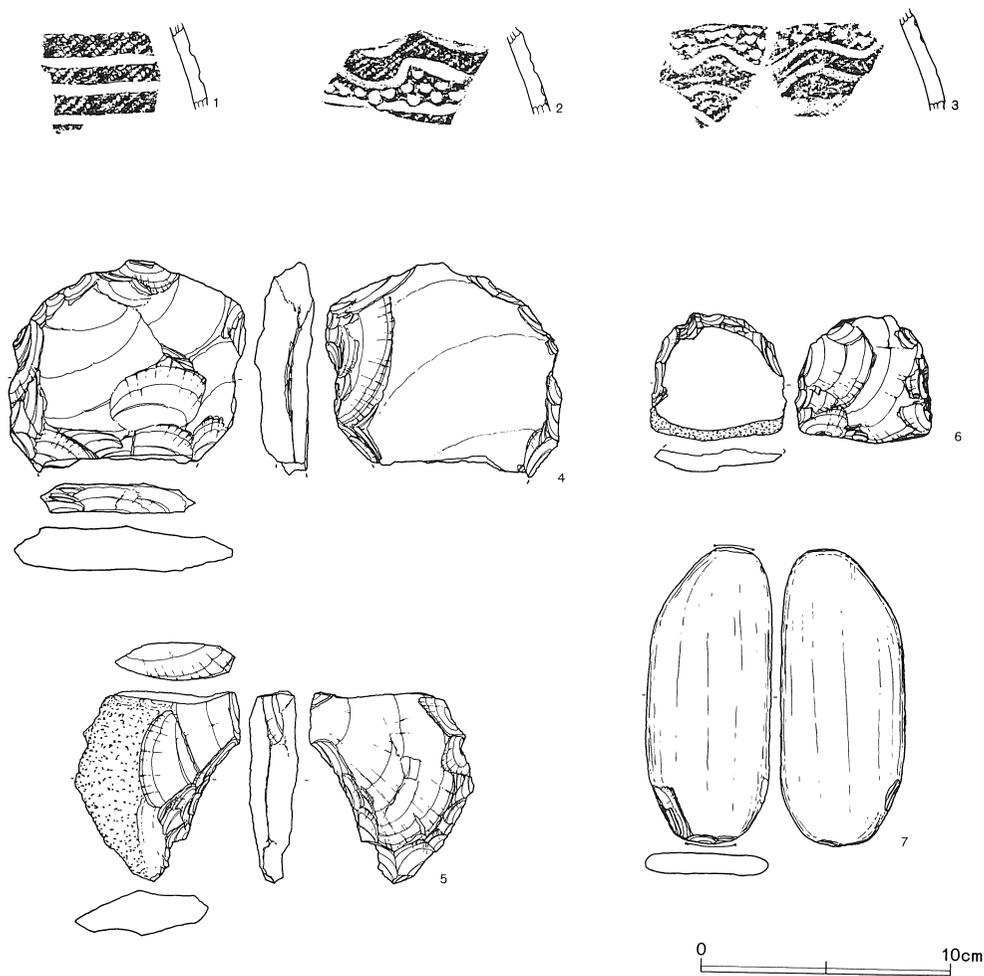
1. 黒褐色土 黄褐色土粒子（径3～5mm）を全体的に多く含み、炭化物粒子を少量含む。粘性なく堅緻。
2. 暗黄褐色土 茶褐色土を主体に黄褐色土ブロック（径1～2cm）を多量に、炭化物粒子をまばらに含む。粘性なく堅緻。
3. 茶褐色土 黄褐色土ブロック（径1～2cm）を部分的に含む。炭化物粒子を少量含む。
4. 黒褐色土 黄褐色土粒子（径3～5mm）を多量に、焼土粒子を少量含む。
5. 暗黒褐色土 基本的に2層と同じで、焼土ブロック・炭化物粒子を多量に含む。粘性あり、しまり弱い。
6. 暗茶褐色土 黄褐色土ブロック（径1～2cm）を少量、同粒子を多量に含む。やや粘性があり、堅緻。

Y-1号住居跡炉跡

- A. 黒褐色土 焼土粒子（径2～3mm）・炭化物粒子（径3～5mm）を多量に含む。外縁部分が硬く焼ける。
- B. 赤褐色土 焼土層。炭化物粒子を少量含む。底面が硬く焼ける。



第5図 Y-1号住居跡



第6図 Y-1号住居跡出土遺物

石器は4点出土している。4は分銅形打製石斧の基部中央で下半部を欠損する。現状の大きさは、長さ8.5cm、幅9.4cm、厚さ2.4cm、重さ214.4gを計り、石材はホルンフェルスである。5は粗製の削器である。長さ7.7cm、幅6.7cm、厚さ2cm、重さ99.4g。石材はホルンフェルスである。6は正面表皮を剝落しているが削器と考えられる。長さ5.2cm、幅5.2cm、厚さ1cm、重さ32.9g。石材はホルンフェルスである。7は敲石。長さ11.9cm、幅5cm、厚さ1cm、重さ109.2g、石材は片岩である。

Y-2号住居跡（第7図）

第6発掘区、その484・485Gridに位置し、第8号方形周溝墓に切られている。Y-3号住居跡とも切り合うが、新旧関係を明らかにし得なかった。検出された東壁は長さ3.2m、床面までの深さは13cm、東壁の傾きはN-58°-Eである。炉の痕跡は認められなかった。柱穴は2基壁寄りに対峙して検出されている。深さは15cm前後と浅い。

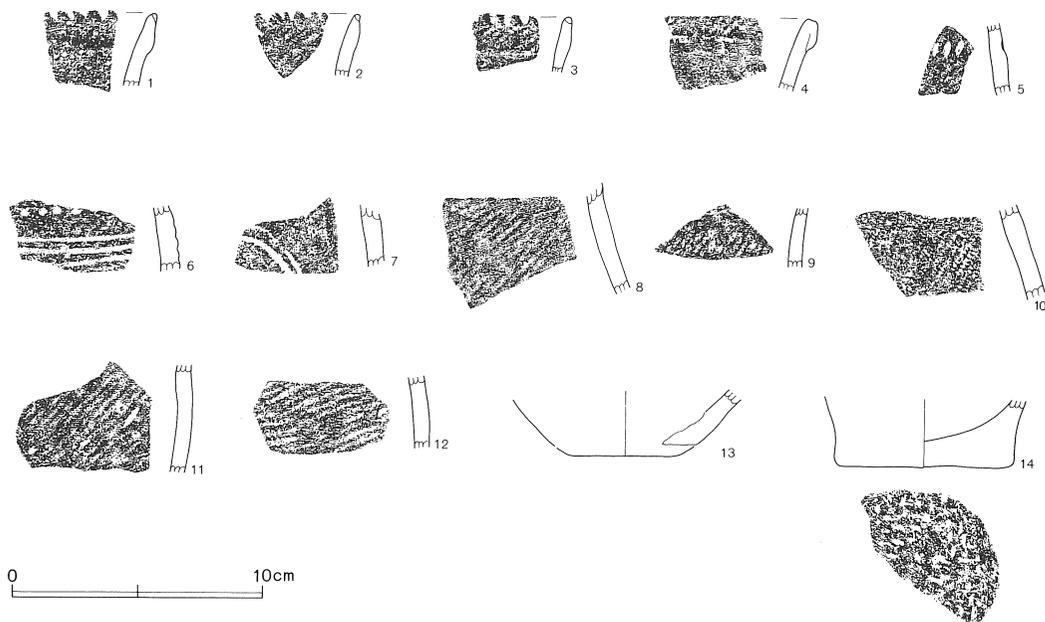
出土遺物は少なく、すべて小破片である。床面直上から出土したものはほとんどない。

Y-2号住居跡出土遺物（第8図）

XIII群1類に属する。1～4は口縁を肥厚ないしは折り返して縄文帯としたもの。1～3は口唇部に刻みを施す。表面の風化が著しいため明瞭ではないが、地文は縄文LRと思われる。5～7は刺突もしくは沈線のある壺頸部～胴部破片である。8～12は縄文のみの破片。すべて縄文LR。13・14は底部破片である。14は底径推定7cmで、底部圧痕を有する。



第7図 Y-2号住居跡



第8図 Y-2号住居跡出土遺物

Y-3号住居跡 (第9図)

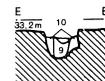
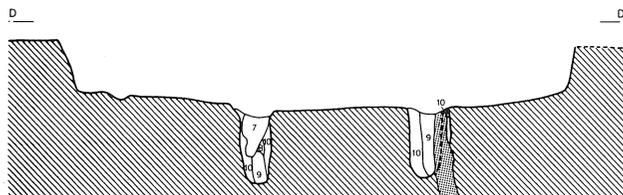
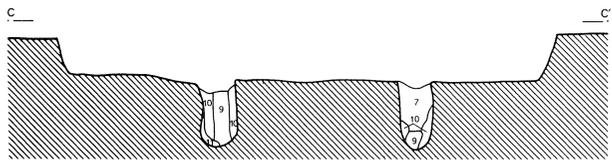
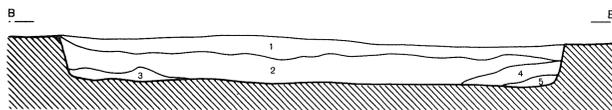
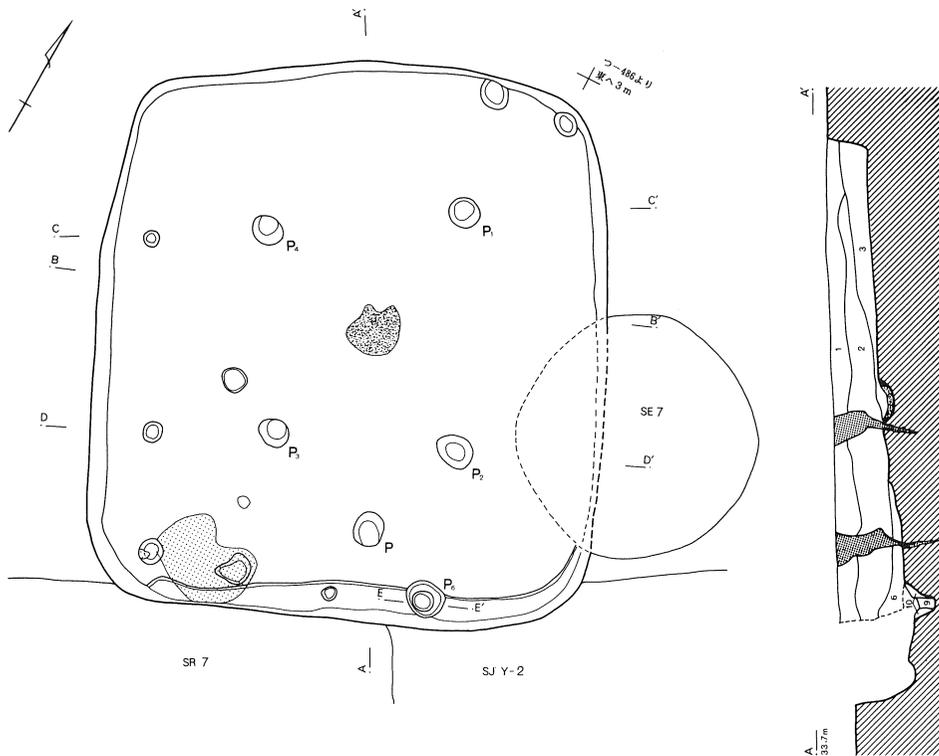
第6発掘区、その485Gridに位置し、Y-2号住居跡、第8号方形周溝墓、第7号井戸と切り合っている。形態は隅丸方形で、噴砂による影響を若干受けている。規模は長軸4.5m、短軸4.1m、傾きはN-28°-Wである。北側のプランは明瞭であったが、南側は切り合いもあり、きわめて不鮮明であった。床面までの深さは40cm前後である。

炉は住居のほぼ中央に設けられている。幅39cmで、浅く掘り込まれている。柱穴は4基が支柱穴で、深さ50~60cmである。壁溝は南壁のみ検出されたが、掘り込みは浅い。

遺物は全体に散在しているが、炉跡上面から壺形土器が1個体(第11図1)出土している。接合関係は第10図のとおりである。主としてXIII群1類と4類の土器が出土している。

Y-3号住居跡出土遺物 (第11~13図)

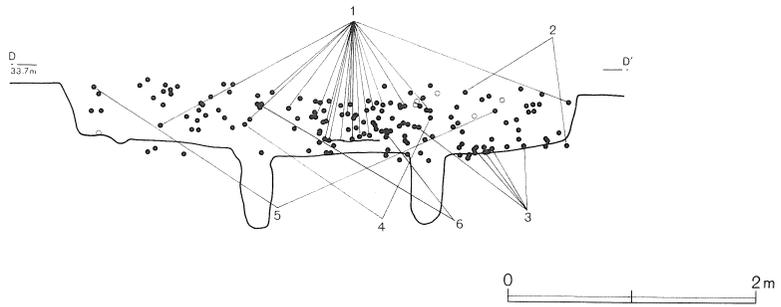
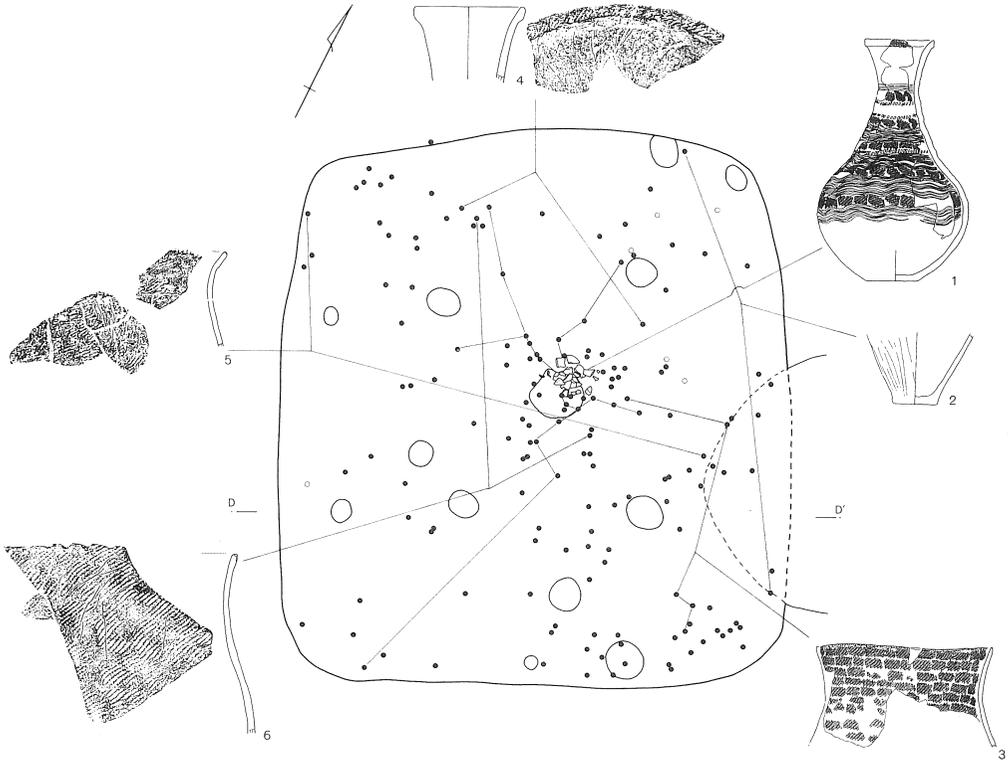
第11図 1は推定口径11cm、胴部最大径24.3cm、底径8.2cm、器高38.6cm。胴部の最大径が中程にくる壺形土器である。第8号方形周溝墓覆土出土の資料と接合した。口縁は肥厚し縄文帯となる。頸部上部の文様は平行沈線と刺突の間に縄文を施し、無文帯を挟んで、下部は刺突と波状文の間に縄文帯を配している。胴部は波状文と縄文が交互に配される。胴部下半は無文。波状文は基本的には3条を1単位としており、上から下へ施文されたと考えられる。縄文はLRの横施文である。底部に木葉痕を残す。色調は黒褐色~にぶい黄橙。残存率は70%である。XIII群1類。2は推定口径28cm。縄文施文の甕形土器である。口唇部に棒状施文具による押捺痕が不規則に施される。縄文はLR。色調はにぶい黄橙で一部に黒斑が認められる。XIII群4類。3は底径7cm。木葉痕のある



Y-3号住居跡

1. 黒色土 黄褐色土粒子を多量に含む。白色粒子を含む。
2. 黒褐色土 黄褐色土混入。粘性あり。
3. 黄褐色土 硬質。
4. 黒色土 黄褐色土微粒子を多量に含む。
5. 黒色土 黄褐色土ブロックを混入する。
6. 黒色土 灰色粘土をわずかに含む。粘性あり。
7. 暗黒色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭化物粒子を多く含む。
8. 淡黄褐色土 粘性の強い粒子の細かい層で、地山のブロック層。
9. 淡黒褐色土 粘性の強い粒子の粗い層で、炭化物は含まれない。
10. 淡褐色土 粘性の大変強い粒子の粗い層で、固くしまっている。
11. 黒色粘土 粘性の大変強い粘土層。薄く貼ったような状態。

第9図 Y-3号住居跡

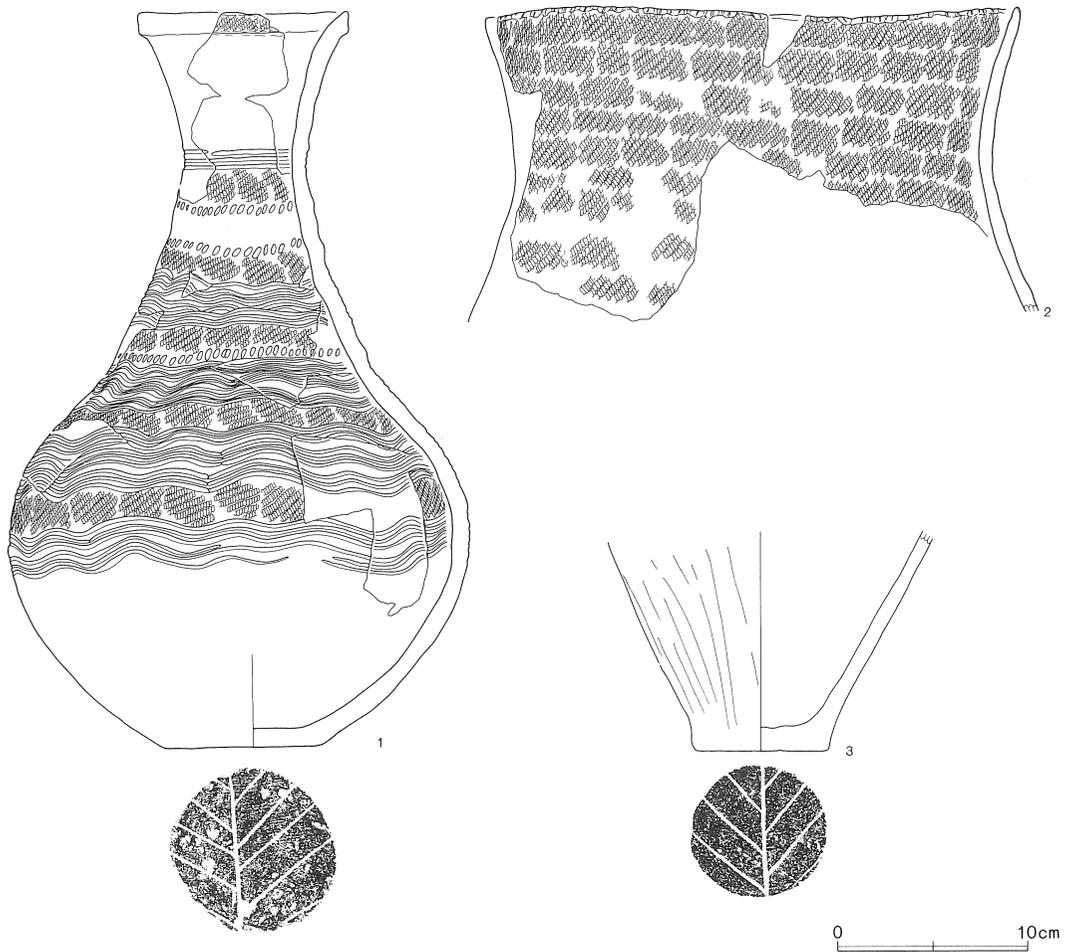


第10図 Y-3号住居跡遺物出土状況（白丸は石）

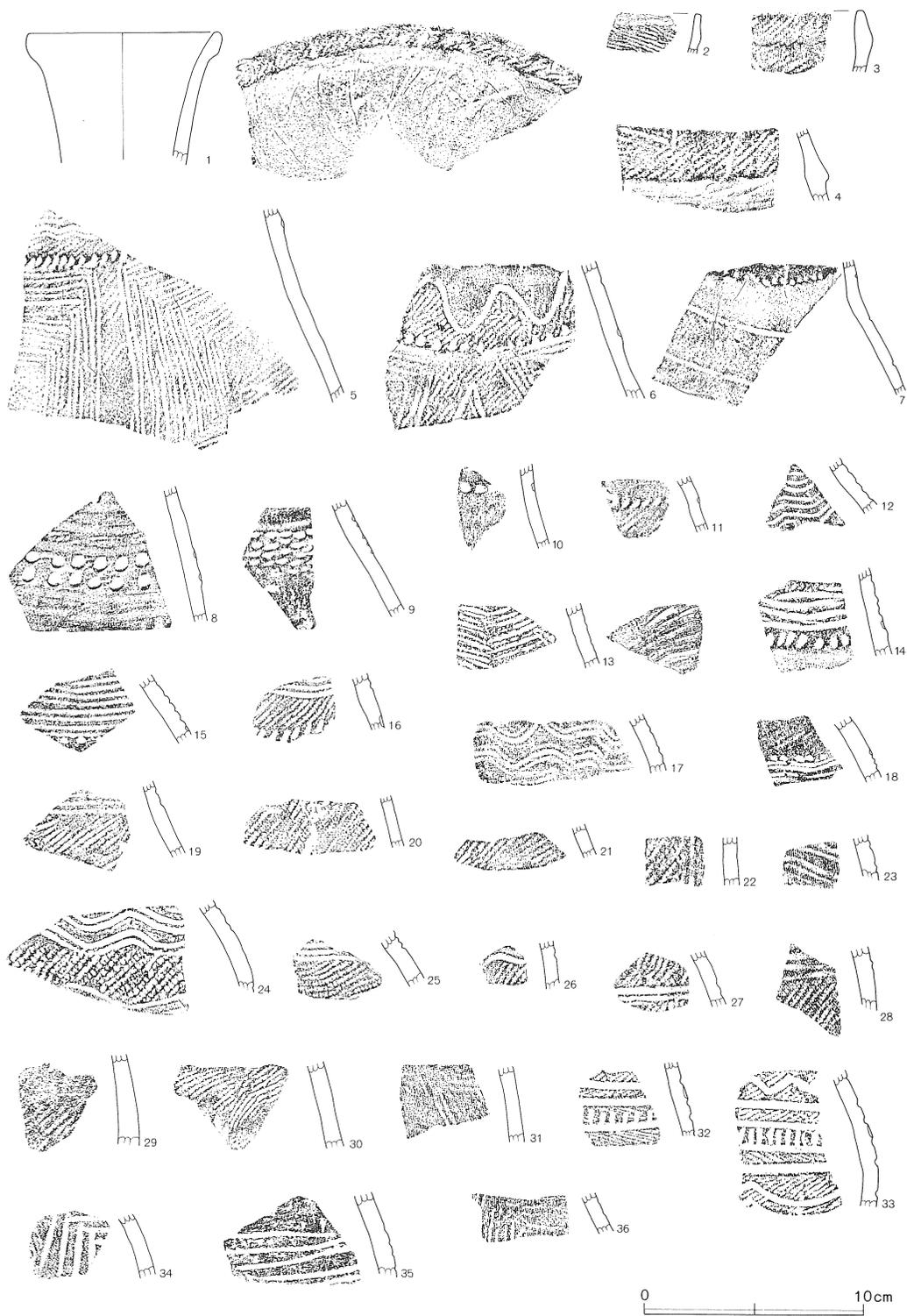
甕底部下半である。縦方向の調整痕を残す。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には白色透明粒子などの混入が多い。

第12図 1～3は壺口縁部である。1は口縁が肥厚して縄文帯となる。口径推定9cm。2と3は口縁がわずかに肥厚するもので、2には燃糸が施されている。4以下は壺頸部～胴部にかけての破片である。5は重矩形文を施す。地文は縄文LR。13は鋸歯状の条痕文を施す。内面にも条痕がみられる。16・18および24～28は第11図1と同じ文様構成をもつ壺の破片であろう。21には赤彩が施されている。32・33は刻目状の沈線を施すもの。XIII群2類か。施される縄文はほとんどがLRだが、30は無節Lもしくは前々段反撚(LRr)である。

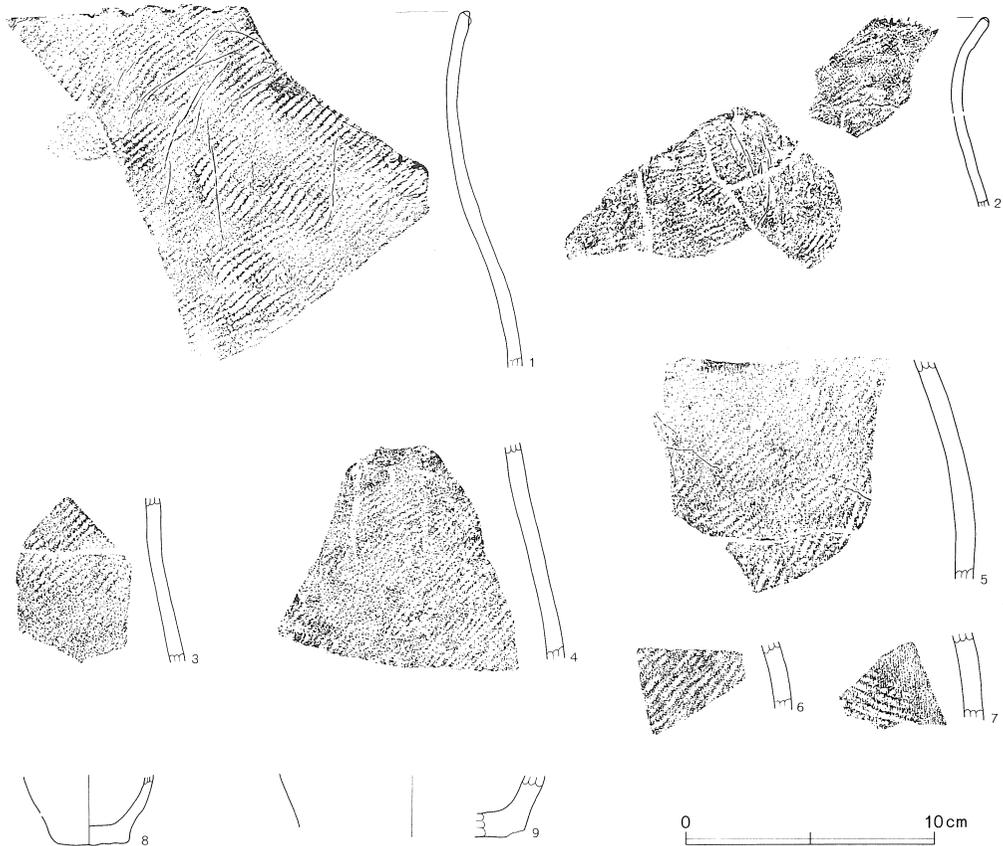
第13図 1～7は縄文LR施文の甕形土器もしくはそれに類するであろう破片である。XII群4類。1の口唇部には棒状施文具による押捺痕が疎に施される。2は薄手の土器で、口唇部には刻みをもつ。8・9は底部破片である。



第11図 Y-3号住居跡出土遺物(1)



第12图 Y-3号住居跡出土遺物(2)



第13図 Y-3号住居跡出土遺物(3)

Y-4号住居跡(第14図)

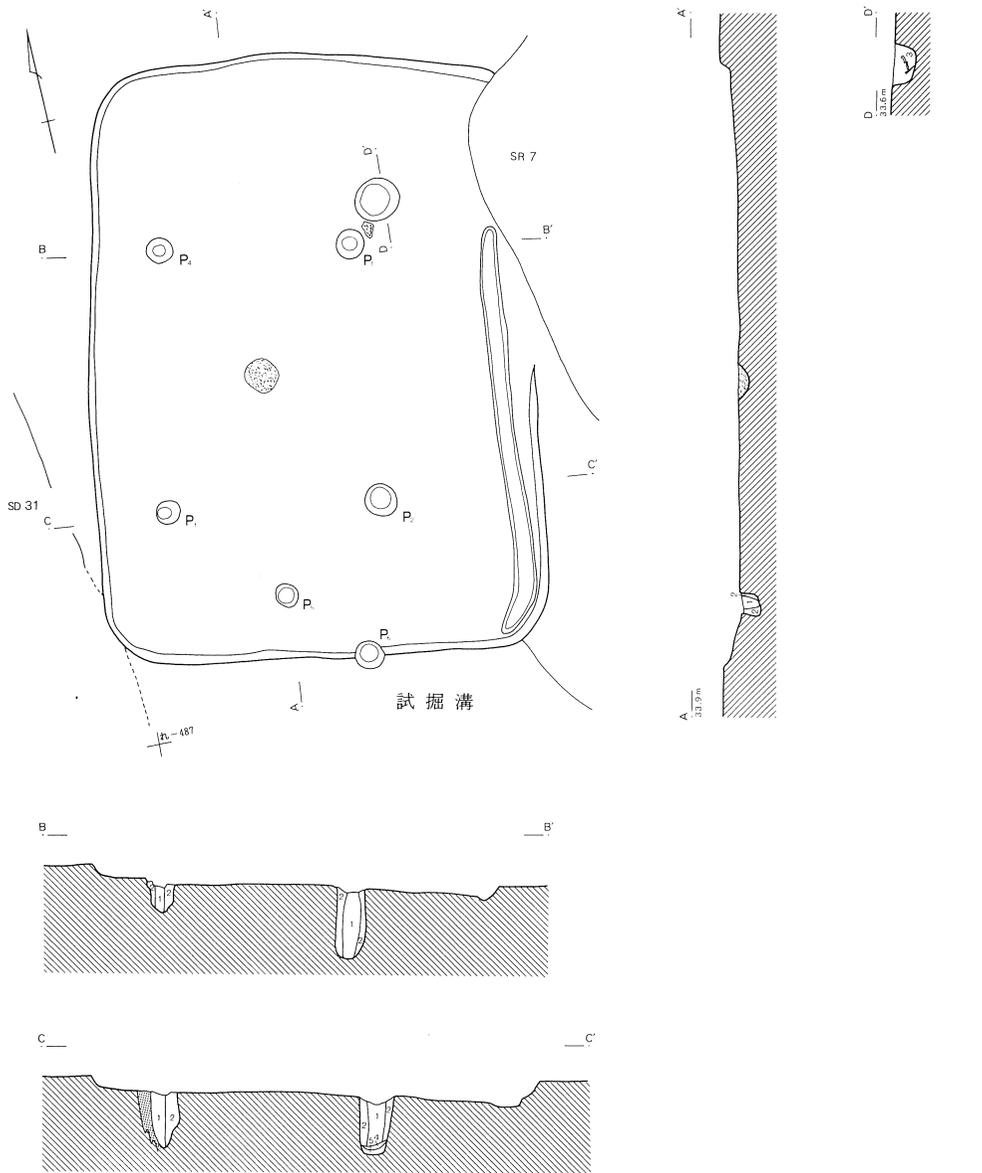
第6発掘区、れー486Gridに位置し、第8号方形周溝墓に切られる。西壁のプランは不明瞭である。規模は長軸4.9m、短軸3.6mで、噴砂によりやや歪んだ隅丸長方形をしている。長軸の傾きはN-8°-E、床面までの深さは約10cm、覆土には黒色土が堆積しており、東側に向かって堆積を増していた。

炉は住居の中央やや西寄りに設けられている。幅30cmで、浅く掘り込まれている。支柱穴は1~4の4基で、ピット4は24cmとやや浅いが、その他は45~60cmの深さである。柱痕も明瞭に観察することができた。壁溝は東壁のみ検出されたが、非常に浅い。

遺物は主に黒色土に含まれていた。第15図にその接合関係を示したが、ピット1の周辺を中心として壺形土器(第16図1)が出土している。土器はおおむねⅢ群1類に比定されよう。

Y-4号住居跡出土遺物(第16~18図)

第16図 1は口径10.5cm、胴部最大径30cm、底径7cm、器高47.3。口縁部は肥厚し縄文帯となり、重矩形文が連続して施される。頸部上半は刺突の間に平行沈線と縄文が充填され、無文帯を挟



Y-4号住居跡

1. 暗黒色土 粘性の大変強い粒子の粗い層で、粘性の強い淡灰色土を多量に含む。炭化物を含む。
2. 淡黄褐色土 淡茶色の砂粒状の土を含む。
3. 黒色土 粘性の弱い粒子の粗い層で、大変粗い炭化物粒子を多量に含む。
4. 淡灰褐色土 粘性の強い固くしまった層。柱下部の変形土層。
5. 淡黄褐色土 2層とほとんど変わらないが、炭化物を少量含む。

0 2m

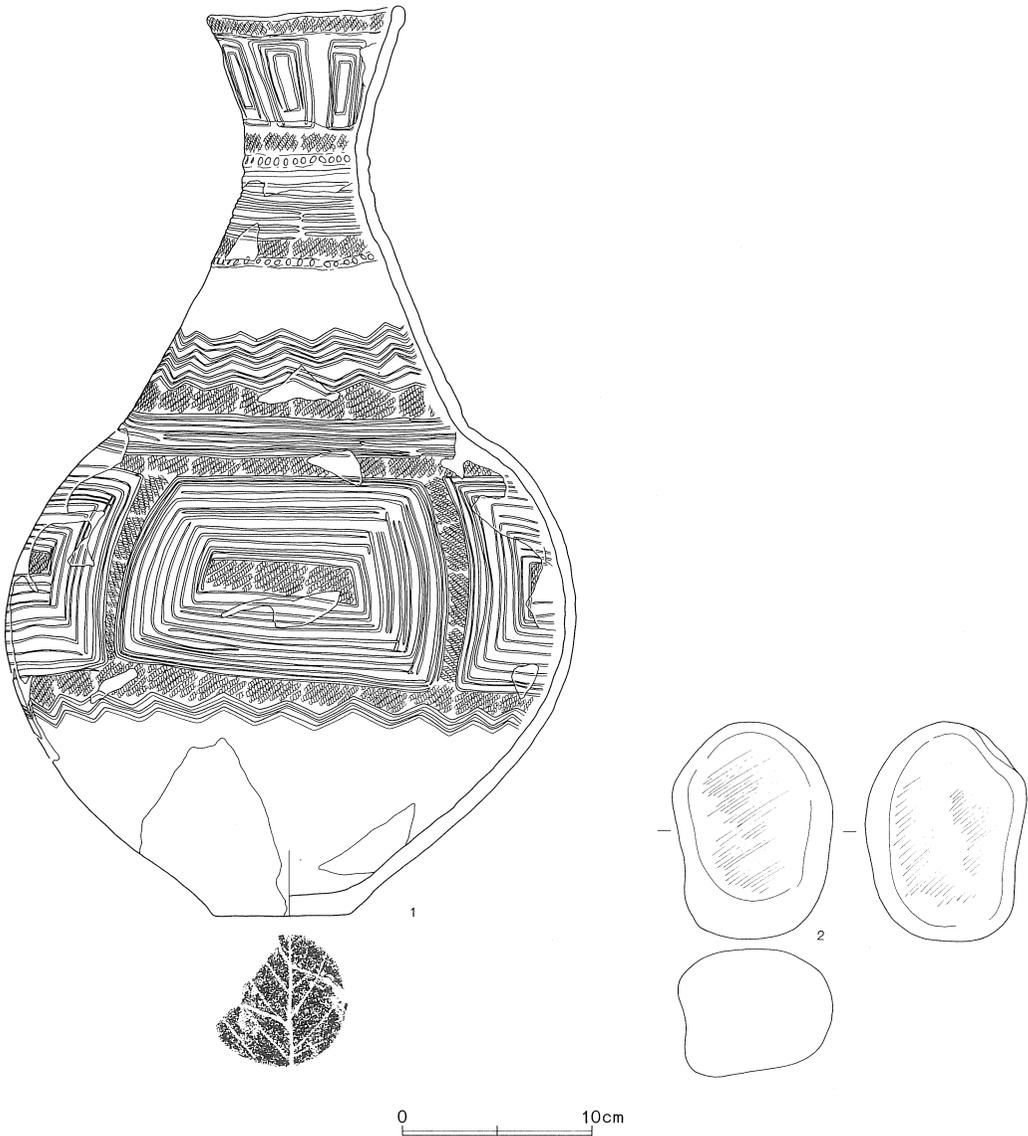
第14図 Y-4号住居跡



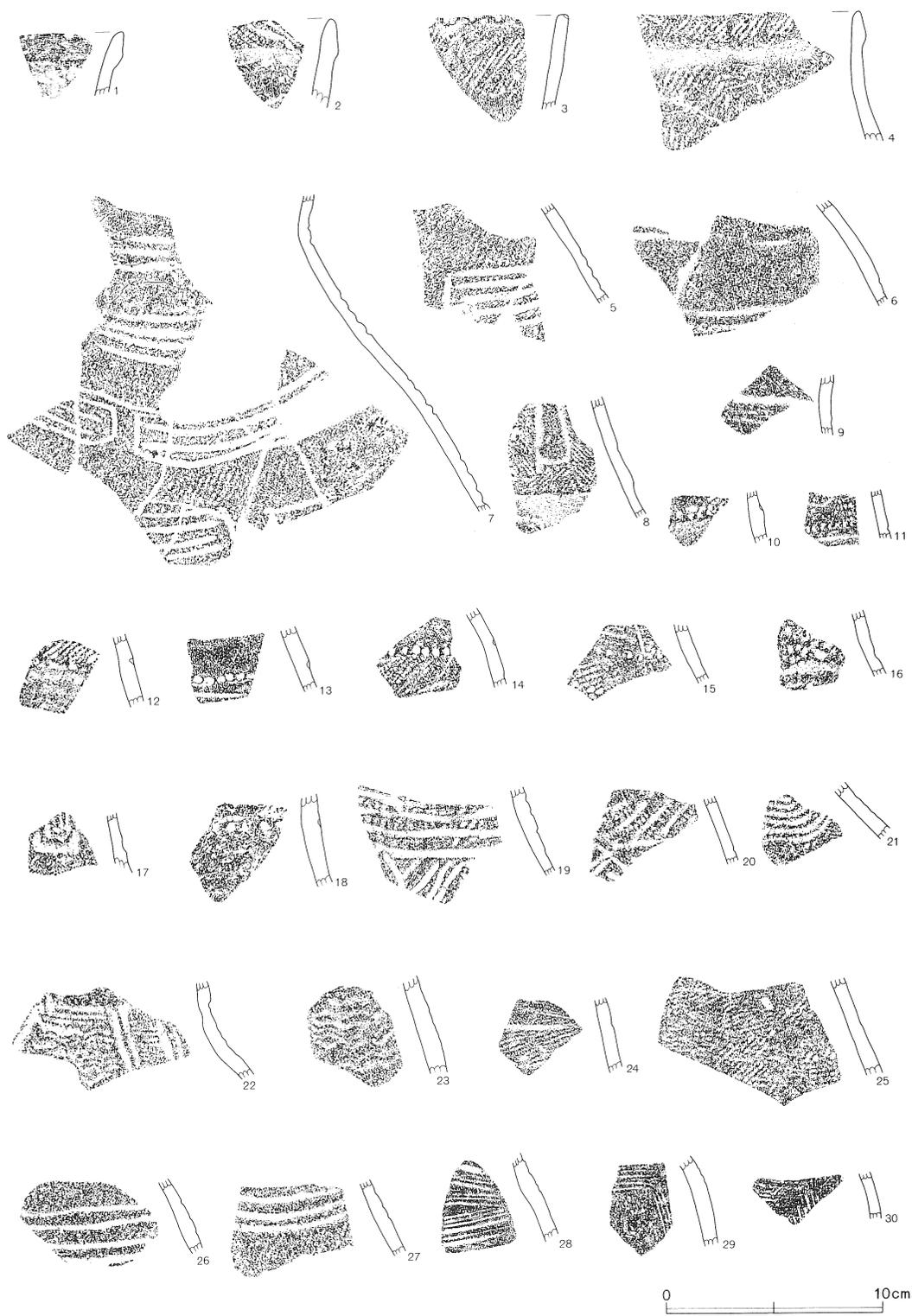
第15図 Y-4号住居跡遺物出土状況（白丸は石）

んで下半には鋸歯状文が施されている。胴部には4単位の重矩形文が配される。地文は縄文LR、胴部下半は無文である。底部には木葉痕が残る。色調はにぶい黄橙で、一部に黒斑がみられる。胎土は混入物が多く、特に赤色粒子の量が多い。残存率は70%である。2は被熱した磨石である。長さ11.4cm、幅8.5cm、厚さ6.7cm、重さ944.2g。石材は花崗岩である。

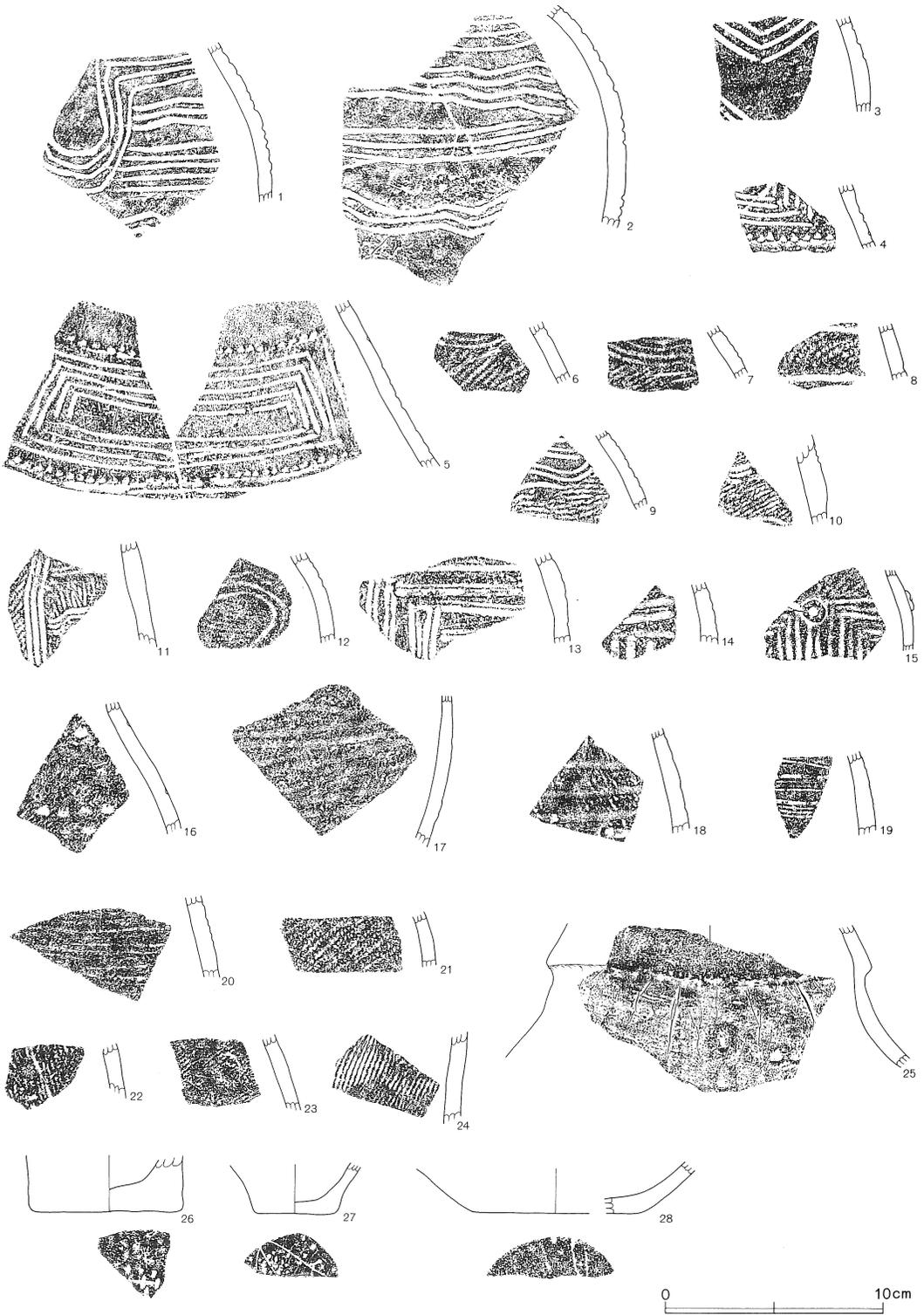
第17図 1・2は壺口縁部である。ともに肥厚するが、1は無文、2には縄文RLが施される。3・4は甕口縁部である。3の口唇部には棒状施文具による押捺痕が施される。XIII群4類か。4は肥厚する口縁をもつ。ともに地文は縄文LRである。5～7は同一個体の壺形土器。流水文状のモチーフを配している。地文は縄文LR。26・27も同系統のものであろう。8～21は壺頸部破片。



第16図 Y-4号住居跡出土遺物(1)



第17图 Y-4号住居跡出土遺物(2)



第18图 Y-4号住居跡出土遺物(3)

刺突を施すものが多い。22・23は同一個体か。区画内に細かい波状文をあしらう。25には羽状の縄文が施されている。

第18図 1・2は同一個体の壺胴部である。沈線が横走するが、一部丸く下がる。4と5も同一の壺頸部下半の破片である。重矩形文の上下に刺突を施している。9～11の地文は前々段反撚（L R r）か。10と11は同一個体であろう。3条を1単位とした沈線を縦横に施す。15は重矩形文？の中心に円形貼文を配する。ⅩⅢ群2類。16は連続する施文具の押圧文を施す。17～20は沈線が施される破片である。19は3条を1単位としている。21～24は縄文のみの破片。24は前々段反撚（L R r）か。他はL Rである。25は無文の壺頸部と推定される。26～28は底部破片。26には網代痕が、他の2点には木葉痕が残る。

第8号方形周溝墓覆土（第19図）

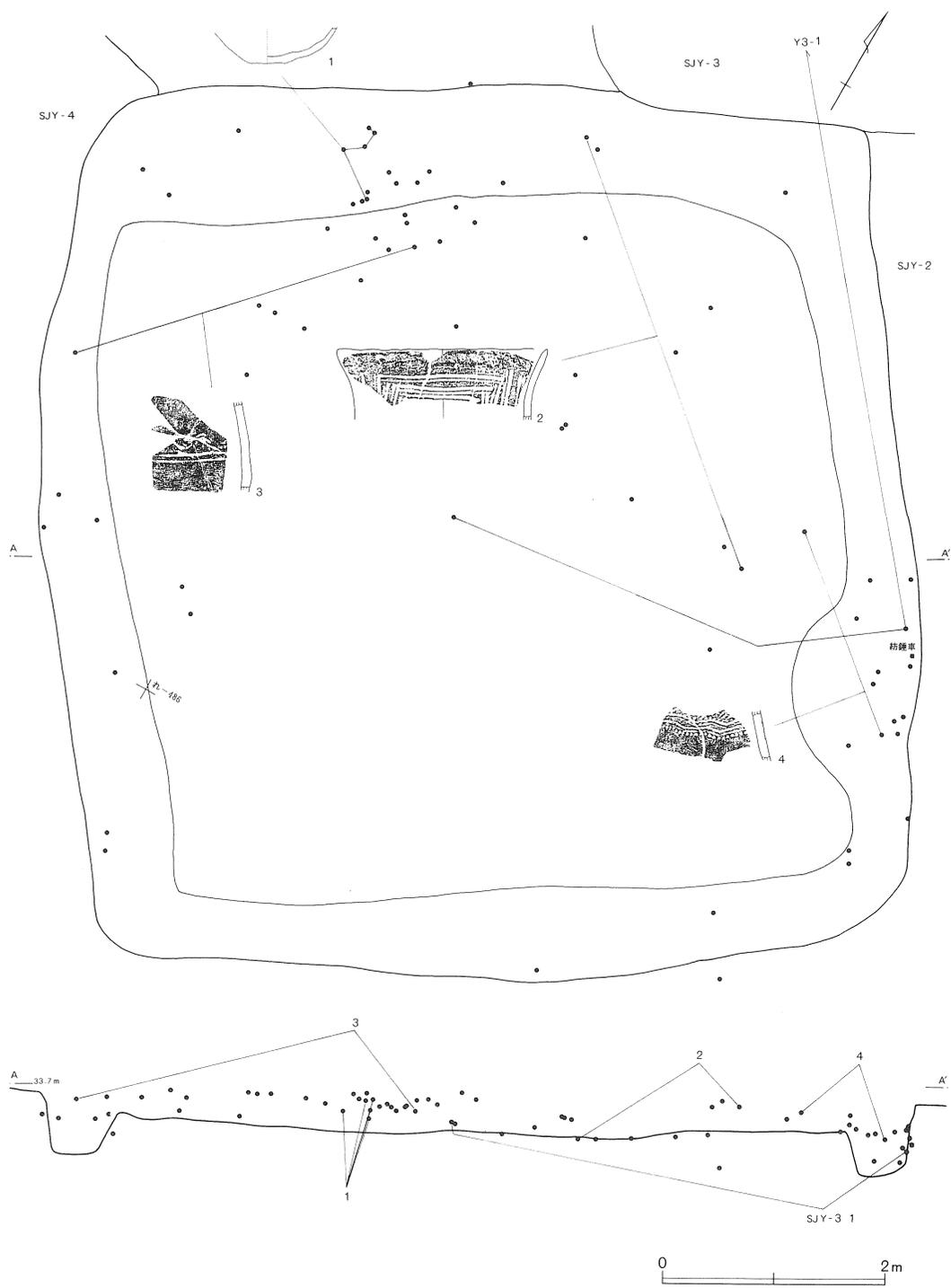
第8号方形周溝墓は、第6発掘区た～そ—484～486Gridに位置し、Y-2～4号住居跡に囲まれるように構築されているが、覆土の黒褐色土中から多くの弥生土器が出土している。覆土には一部攪乱を受けたあたりもあり、住居跡出土資料との接合関係もみられることから、これらの遺物は周囲の住居跡に帰属する可能性が強いものとし、ここにまとめて紹介することにした。主としてⅩⅢ群1類に属する遺物である。

第8号方形周溝墓覆土出土遺物（第20～22図）

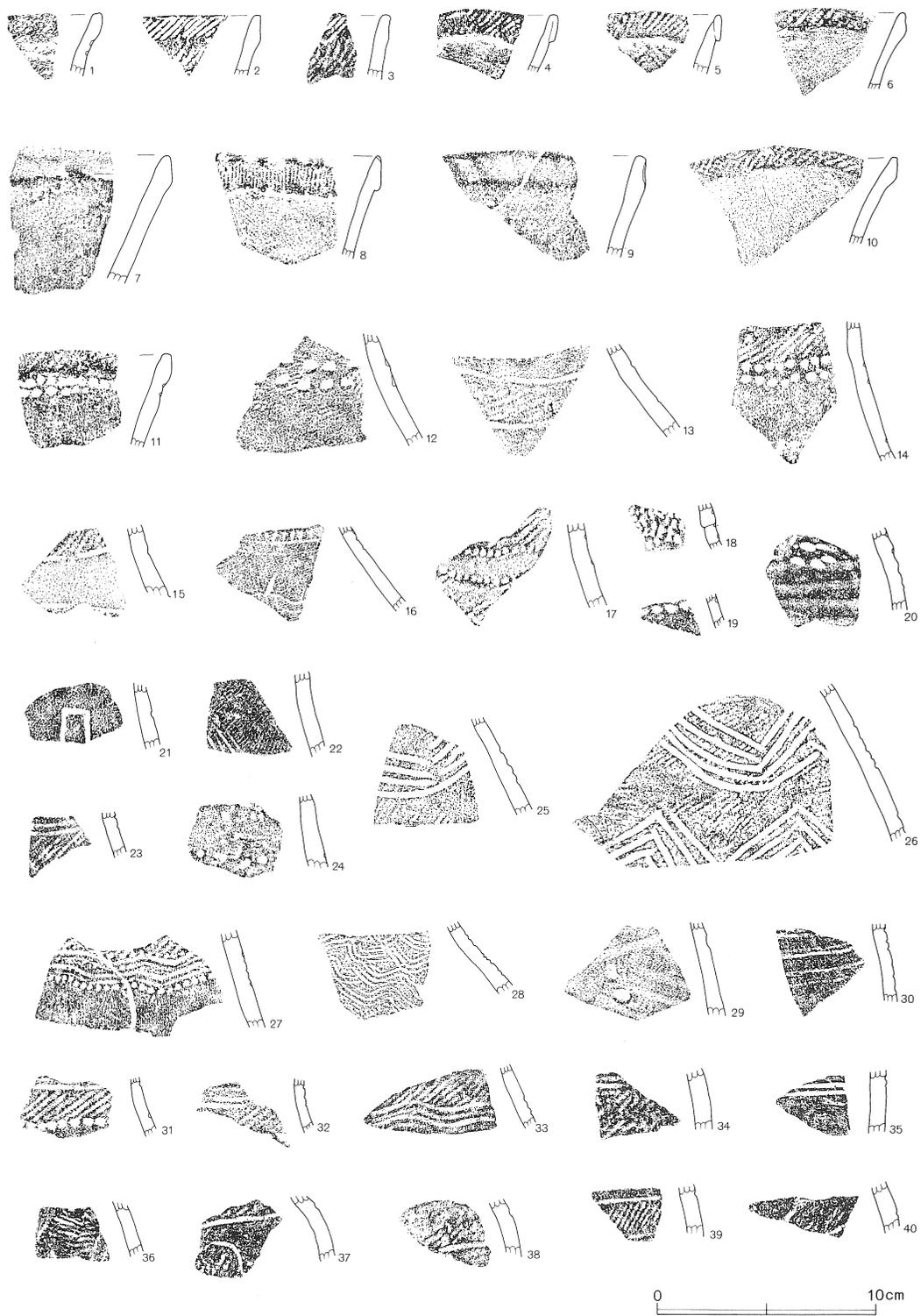
第20図 1～11は口縁を肥厚ないしは折り返している壺口縁部破片である。1と11は縄文帯の下に2列の刺突を施している。2と3は同一個体。縄文は前々段反撚（L R r）か。同様な縄文は36にもみられる。8は肥厚部に偽縄文を施す。地文も偽縄文。ⅩⅢ群3類か。12以下は壺の頸部～胴部の破片と考えられる。25・26は同一個体であろう。鋸歯状文を施す。地文は縄文L R。5および23には赤彩が認められる。

第21図 1は沈線と波状文の施される壺胴部破片である。8～9、11～17は縄文のみの破片である。原体の多くはL Rであるが、12のみR L。10は偽縄文である。18・19は荒い条痕が施される甕破片。20～23は重矩形文を配する甕の破片で、Y-4号住居跡出土資料（第19図12）と同一個体の可能性がある。25・26はⅩⅢ群4類に属する縄文のみの甕の破片である。縄文はL R。27～33は底部破片である。27・28には網代痕、30～32には木葉痕が残る。

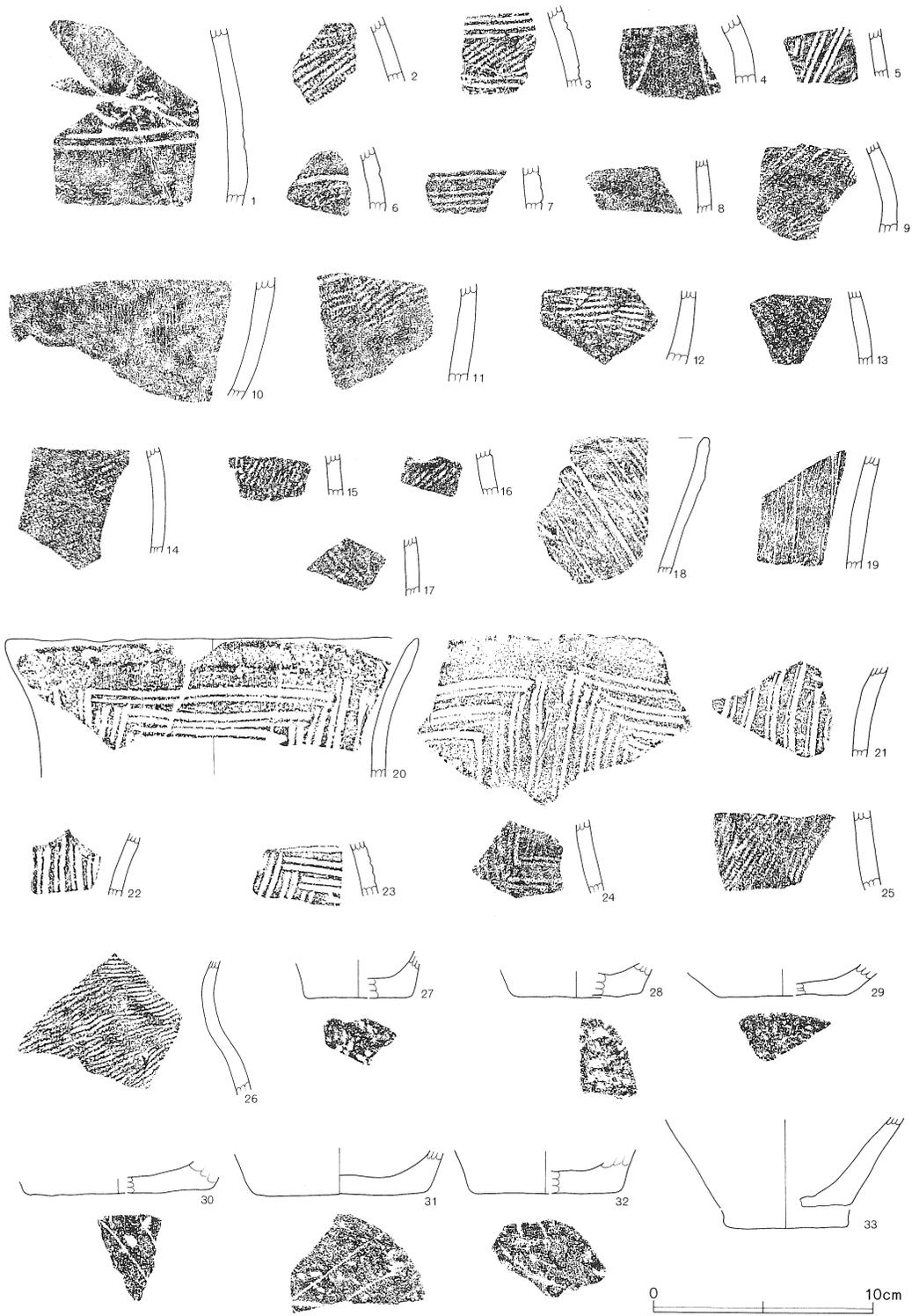
第22図 1は底径6.5cm。木葉痕を残す無文の壺底部である。色調はにぶい黄橙。2は紡錘車の破片と思われる。表面に削りの調整痕がみられる。3は敲石である。長軸の一方に敲打痕が認められる。大きさは長さ10.3cm、幅5.3cm、厚さ4.9cm、重さ372.3g。石材は安山岩である。



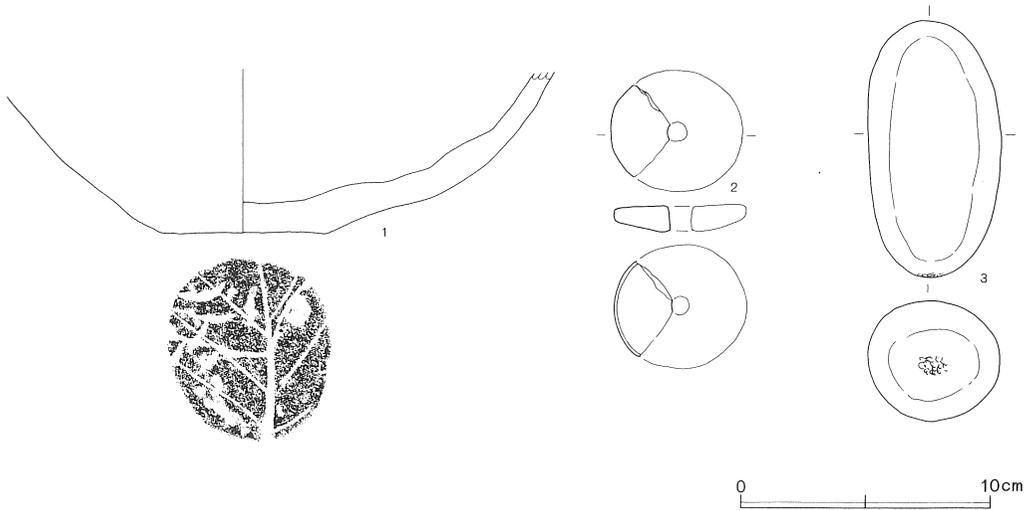
第19图 第8号方形周溝墓内弥生土器出土状况



第20图 第8号方形周沟墓覆土出土遗物(1)



第21图 第8号方形周沟墓覆土出土遺物(2)



第22図 第8号方形周溝墓覆土出土遺物(3)

(2) 土坑

Y-1号土坑 (第23図)

第5発掘区西端、か-462Gridに位置する。規模は73×60cmのやや東西に長い楕円形を呈している。深さは10cmである。覆土上層には片岩や礫が含まれており、集石的な様相を呈している。遺物もおもに覆土上層から出土している。

Y-1号土坑出土遺物 (第23図)

1～3は沈線および波状文が施文される壺胴部破片である。3は沈線の下に円形刺突文が配される。4は2条を1単位とする平行沈線が横走する壺胴部である。沈線群より上部には縄文を充填するが、下位は無文である。Ⅲ群1類。

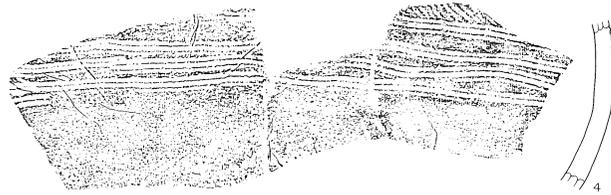
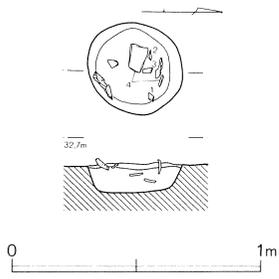
Y-2号土坑 (第23図)

第6発掘区、わ-478Gridに位置する。規模は62×48cmの半円形を呈し、段状に掘り込まれている。深さは50cmである。遺物はすべて覆土中に散在していた。

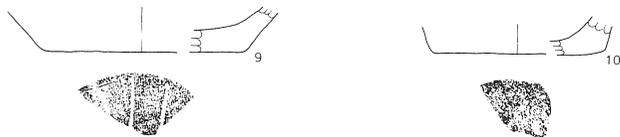
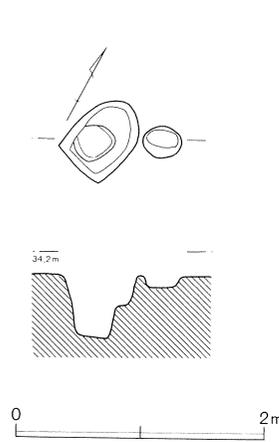
Y-2号土坑出土遺物 (第23図)

1は鋸歯状文を施す壺頸部破片。2・3は壺胴部破片と考えられ、波状文を施している。3の地文は縄文LR。4～6は縄文のみもしくは無文の破片である。9・10は底部破片で、9には木葉痕が残る。Ⅲ群1類。

SK Y-1



SK Y-2



第23図 土坑と出土遺物

Ⅵ 谷及びグリッドの出土遺物

1 谷

上敷免遺跡では、第1発掘区の東端と、第5発掘区の中央部の2ヶ所から谷状の落ち込みが検出されている。そのうち第5発掘区、X軸の452～455に位置する谷から当該期の遺物が多量に出土した。谷は幅15m前後で、ほぼ南北方向に延びている。包含層は谷の東斜面に形成されており、遺物をもっとも集中して出土する範囲は、グリッドでいうと、る—452・ち～ぬ—451Gridである。東斜面においてはそれ以外の範囲からも遺物は出土しているが、量的には格段に少なく散在するにすぎない。

包含層は土師器・須恵器を多く含む層と縄文土器を主体に含む層とに大別される。縄文土器主体の包含層は、り—451Gridにおいては2層確認されているが、湧水等の影響のため、遺物を層別に取り上げることはできなかった。また、同じ理由で、確認面から2m弱掘り下げたにとどまり、谷の完掘はなしえなかった。

出土遺物の総量はコンテナ30箱以上。うち2/3が縄文土器で、さらにその大半が粗製の無文土器である。接合率は非常に悪く、粗製土器のうち、底部～口縁部まで復元できたのは4個体にすぎないが、底部だけでは187点もの出土が確認されている。



第24図 第5発掘区谷 (1/600)

I 群 2 類 (第53図1・2)

称名寺式。2は口縁部に文様帯をもたず、口縁直下の横線によって無文帯を区画する。

I 群 3 類 a 種 (第53図3～28)

堀之内I式。6は小波状口縁を呈し、波頂下の貼付文に縦2対の刺突を施す。7～9は口縁部が肥厚し、指頭圧痕を施すもの。9は風化のため明瞭でない。27は把手、28は注口土器の注口部で、外面は丁寧に磨かれている。

I 群 3 類 b 種 (第27図、第28図1・2、第53図29～34)

堀之内II式。第27図1は口径10.5cm、器高11.4cm、底径7.0cm。小型の深鉢形土器である。4単位の把手をもち、口唇部内面には沈線が巡る。胴部文様帯は4単位に構成され、3条を1単位とした平行沈線で鋸歯状に区画されるが、1単位だけ中の三角形が乱れている。沈線内には縄文LRが充填される。同図2は外反する深鉢形土器である。口径推定24.5cm。単位は4単位と推定され、口唇部内面には沈線が巡る。胴部文様帯は2条を1単位とした沈線で、三角形を交互に連続させている。4単位を意識して施文されるが、ずれた部分は稲妻文で埋めている。沈線内は縄文LRを充填する。

第28図1の口縁部は無文帯となり、刺突の施された隆帯が2条巡っている。無文帯の下は2条1単位の沈線によって連続する半円文が施されている。2は正面にハの字状の隆帯をもち、胴部は縄文が充填された沈線による区画が施される。隆帯の反対側には把手が剥落した痕跡があり、注口土器と推定される。底部には網代痕が残る。底径8.4cm。

第53図29は刻みを施した隆帯をもつ深鉢口縁部である。内面には浅い沈線が巡る。胎土には赤色粒子の混入が目立つ。31は口縁部に粘土瘤を貼付したあと、つまんで調整している。内面には2条の沈線が巡っている。

I 群 5 類 (第53図35～38)

曾谷式。35は波状口縁の深鉢形土器である。波頂部の貼付文には縦3つの刺突が施される。36・37は波状口縁の波頂部の破片である。

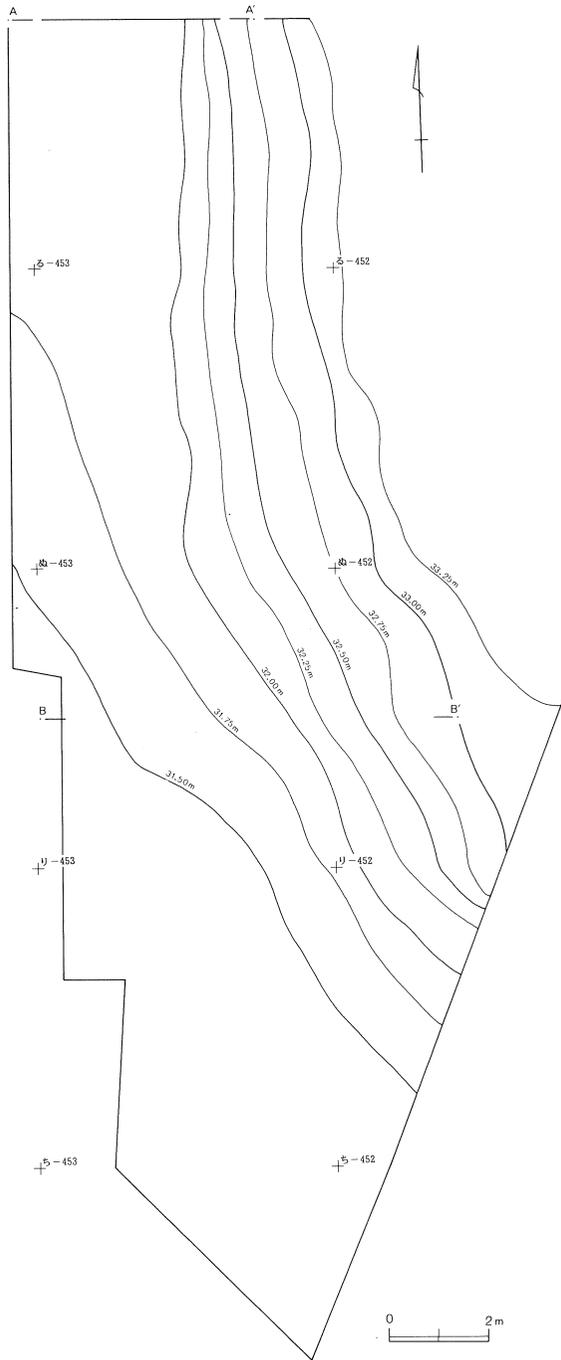
I 群 6 類 (第53図40～44)

瘤付土器系の一類である。40は平行する沈線の上に瘤がつくものである。

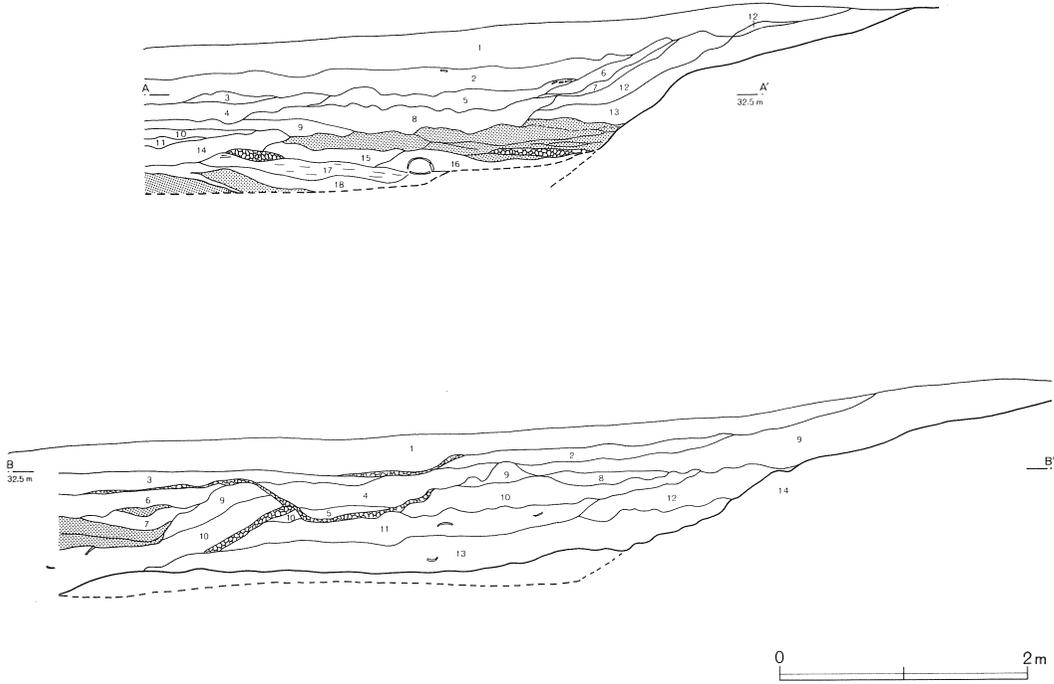
II 群 1 類 (第53図39、第54図1・2)

安行1式。1は波状口縁の波頂部である。無文の瘤が縦に施されている。2は表面の風化が著しいが、口縁部の無文帯と推定される。

II 群 2 類 (第54図3)



第25図 谷発掘区(1/150)



谷部包含層 A-A'

1. 明褐色土 黄色土粒・砂粒含む。粘性あり。
2. 暗褐色土 黄色土粒・炭化物を少量含む。粘性あり。しまりよし。
3. 灰茶褐色土 砂粒（火山灰か？）を多く含む。しまりなし。
4. 暗茶色土 火山灰・砂を少量含む。粘性あり。しまりよし。
5. 黄褐色土 多量の黄色土を含む。粘性あり。しまりよし。
6. 黒褐色土 少量の黄色土・砂を含む。粘性あり。しまりよし。
7. 黄褐色土 黄色土を大量に含む。しまりなし。
8. 暗褐色土 黄色土・砂・炭化物を含む。粘性強。しまりよし。
9. 灰茶褐色土 灰褐色の粘土・砂を含む。酸化強い。
10. 灰白色砂 粘土と砂よりなる層。しまりなし。
11. 明灰白色土 粘土・砂・黄色土粒よりなる層。しまりなし。
12. 明茶褐色土 黄色土粒多い。炭化物・焼土少量含む。
13. 茶褐色土 黄色土粒・砂粒及び炭化物・焼土を少量含む。しまりよし。B-B' 2層と同じか？
14. 明灰白色土 白色粘土と砂の混合層。粘性あり。しまりよし。
15. 黄灰白色土 白色粘土・砂・黄色土粒の混合層。粘性あり。しまりよし。
16. 灰白色土 粘土と砂からなる層。粘性あり。しまりよし。
17. 灰白色土 粘土と砂からなる層。砂が主体で葉層発達。粘性なし。しまりなし。
18. 灰白粘土



礫層
砂層

谷部包含層 B-B'

1. 明褐色土 黄色土粒・砂粒を含む。若干粘性あり。
2. 茶褐色土 黄色土粒・砂粒を少量、炭化物・焼土をわずかに含む。しまりよし。
3. 灰褐色土 砂粒を多量に含み、少量の炭化物を含む。しまりなし。
4. 暗褐色土 砂粒・黄色土粒を多く含む。円礫（径1~2mm）少量あり。しまりなし。
5. 黄茶褐色土 黄色土粒を主体に粘土・砂を少量含む。粘性あり。しまりよし。
6. 茶色土 黄色土・木炭を少量含む。粘性あり。しまりよし。
7. 暗黄色土 少量の黄色土・木炭・焼土を含む。粘性あり。しまりよし。
8. 暗黄褐色土 多量の黄色土粒と少量の礫（径1~2mm）・砂を含む。しまりなし。
9. 茶褐色土 多量の黄色土粒を含む。少量の炭化物あり。粘性あり。しまりよし。
10. 暗茶色土 少量の黄色土粒・木炭・焼土を含む。粘性あり。しまりよし。
11. 黒褐色土 少量の黄色土粒・木炭・焼土を含む。しまりよし。粘性あり。
12. 暗黄褐色土 黄色土粒・砂粒を多量に含む。しまりよし。
13. 茶褐色土 少量の黄色土粒・木炭・焼土を含む。しまりよし。粘性あり。
14. 暗黄褐色土 多量の黄色土粒を含む。しまりよし。粘性あり。
9・10 … 土師器包含層。（10は若干縄文土器を含む。）
11・13 … 縄文土器包含層。

第26図 谷部包含層土層断面図 (1/60)

安行2式。胴部がくびれる瓠形の土器の口縁部である。口縁部は肥厚して縄文帯となり、頸部には充填縄文（RL）の連弧文が施される。

Ⅱ群3類（第28図3、第54図4～30）

安行3a式。第28図3は胴部がゆるやかにくびれる深鉢形土器である。風化が著しい。上部に刻みをもつ突起を有する。文様帯は縄文帯を介して2段に施文されている。刺突を中心にS字状の入り組み文が展開し、それをさらに取り巻くように三叉状の彫り込みが上下に施文されている。さらに縄文RLが充填されているが、その施文帯の選択は規則的ではない。

第54図4～8は同一個体である。波状口縁の深鉢形土器で、波頂部には刻みを施し、縦方向の刻みをもつ瘤を配する。14～21も同一個体である。風化が著しい。25は注口土器である。注口部の剝離面が確認され、そこを中心に三叉状文が施されている。

Ⅱ群4類（第28図4、第54図31～41）

安行3b式。第28図4は浅鉢形土器である。突起は粘土を貼り付けて刻みを施している。文様帯は連弧文のモチーフが基調となり、縄文LRで充填されている。残りは比較的良好である。

第54図35・37は鉢巻状に粘土紐を巻く波状口縁の波頂部である。38・40はボタン状突起を貼付するもの。

Ⅱ群5類（第55図1～3）

安行3c式。1と2は同一個体か。連弧状文の区画内を刺突で充填している。胎土には赤色粒子が多量に含まれる。3は頸部がわずかにくびれる深鉢形土器。瘤を中心に連弧状の文様が施され、くびれ部には刺突が連続する。いずれも風化が顕著である。

Ⅱ群6類（第55図4）

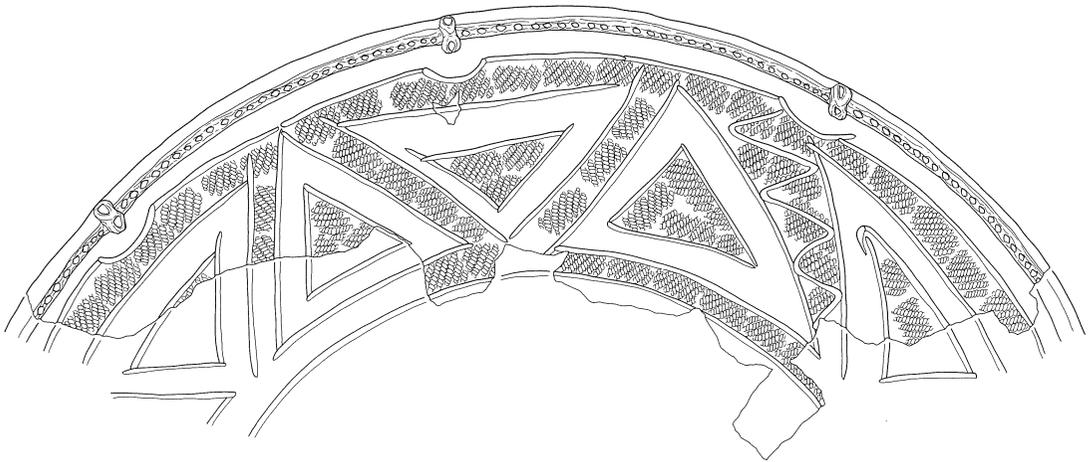
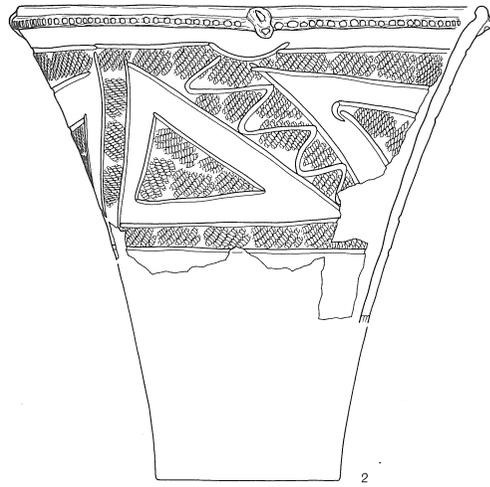
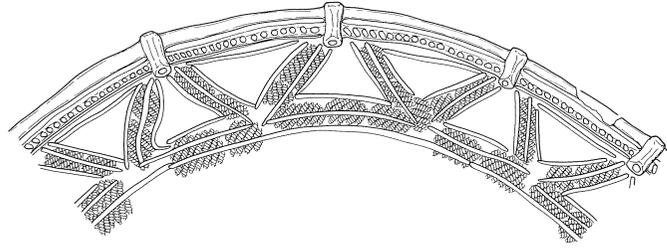
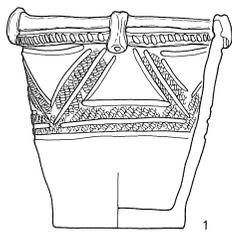
壺形土器の肩部である。風化が著しく明瞭ではないが、雲形文的なモチーフが施されているようである。沈線に彫刻的な手法が窺えるが、大洞C₁式平行期の土器である可能性を指摘するととめておく。

Ⅲ群（第55図5～25）

紐線文系の粗製土器を一括した。5・6は安行1式（1類）。5は肥厚した口唇部にまばらな押圧が認められる。曾谷式に伴う可能性もある。7・8は安行2式（2類）。隆帯が部分的に剝落している。9以下はすべて安行3a式（3類）に比定される。

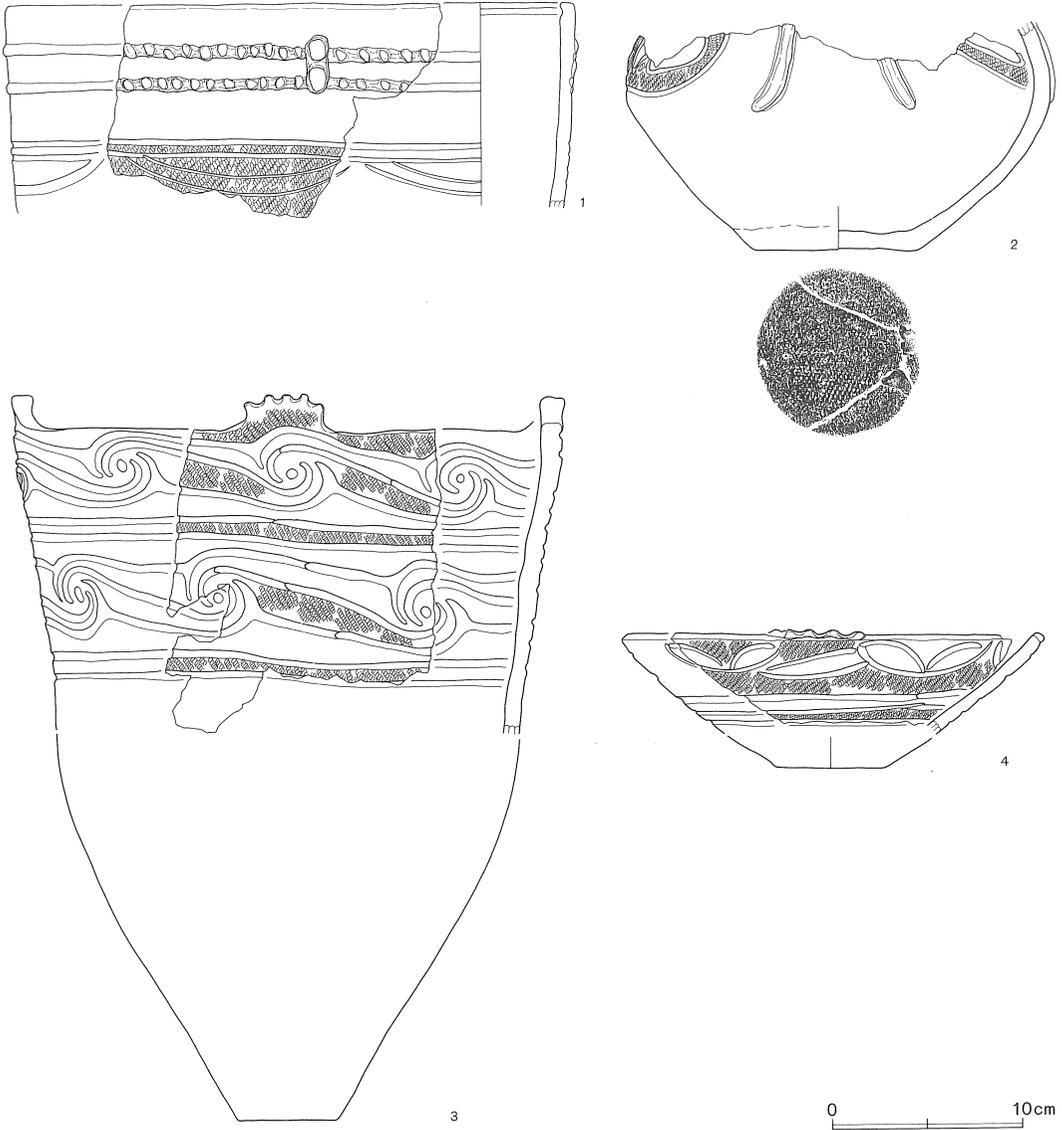
Ⅳ群

口縁部に隆帯を貼付する系統の無文土器を一括して本類とした。隆帯の段数および形態によって次のように細分される。



0 10cm

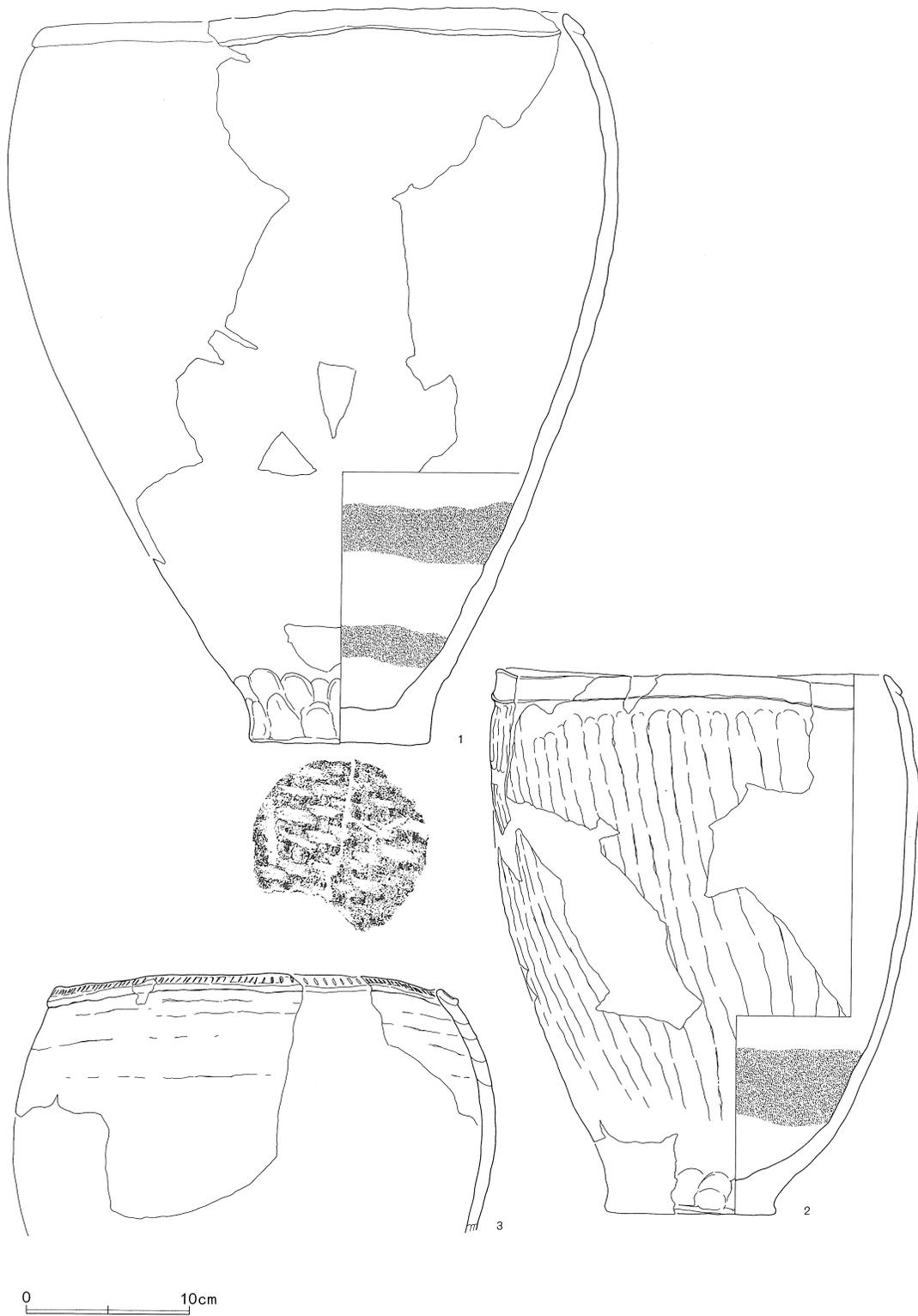
第27図 谷出土遺物(1)



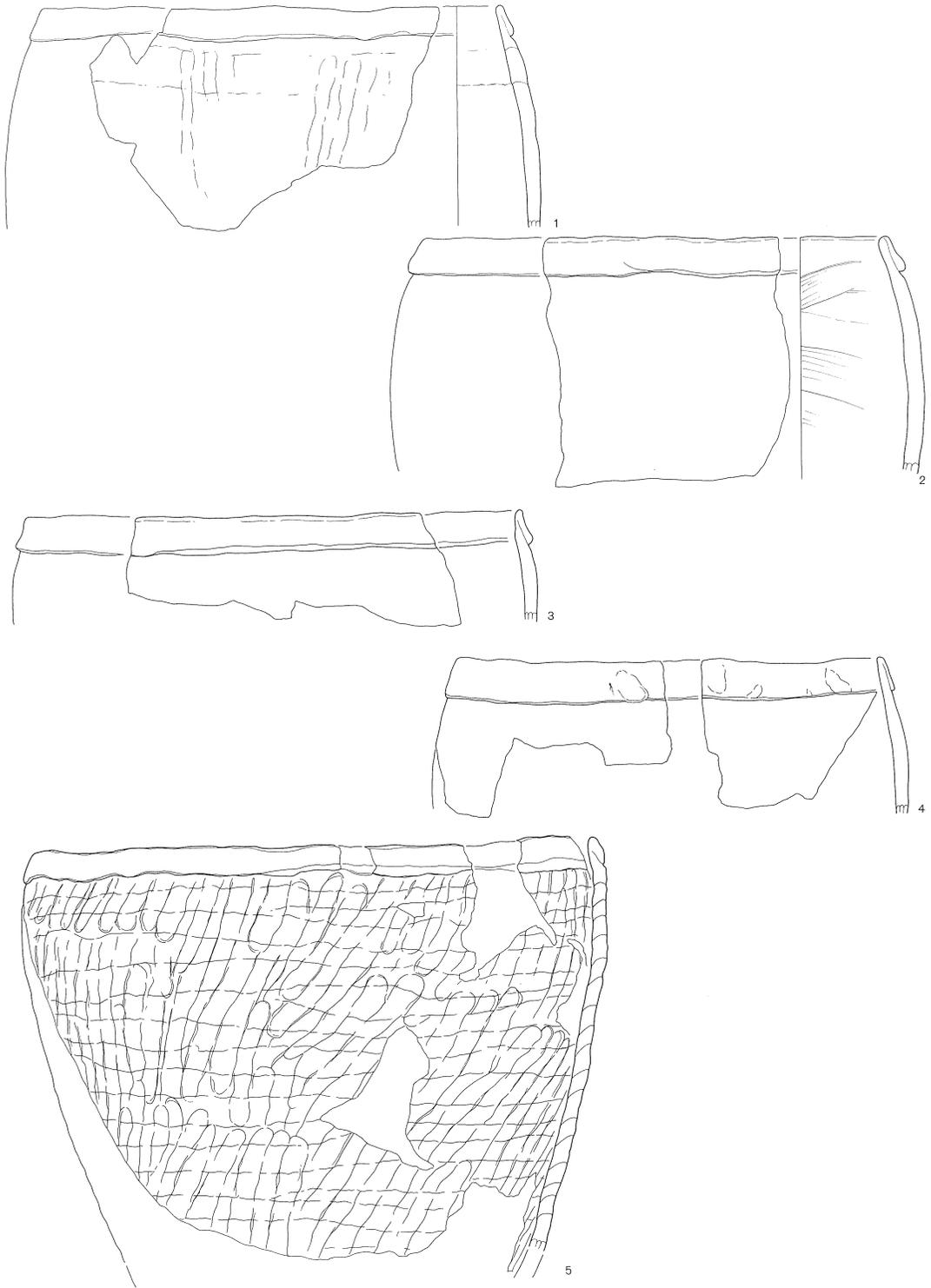
第28図 谷出土遺物(2)

1類 (第29・30図、第56図)

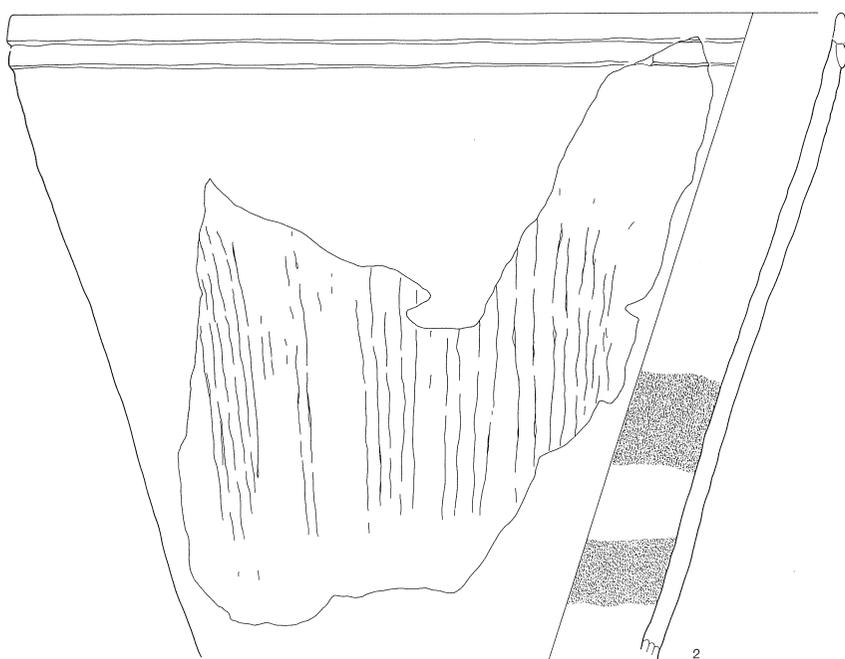
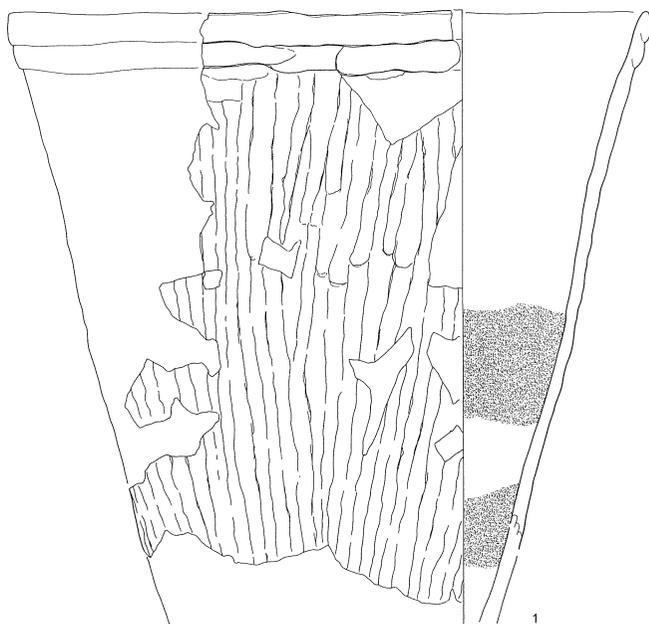
口縁部の隆帯が1段のもの。第29図1は推定口径32cm、器高44.6cm、底径11.0cm。口縁はかなり急に内彎する。底部には指当痕が明瞭である。内面の炭化帯は上の段のほうが下よりも薄い。残存率40%。同図2は底部近くで歪んでおり、縦位の指ナデ痕が明瞭に認められる。推定口径24cm、器高32.8cm、底径10.4cm。残存率は60%。第30図5も指ナデ痕と輪積痕が顕著である。第29図3は隆帯に爪形刺突を施すものである。これをb種とし、無調整のものをa種とする。



第29図 谷出土遺物(3)

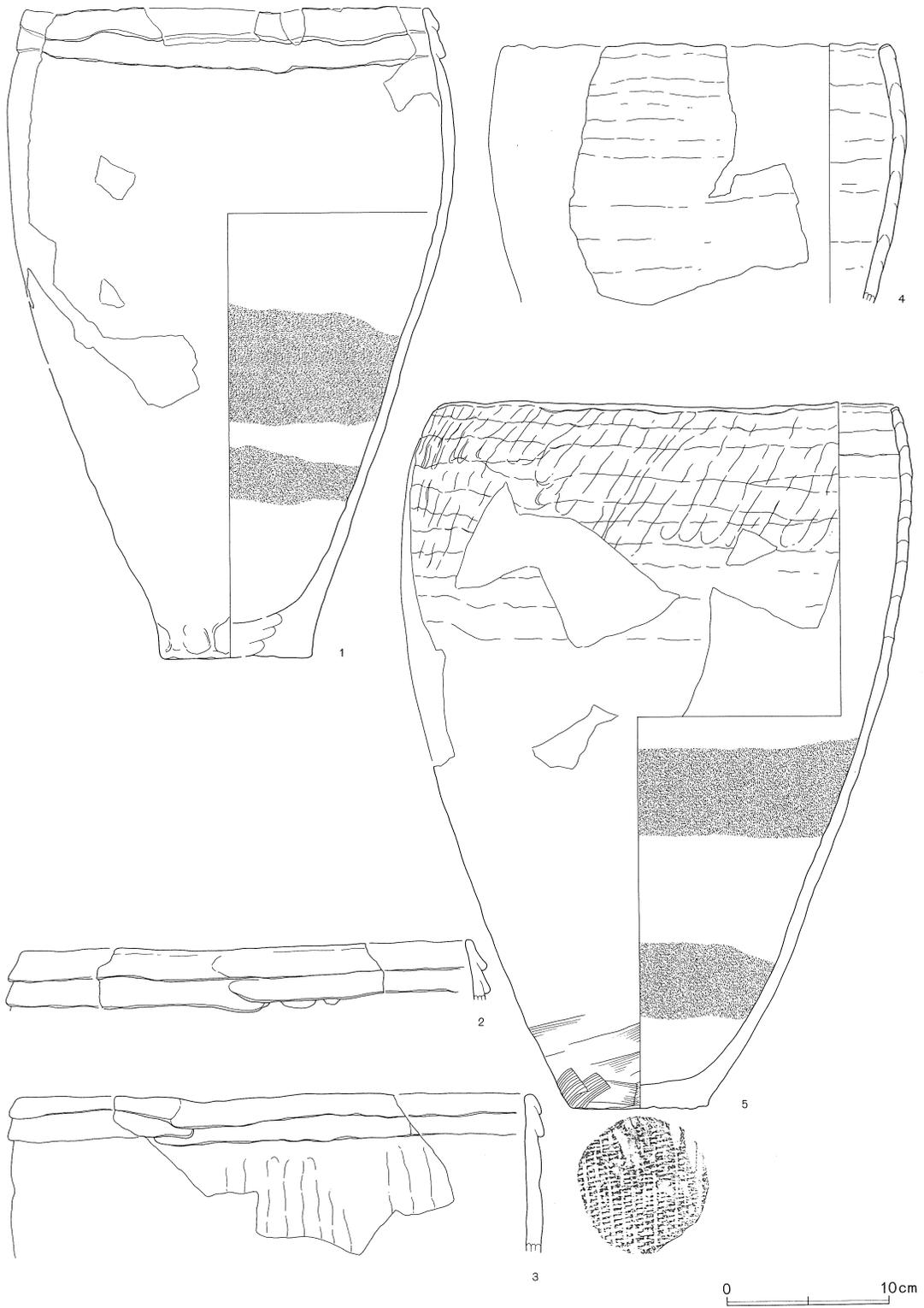


第30図 谷出土遺物(4)

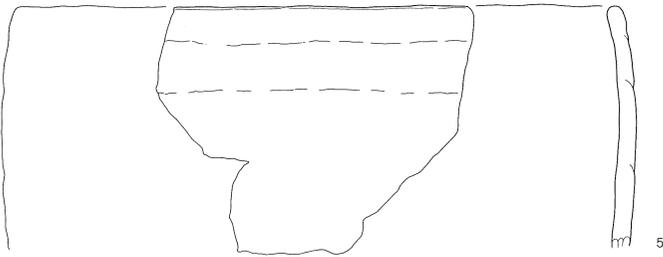
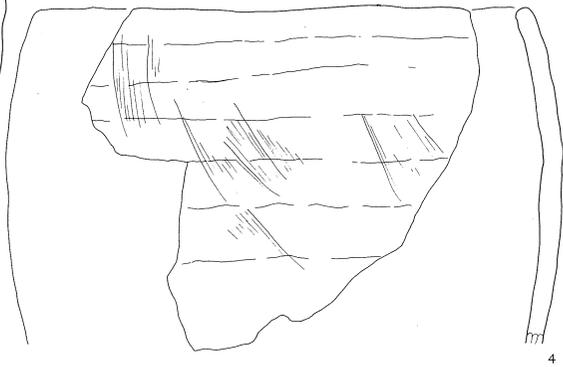
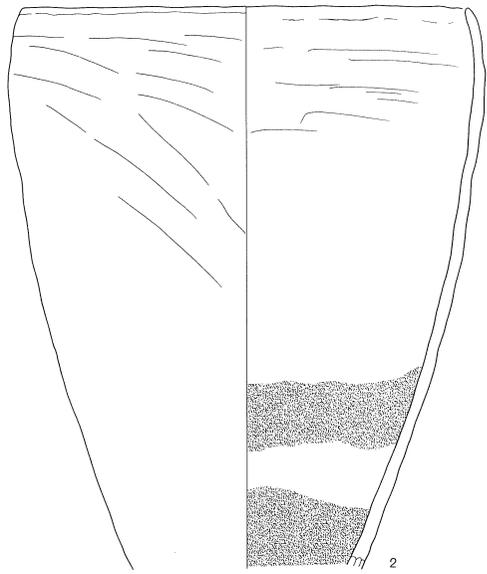
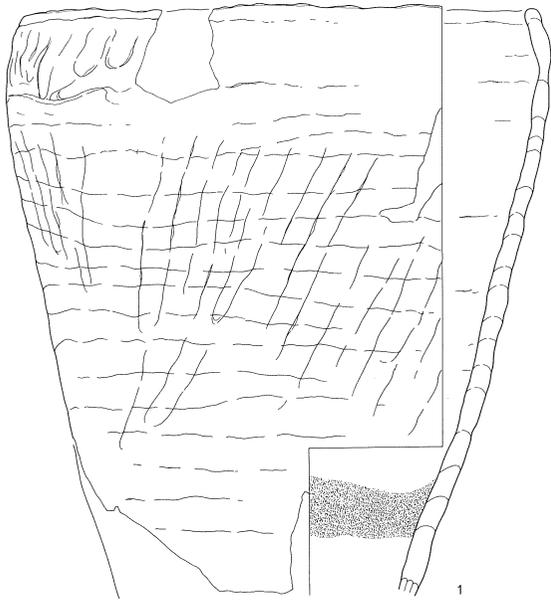


0 10cm

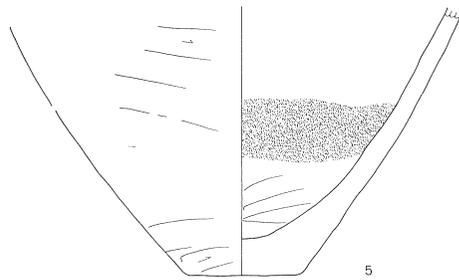
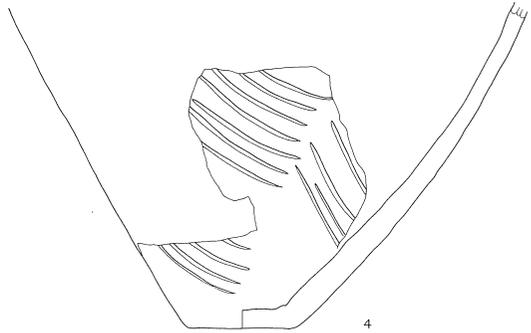
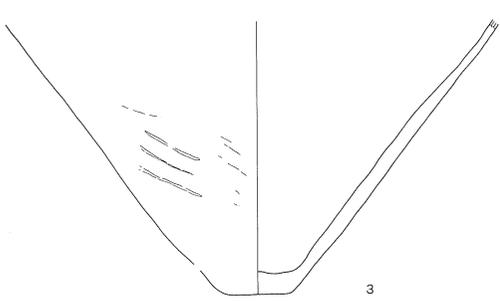
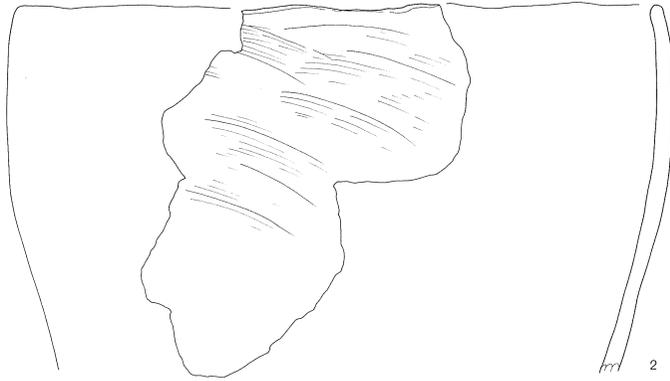
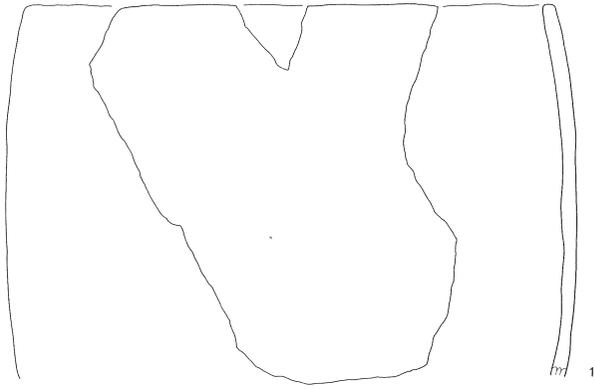
第31図 谷出土遺物(5)



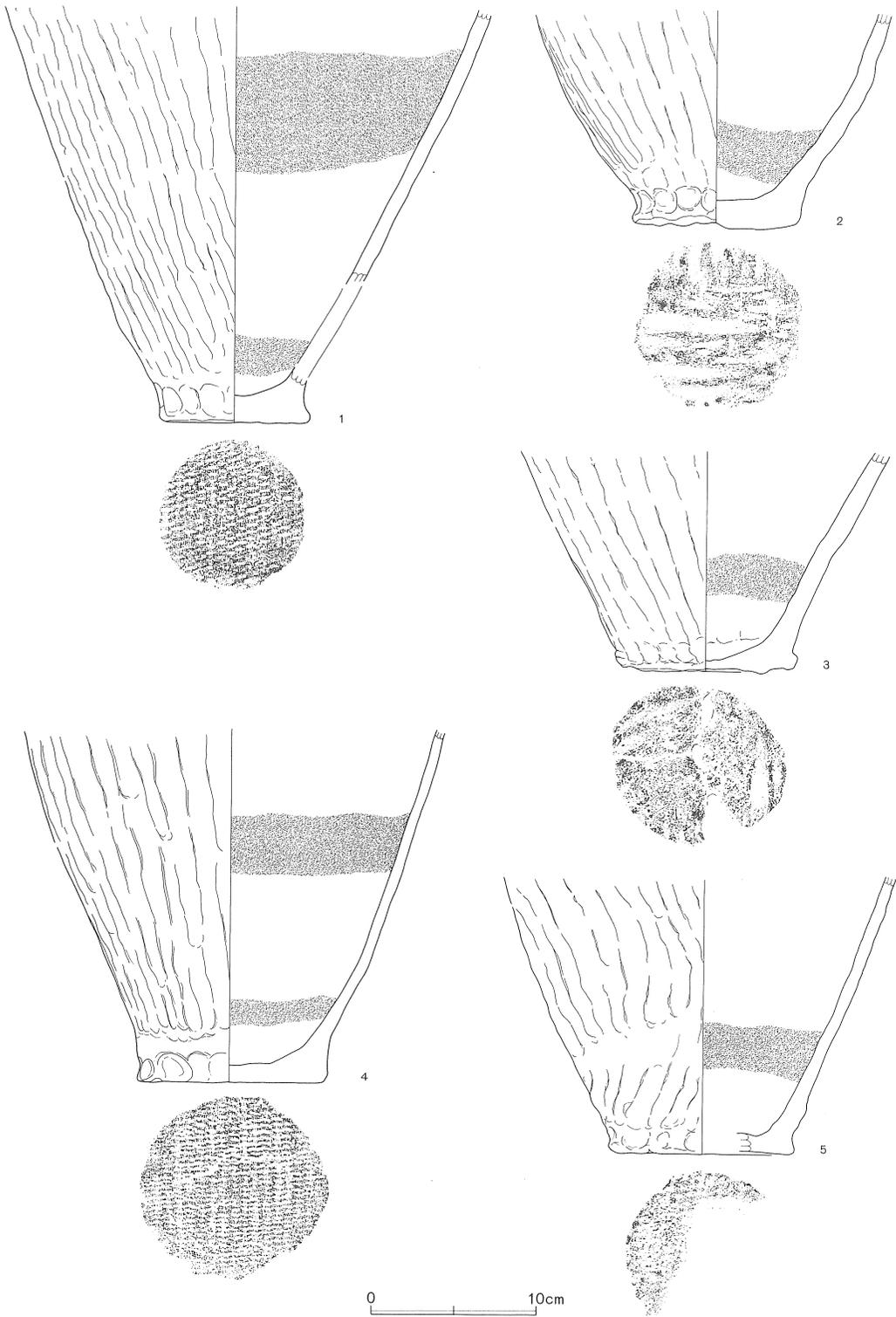
第32図 谷出土遺物(6)



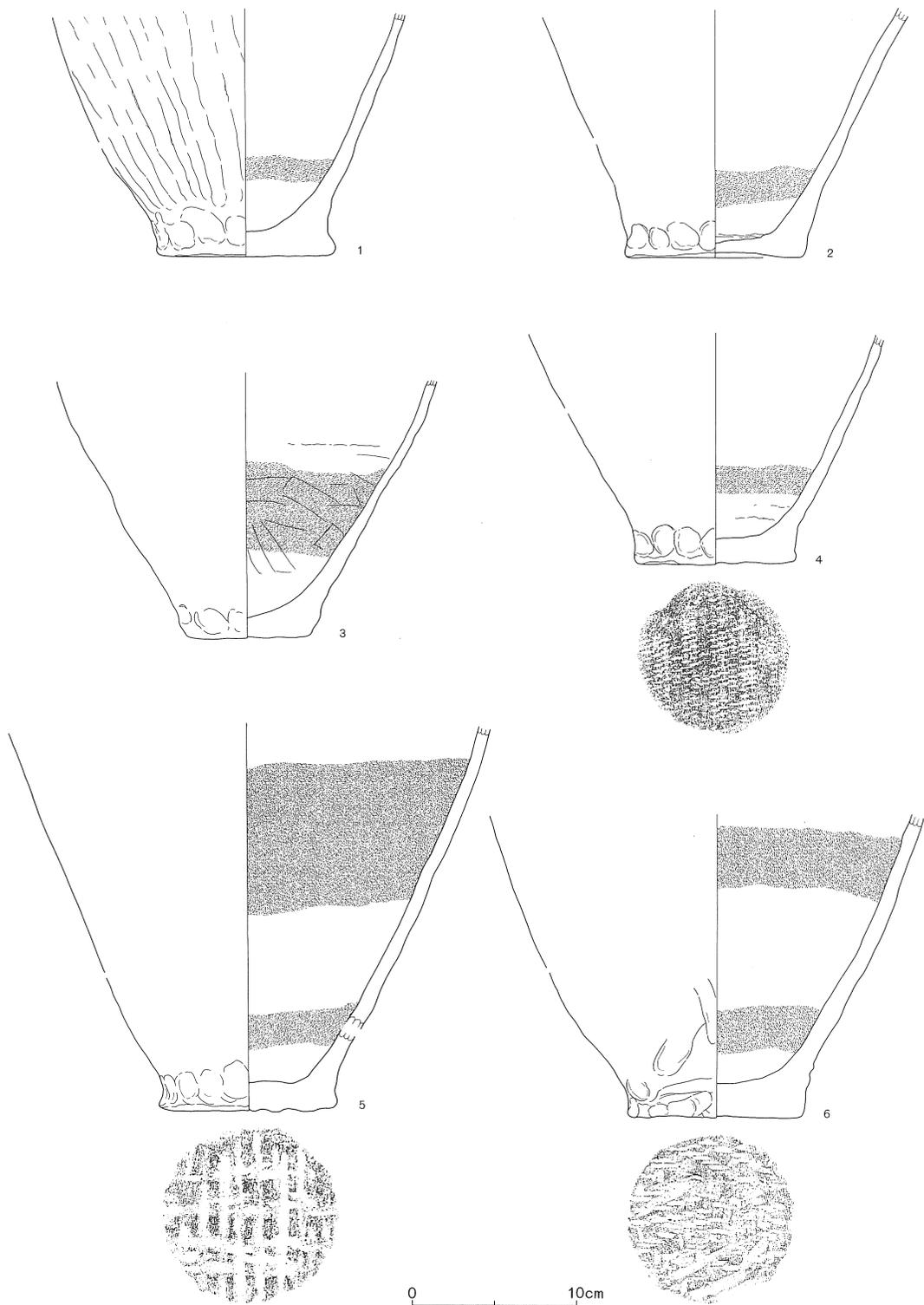
第33図 谷出土遺物(7)



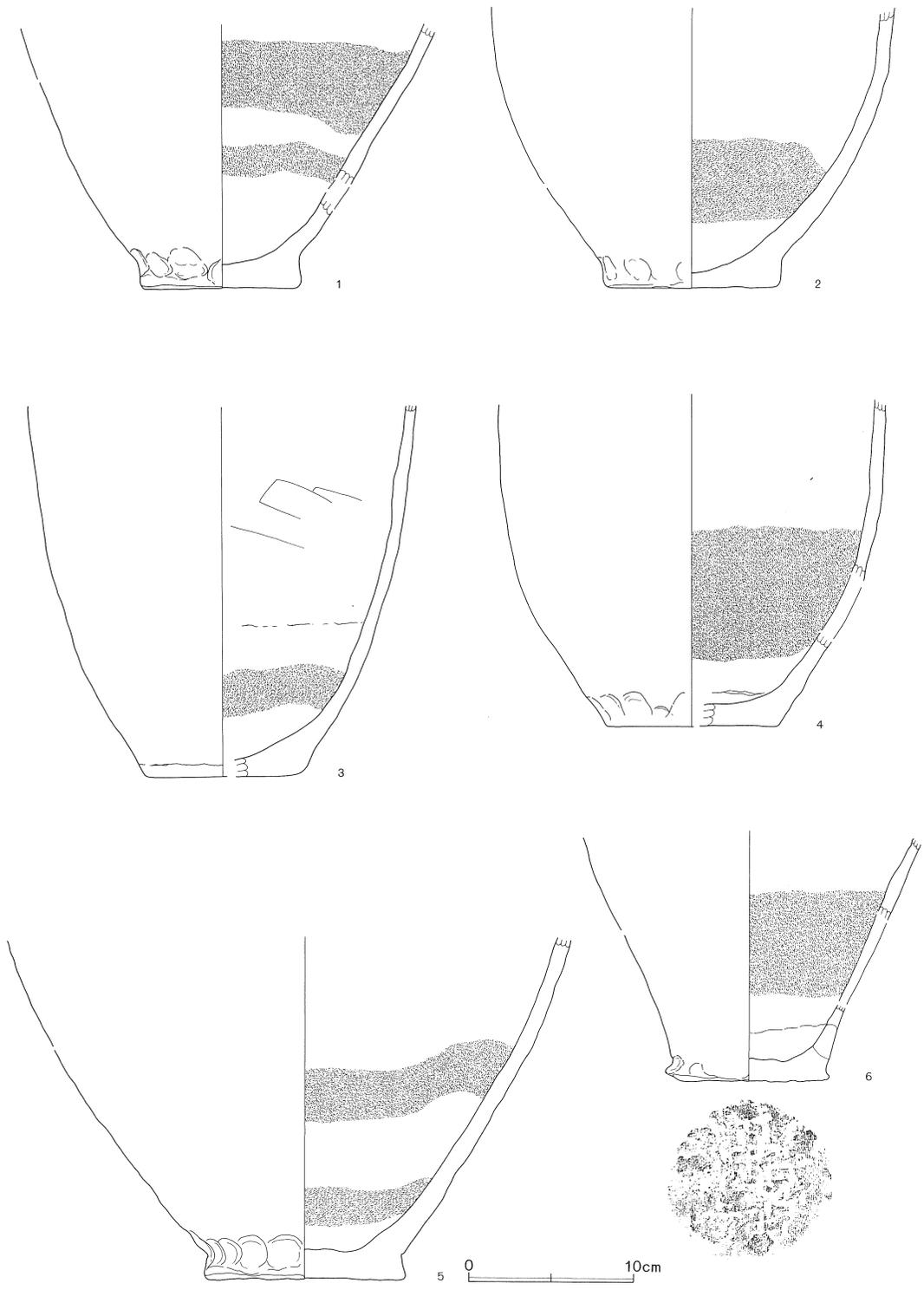
第34図 谷出土遺物(8)



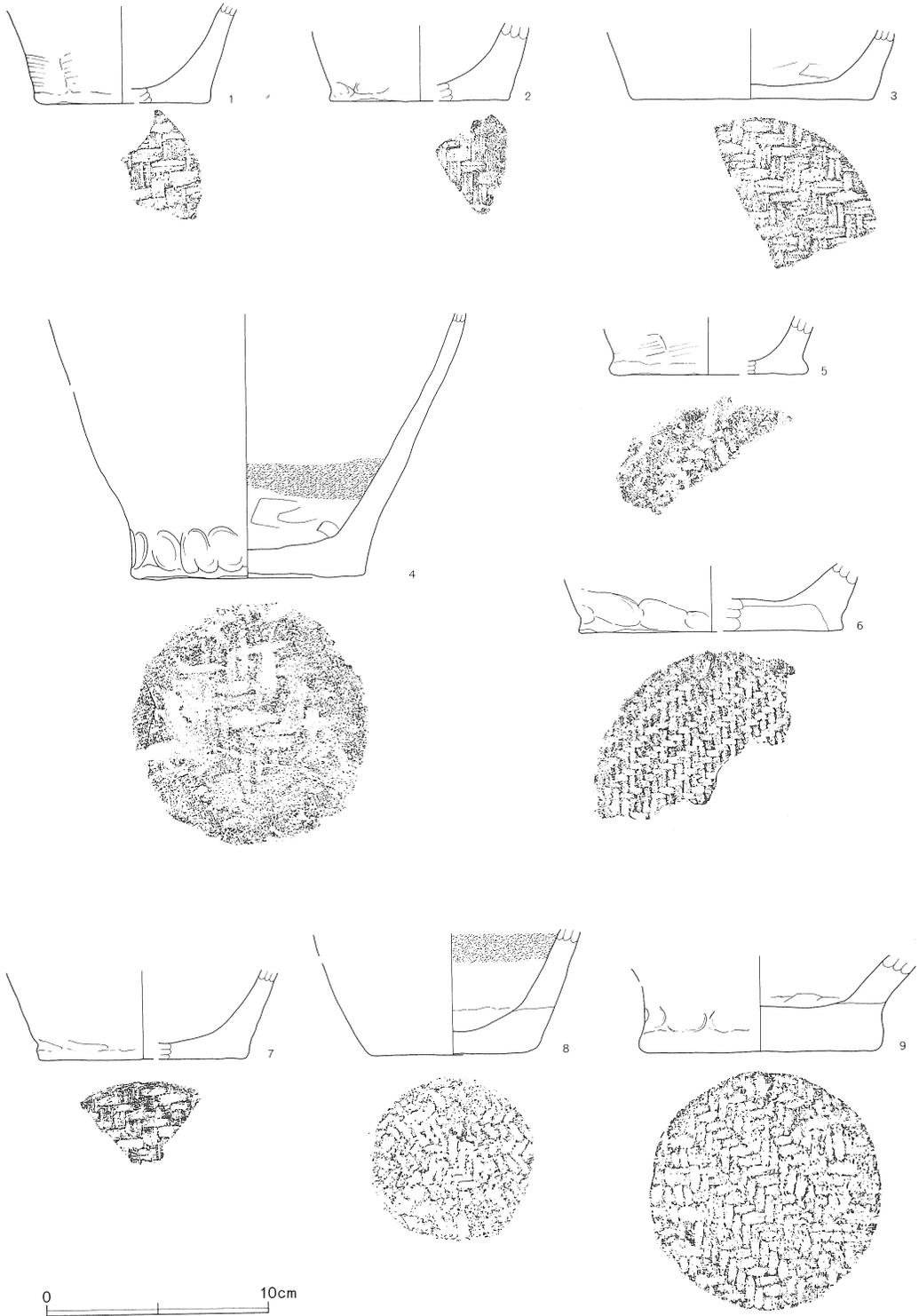
第35図 谷出土遺物(9)



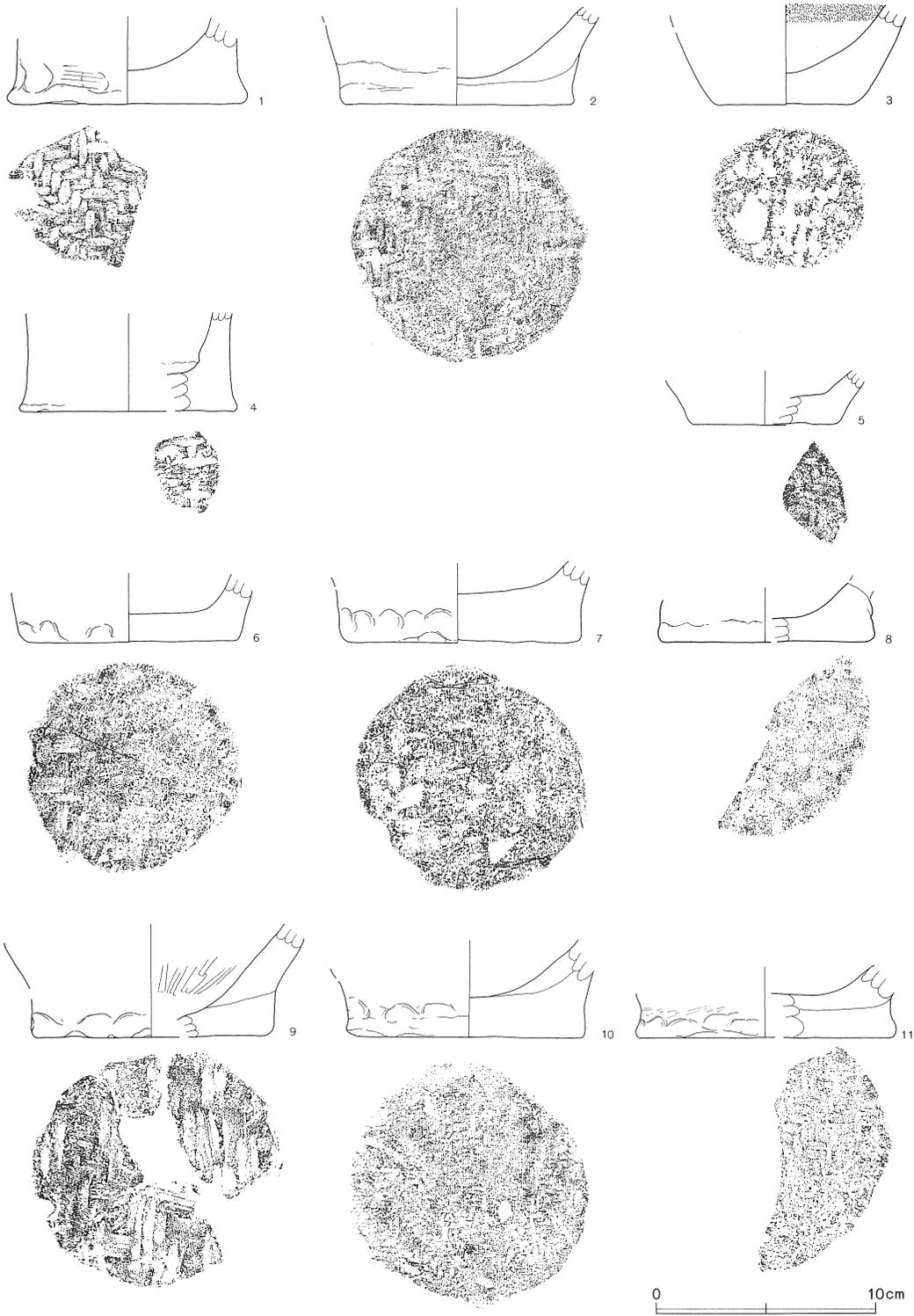
第36図・谷出土遺物(10)



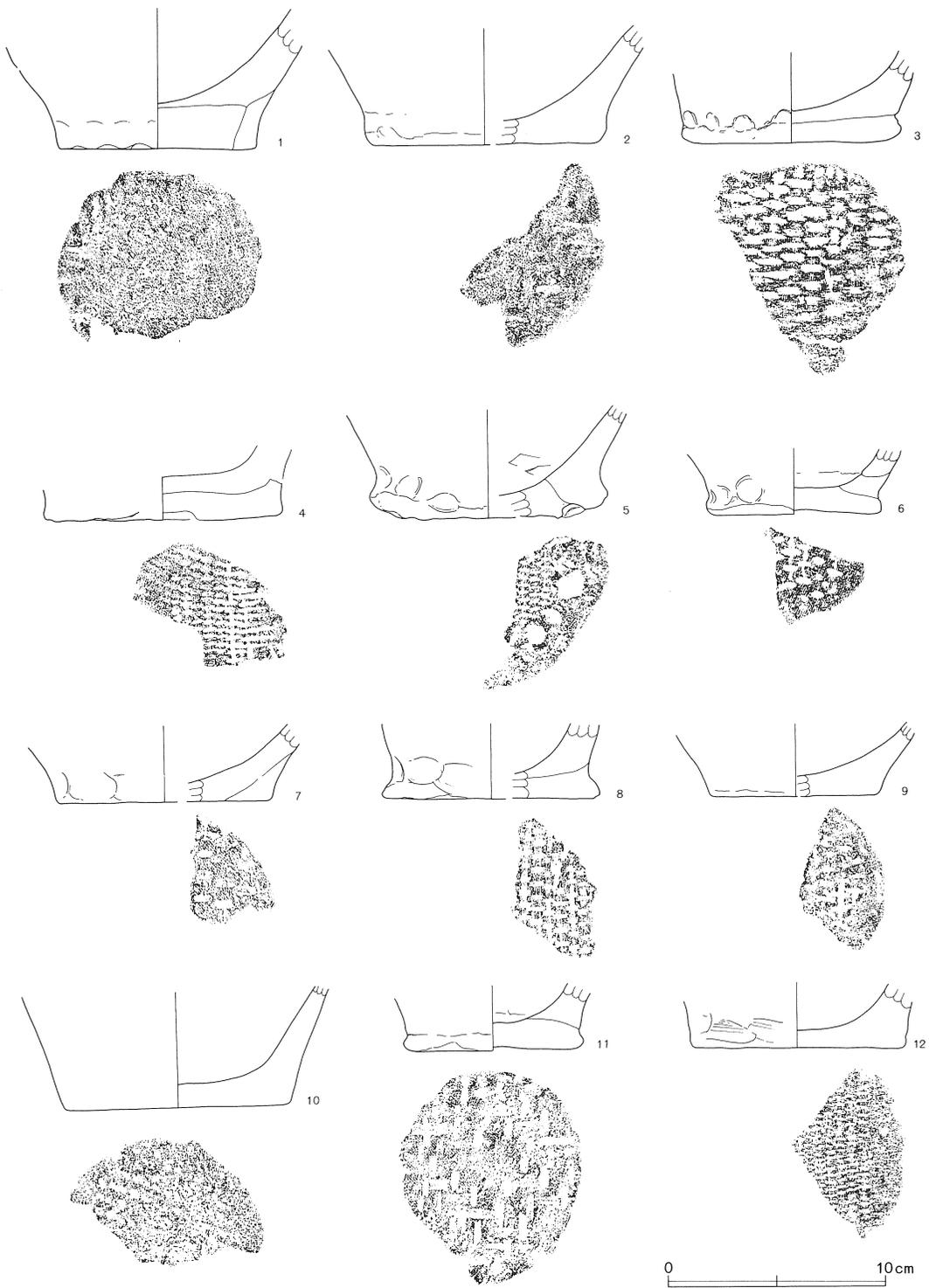
第37図 谷出土遺物(11)



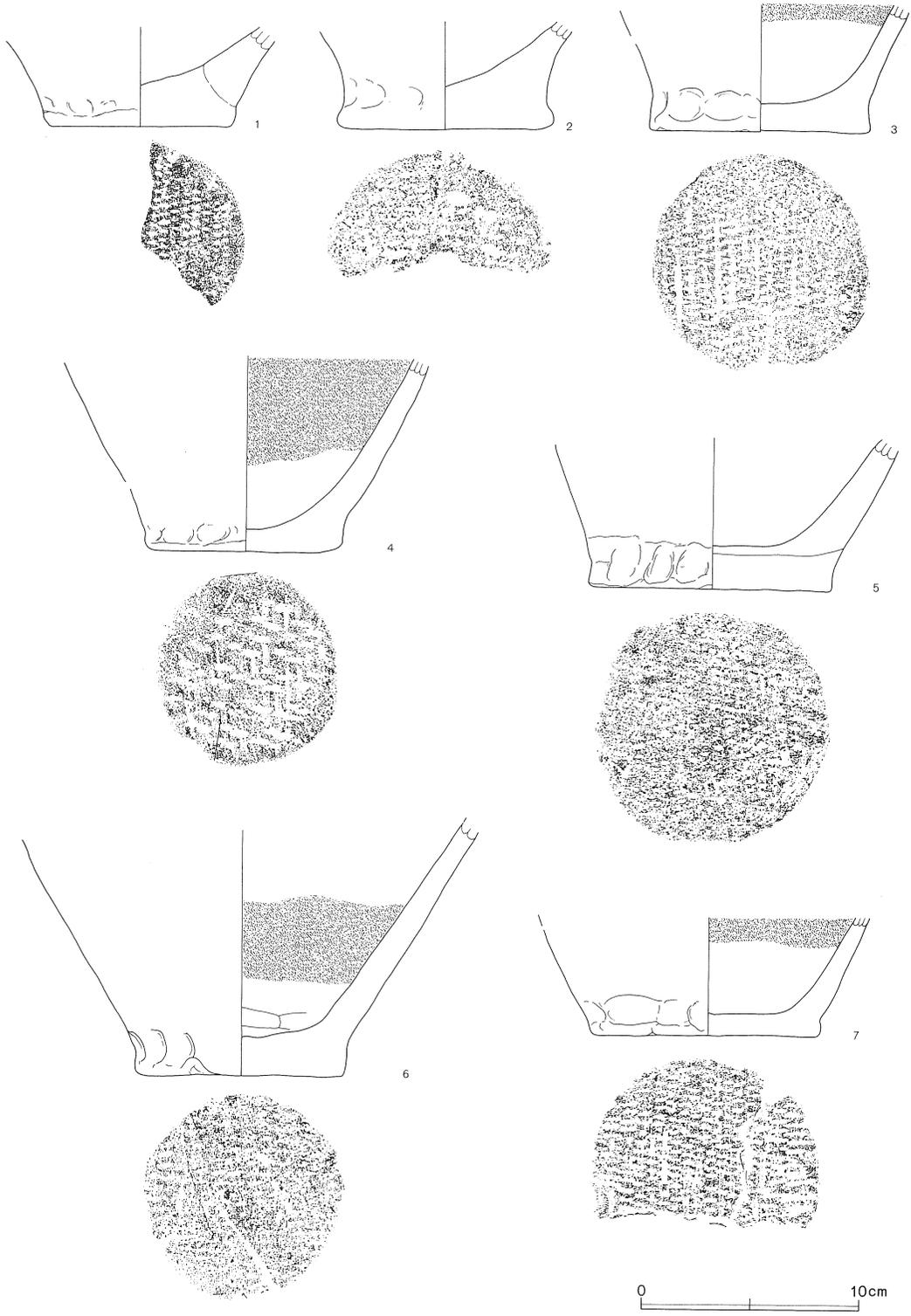
第38図 谷出土遺物(12)



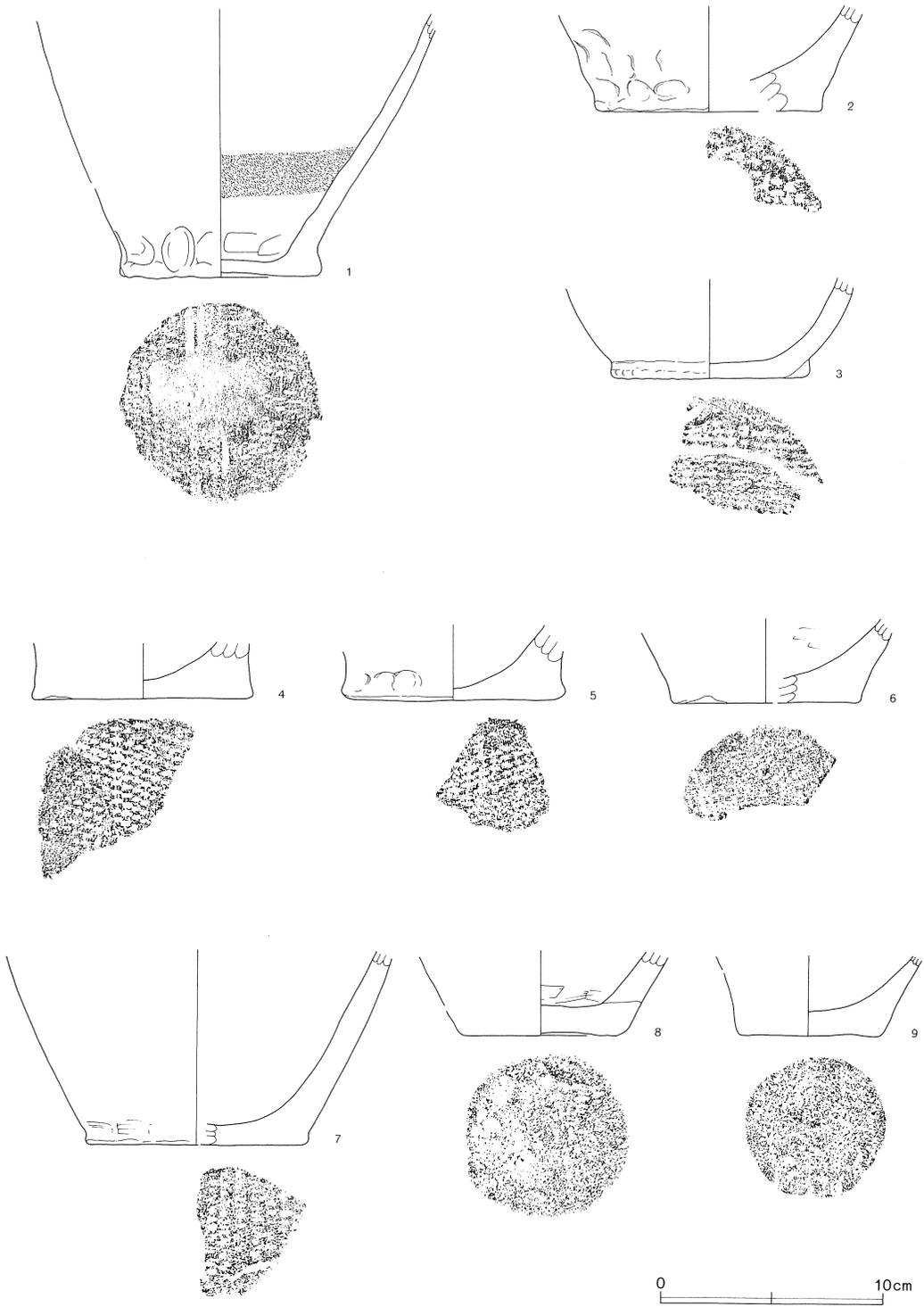
第39图 谷出土遺物(13)



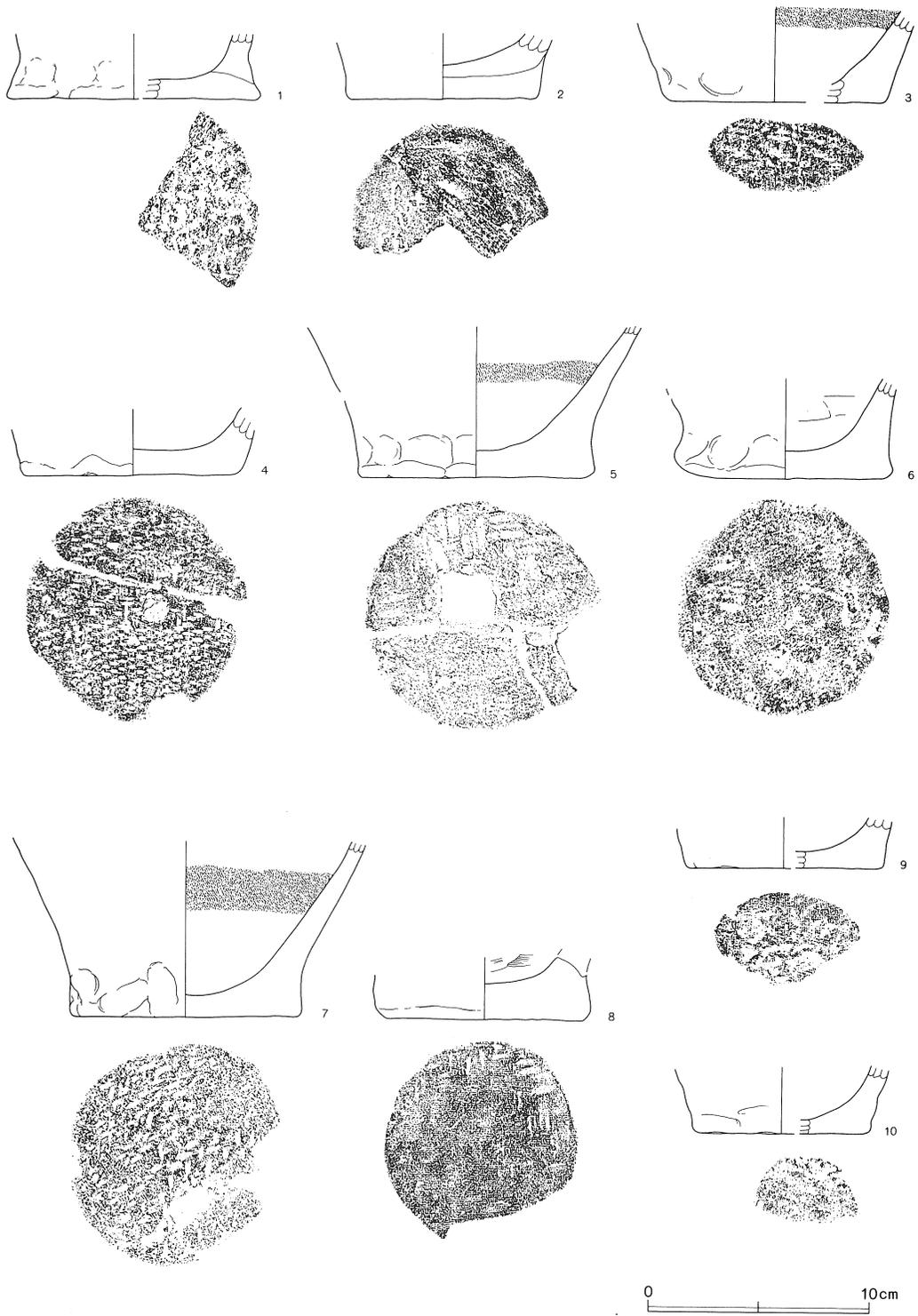
第40图 谷出土遺物(14)



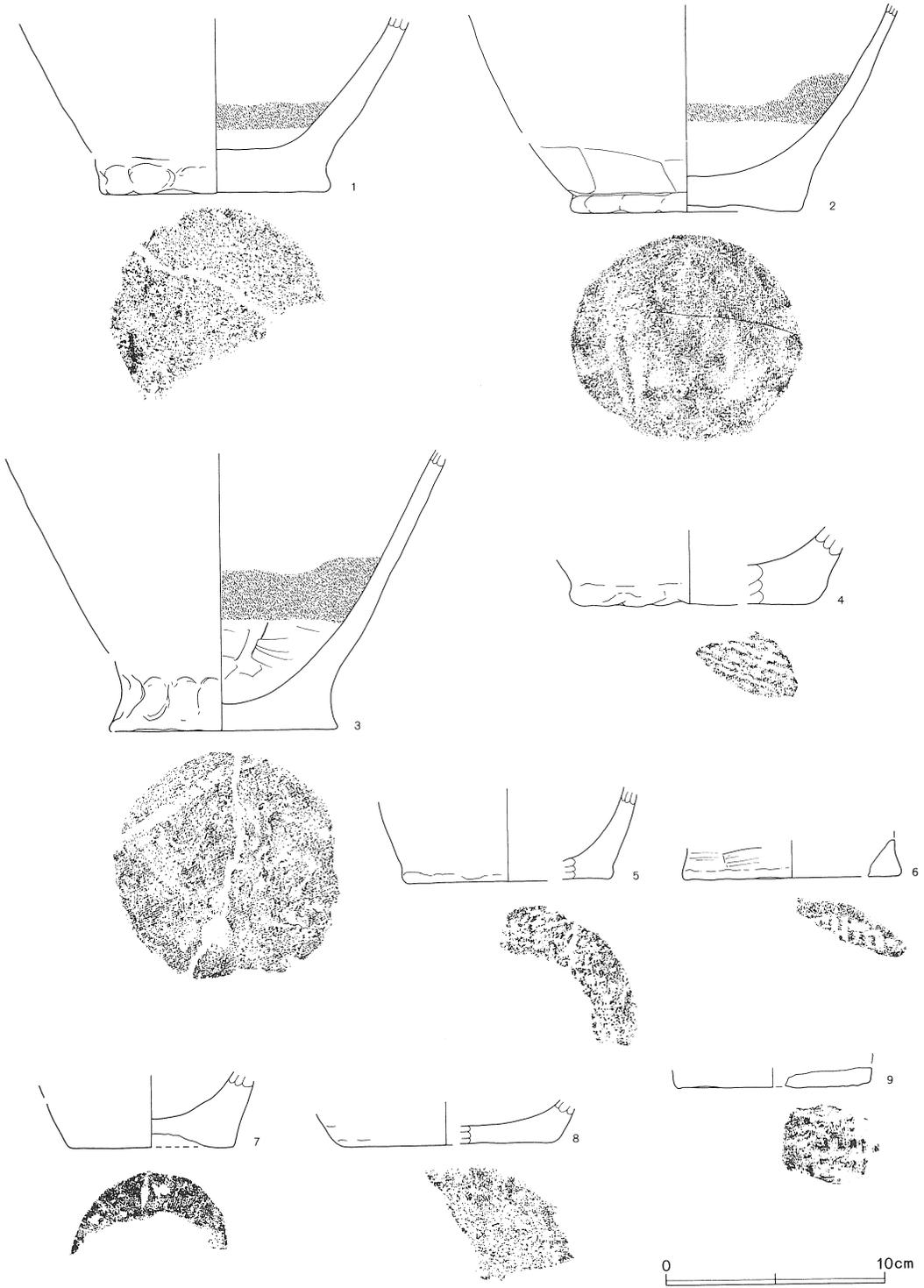
第41図 谷出土遺物(15)



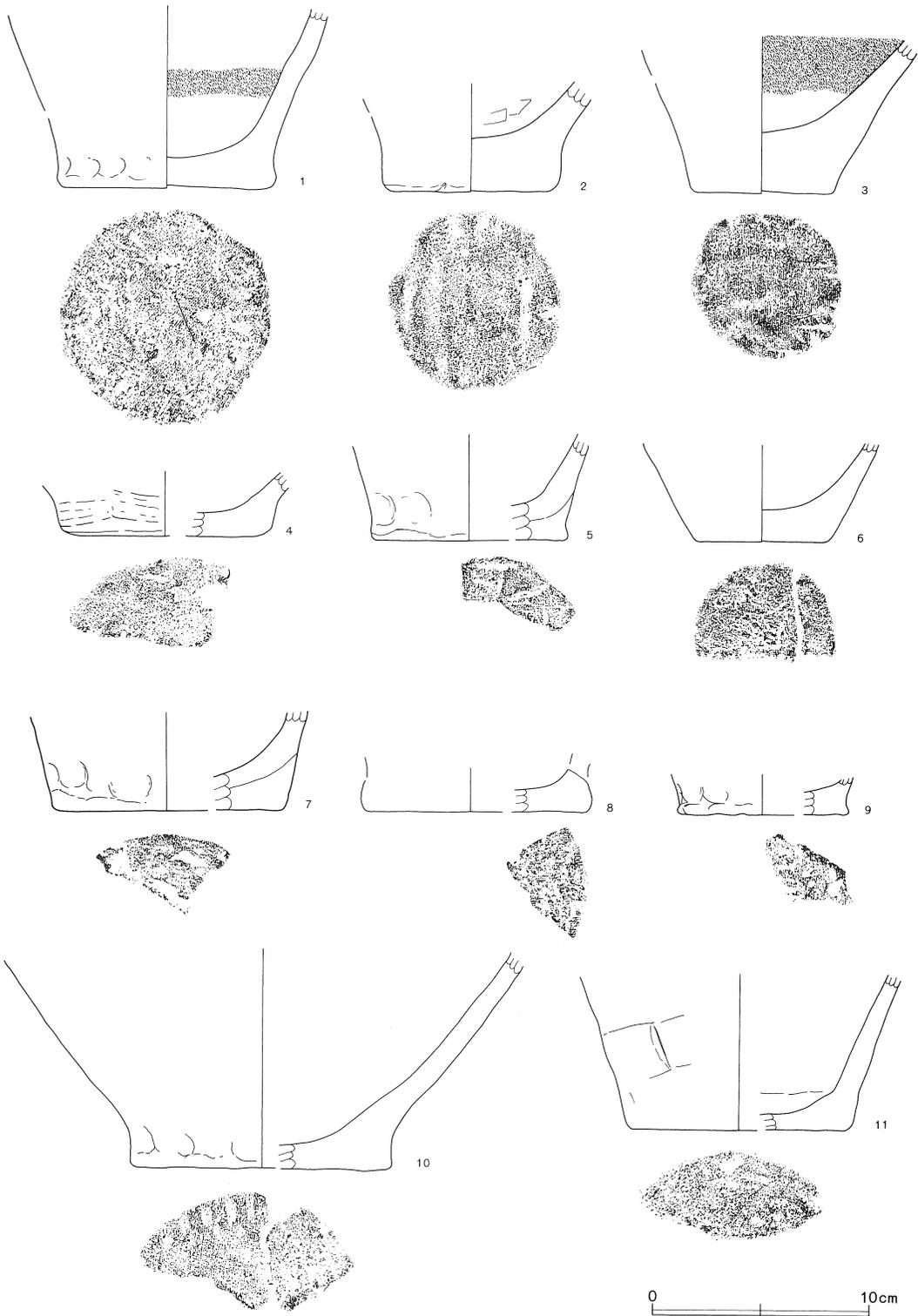
第42図 谷出土遺物(16)



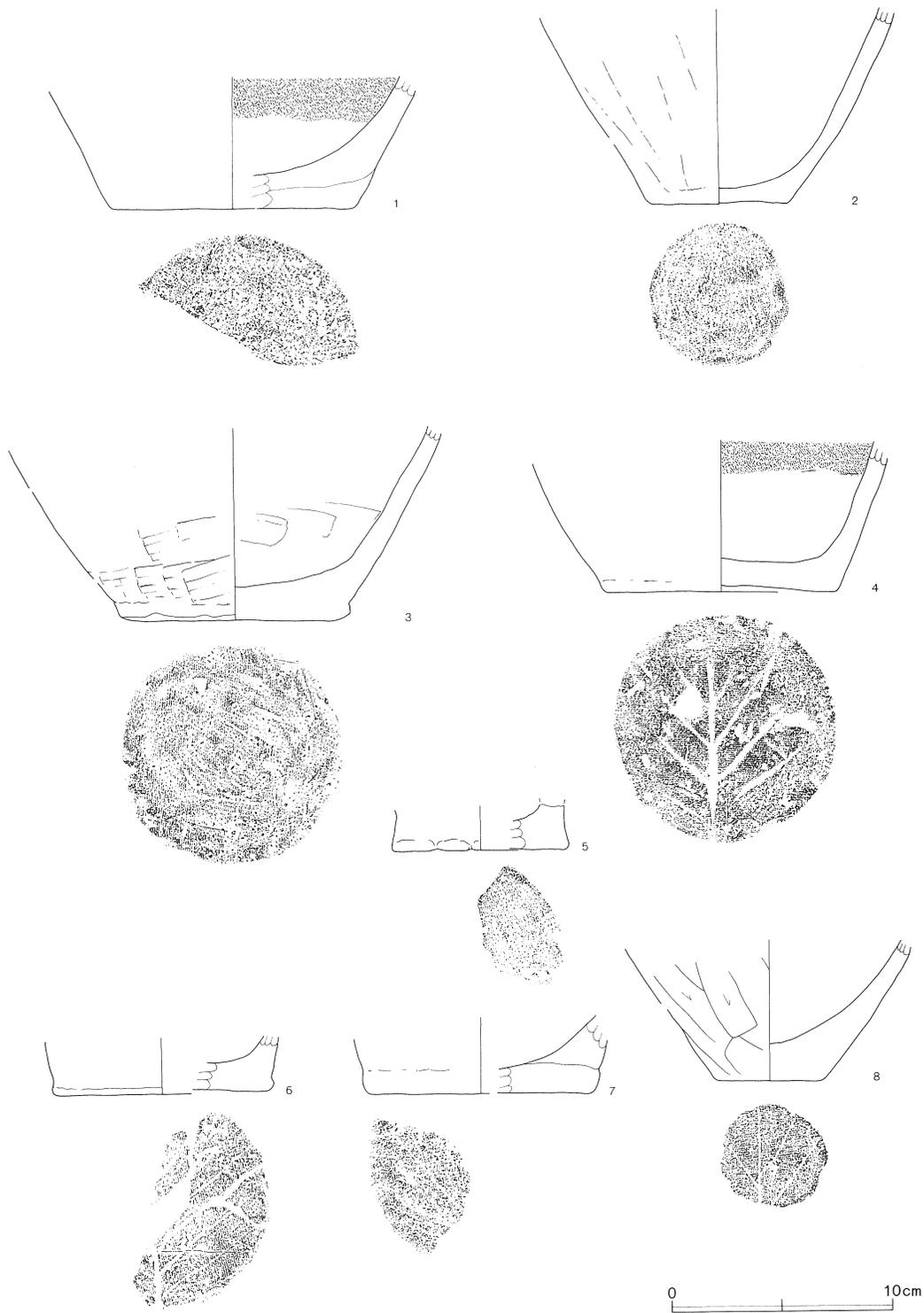
第43图 谷出土遺物(17)



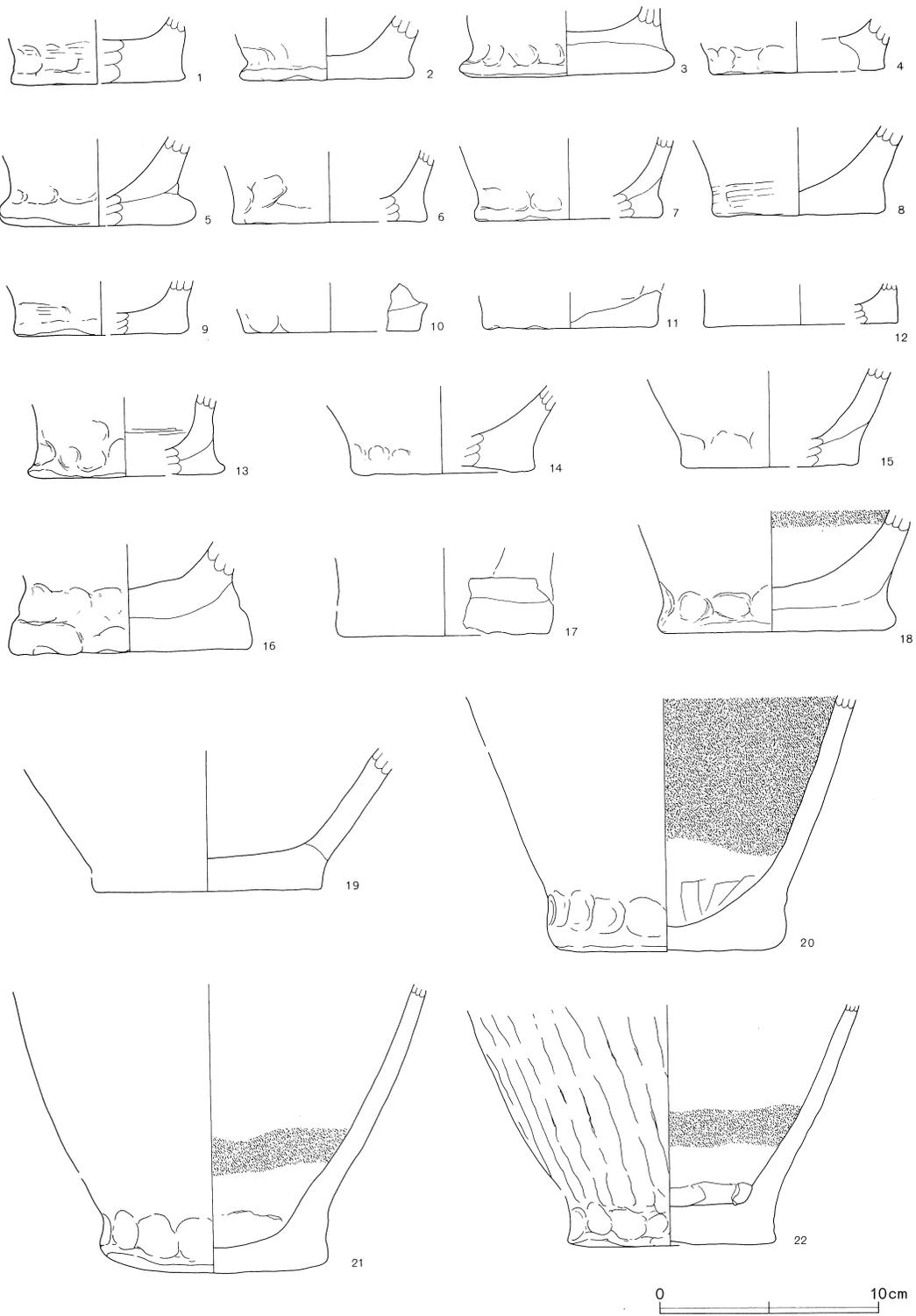
第44図 谷出土遺物(18)



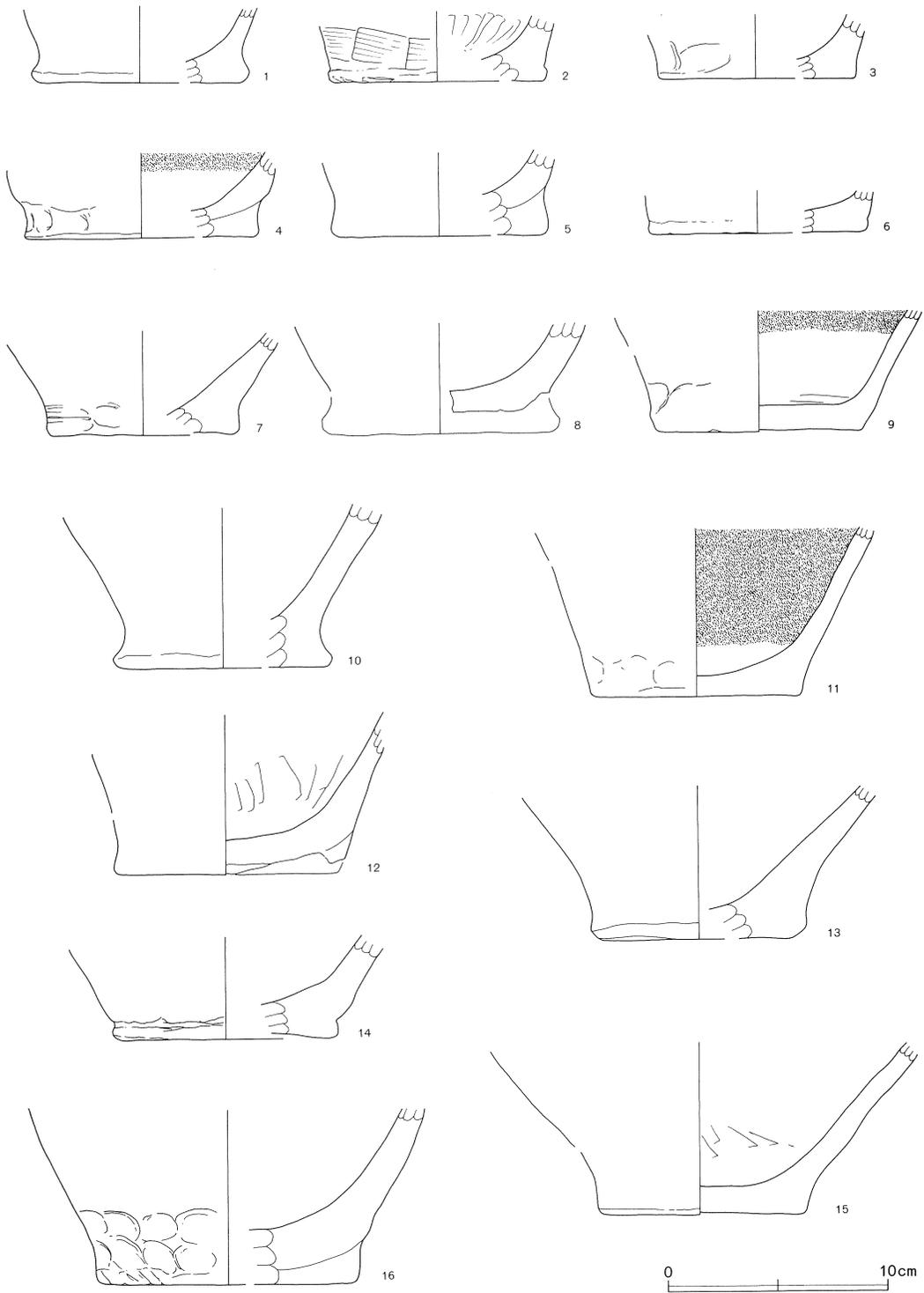
第45図 谷出土遺物(19)



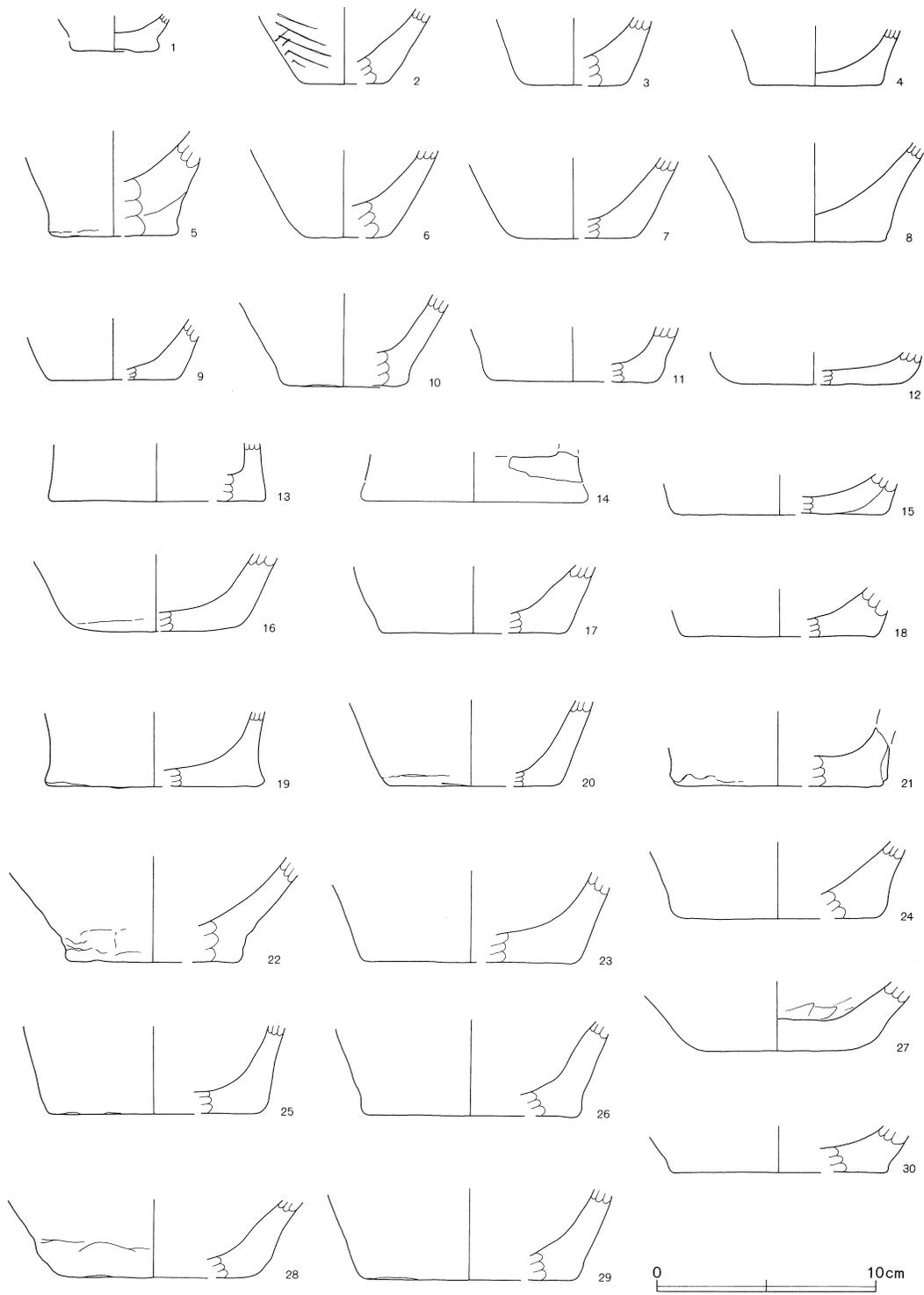
第46図 谷出土遺物(20)



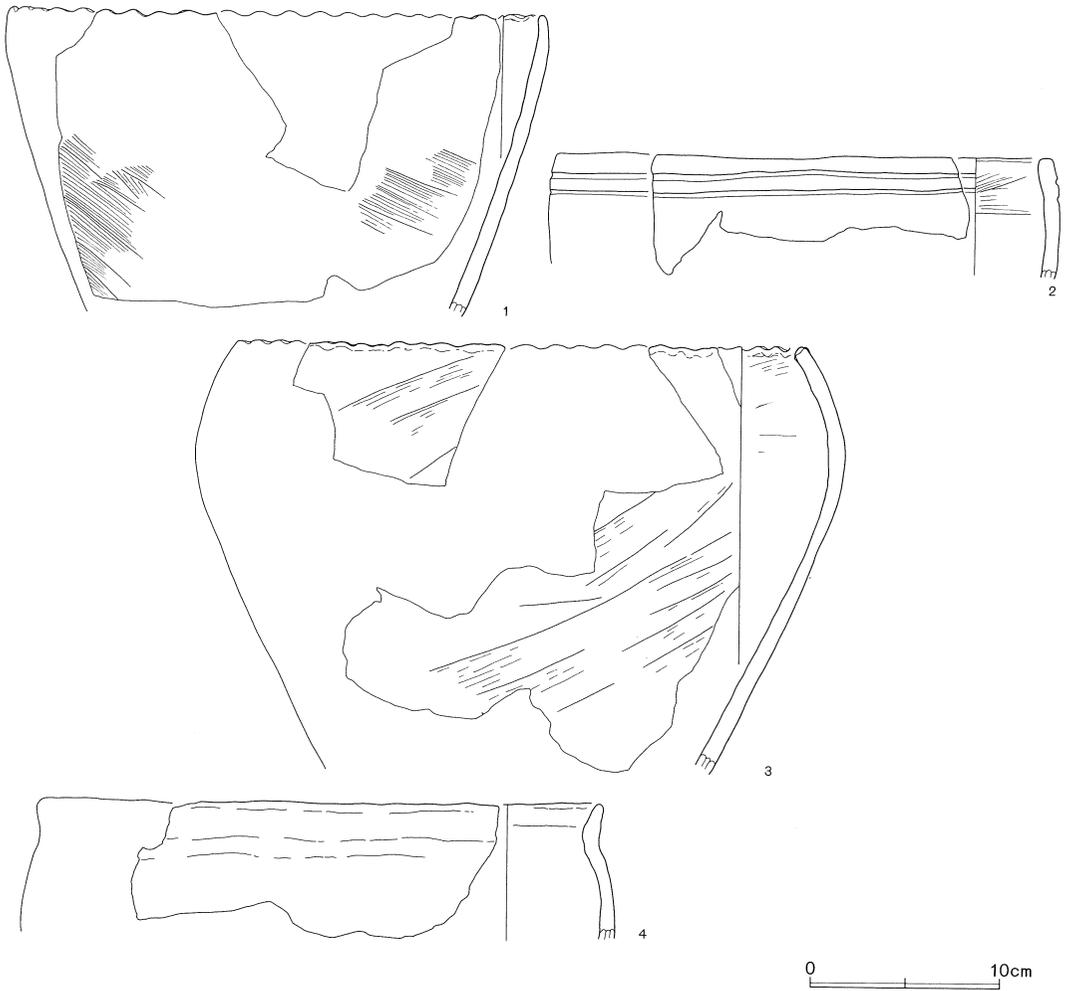
第47图 谷出土遺物(21)



第48図 谷出土遺物(22)



第49図 谷出土遺物(23)



第50図 谷出土遺物(24)

2類 (第31図、第32図1～3、第57図、第58図1～31)

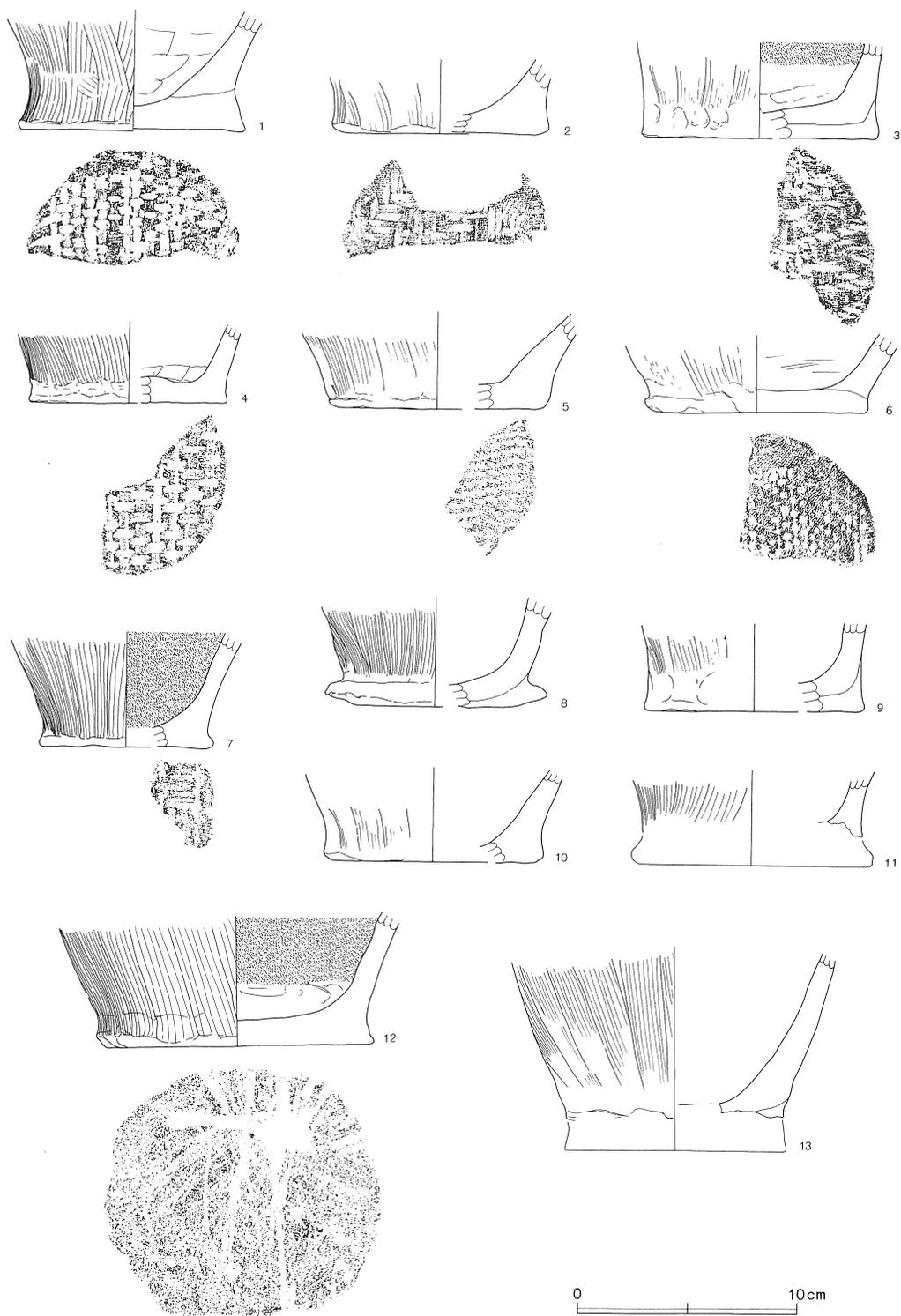
口縁部の隆帯が2段のもの。器形には口縁がひらくもの(第31図)と内彎するもの(第32図1)とがある。第32図1は推定口径25cm、器高39.7cm、推定底径9.5cmである。外面の風化が著しいが、縦方向の指ナデ調整がわずかに認められる。残存率は60%。

3類 (第58図32～38、第59図24)

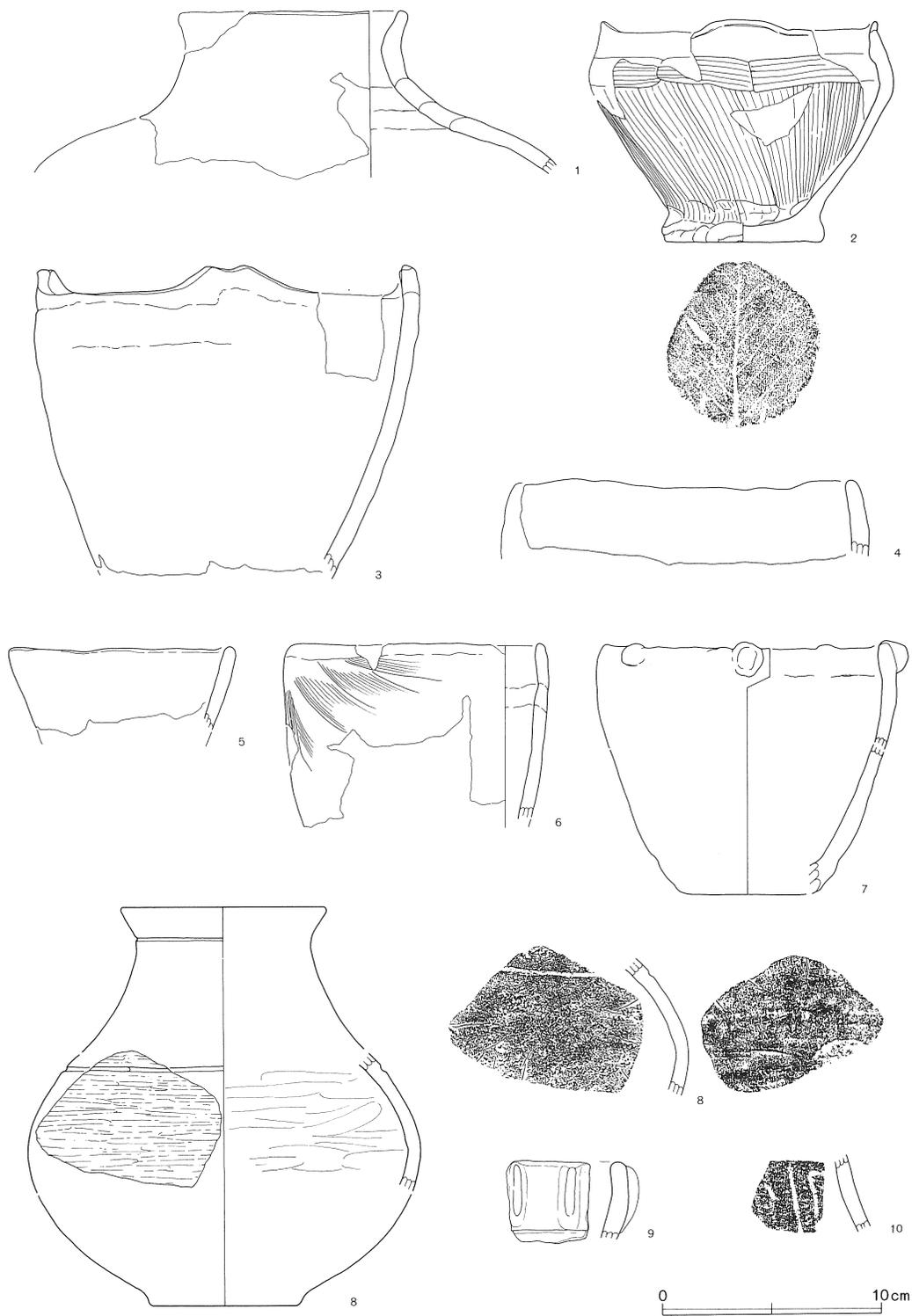
口縁部の隆帯が3段以上のもの。3段と推定されるものが主であるが、第59図24のように数段に及ぶものもある。

4類 (第50図2、第59図1～23)

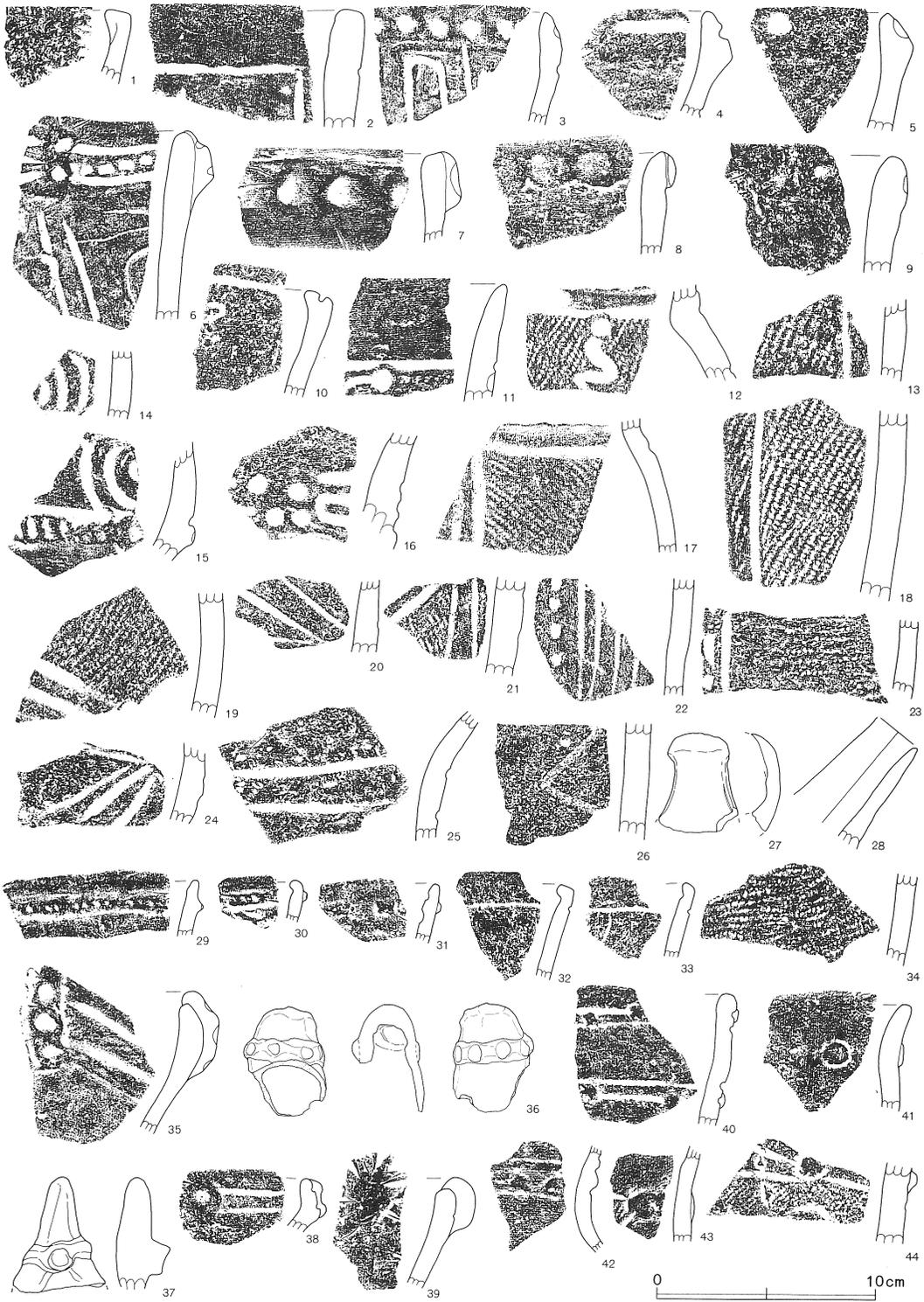
口縁部に沈線をもつもの。口縁部の隆帯が扁平化し、境目が沈線状となるもの(第59図1～22)



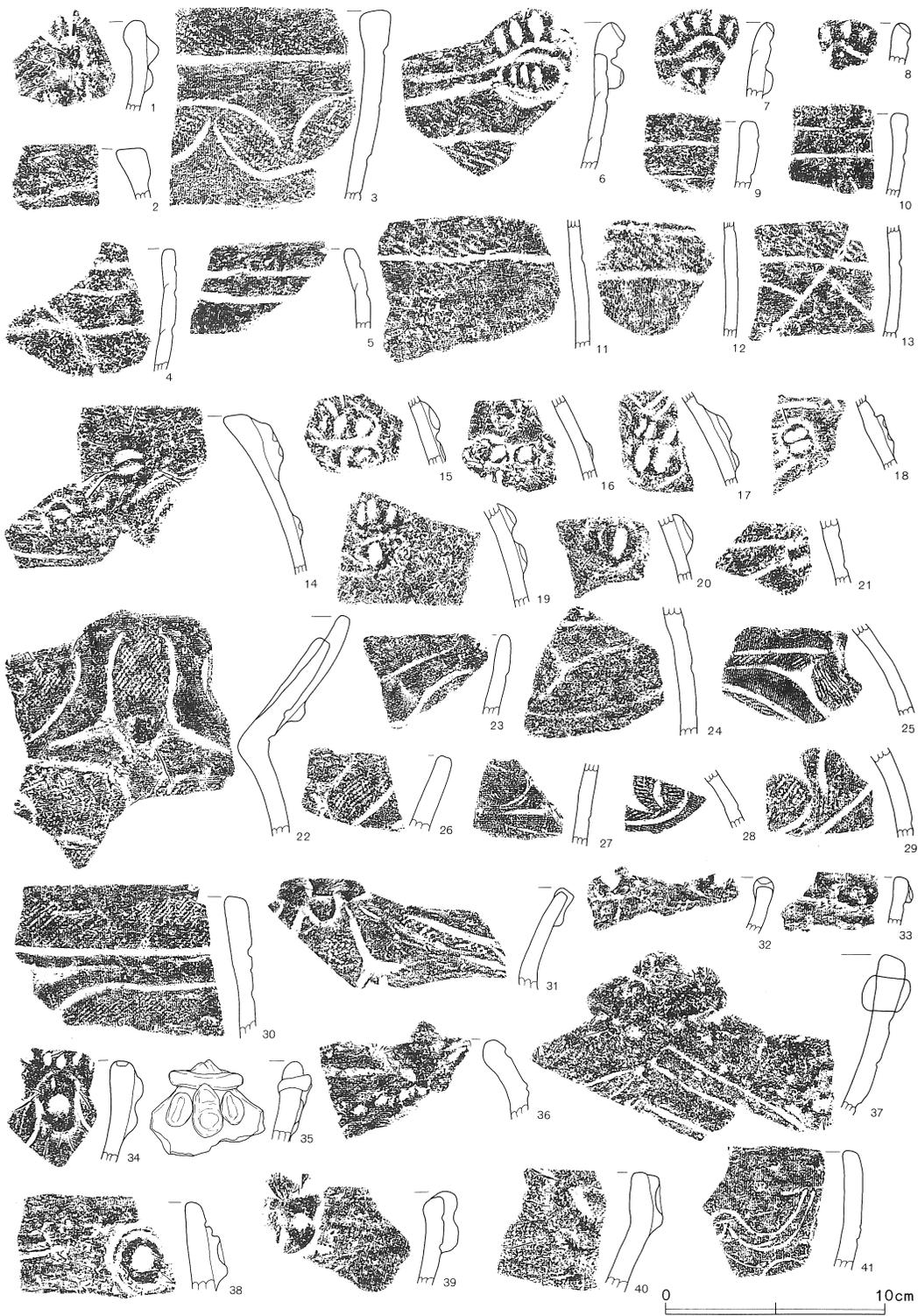
第51図 谷出土遺物(25)



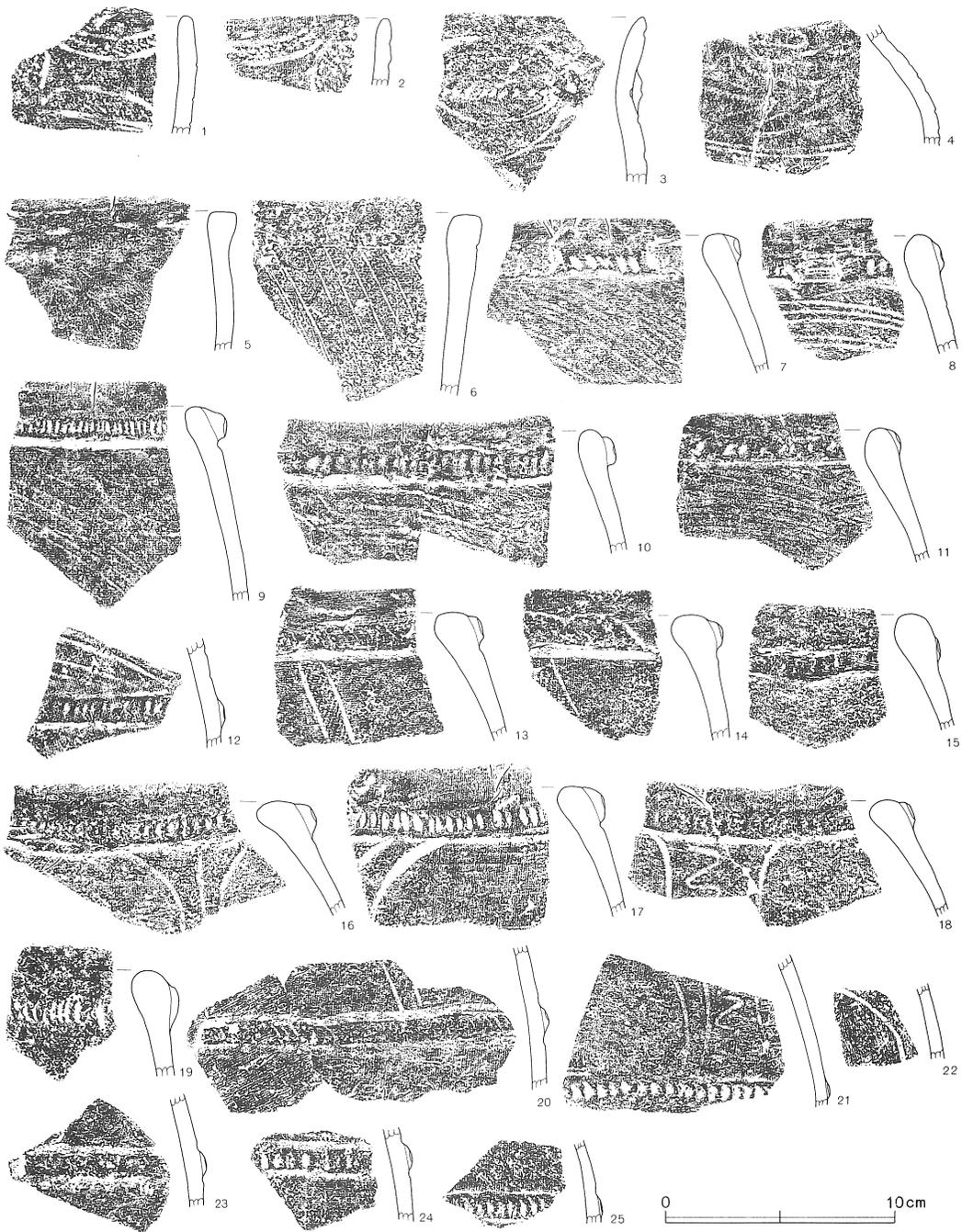
第52図 谷出土遺物(26)



第53図 谷出土遺物(27)



第54図 谷出土遺物(28)

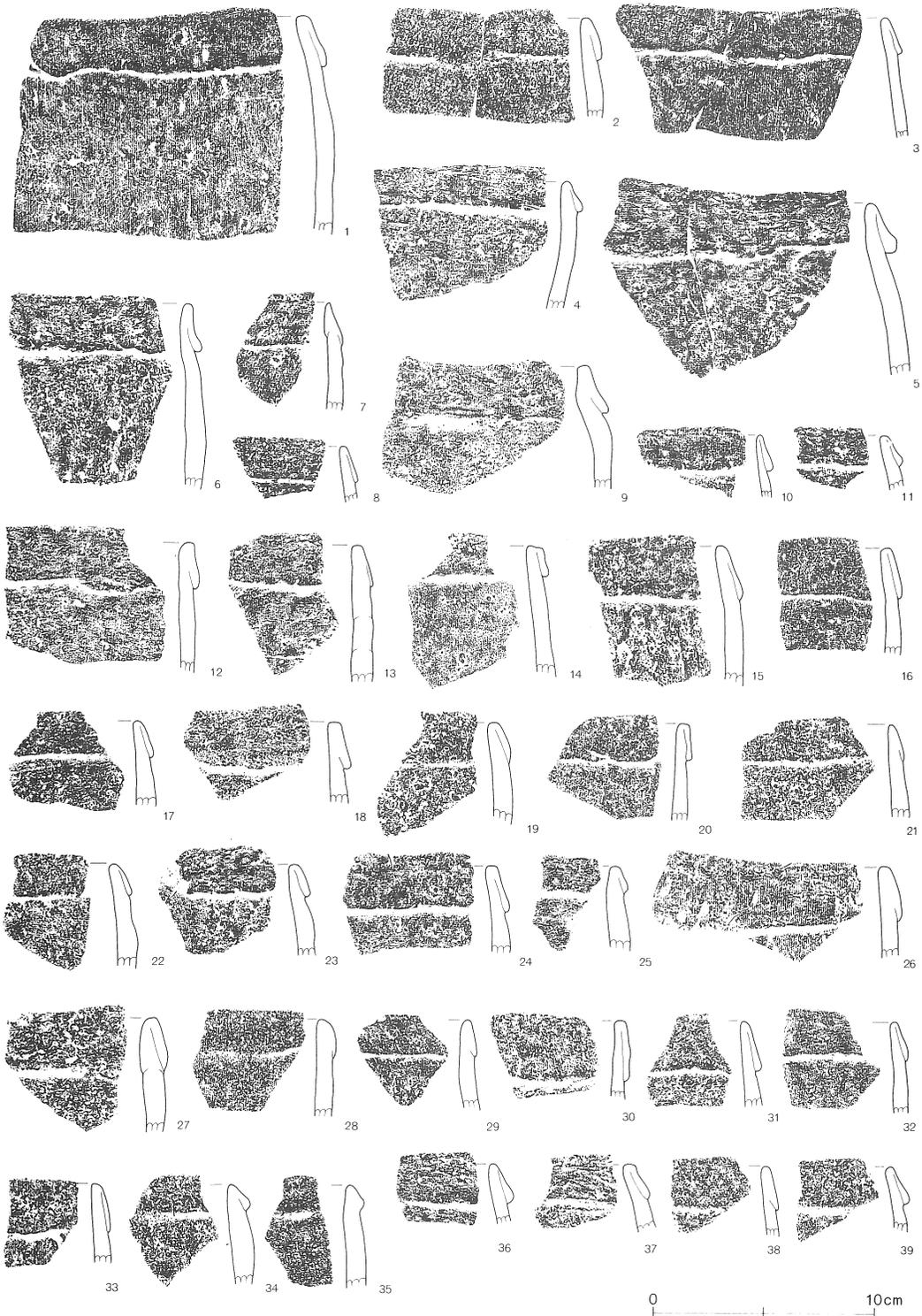


第55図 谷出土遺物(29)

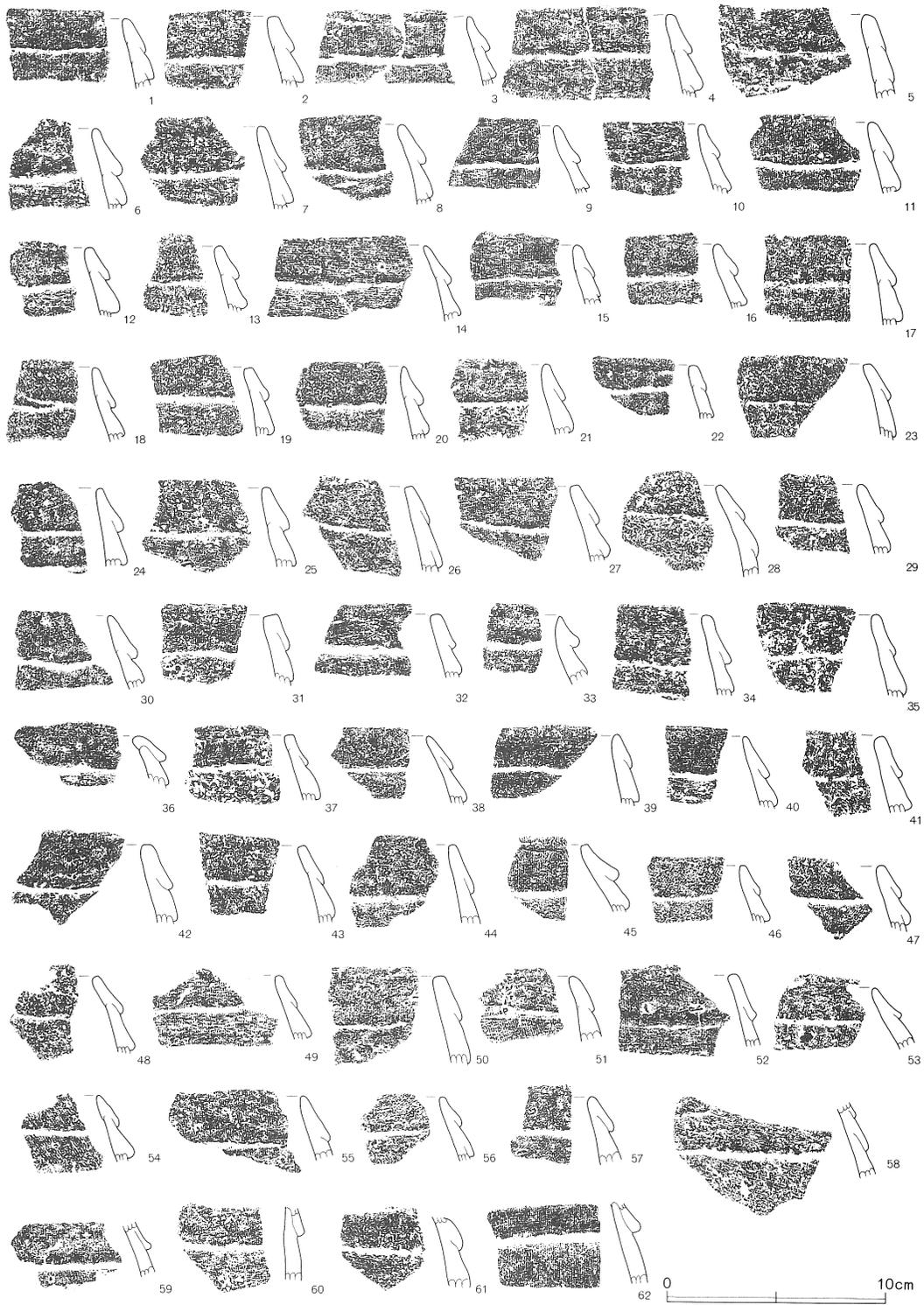
をa種とし、口縁部に隆帯を貼付せず沈線を施文するもの（第50図2・第59図23）をb種とする。

V群

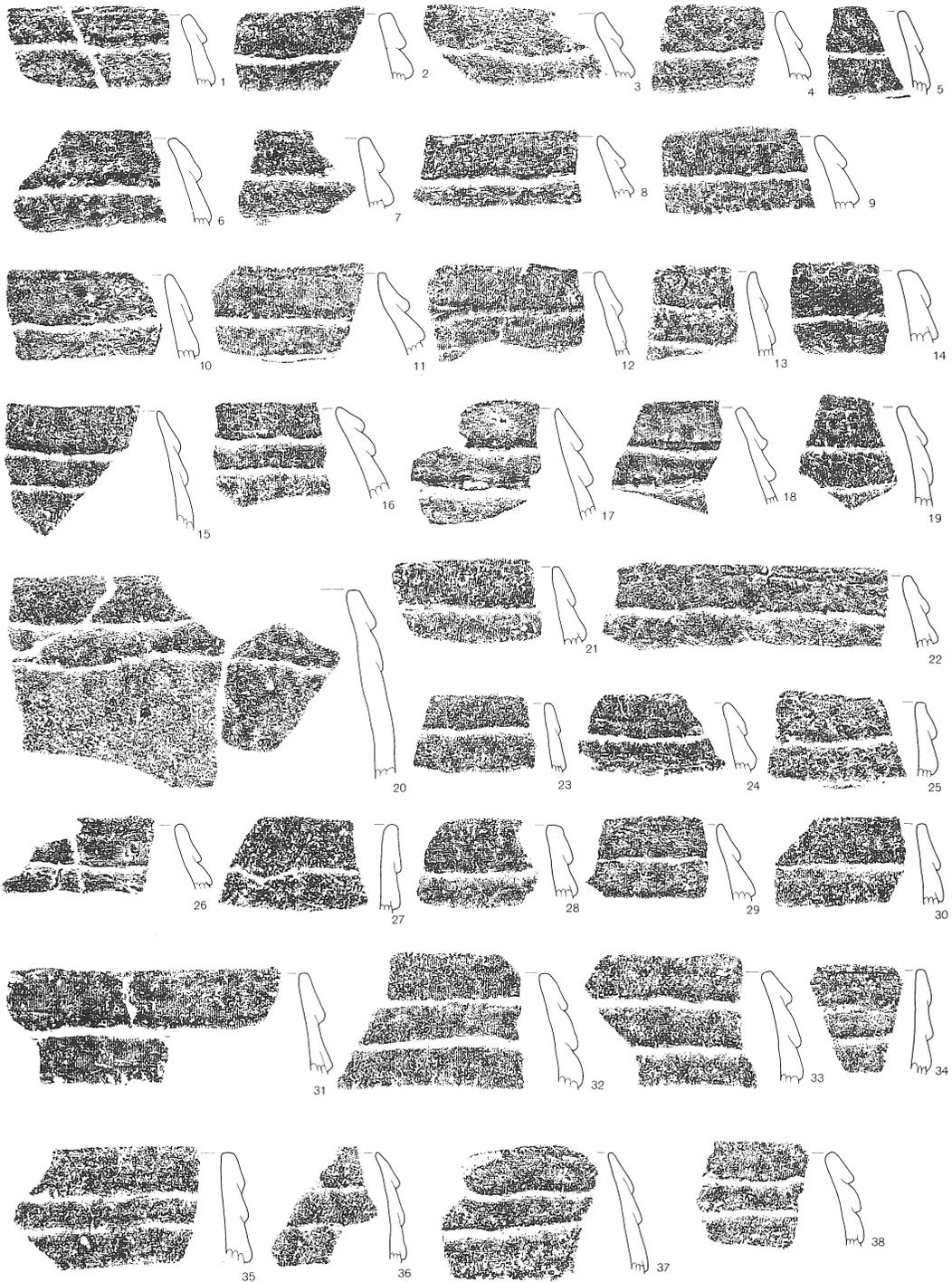
無文土器を一括する。IV群とともに谷包含層の主体をなす土器群である。



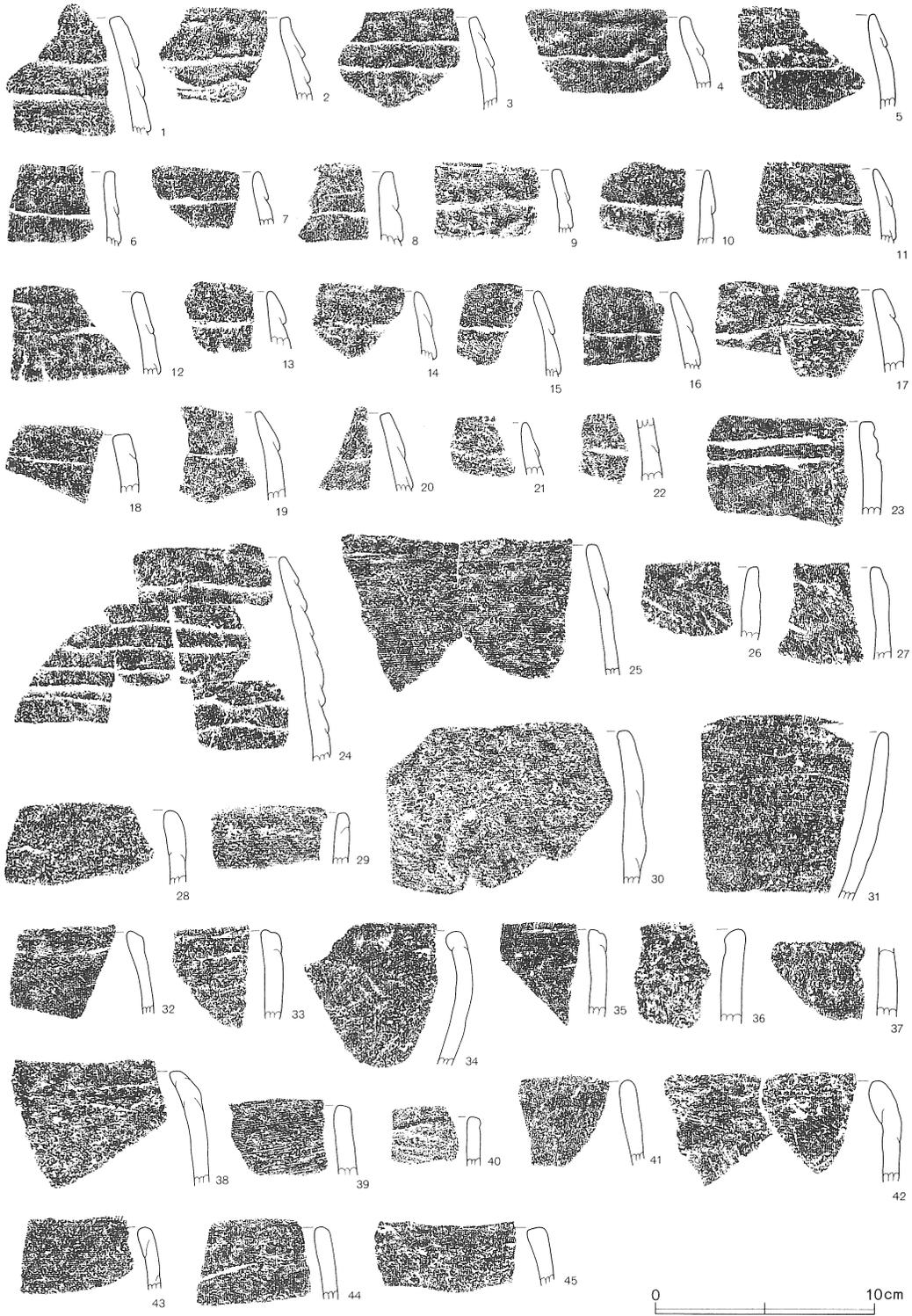
第56图 谷出土遺物(30)



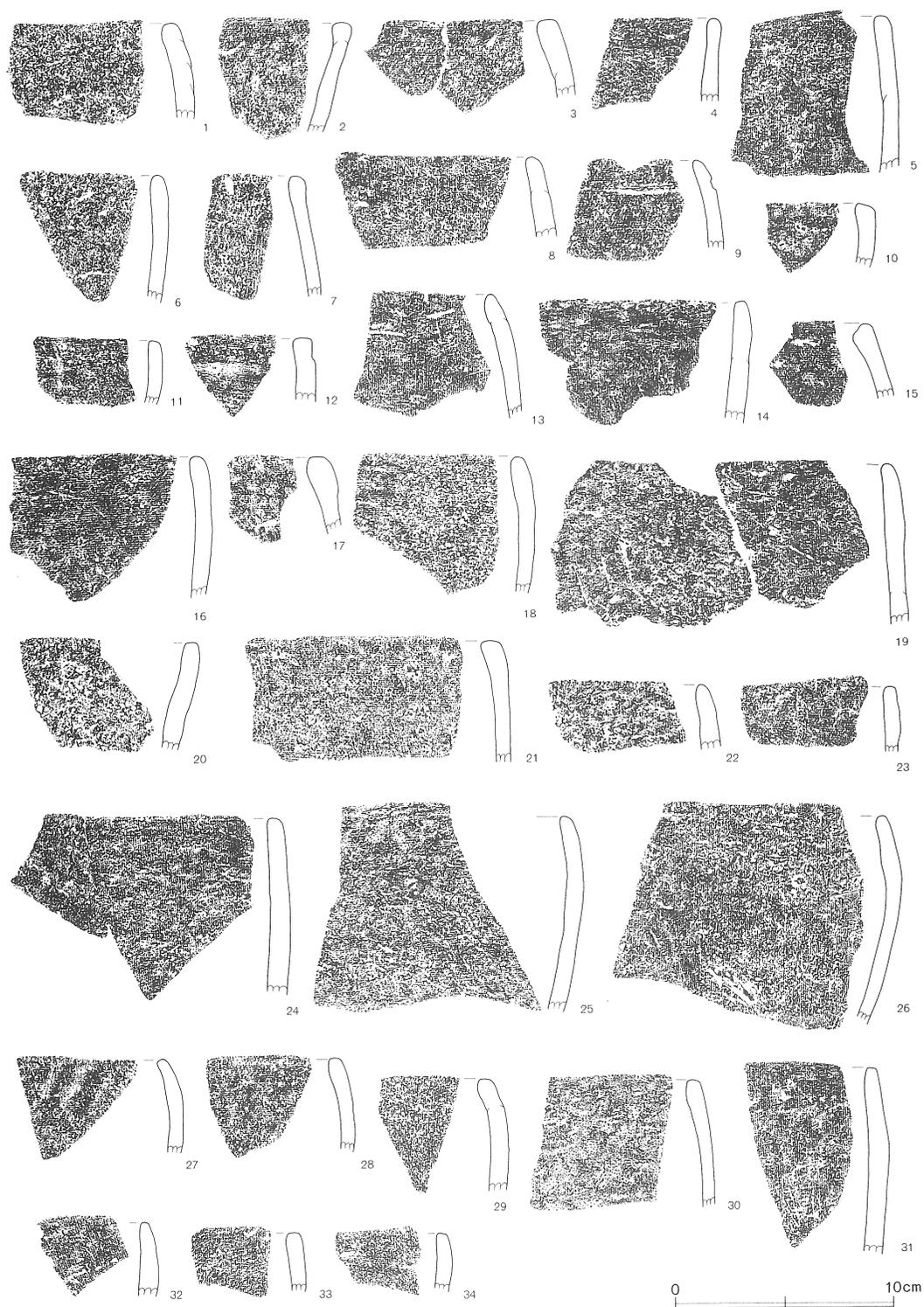
第57图 谷出土遺物(31)



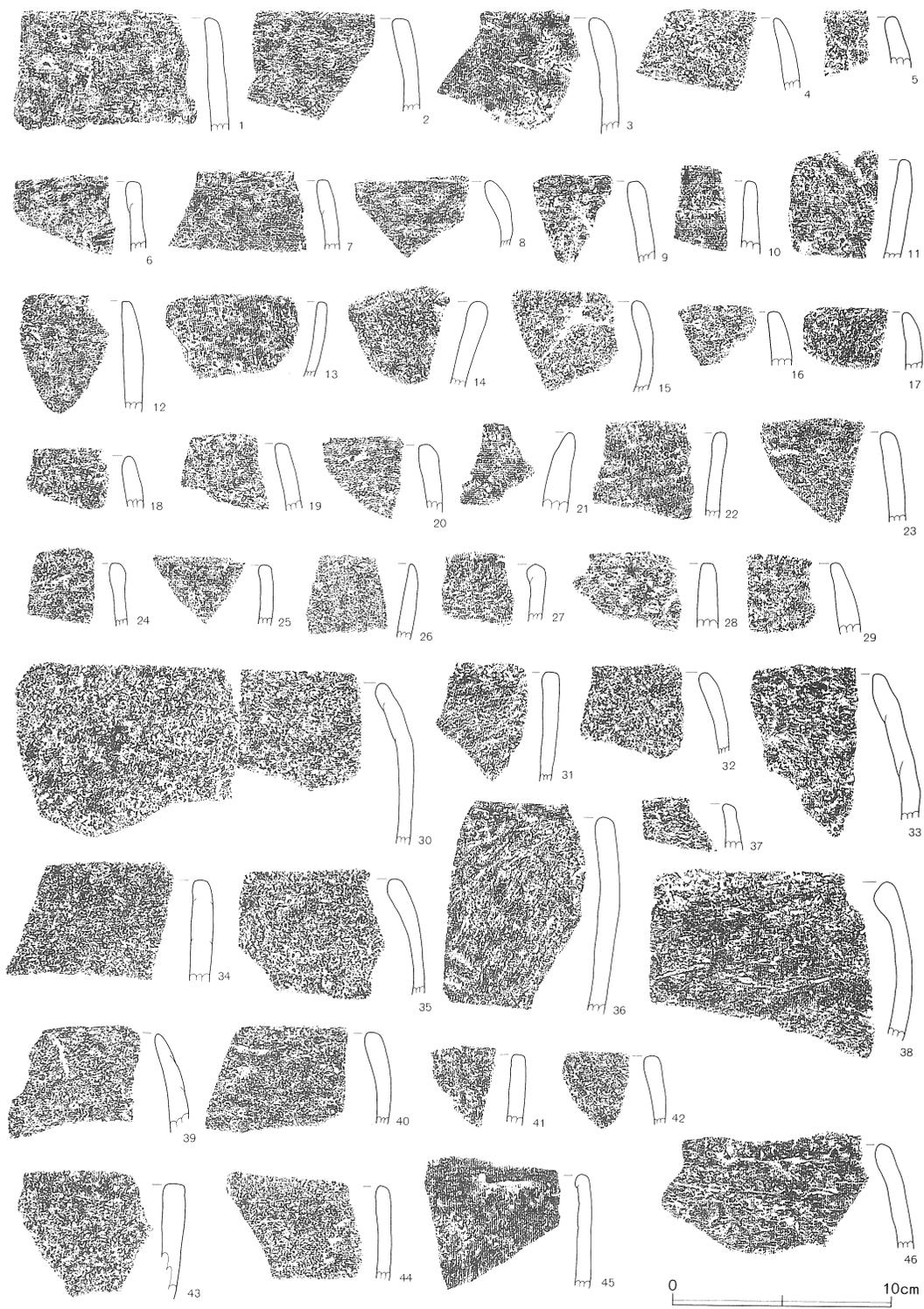
第58図 谷出土遺物(32)



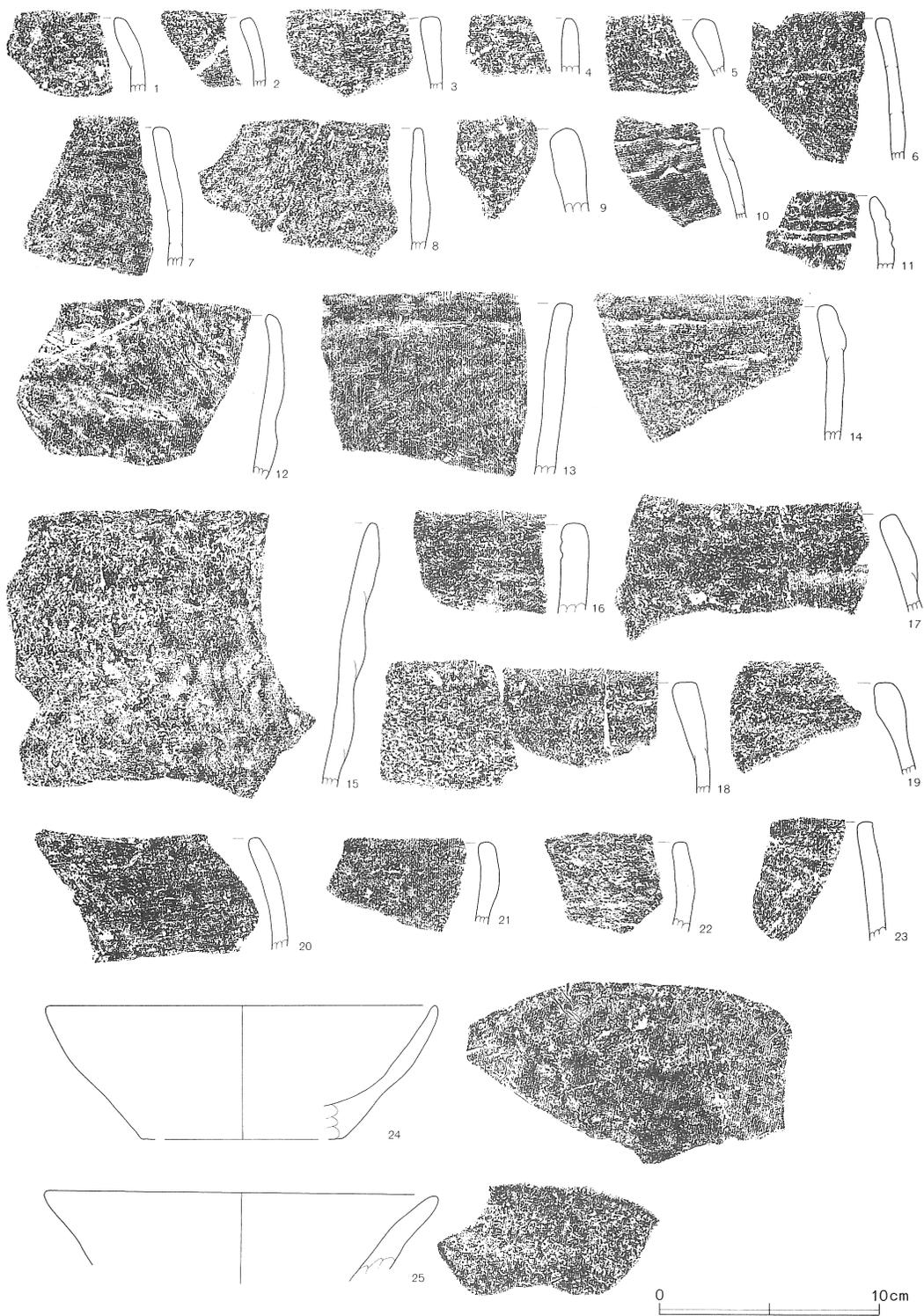
第59図 谷出土遺物(33)



第60図 谷出土遺物(34)



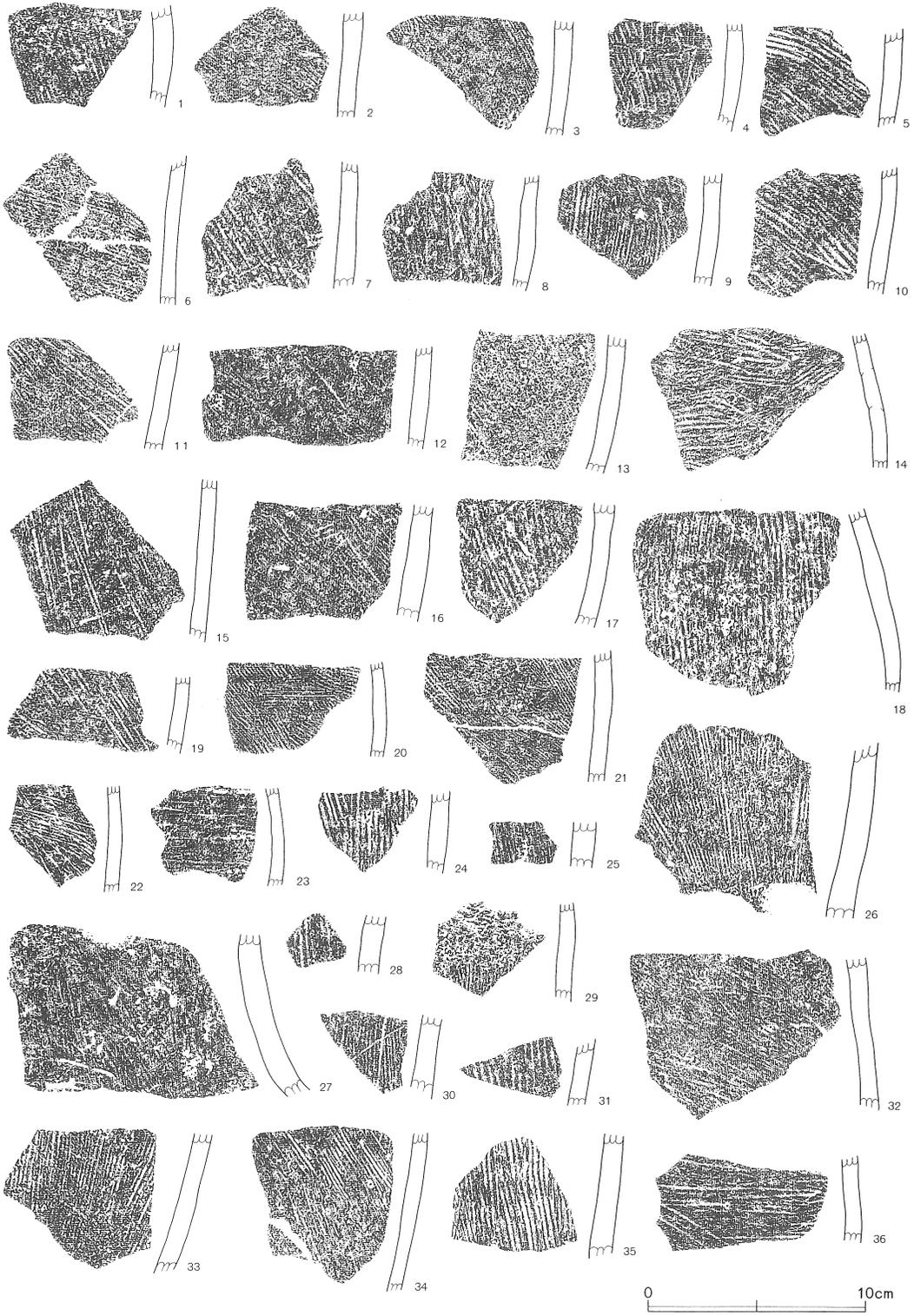
第61図 谷出土遺物(35)



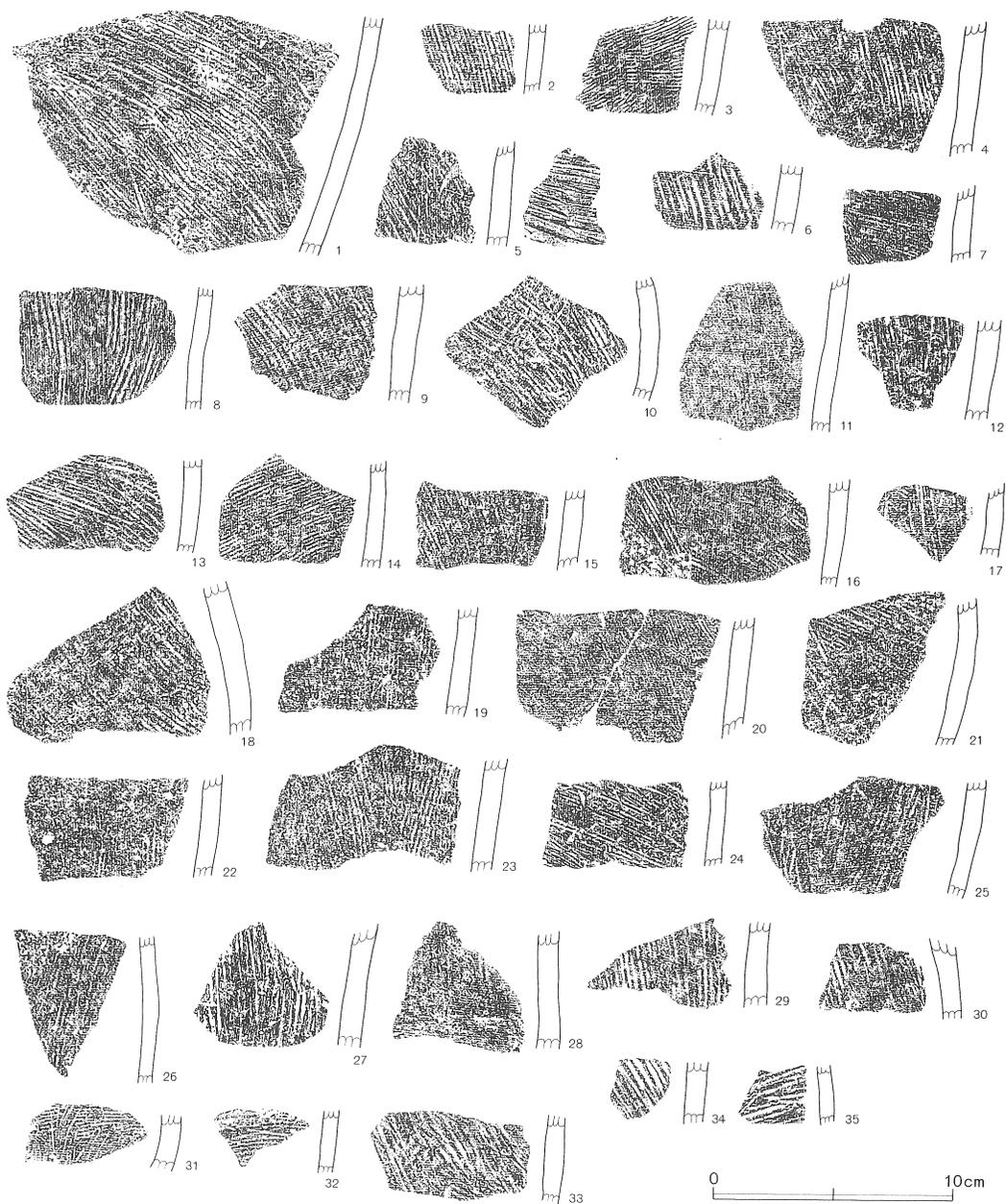
第62図 谷出土遺物(36)



第63図 谷出土遺物(37)



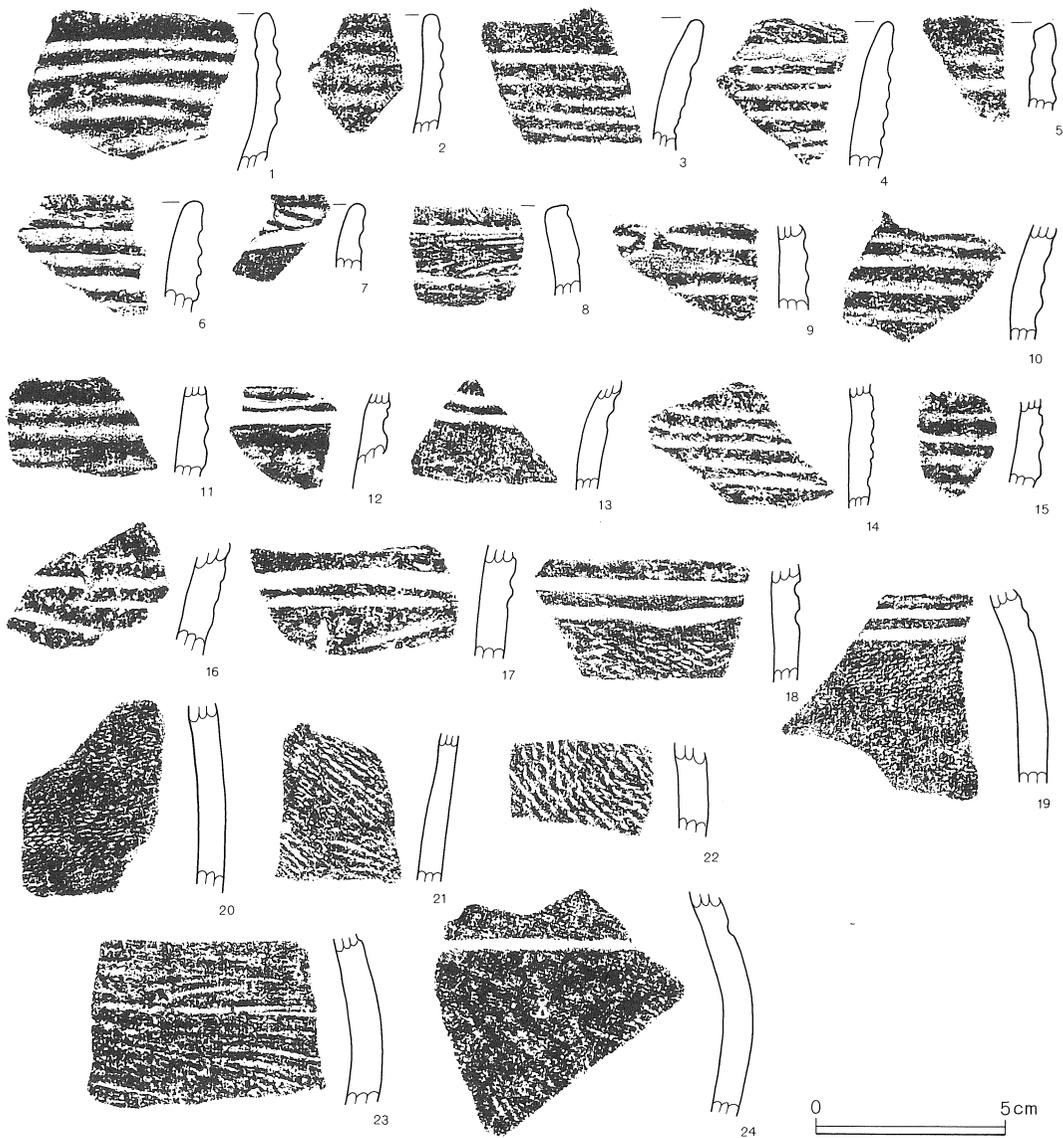
第64図 谷出土遺物(38)



第65図 谷出土遺物(39)

1類 (第32図4・5、第33図、第34図1・2、第52図4～6、第59図25～45、第60～62図)

口縁部になんら装飾をもたないもの。口縁部が肥厚するもの(a種)とそうでないもの(b種)とが認められる。深鉢形土器がほとんどを占めるが、浅鉢形土器もわずかながら含まれている。総じて風化が顕著で器面の調整を観察できるものが少ないが、指ナデを施すものや条痕の調整痕を残すものがみられる。第32図5は推定口径28cm、器高43.0cm、底径8.4cm。口縁部から胴部上半にか



第66図 谷出土遺物(40)

けて輪積痕および縦位の指ナデ痕が明瞭である。底部の調整には刷毛状の調整具を用いている。残存率は60%である。

2類 (第50図1・3、第52図3・7)

口縁部に装飾を施すもの。刻みを施すものをa種、突起を有するものをb種とした。第50図1・3は口縁部に刻みを施す深鉢である。条痕の調整痕が観察される。第52図3は山形の4単位の突起をもつ。外面は比較的丁寧に調整されている。口径17.4cm。同図7は瘤状に粘土を貼付したものである。単位は不明。風化が非常に進んでおり、表面は粉状になっている。口縁部と胴部の接合面は

ないが、大きさや胎土の状態から同一個体と判断した。

3類 (第50図4、第63図1～12)

無文の甕形土器を本群とする。口縁部に刻みをもつ第63図1～11をa種、口縁部が小さく広がる第50図4と第63図12をb種とした。

4類 (第52図1)

無文の壺形土器を本群とする。1は推定口径10.5cm。器面の風化が著しい。頸部に付着物が存在する。内面の輪積痕が明瞭である。胎土には赤色粒子、白色透明粒子の混入物が多い。

Ⅵ群 (第66図)

1類 (1・2・11)

浮線文系の浅鉢形土器を1類とする。1・2は口唇部にかけて直線的に立ち上がる浅鉢形土器である。1は対向する三叉状の彫り込みが施され、浮線によって流水状のモチーフが描かれている。彫り込み凸部の両側はわずかに隆起している。口縁部内面に2条の沈線を持つ。2は平行沈線の一部に三叉状のえぐりをいれることにより、π字状のモチーフを描いている。11も浅鉢の胴部と考えられる。1と同一個体の可能性もある。

2類 (3～7、9～15)

1類に伴うと考えられる甕形土器である。3～7は口縁部、9～15は胴部破片である。口唇部下の装飾は、4には条痕、7には斜行する沈線が施されている。9は甕形土器の頸部下端の装飾と考えられるが、浅鉢の可能性もある。浮線の結節部にヘラ状工具により、縦長の刻みが施されている。10～15も頸部下端の装飾の一部と考えられる。いずれも平行沈線が施されている。

3類 (16～19、23・24)

沈線文を主体とするものである。荒海式併行期及びその直後のものと考えられる。いずれも甕形土器の胴部破片と考えられる。16と17は沈線によって変形工字文系のモチーフが描かれている。17は地文に条痕を持つ。18・19・23・24は地文に密な捺糸文をもち、その上に平行沈線が施されている。いずれも先端に丸みのある、やや幅広の工具で施文されている。

Ⅶ群 (第63図14～16)

口縁部に突帯文を有するものを本群とした。口縁部に刻みの施された突帯が巡っている。器面は縦方向のケズリで調整されている。

Ⅷ群

1類 (第52図2、第63図17～36、第64・65図、第66図8)

条痕文を有する粗製土器を一括する。第52図2は推定口径12.5cm、器高10.1cm、底径7.4cmの鉢形土器である。口縁部に小さな突起を有し、無文帯が巡る。条痕は胴部を縦位に施した後、口縁下横位に1段施される。底部には指当痕と施文具による調整痕が残る。底は木葉痕が明瞭である。

第63図17～36、第66図8は口縁部の、他は胴部の破片である。口縁部に刻みをもつものも見受けられる。第66図8は口縁部に粘土帯を貼付し、その上に斜行する条痕を有する深鉢である。口唇部は平に面取りされている。胴部には横走する条痕が施されている。

IX群 (第66図20～22)

撚糸を施文する土器群を本群とした。甕、または深鉢の胴部破片と考えられる。

XI群

底部および胴部～底部にかけての土器を一括した。

1類 (第34図3～5、第46図2・8、第49図2)

底径の小さな底部をもち、器面はケズリで調整される。条線が施されるものもある。安行式の粗製土器の底部と考えられる。

2類 (第35～48図、第49図3～30)

無文土器の底部を一括した。内面には炭化帯が巡るものが多い。指当痕や刷毛目状の調整がみられる。

3類 (第51図)

条痕文が施される底部を3類とした。風化のためわずかな痕跡しか観察できないものもある。形態は総じて幅広の平底である。

XII群 1類 (第52図8)

遠賀川式と推定される壺の胴部破片である。外面は風化が進みよく見えないが、縦位の細かい刷毛目で調整した後、丁寧に横方向にミガキが施されているようである。肩部の沈線は浅いが明瞭である。内面はナデ状の調整痕が観察できる。色調は外面が褐灰色、内面が灰黄褐色を呈する。

XIII群 1類 (第52図9・10)

9は棒状浮文が施される口縁部である。本類に属する確証はないが、後期のものとも思われないので、とりあえずここで紹介しておく。10は壺頸部か。

2 グリッド

ここでグリッド出土として報告する土器群には、表採資料や遺構確認時における出土資料を含むが、主体となるのは古墳時代以降の遺構に混入して出土した資料である。

I 群 2 類 (第67・68図)

称名寺式。第67図1・2は波状口縁の深鉢形土器である。1は沈線による文様が施され、波頂部から刻みをもつ隆帯が下りる。2は波頂部に渦巻状の突起をもつ。風化が著しく隆帯は大半が剥落している。第68図1～14は沈線内に縄文を施文するもの。原体は縄文LR。15～23は沈線内に刺突文を施文するものである。21は刻みを施した偽口縁である。

I 群 3～6 類 (第69図1～32)

1～24は3類a種堀之内I式。25～27はb種堀之内II式である。28は横方向の荒い指ナデ調整を施している。3類a種の粗製土器と考えられる。29～31は4類加曾利B式。30は口縁部に粘土瘤を貼付し、つまみ調整を施している。32は5類曾谷式である。波状口縁の破片であるが、隆帯は欠落している部分がある。

II 群 (第69図33～37)

33は1類の安行1式。肥厚する口縁に縦長の粘土瘤を貼付する。縄文はLR。35～37は3類安行3a式である。

IV 群 (第74図1～16)

1～8は隆帯が1段の1類であるが、2や7などは沈線化する4類a種に近い。9～11は2段以上の隆帯が貼付されるもので2類もしくは3類である。12～16は1段の隆帯に横位の条痕が施されるものである。これを1類c種とする。17は4類a種、18は4類b種である。

V 群 (第74図35～44・54)

35～37は刻みの施される2類a種、43・44は甕形土器の3類である。38～42は1類に分類されるが、38は内面に隆帯貼付の痕跡がみられる。54は推定口径10cmの小形の壺形土器である。口縁部は若干肥厚する。4類に分類しておく。

なお、第74図の45～53は沈線や縄文を施文する口縁部の破片である。今回の分類の範疇に入らないものとしてまとめて掲載した。45～47は沈線を有するものである。46はあるいはII群2類に含まれるかもしれない。48は連続する刺突を施すもの。49は小さな突起をもち、沈線下に縄文LRを施文するもの。50・51は縄文施文の口縁部である。51は若干外反し、内側から刻みが施されている。

Ⅵ群1類 (第70図1～25、27～55)

浮線文系の浅鉢形土器である。器形には、口縁部が直立するもの(1～25・43)、やや内湾するもの(40・47)、体部上半で緩やかにくびれ、頸部が外反するもの(41・42・44・45)がある。

1～19は口唇部直下に無文帯が発達せず、口外帯の装飾を持たないものである。5・12～14・17は、摩耗が激しく、詳細は不明である。18は沈線の幅が広く、浮線化が進んでいるが、他のものは沈線部分と隆帯部分がほぼ同じ幅で、浮線化はあまり進んでいない。8は口唇部の形状から、甕形土器の可能性もある。17は頸部に結節を持つ。

20～25は口唇部直下に無文帯を持つものである。21は頸部に幅広の無文帯を有し、頸部に結節を持つ。結節部は、下方の沈線からのえぐりによってπ字状を呈する。22は口唇部に緩やかな突起を持ち、頸部に結節が施される。頸部の結節は、粘土粒の頂部に刻みをいれて作出されている。

40・42～46・54は口唇部直下に無文帯を有し、口外帯に装飾を持つものである。

43の口外帯装飾は突起間を結節沈線で結ぶものである。突起には下方からえぐりが加えられている。他は中心に刺突のある突起を持つもので、41もおそらくこれと同様の装飾を持つと考えられる。54と55は同一個体である。このタイプには、頸部に突帯や結節を持つものはみられない。

27～31は、頸部に突帯、または結節を持つ胴部破片である。28・29は結節部が隆起するもの。30・31の結節部は痕跡的なものである。

胴部文様帯の意匠の全容が明らかな資料は少ない。21は浮線が重畳するが、意匠は不明である。22は斜行する浮線が施されている。浮線上には細かい刻みが連続して施される。24は網目状の浮線が施されるものである。浮線の結節部には、粘土の「マクレ」が目立ち、乾燥度が低いうちに施文されたと考えられる。32・52は重畳する浮線が収斂することによって、レンズ状のモチーフが描かれている。40は重畳する浮線で弧線状に垂下するモチーフが描かれているが、意匠全体の構成は不明である。41は重畳する浮線が菱形のモチーフを構成すると考えられる。47・49も同様のモチーフと考えられる。53は胴部下半に施文されており、浮線の結節部に刺突が施され、モチーフを構成する浮線上に連続する刺突が施されている。54・55は32・52に比べてやや直線的なレンズ状のモチーフと考えられる。

Ⅵ群2類 (第71・72図)

1類に伴うと考えられる甕形土器である。第71図1～21は口縁部破片、同図22～33、第72図は胴部破片である。口唇部直下の装飾は、第71図1・2が燃糸文、5・7・16は条痕、3・12はLR単節縄文が施される。14・15もLR単節縄文が施され、同一個体である。

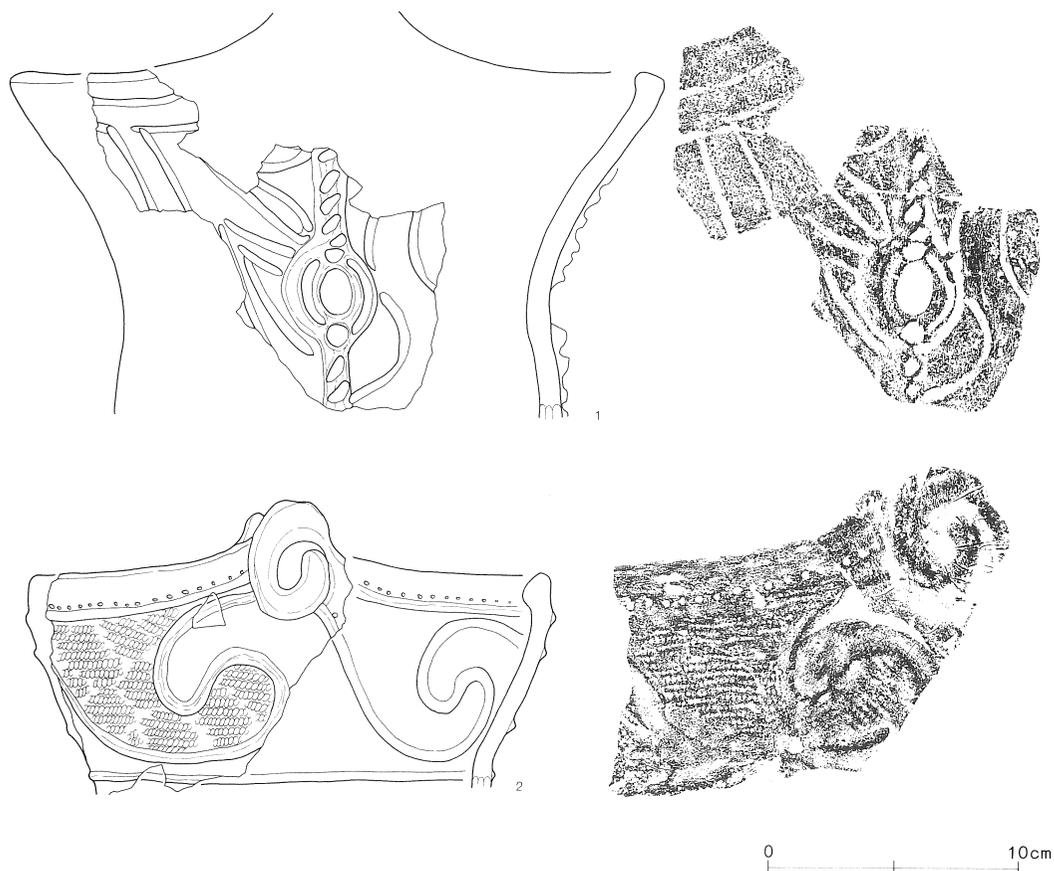
頸部上半の装飾には、平行沈線の一部にえぐりをいれ、隆帯部の一部を接続するもの(4)、綾杉状、または斜行する重畳沈線が施されるもの(6・13)、平行沈線が施されるもの(5・12)がある。

第71図23～30は頸部装飾帯の明らかな胴部破片である。23・26は工字文、24・27は浮線の結節部に刻みを有するもの、25・28は浮線の一部分を下方から押し上げて浮線部を接続させ、レンズ状のモチーフを取るものである。29・33は平行沈線が施されている。

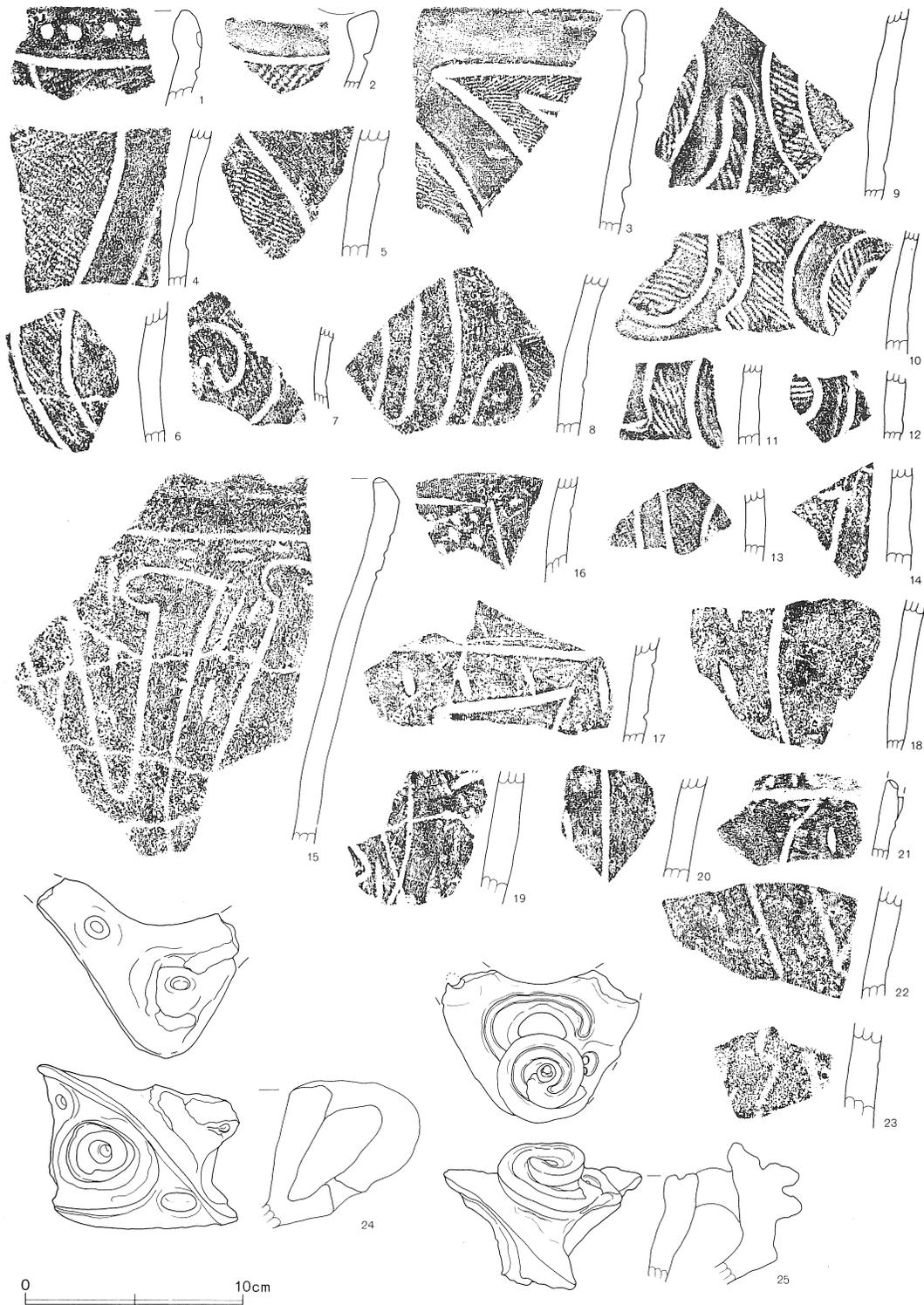
第72図も胴部破片である。30～39は、綾杉状の沈線文が施されている。いずれも頸部下端の裝飾帯に施されたものと考えられる。地文には15・22・36が条痕、17・21・26はL R単節縄文、28・33は細密な条痕が施されている。

Ⅵ群 3類 (第70図26、第73図)

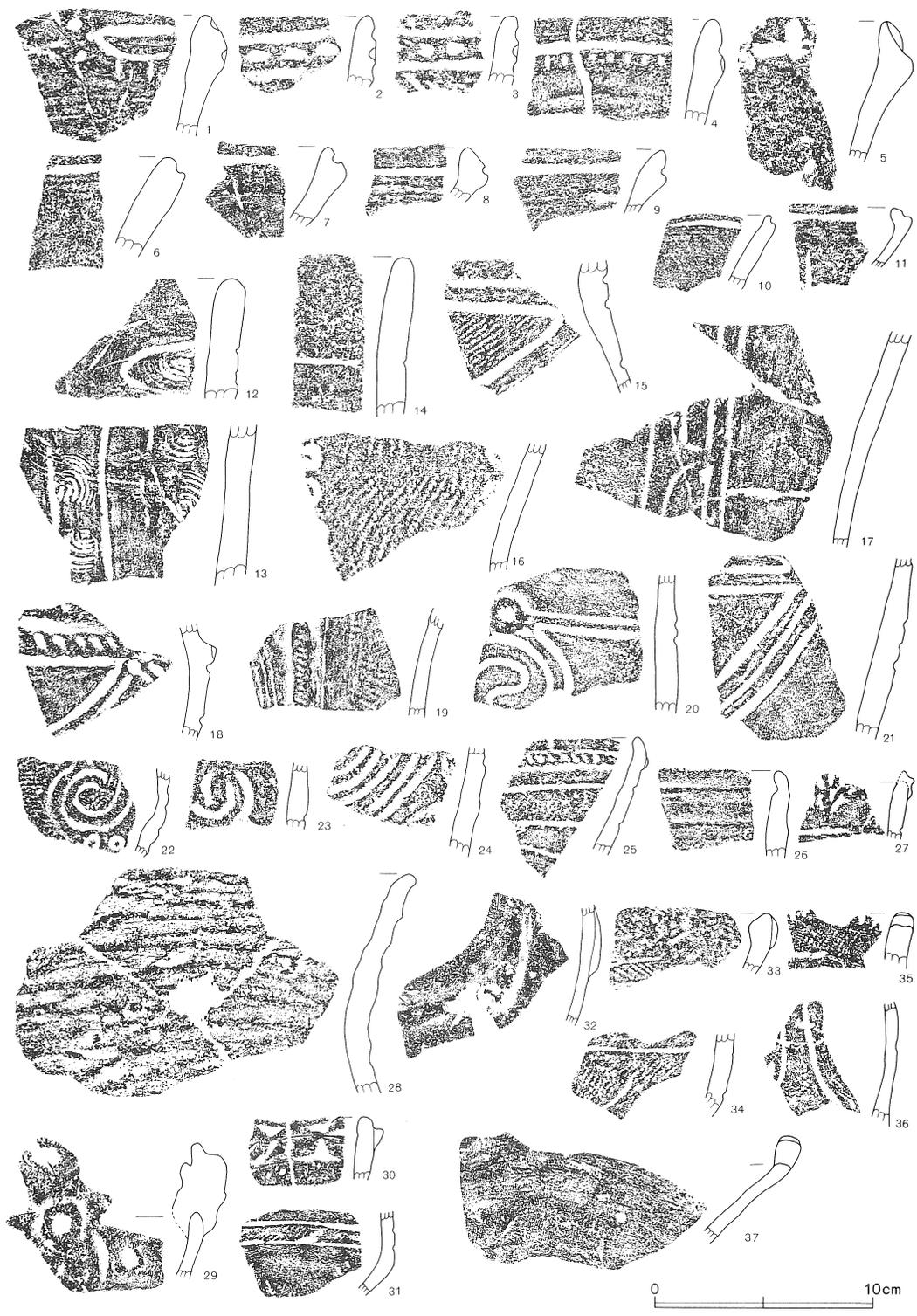
沈線文を主体とするものである。荒海式併行期及びその直後のものと考えられる。第70図26は浅鉢で、ヘラ描きの沈線により、流水状のモチーフが描かれると考えられる。第73図1～6は甕形土器の口縁、7～11は鉢、14・15は浅鉢である。鉢、浅鉢の口唇部は先端が丸みを帯びるか、やや尖り気味になるものが多い。15は口唇部が面取りされ、細い沈線によって変形工字文系のモチーフが描かれる。16・17は頸部に変形工字文を有する甕形土器の胴部と考えられる。L R縄文施文後、先端に丸みのある工具で幅広の平行沈線が施されている。21・22は地文に条痕をもち、斜行する沈線が見られる。変形工字文系のモチーフをもつ甕形土器と考えられる。25は細い沈線によって流水状のモチーフが描かれているが、意匠全体の構成は不明である。外面はよく磨かれており、壺形土器と考えられる。



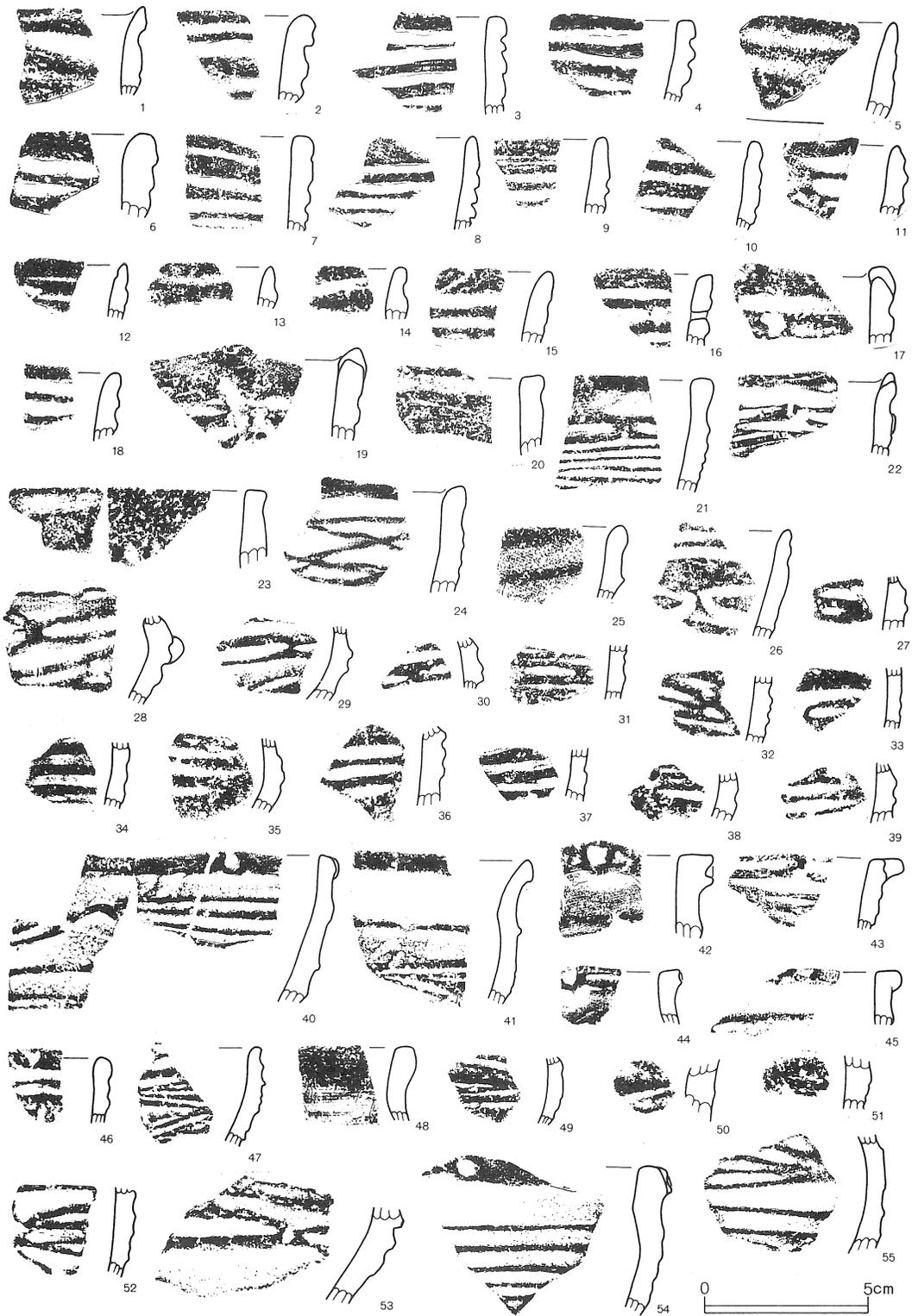
第67図 グリッド出土遺物(1)



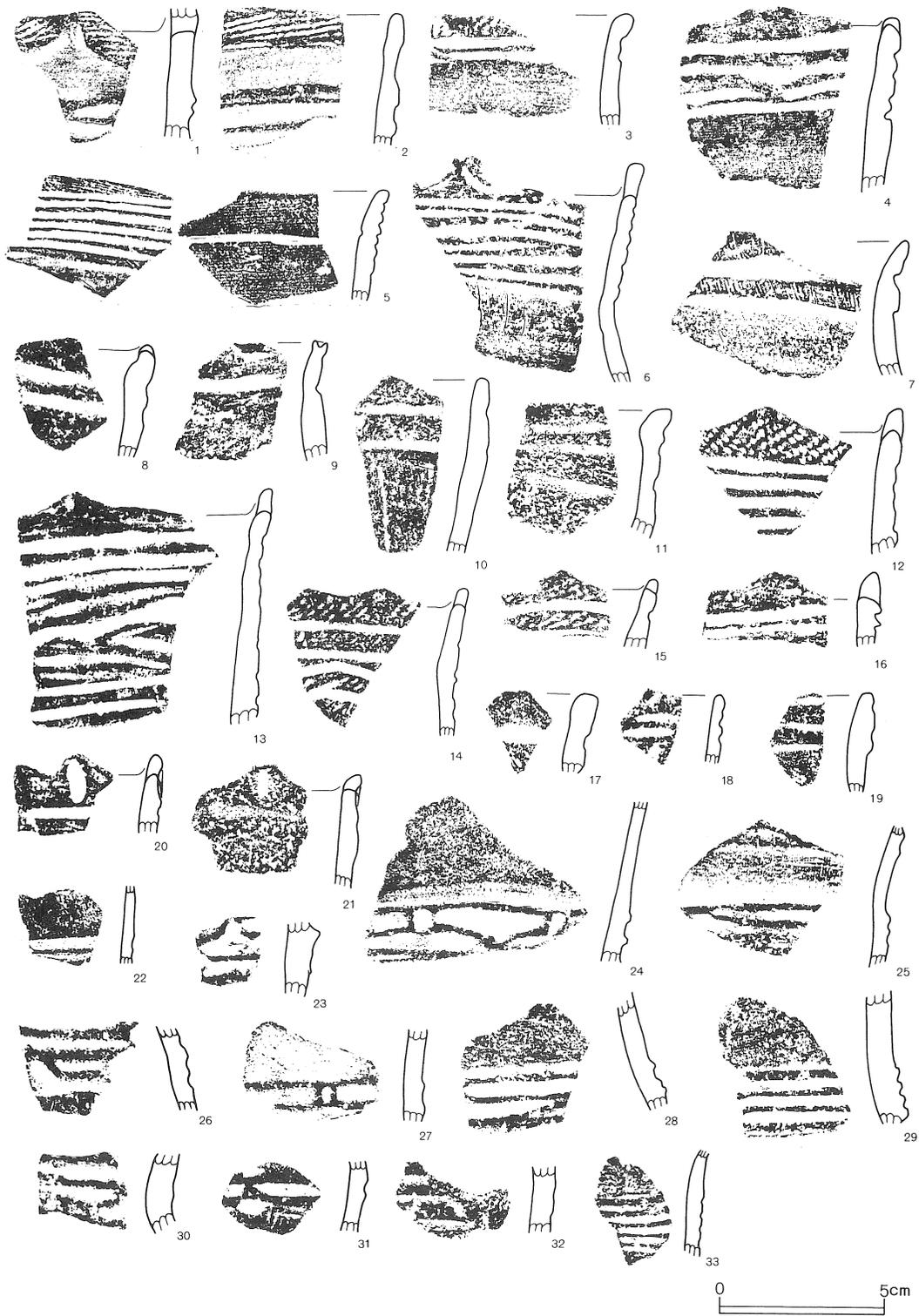
第68図 グリッド出土遺物(2)



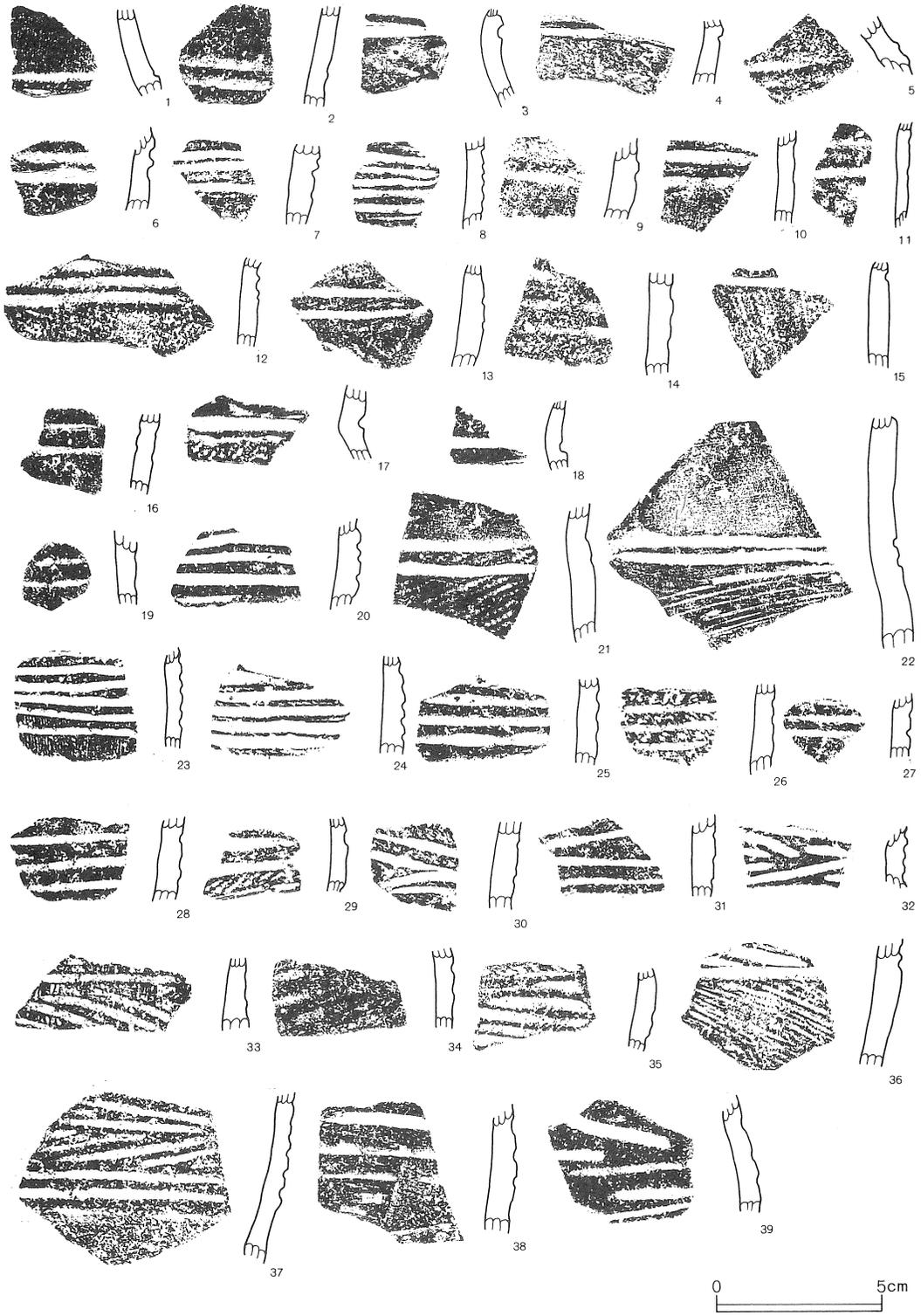
第69図 グリッド出土遺物(3)



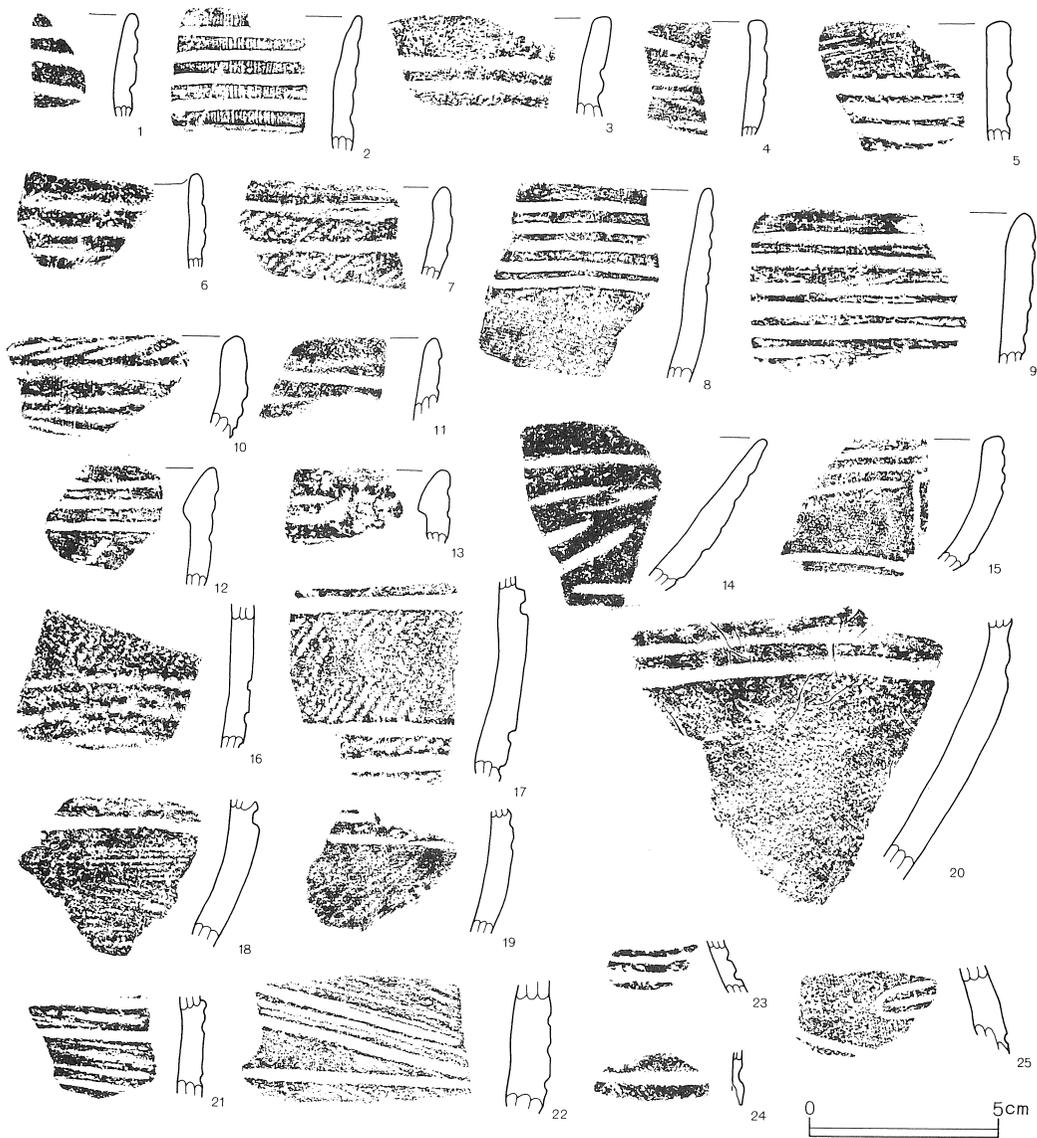
第70図 グリッド出土遺物(4)



第71図 グリッド出土遺物(5)



第72図 グリッド出土遺物(6)



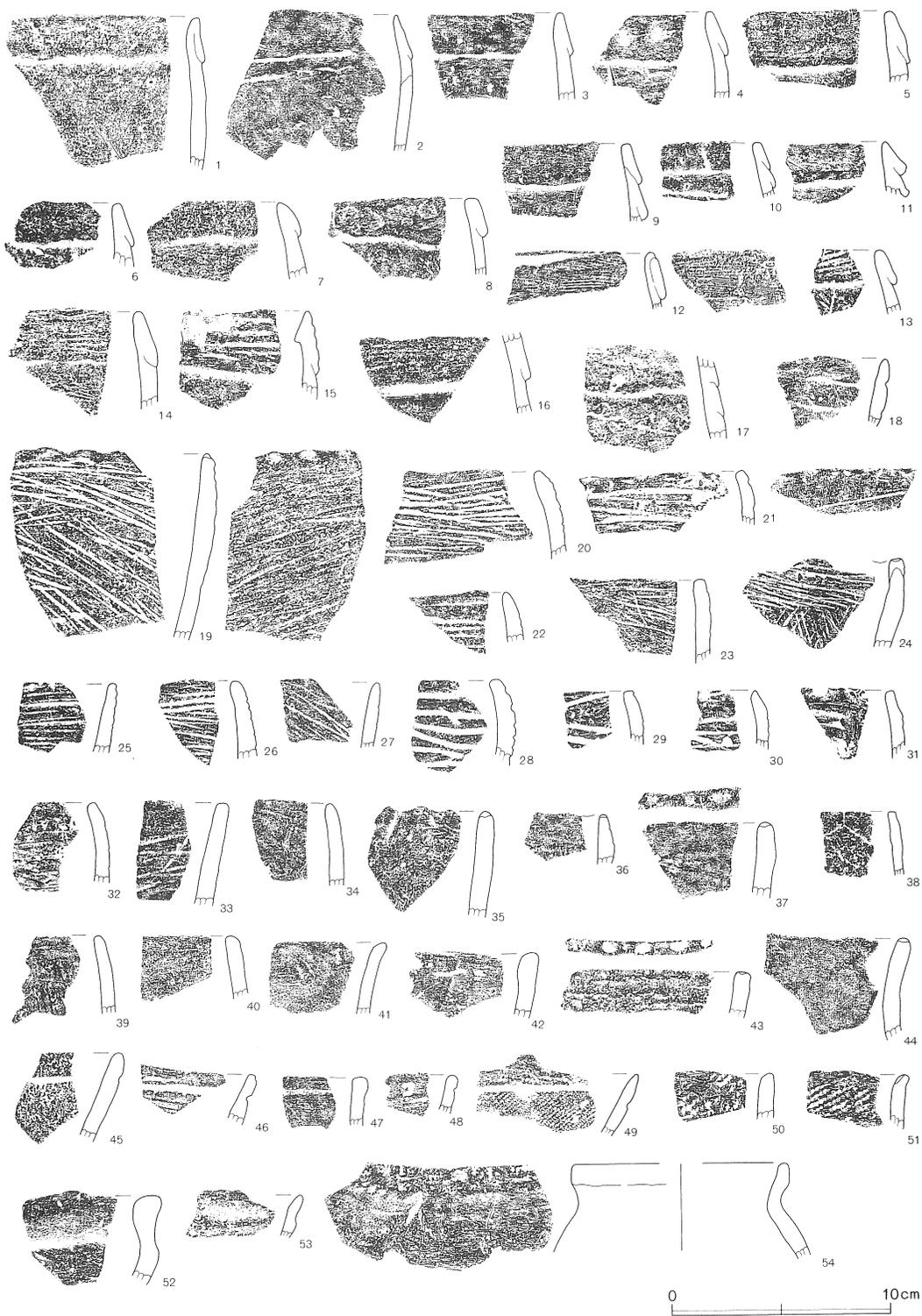
第73図 グリッド出土遺物(7)

VIII群 1類 (第74図19~34、第76~78図)

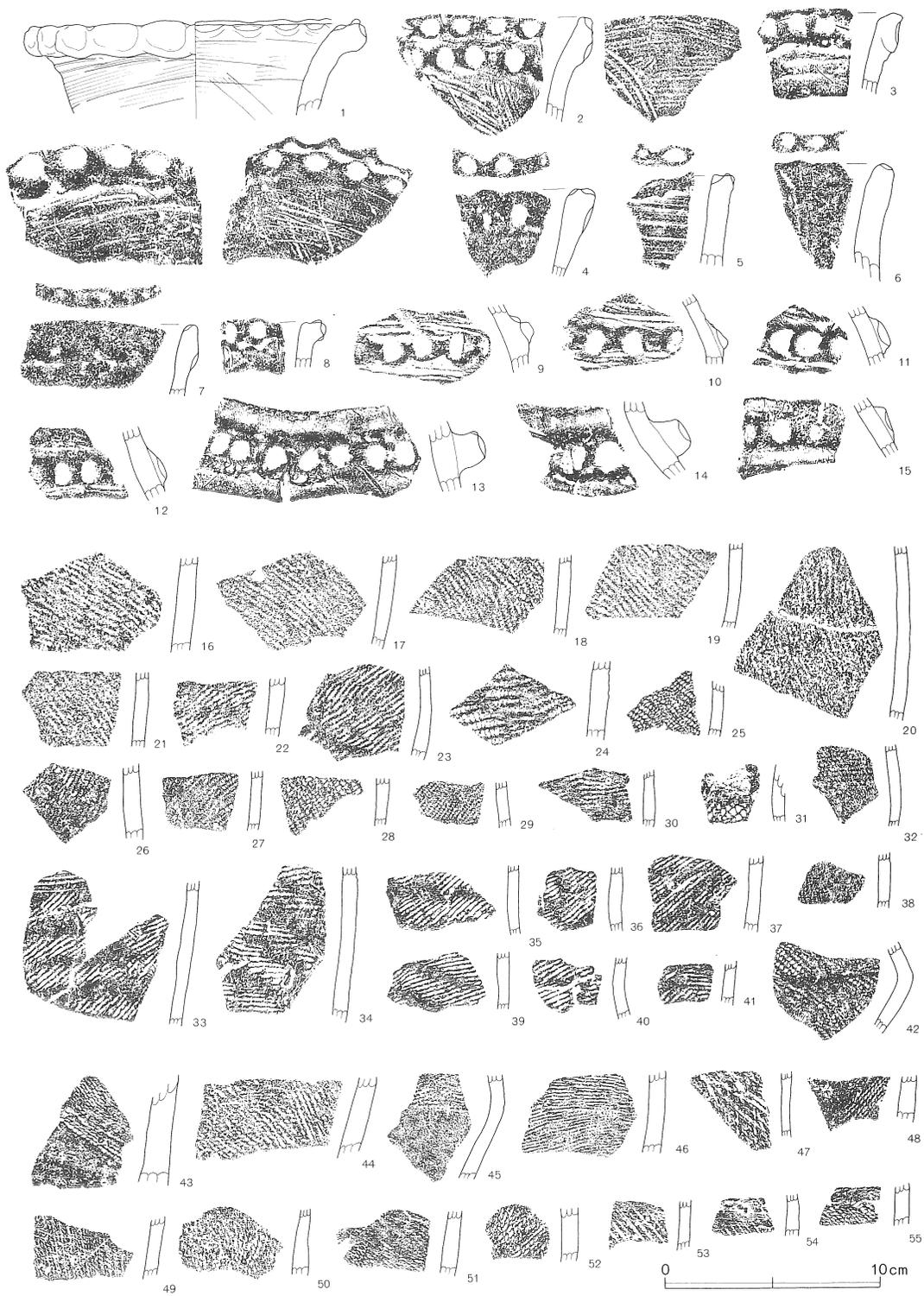
第74図19~34は口縁部の破片である。19には刻みが施され、内外面ともに条痕がみられる。24は小さな突起の頂部に刺突が施されるものである。29~31は同一個体か。薄手で造りも粗雑である。34は風化が著しいが、わずかに条痕が確認できる。第76図以降は胴部の破片である。

VIII群 2類 (第75図1~15)

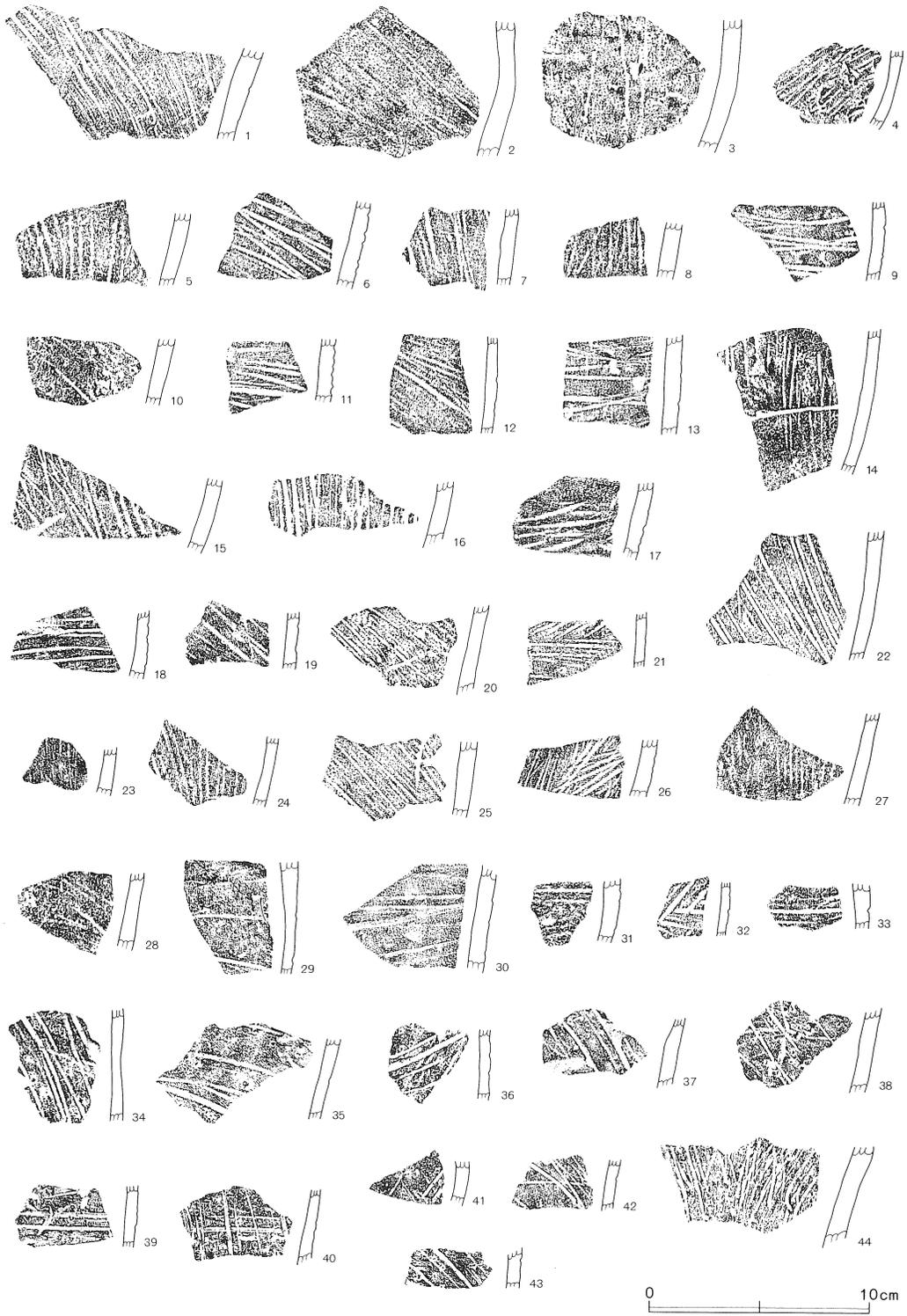
水神平式系統の条痕文土器を本類とした。突帯文土器である。口縁部は肥厚し、1段ないしは2段の指頭圧痕による列点を施す。9~15は頸部の突帯と考えられる。



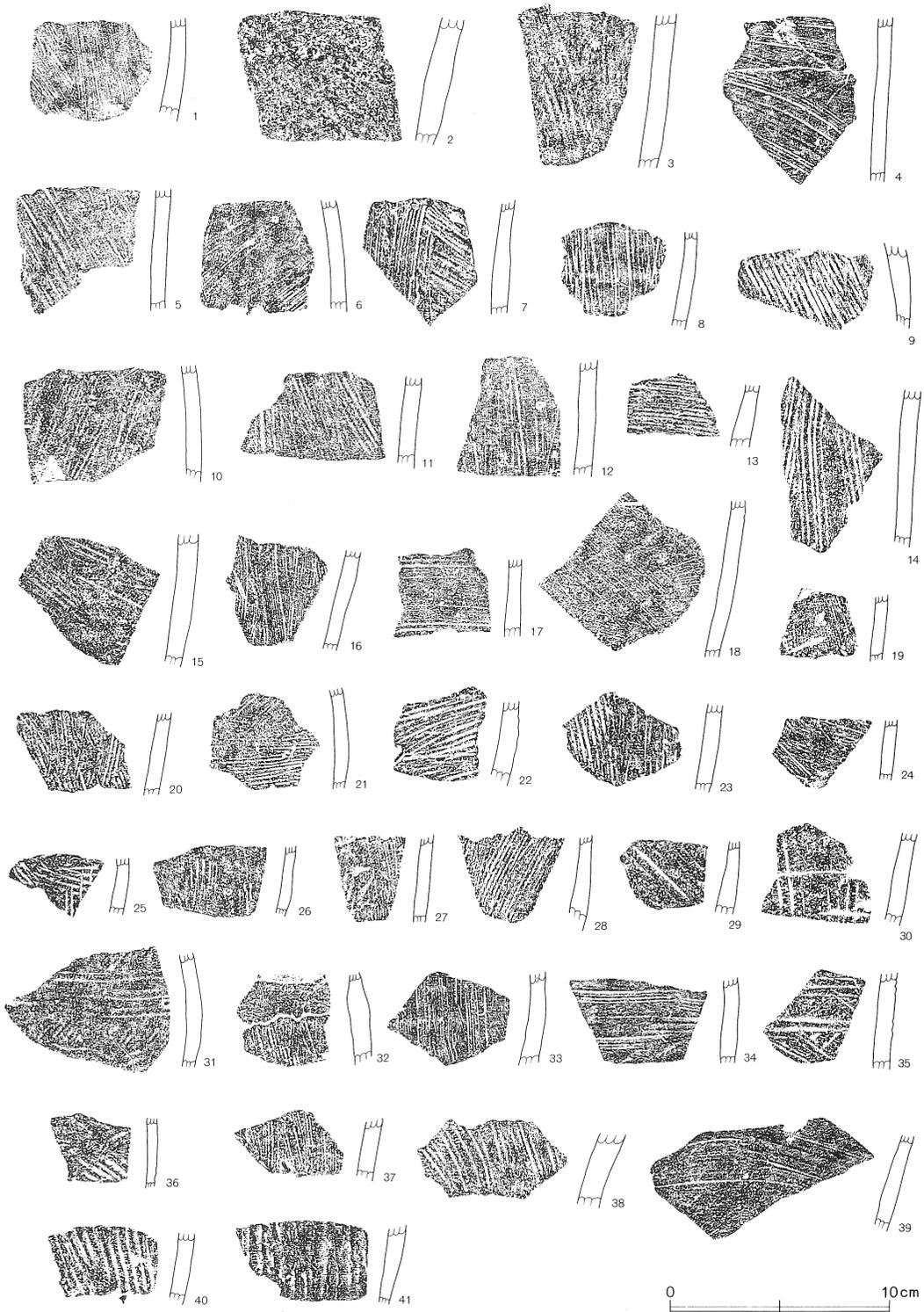
第74図 グリッド出土遺物(8)



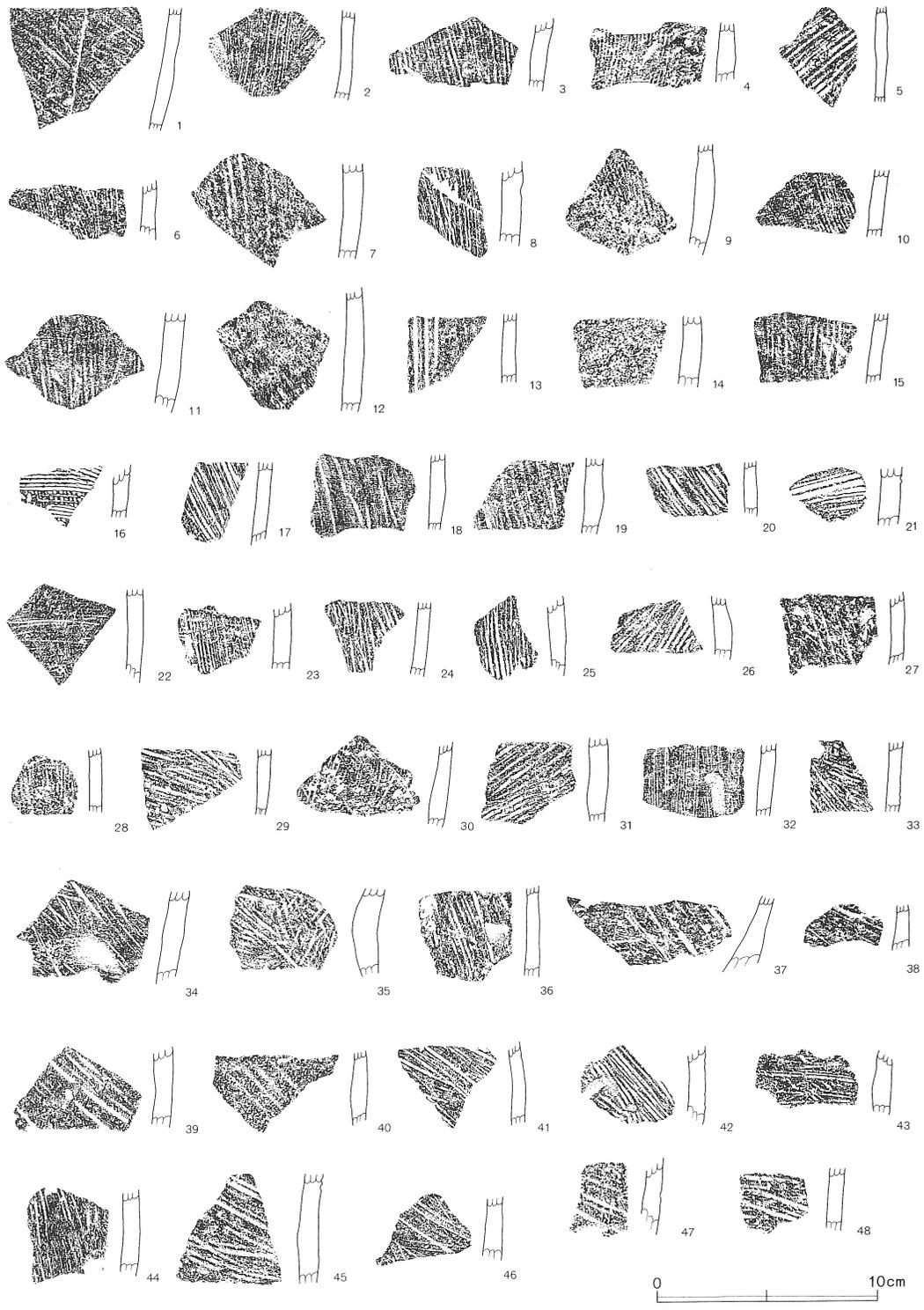
第75図 グリッド出土遺物(9)



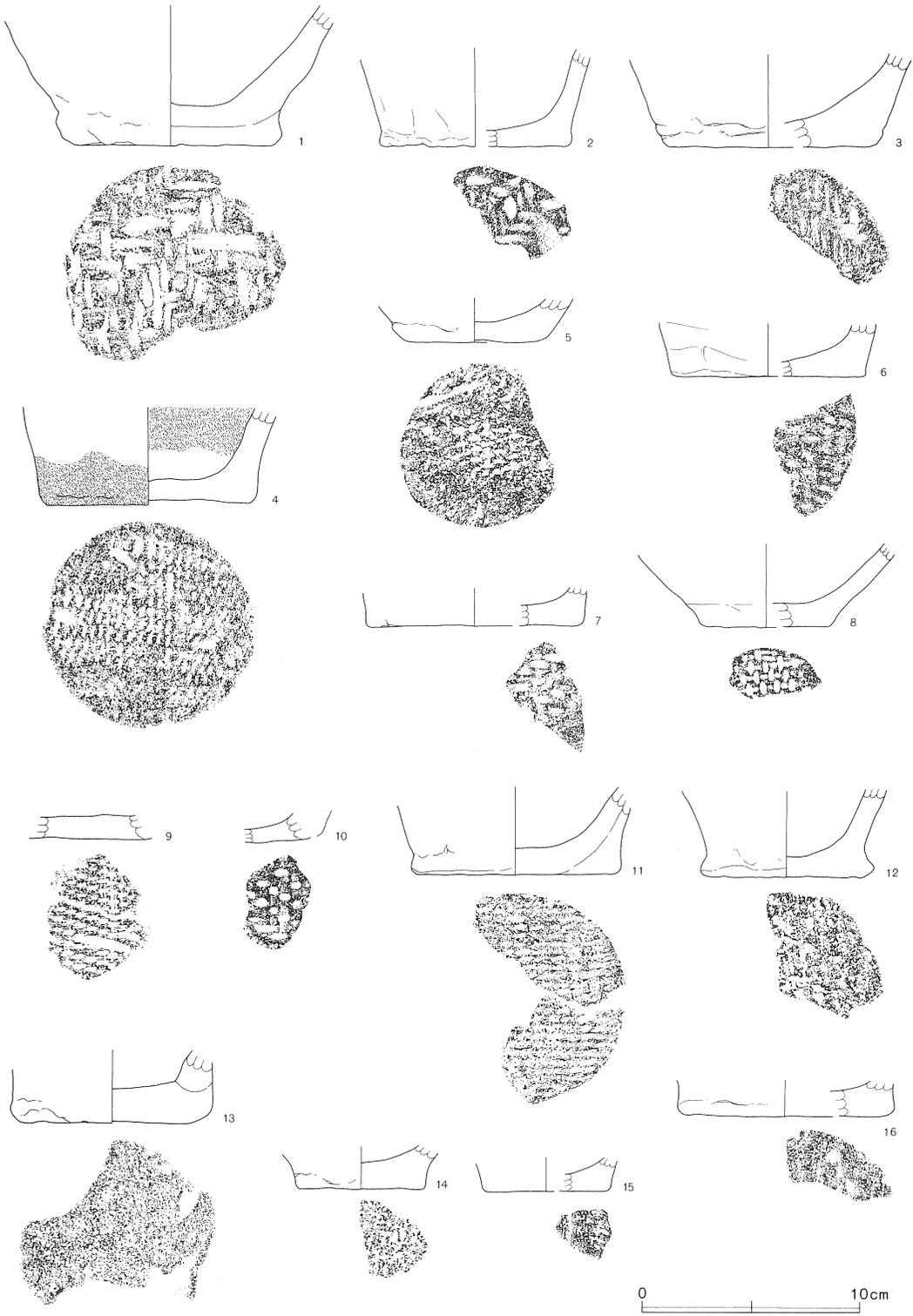
第76図 グリッド出土遺物(10)



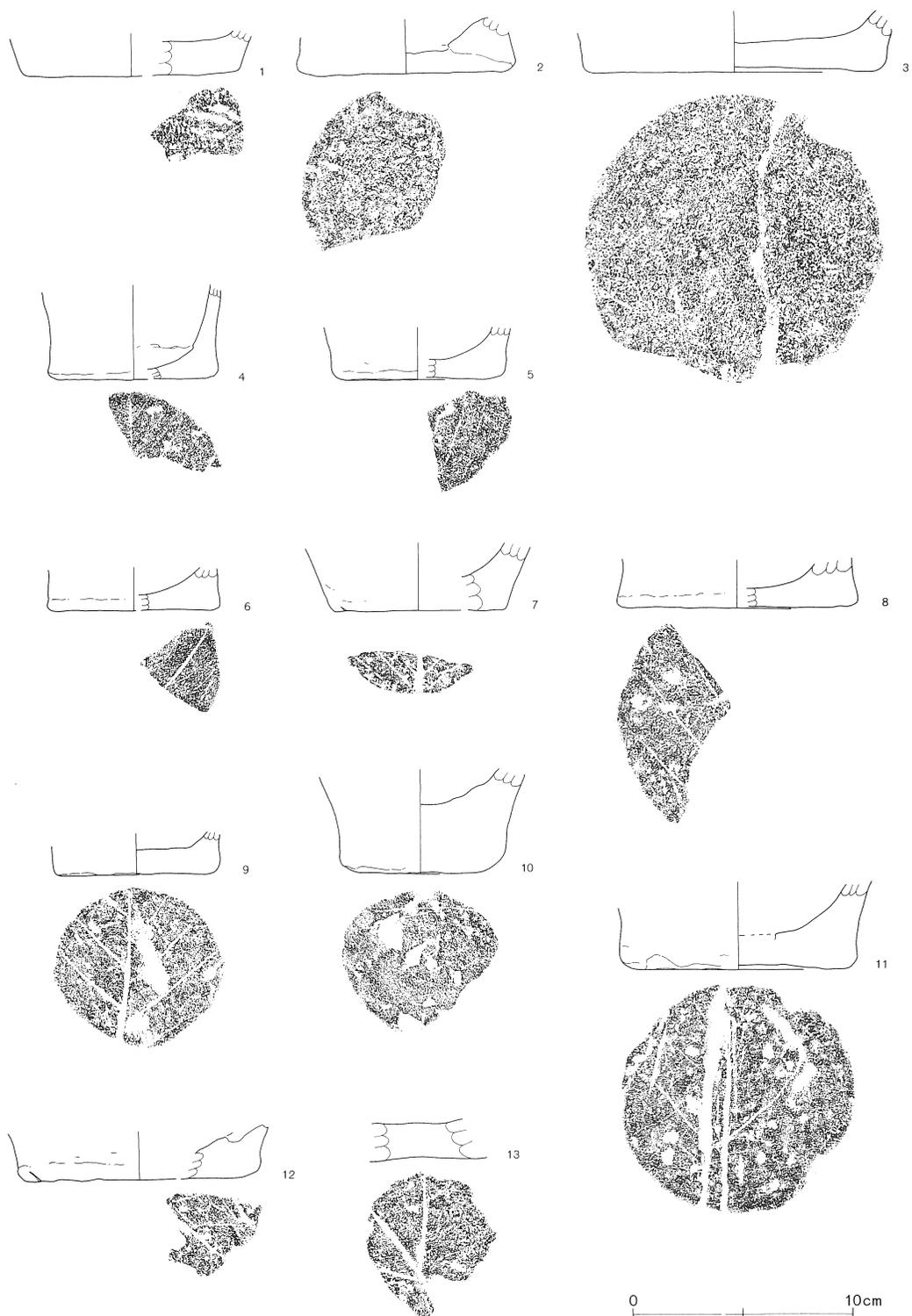
第77図 グリッド出土遺物(11)



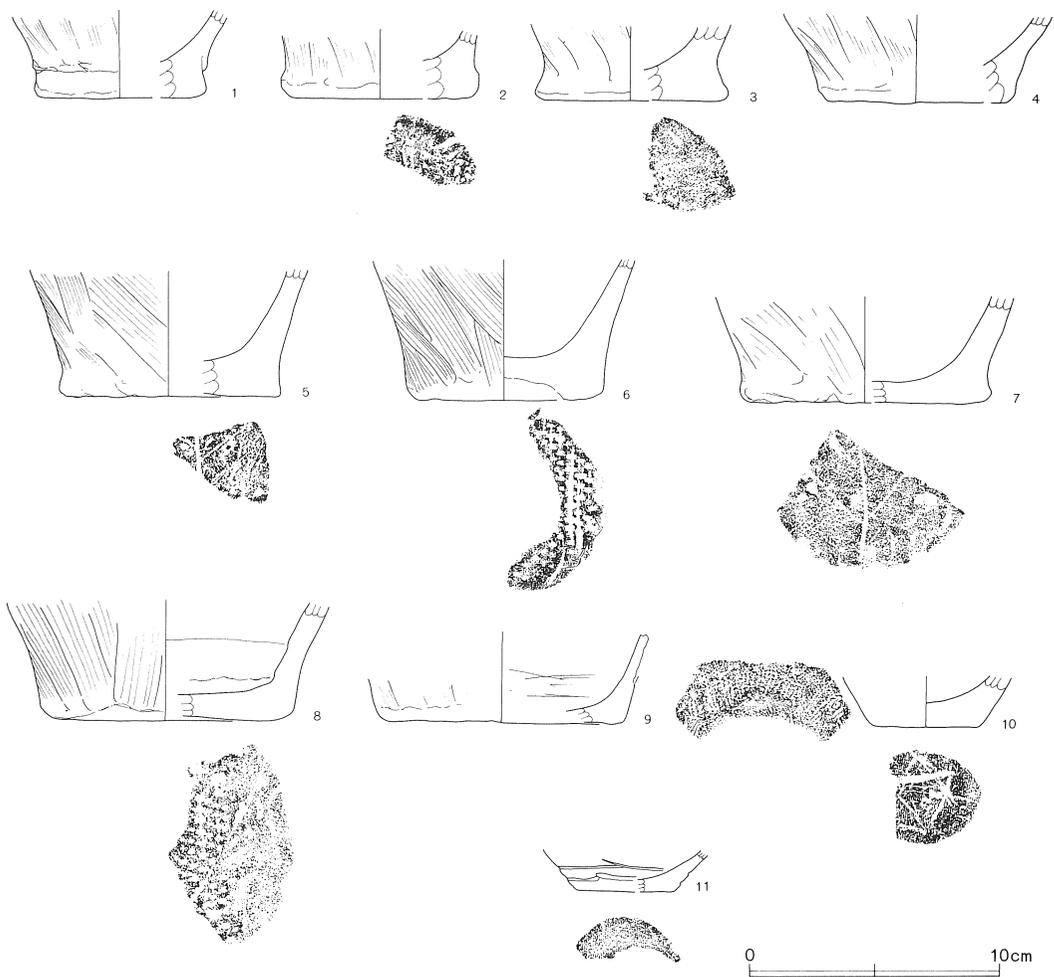
第78図 グリッド出土遺物(12)



第79図 グリッド出土遺物(13)



第80図 グリッド出土遺物(14)



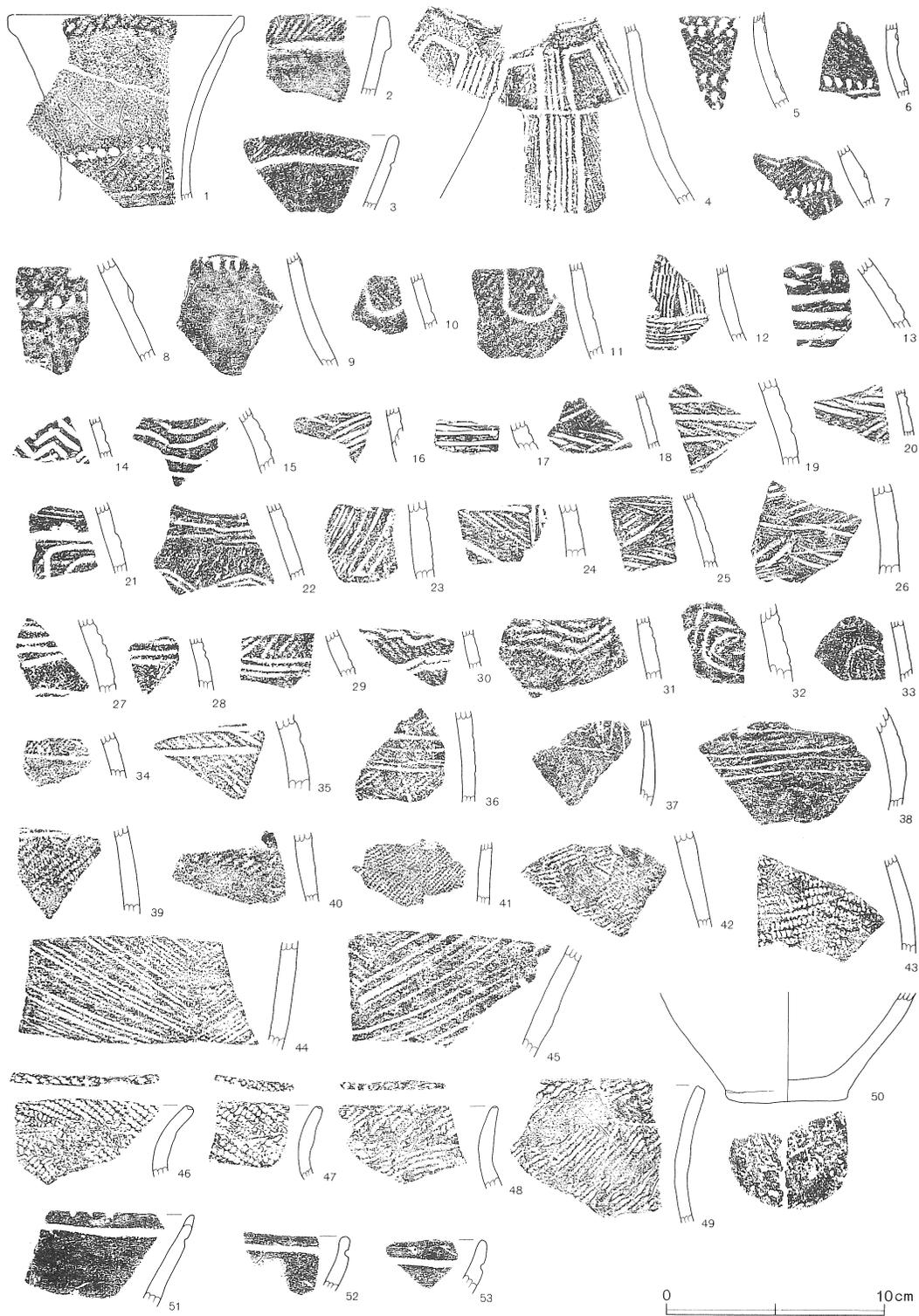
第81図 グリッド出土遺物(15)

区群 (第75図43~55)

撚糸が施されている破片を一括した。原体はすべて撚糸Rである。43は厚手の土器であり、無文の部分も認められる。45は撚糸施文部と無文部の境で屈曲している。

X群 (第75図16~32)

縄文施文の土器群である。縄文LRが多いが、18・28・42はRLである。33~41は胎土や色調(にぶい橙)が共通し、施文される縄文も無節L、もしくは前々段反撚(LRr)と考えられるものである。



第82図 グリッド出土遺物(16)

XI群 (第79～81図)

第79～80図は2類、無文土器の底部である。第81図1～9は条痕文が施文される3類である。10には捺糸Rが施文されている。これを4類とする。11はいずれにも属さない鉢形土器の底部で、沈線が施文されている。

XII群 2類 (第82図51～53)

口縁部に沿って1本の沈線を巡らすものを本類とした。鉢形土器と推定される。四十坂遺跡出土資料に類例をみることができる。

XIII群 (第82図1～50)

1～45は1類の壺形土器を中心とする破片である。うち頸部に縦長の矩形状文が連続する4および12は2類の可能性がある。また、44・45は壺胴下半の条痕施文部の破片であるが、このような資料は遺構出土の土器にはみられない。46～50は4類の甕形土器である。46・47は同一個体。地文は縄文RL。口唇部にも施文されている。49・50も同一個体である。底径5.5cm。

3 土製品・玉類

谷およびグリッドからは土器以外の遺物も出土しているが、量的には非常に少ないので、ここにまとめて記載することにする。3・7・9・10はグリッド出土、他はすべて谷からの出土である。

1は薔薇の蕾状の文様を施した五角形の装飾板の3方に脚がつくものである(1本は欠失)。側面にはπ字状のモチーフが施されている。吊手の可能性もあるが類例がなく、ここでは土製品として報告しておく。

2は把手状の土製品である。外面には指ナデ痕が明瞭に残る。スプーン状土製品の柄の部分と推定される。

3は棒状・無文の土製品である。土偶の一部か。

4は土偶の左足の部分である。表面が風化しているが、沈線のみで縄文は施されていないようである。晩期安行式にともなうものと推定される。

5は底部状の不明土製品である。外面には条痕の痕跡がみられる。

6～8は耳栓である。6は孔のない柱状のもので、渦巻文が施される。径3.1cm、重さは20gである。7は無文輪状のもの。径2.9cm、重さ13.3g。8は中型の無文輪状の耳栓である。欠損品。径5.6cm、重さ30.6gである。

9と10は土板状の土製品。9は拓本でははっきりしないが、指圧痕に指紋が観察できる。10には靱圧痕が認められる。なお、これらが縄文時代の遺物である確証はない。

11は石製の玉である。その形状は歯によく似ており、先端部には5本の溝が切られている。穿孔は両側から行われており、頭頂部にも2対の浅い穿孔をもつ。青緑色を呈する。長さ2.3cm、重さは2.26gである。



第83図 土製品・石製品

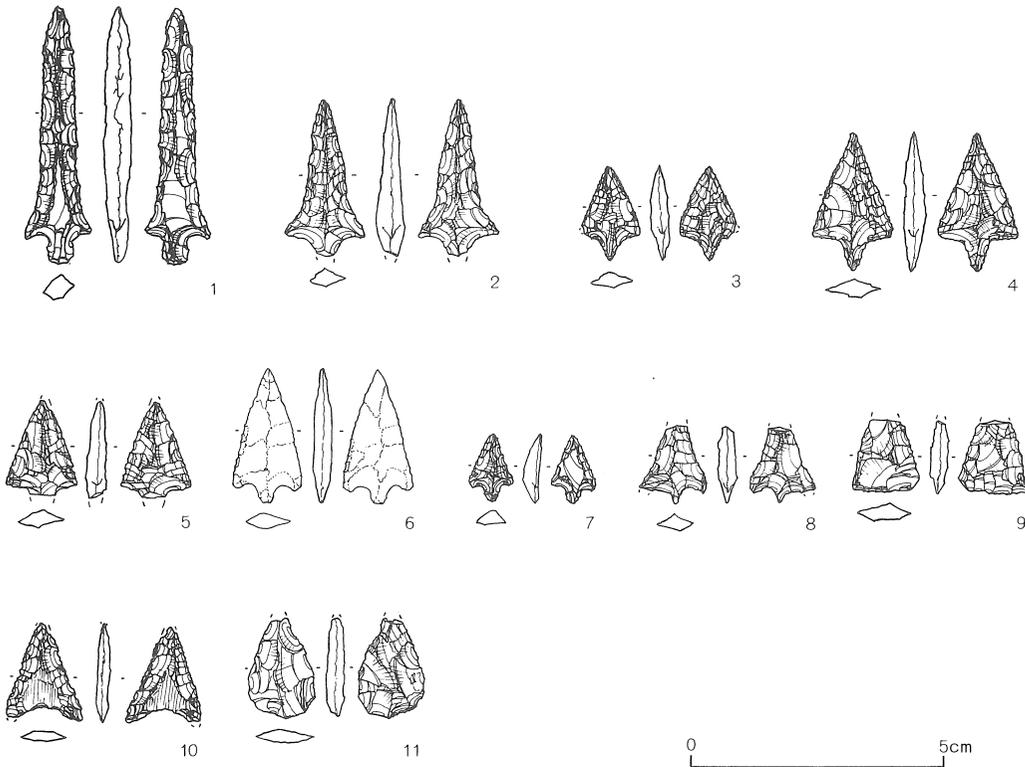
4 石器

石鏃 (第84図1~11)

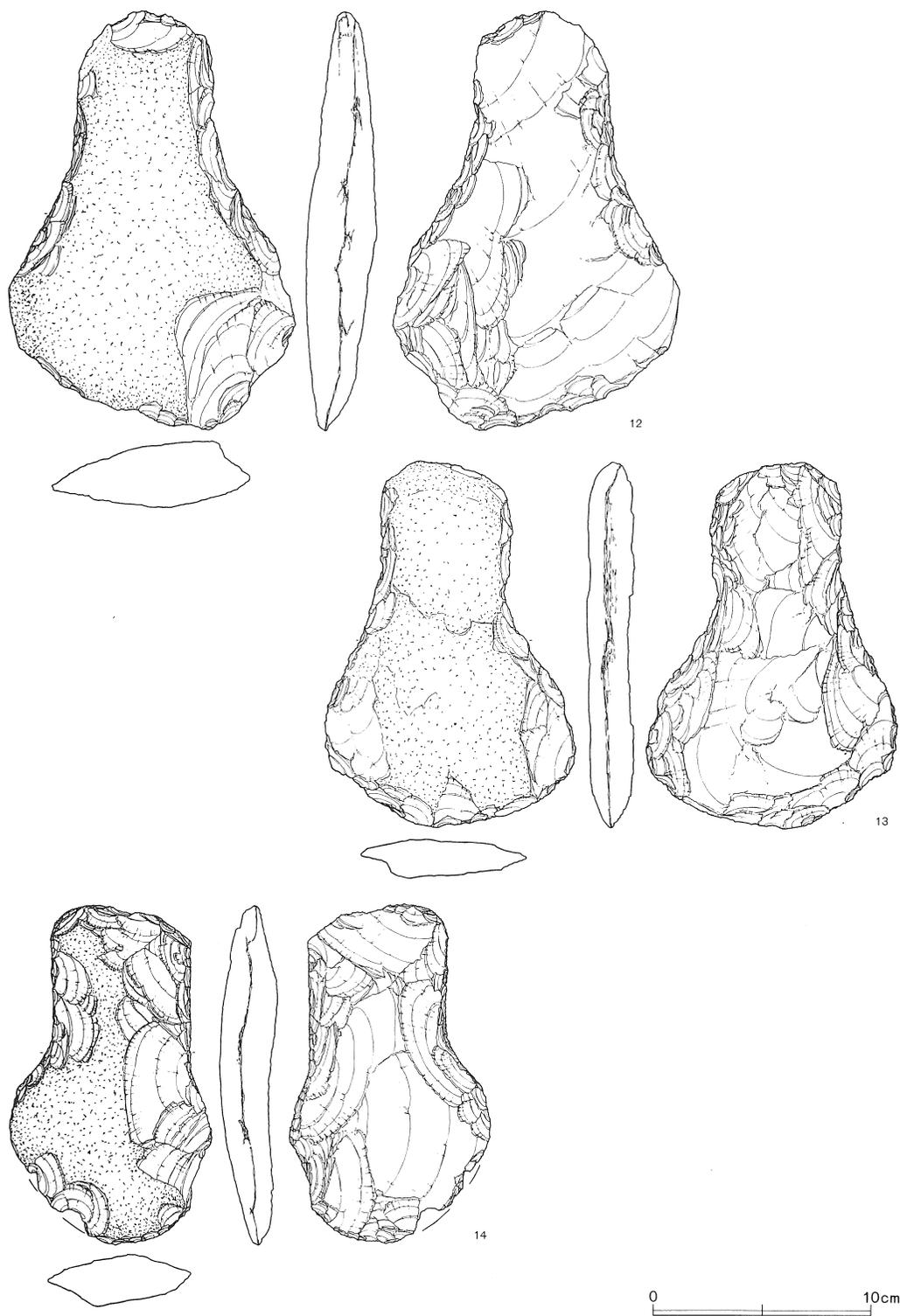
石鏃は基部の形状によってⅠ) 有茎のもの (1~8)、Ⅱ) 無茎のもの (9~11) に大別される。

Ⅰ) 1は先端部の作りが明確で、細長の鏃身部を有するいわゆる五角形鏃である。基部は下方向からの剥離によって抉りを作ってあり、逆刺状の鋭利な先端を作り出している。茎部は幅広コ字状を呈するが、全体の大きさから短小の感じである。本石鏃に近似する資料は、弥生時代中期の東海地方、伊勢湾沿岸を中心に観ることができるが(松木1989・平井1991)、現状で関連性を検討するには資料的制約が大きい。2は逆刺部の作りは1に近似するが鏃身部は二等辺三角形を呈している。3~5は鏃身部が三角形を呈し基部は平基有茎で茎部は小さく尖る。6・7の鏃身部は3~5と同じく三角形を呈し基部は凹基有茎である。

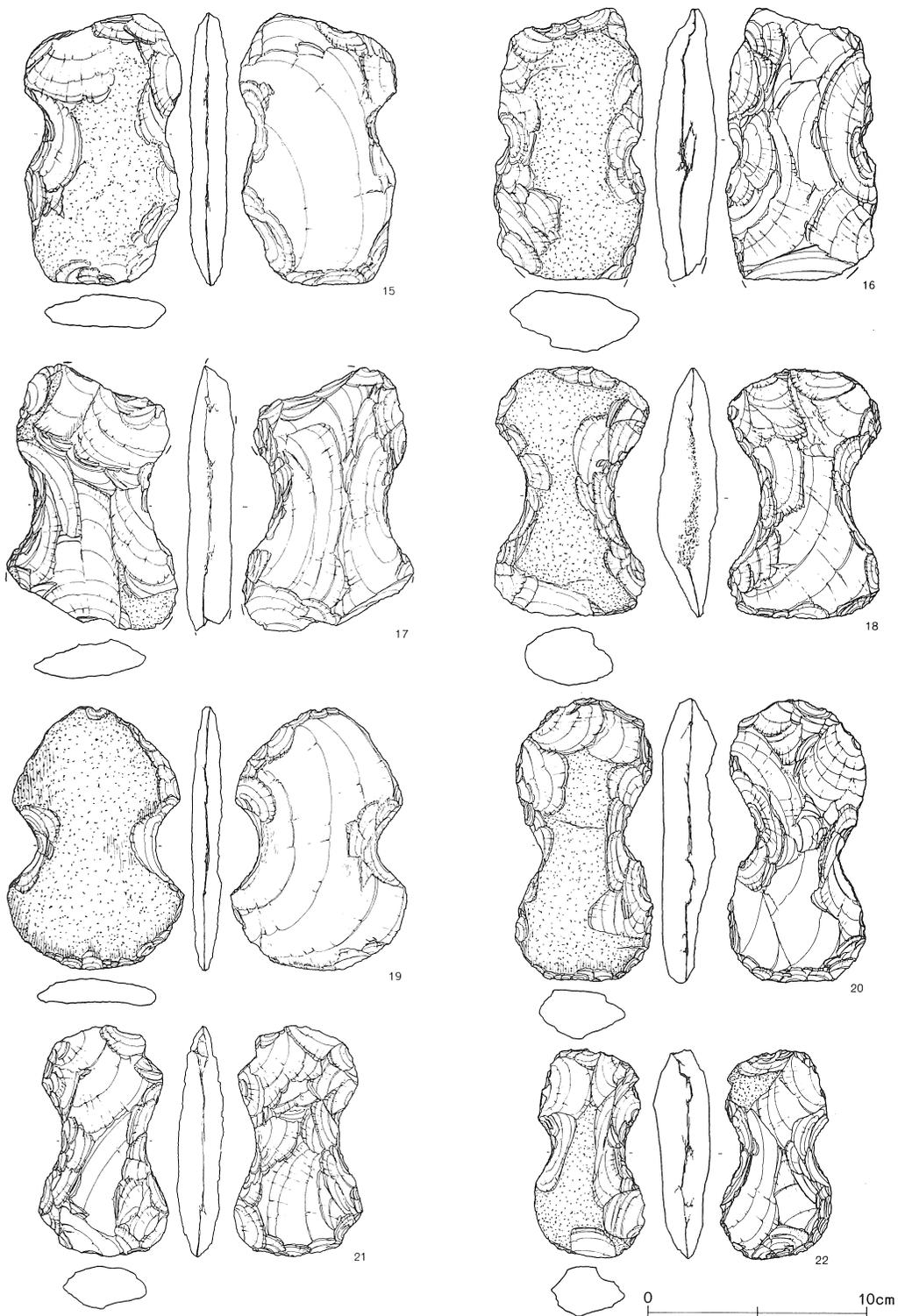
Ⅱ) 9は平基。10は凹基。11は円基である。10は両面の下半部に入念な研磨が施される局部磨製石鏃である。



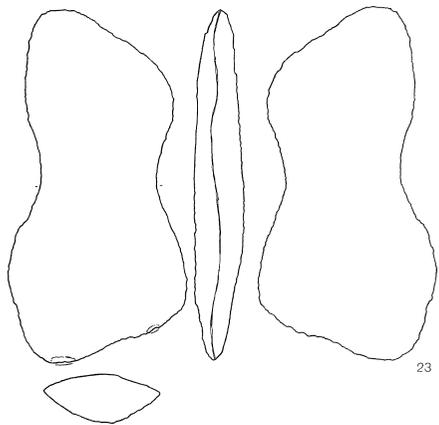
第84図 石器(1) 石鏃(2/3)



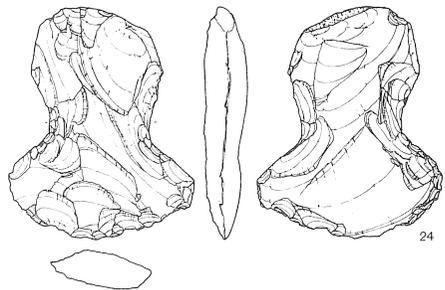
第85図 石器(2) 打製石斧



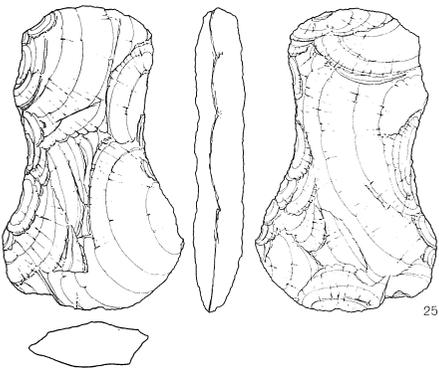
第86图 石器(3) 打製石斧



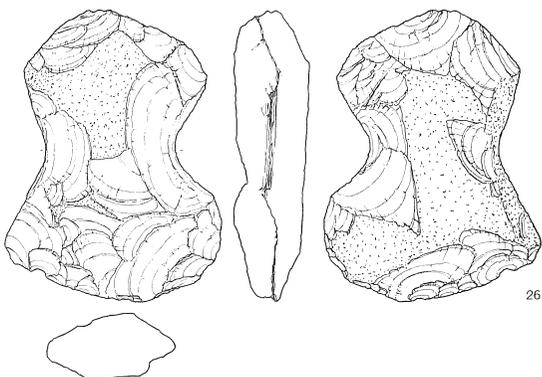
23



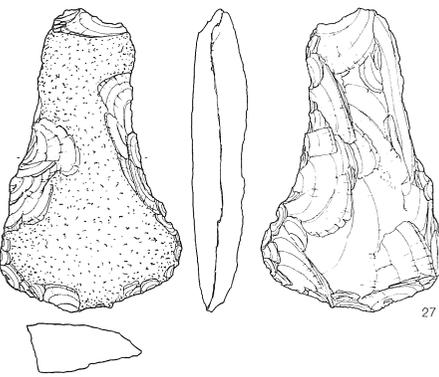
24



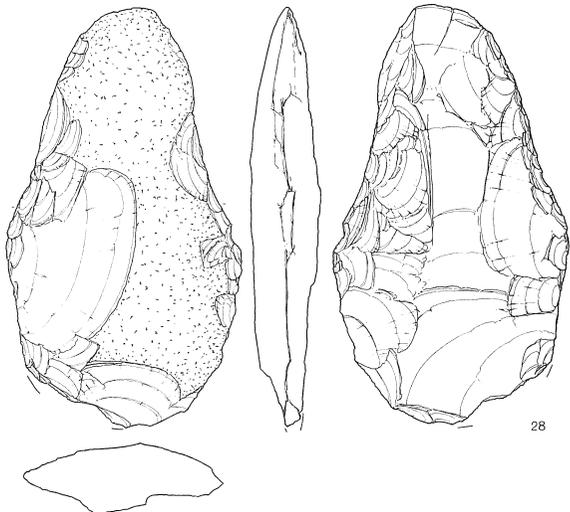
25



26



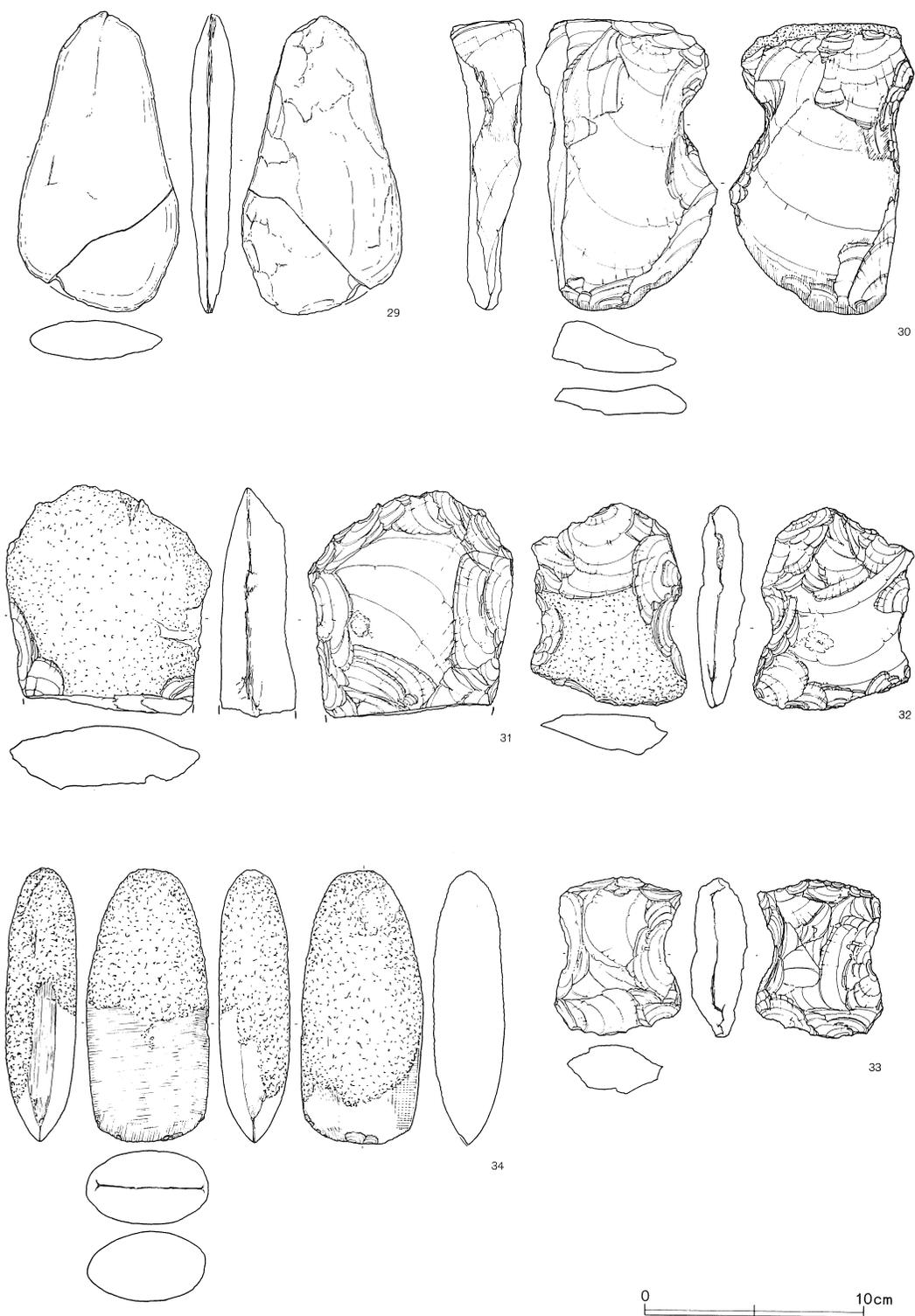
27



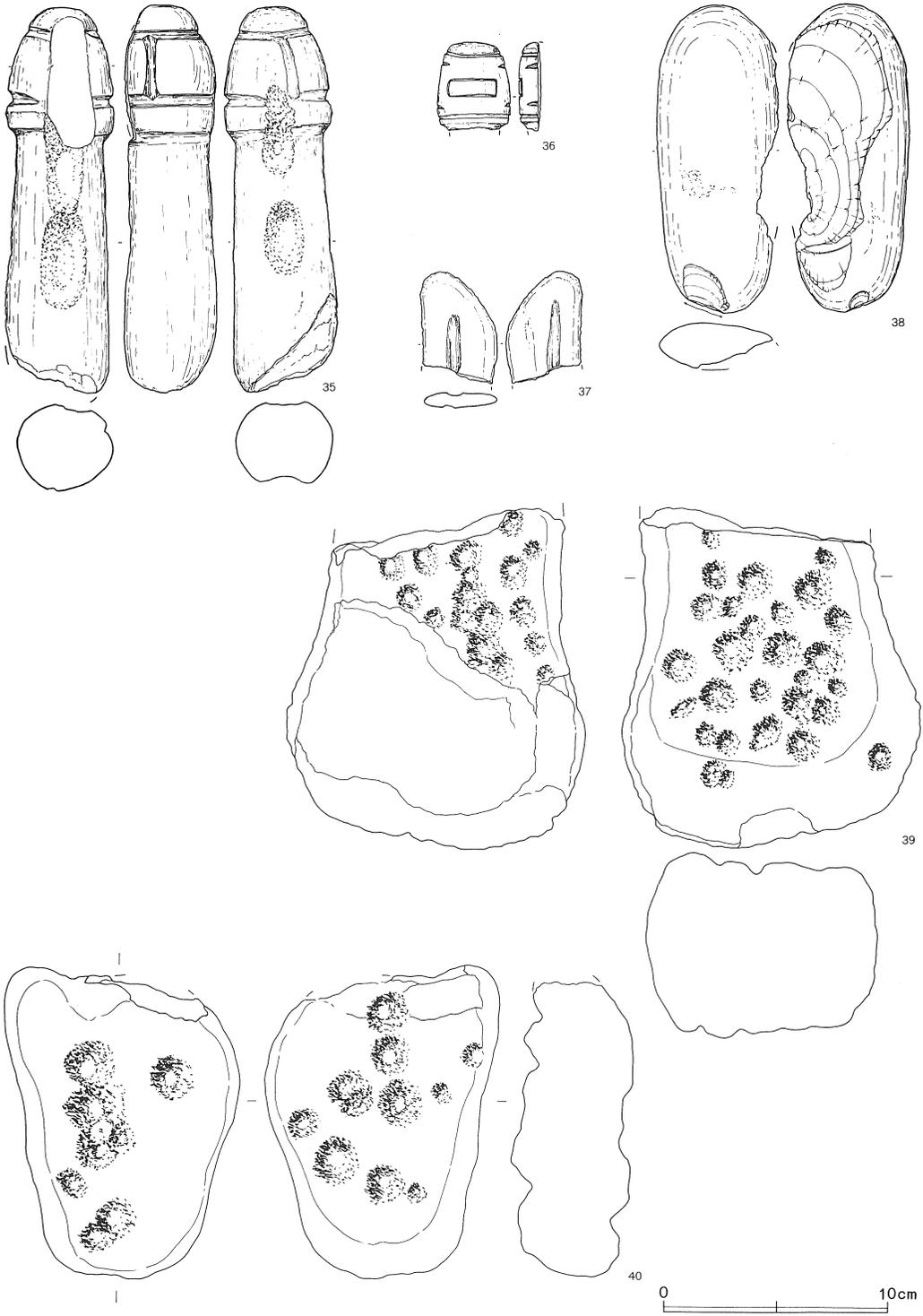
28



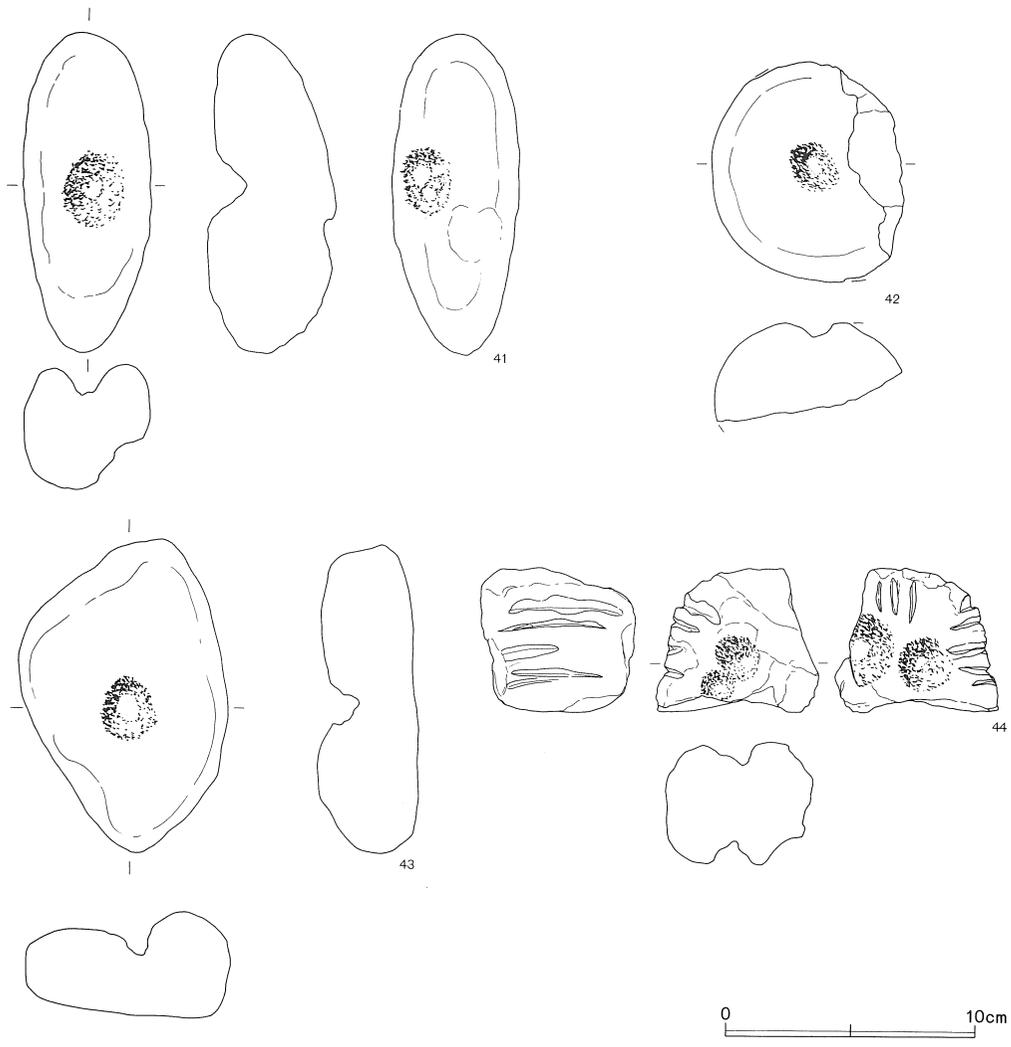
第87图 石器(4) 打製石斧



第88図 石器(5) 打製石斧・磨製石斧



第89图 石器(6) 石棒·砥石·敲石·凹石



第90图 石器(7) 凹石

石器 (第84~90図)

No.	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	出土遺構
1	石鏃	5.50	1.30	0.50	2.34	安山岩	SJ17
2	石鏃	3.10	1.60	0.60	1.44	頁岩	SJ164
3	石鏃	1.90	1.40	0.40	0.86	チャート	SJ223
4	石鏃	2.70	1.60	0.50	1.21	頁岩	SJ74
5	石鏃	1.85	1.10	0.40	0.58	黒曜石	SJ245
6	石鏃	2.65	1.30	0.40	1.16	粘板岩	SJ215
7	石鏃	1.30	0.90	0.30	0.24	メノウ	SJ232
8	石鏃	1.55	1.30	0.40	0.54	チャート	SJ229
9	石鏃	1.40	1.35	0.35	0.62	チャート	SJ78
10	石鏃	1.90	1.50	0.30	0.52	黒曜石	
11	石鏃	1.90	1.30	0.35	0.48	チャート	SJ70
12	打製石斧	19.25	13.20	3.40	732.66	ホルンフェルス	谷
13	打製石斧	16.80	10.60	2.30	470.98	片岩	SJ243
14	打製石斧	15.60	9.30	2.70	396.19	ホルンフェルス	SE 2
15	打製石斧	12.45	7.30	1.75	210.91	ホルンフェルス	SJ57
16	打製石斧	12.40	7.00	2.80	281.29	ホルンフェルス	SD14
17	打製石斧	12.20	7.90	2.10	228.83	ホルンフェルス	SJ84
18	打製石斧	11.45	7.10	2.80	207.29	ホルンフェルス	SJ31
19	打製石斧	12.05	8.10	1.40	165.52	砂岩	SJ234
20	打製石斧	12.90	6.35	2.90	228.28	砂岩	谷
21	打製石斧	10.60	5.95	2.20	154.26	ホルンフェルス	表採
22	打製石斧	9.55	5.10	2.70	133.22	粘板岩	表採
23	打製石斧	14.15	7.20	2.10	238.36	ホルンフェルス	表採
24	打製石斧	9.30	7.50	1.75	118.44	粘板岩	谷
25	打製石斧	12.20	7.35	2.05	210.51	ホルンフェルス	る449G
26	打製石斧	11.70	8.80	3.20	363.50	砂岩	谷(ち452G)
27	打製石斧	12.20	7.40	2.30	191.96	ホルンフェルス	SJ54
28	打製石斧	16.90	9.50	2.80	444.16	ホルンフェルス	SJ19
29	打製石斧	13.80	7.40	2.00	214.90	粘板岩	SJ263
30	打製石斧	13.35	8.40	3.50	351.82	シルト岩	SJ206
31	打製石斧	10.50	9.40	3.50	421.78	砂岩	SD12
32	打製石斧	9.30	7.20	2.20	146.41	安山岩	谷
33	打製石斧	7.25	5.80	2.60	122.83	ホルンフェルス	SJ74
34	磨製石斧	12.50	5.65	3.30	414.98	砂岩	谷(ち452G)
35	石棒	17.25	5.00	4.10	556.77	緑色岩	SJ26
36	石棒	3.90	3.30	1.00	2.99	片岩	SJ230
37	砥石	4.95	3.40	0.80	14.50	砂岩	谷(ち452G)
38	敲石	13.80	5.50	2.10	197.62	砂岩	谷(ち452G)
39	凹石	15.10	13.40	8.40	1965.22	安山岩	SJ84
40	凹石	14.00	10.60	5.40	817.14	安山岩	SJ66
41	凹石	12.70	5.20	5.20	269.53	安山岩	SJ96
42	凹石	8.80	7.70	4.10	137.22	砂岩	SJ111
43	凹石	12.00	8.50	4.30	510.47	砂岩	SJ37
44	凹石	5.8	6.50	6.30	137.22	安山岩	SJ78

打製石斧（第85～88図12～33）

打製石斧は、Ⅰ）基端部から刃部に向かい「ハ」字状に広がる、いわゆる撥形。長さが15～19cmの大形のもの（12～14・29）と、長さが12～13cmの中形のもの（27・28）が見られる。Ⅱ）基部の中ほどに挟りが入る、いわゆる分銅形。長さが9～14cmと中形のもの（15～26）と、長さが7～9cmと比較的小形のもの（32・33）に大別される。また、30・31は欠損等からその他としておく。

Ⅰ）12・13は正面に自然面、裏面に分割面を大きく残す。調整加工は基部両側縁の表裏に施され基部の作り出しを意識している。また、12は刃部の調整加工があまり観られない、素材分割の際の鋭利な側縁を刃部としている。13は刃部に規則的な剝離加工が観られ平面形状はきれいな円刃を呈している。14は基部両側縁が中央部まで平行し、急激に開き円形を呈している。形状から鍵穴を逆さにした状態を想起させる。刃部形状は円刃で細かい剝離が観察される。

次に中形のもの。27は右側縁が両面に剝離加工が施され鋭利な側縁をなすのに対し、左側縁は素材を分割したかの様な直角の面を有している。28は形状が零状を呈している。刃部は欠損から調整加工のあり方は観察できない。29は表面の風化が進んでおり剝離面等の観察は不可能であった。

Ⅱ）15・16は両側縁が平行し、中央部に小さな挟りがある。正面に自然面、裏面に分割面を残す点は共通するが、調整加工の施し方を観察すると、15は両面に周縁からの小さな剝離で整形しているのに対し、16は正面が周縁的な細かい剝離、裏面が面的な剝離によって分割面を剥ぎ取る様に施している。16は刃部を欠損し、15の形状は直刃を呈している。次に縦側面を観ると、15が薄手偏平であるのに対し16は厚手で基部中程に最大厚がくる。

18～20・22は正面に自然面、裏面に分割面を大きく残す。基部の挟りは比較的大きく上下が対称形に近い形状を呈す。18・20は刃部の形状は直刃に近く、細かい調整剝離で入念に整えられている。基端部はラフな面的剝離によって構成され刃部と対照的である。

17・21・24・25は正面に複数の剝離面により構成され自然面をほとんど残さない。24は自然面を打面とした縦長剝片を素材とする点は30と共通する。

26は両面に自然面を残し偏平の礫に直接剝離加工を施したものである。加工は刃部側下半部に集中する。

23は正面の風化が激しく剝離面の観察は不可能であった。

32・33は比較的小形と分類した一群である。長さとの比率が1対1.3未満であり、中形の1対1.3～2と大きく異なる。製作技法は32の正面に自然面を残し調整加工は周縁的であるのに対し、33は全面を大形の剝離面で構成される。裏面を観察すると、32は正面同様の周縁からの調整加工で分割面を残す。33は正面の加工から比べると周縁的で分割面を残す。2点の形態は基部側縁は平行し中央付近で僅かにくびれ、刃部は直刃と共通する。縦側面を観ると32は薄手で刃部は片刃・鋭利であるのに対し、33は厚手・両刃・鈍角と対照的である。

31は下半部を欠損する。30は基端部に自然面からの打撃による縦長剝片を素材としている。正面の剝離方向と主要剝離面の方向は一致しており、左側面は素材剝片を分割するかの様に面を構成している。右側縁は両面からの剝離によって挟りを有する。刃部は右側に大きく傾いた偏刃で、両面の磨耗は顕著でトロトロになっている。

磨製石斧（第88図34）

基部に敲打痕を残し、刃部は入念に研磨を施している。また、側面は刃部付近が研磨によって面を構成している。刃部断面は両凸刃、平面形は直刃に近い。

石棒類（第89図35・36）

35は把頭部に横に平行する2本の沈線と、沈線間を縦に結ぶ2本の沈線による装飾が施されている。また、刃身部の両面に凹が4ヶ所みられ凹石として再利用（基部欠損後か？）されている。基部は欠損されているが現状の右側面のラインが収束を始めている点からさほど長くなるとは思えない。

36は把頭部の破片である。現況から石棒か石剣かの判断は難しい。

砥石（第89図37）

偏平な面の両面に溝が2本観られる。

敲石（第89図38）

楕円形の偏平礫の一端に敲打痕が観られる。裏面は左側からの打撃によって大きく欠損する。

凹石（第89・90図39～44）

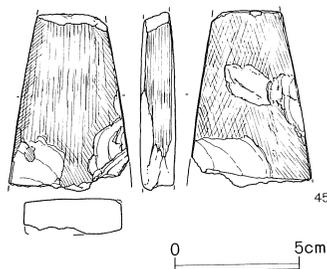
39・40は大形板状礫の両面に複数の凹が観られる。41～43は礫の正面及び両面に各1つ凹を有する。44は複数の凹と線条痕が観られる。

【追加資料】

脱稿後の資料整理のおり、未報告のコンテナに石器が1点紛れ込んでいたのが発見された。追加資料として掲載しておく。

磨製石斧（45）

基端部及び刃部を欠損する。現存では長さ7.15cm、幅4.85cm、厚さ1.5cm。重量は89.54g。石質は蛇紋岩である。出土地点は第5発掘区（第252号住居跡覆土）である。



磨製石斧（追加）

V 縄文・弥生時代のまとめ

1 土器について

従来、縄文時代の遺跡が乏しかった県北妻沼低地周辺であるが、近年の調査数の増加により、この時期の遺跡も徐々に明らかになりつつある。国道17号深谷バイパス関係の発掘調査では、明戸東遺跡および原遺跡で後期（称名寺式～堀之内式期）の遺構が、本遺跡の東側に接する新屋敷東遺跡からは後晩期（堀之内～安行3b式期）の遺構が調査されている（磯崎1989、田中他1992）。上敷免遺跡の調査では遺構はほとんど検出されなかったものの、縄文後晩期の新たな資料例をつけ加えることとなった。

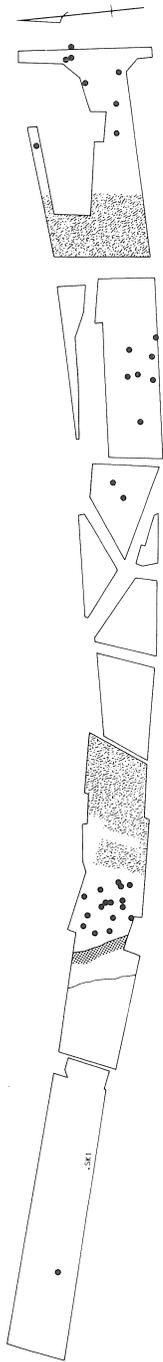
本遺跡から出土した遺物の中で特筆すべきは、縄文晩期終末～弥生初頭に相当する一群の資料である。第93～110図は県内の当該期の主な資料を集成したものである（註1）。これらを概観してもわかるように、本遺跡では浮線文系の浅鉢形土器に加えて甕形土器がまとまって出土しており、浮線文系の土器がこれほど多く出土した例は埼玉県内では初めてである。さらに、それらに伴って、東海系の土器群（条痕文系・突帯文系土器）が出土しているのも注目に値する。当該期のきわめて良好な資料が得られたと考える。

第5発掘区に形成された谷の包含層からは、粗製土器が大量に出土したが、それは縄文土器の出土量のおよそ90%を占めるものと思われる。それに伴うと考えられる精製土器の出土はきわめて少ないため、これら粗製土器の編年的位置づけが問題となろう。また、粗製土器の多くは内面に帯状の炭化付着範囲をもっている。これは煮沸の際の痕跡と考えられるが、胴部が残存する資料では、炭化帯を底部近くと胴部中央～下部の2ヶ所に残す例が多い。大形粗製土器の用途を考えるに当たって、良好な資料を呈示したといえよう。

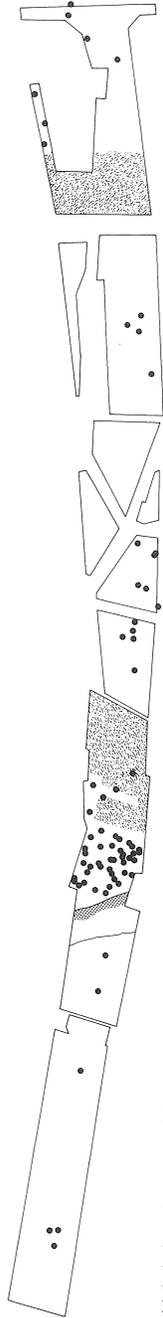
さらに言及しなくてはならないのは、埼玉県内における初の出土例と考えられる遠賀川式土器の存在である（註2）。関東地方における遠賀川式・遠賀川系土器の分布が、東日本における弥生時代の成立を考えるにあたって、提起する問題は多い。空白地帯であった埼玉県における今回の発見は、その問題に対する基礎資料として、それがほんの1片であっても大きな意義をもつものといえよう。

グリッド出土土器として掲載したものは、先述したように新しい遺構の覆土から出土したものが大半を占める。したがってある程度の出土地点がおさえられるわけであるが、その分布をおもな類別についてまとめたのが第91・92図である。これをみてまず第一に気がつくことは、分布の集中域が第5発掘区谷の東側と第2発掘区中央部の2ヶ所にみられることである。前者を第1集中区、後者を第2集中区とする。第1集中区は土取りによる削平がなければもっと範囲を広げていた可能性がある。縄文後期においては2つの集中区以外に、第1発掘区からの出土がある。これは、本遺跡の東側に新屋敷東遺跡など当期の集落が展開することに関連するのであろう。浮線文・沈線文系土器と条痕施文土器は、第1・第2両方の集中区を中心に出土しているが、後期と比較して第2集中区にもより多い出土がみられる傾向にある。これらの土器群は谷からも出土しており、双方の繋が

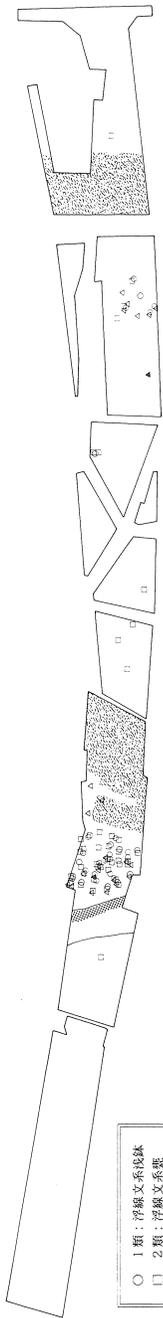
I 群 2 類 (称名寺式)



I 群 3 類 ~ 5 類 (後期前葉 ~ 中葉)

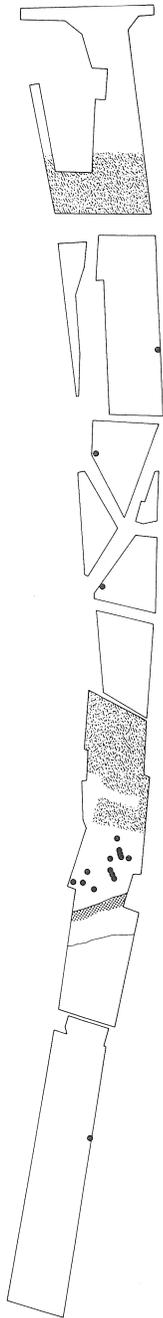


VI 群 (浮線文・沈線文系)



- | | |
|---|------------|
| ○ | 1 類：浮線文系残株 |
| □ | 2 類：浮線文系残 |
| △ | 3 類：沈線文系 |
| ▲ | その他 |

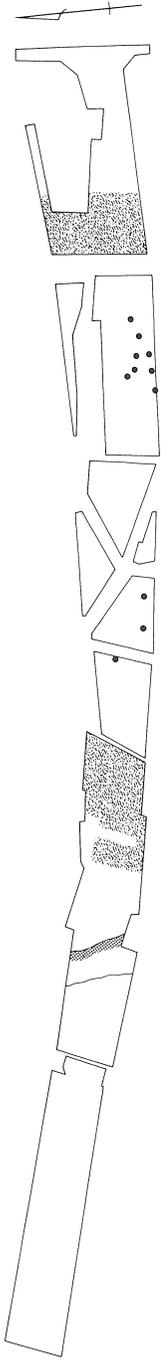
IV・V 群 (粗製土器)



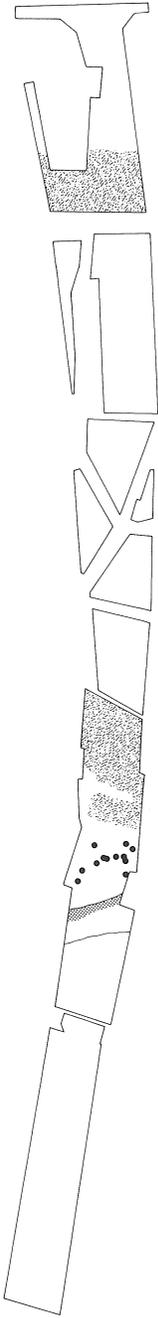
0 100m

第91図 縄文・弥生土器出土地点(1) (1/4,800)

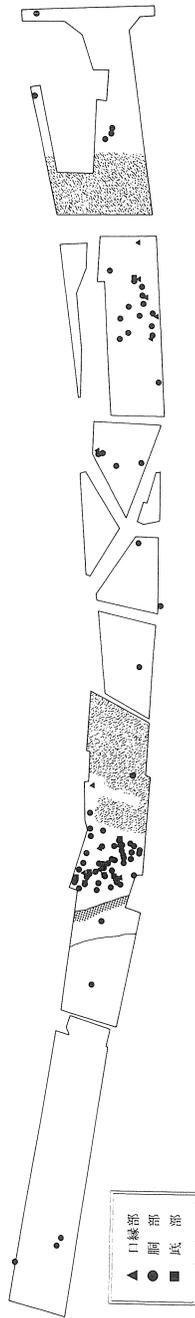
Ⅷ群2類 (水神平式系)



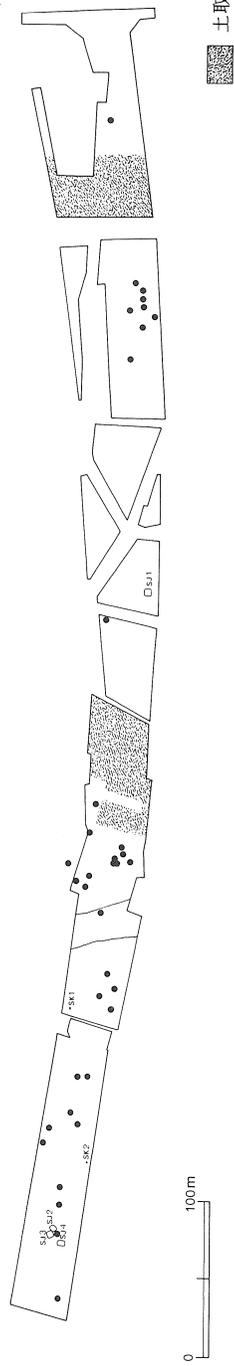
Ⅸ群 (撚糸施文)



Ⅹ群1類・Ⅺ群3類 (条痕文施文)



ⅩⅢ群 (弥生中期)



第92図 縄文・弥生土器出土地点(2) (1/4,800)

りは明確にとらえることができる。おそらく谷の北東側に縄文後晩期～弥生初頭にかけての生活圏が形成されていたのではないだろうか。また、撚糸施文の土器は谷及び第1集中区に、水神平式系とした条痕文系土器は第2集中区にのみ分布し、対象的なのも興味深い。弥生中期になると谷及び第1集中区からの出土は少なくなり、住居の形成される第6発掘区に分布が広がっていく。

弥生中期の住居跡が4軒検出されたのも大きな成果としてあげることができる。県内における須和田式期の集落は近年の発掘調査の増加により、行田市池上遺跡（中島1984）や行田・熊谷市小敷田遺跡（吉田他1991）などで確認されているが、その数は決して多くはない。上敷免遺跡といえは従来再埋葬遺跡として著名であった。1977（昭和52）年に実施された発掘調査により、再埋葬2基が検出された（蛭間他1978、第111図）。また、調査以前には同地点付近から計28個体の土器が採集されている（関1983、第113～118図）。この発掘地点と本報告の発掘区との位置関係は、第2図をみれば明らかなように、第4発掘区のおよそ200m北側に位置し、今回検出されたY-2～4号住居跡とは谷一つ隔てた、Y-1号住居跡と同じ微高地上にある。住居跡出土資料は、再埋葬群としてとらえることのできる概報告の資料と比較すると、壺形土器が胴部最大径をほぼ中央にもつ器形であること、胴部下半の条痕が施文されないことなどに相違点が見いだせる。また、連続する重矩形文及び平行沈線と波状文が多用されることが文様の特徴として指摘できる。さらに住居跡資料の中には中部地域の栗林式に相当する土器が散見され、弥生後期の吉ヶ谷式土器の祖形ととらえられている縄文施文の甕形土器（中島1984の甕4類に相当）も出土している。これらの諸点から、本資料は再埋葬群資料よりも時期的に新しいものと考えられ、県内では池上遺跡出土資料とほぼ同様の編年の位置をもつものと推定される。

註

(1) 埼玉県における縄文晩期末～弥生初頭の主な遺跡には次のものがあげられる。図はすべて各遺跡の報告書等から転載したものであるが、その際縮尺を統一したことを付け加えておく。

1. 猿貝北遺跡 川口市大字安行字大元 山本他1986
2. 大間木内谷遺跡 浦和市大字大間木字内谷 青木他1980、小倉他1985
3. 北宿西遺跡 浦和市大字三室字北宿 青木他1986
4. 白幡中学校校庭内遺跡 浦和市大字白幡字本宿 青木他1977a
5. 馬場小室山遺跡 浦和市大字三室字馬場 青木他1983
6. 前窪遺跡 浦和市大字下木崎字前窪 町田1973、青木他1977b
7. 吉場遺跡 浦和市大字大牧字吉場 小倉他1984
8. 在家遺跡 上尾市大字平方字在家 細田1991
9. 宮岡水川神社前遺跡 北本市大字高尾字宮岡 早川他1972
10. 雅楽谷遺跡 蓮田市大字黒浜字江ヶ崎 橋本他1990
11. ささら遺跡 蓮田市東3丁目 藤原他1983、橋本他1985
12. 関山貝塚 蓮田市関山1丁目 庄野他1974
13. 稲荷前遺跡 (B区) 坂戸市大字堀込 ※
14. 打越遺跡 富士見市大字水子字打越 荒井他1978
15. 花見堂遺跡 比企郡嵐山町大字川島字花見堂 金井塚他1976
16. 屋田遺跡 比企郡嵐山町大字川島字屋田 今井他1984
17. 高麗所在遺跡 日高市 鈴木1979
18. 四十坂遺跡 大里郡岡部町当後字四十坂 栗原1960、栗原・石岡1983
19. 菅原遺跡 大里郡岡部町大字普濟寺字古城 ※※
20. 甘粕山遺跡群 (東山・如来堂A～C) 児玉郡美里町大字甘粕 増田他1980
21. 下阿久原平遺跡 児玉郡神泉村大字下阿久原
22. 岩合遺跡 秩父市大字浦山字岩合 小林・吉川1966
23. 三角穴半洞窟遺跡 秩父郡皆野町大字下日野沢字日野 小林・吉川1964
24. 花井遺跡 秩父郡横瀬村大字横瀬 吉川1983
25. わらび沢遺跡 秩父郡吉田町 吉川1983

※浮線文系土器が2点出土している。(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団で整理中。1993(平成5)年度報告予定。

※※浮線文系土器1点の出土が確認されている。(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団で現在調査中である。

(2) 設楽博己氏の御教示による。

なお、復元に際しては各方面からの御意見を参考としたが、筆者の力量不足のため、それを生かすことができなかった。当然、誤認点も多くあることと思う。資料の忠実な呈示という報告書の使命とは相容れないが、その資料的価値をアピールするため、御批判を覚悟のうえあえて掲載に踏み切った次第である。

【引用・参考文献】

青木義脩他1977a『白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第3集

青木義脩他1977b『前窪遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第4集

青木義脩他1980『大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第13集

青木義脩他1983『馬場(小室山)遺跡』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第3集 浦和市教育委員会

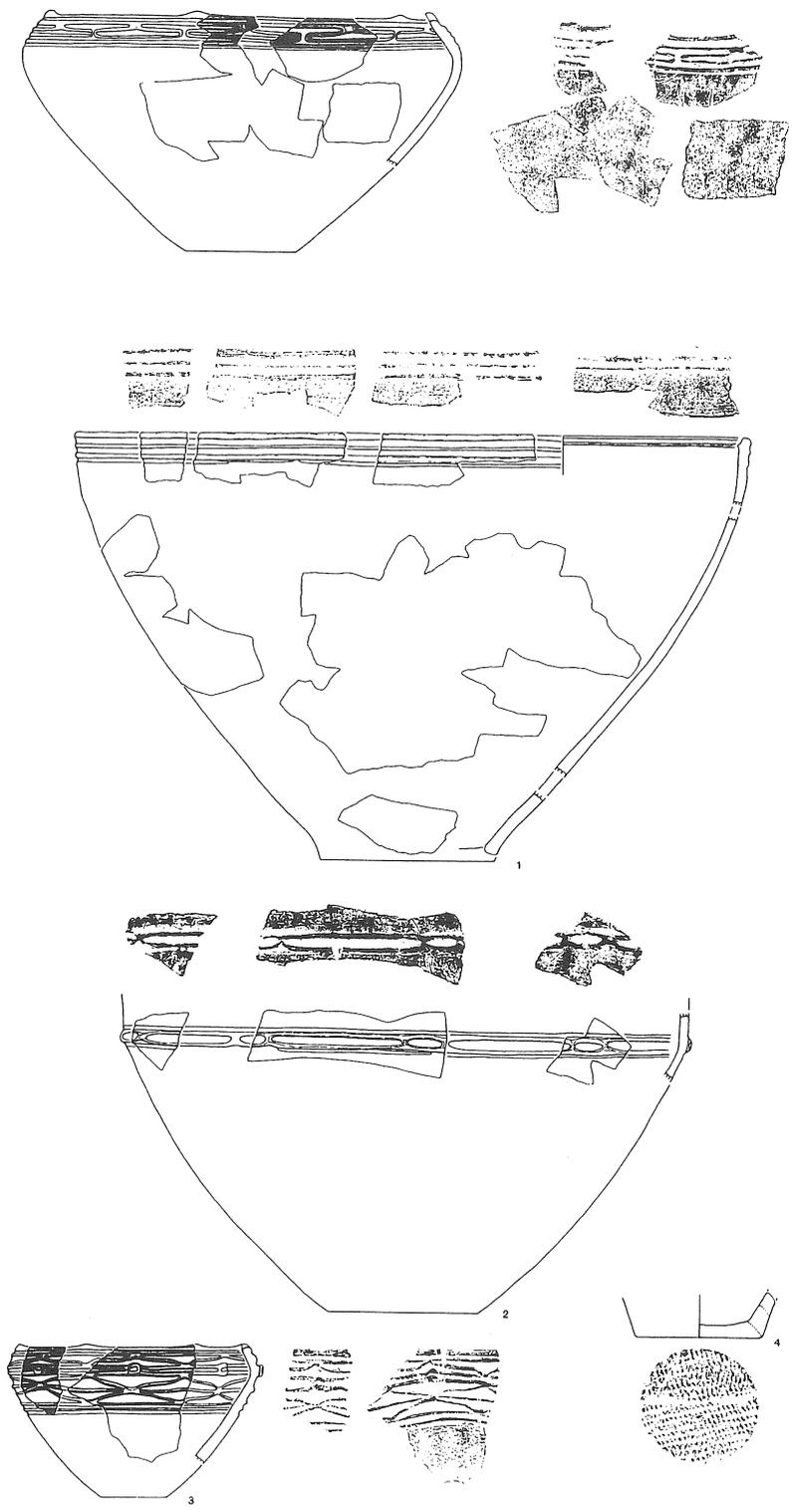
青木義脩他1985『大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第45集

青木義脩他1986『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第63集

荒井幹夫他1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会

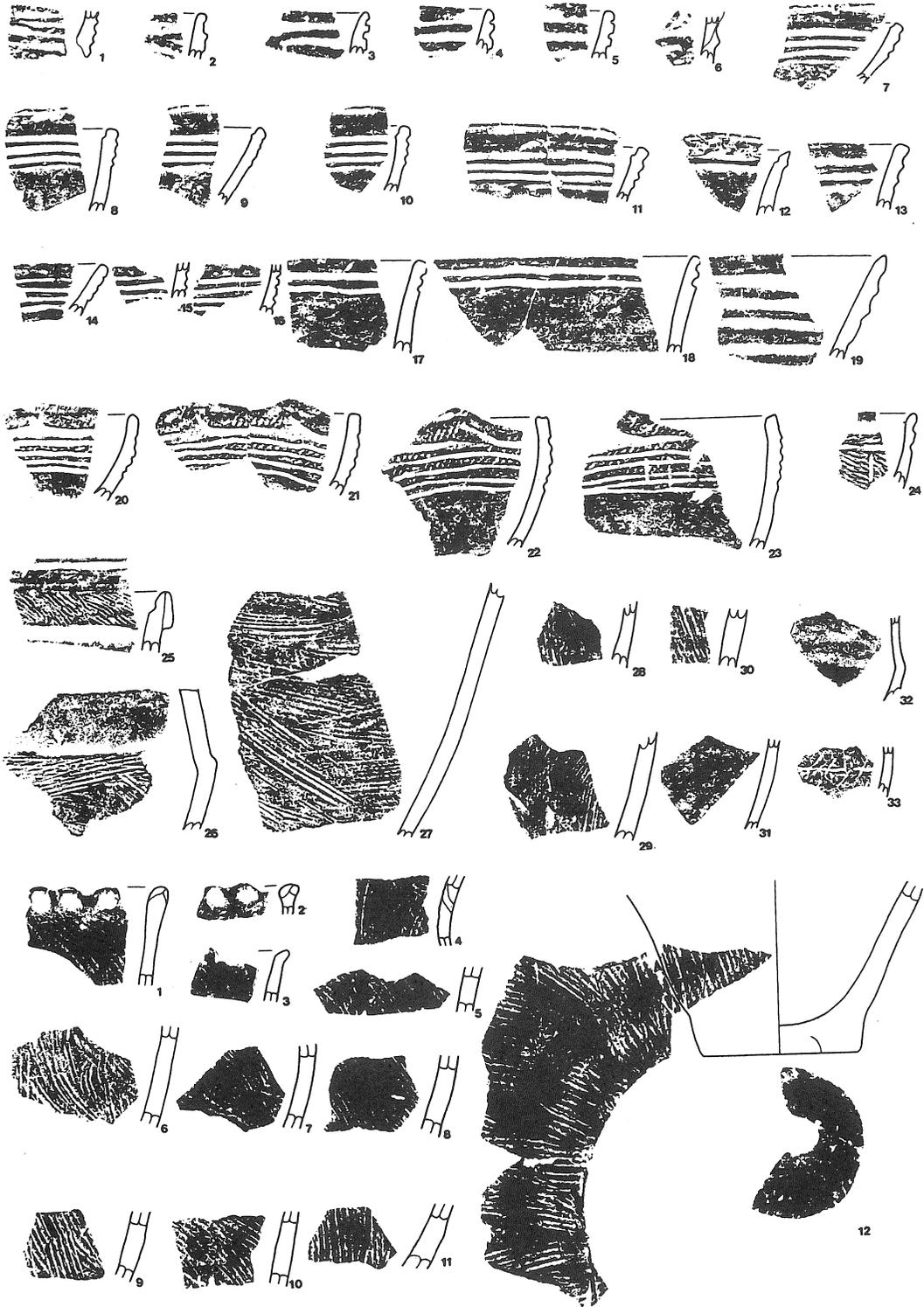
- 磯崎 一1989『新田裏・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集
- 今井 宏他1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
- 小倉 均他1984『吉場・西谷・宮前・大間木内谷・和田西遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第34集
- 金井塚良一他1976『花見堂』嵐山町教育委員会
- 栗原文藏1960「四十坂遺跡の初期弥生式土器」『上代文化』第30輯 国学院大学考古学会
- 栗原文藏・石岡憲雄1983「四十坂遺跡の初期弥生式土器再論」『研究紀要』第5号 埼玉県立歴史資料館
- 小林 茂・吉川國男1964「秩父三角穴半洞窟遺跡調査概報」『埼玉考古』第2号 埼玉考古学会
- 小林 茂・吉川國男1966「秩父・浦山岩合遺跡発掘調査概報」『埼玉考古』第4号 埼玉考古学会
- 設楽博己1991「関東地方の遠賀川系土器」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』 児嶋隆人先生喜寿記念事業
会
- 庄野靖寿他1974『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集 埼玉県教育委員会
- 鈴木徳雄1979「日高町高麗公民館所蔵の千網式土器」『埼玉考古』第18号 埼玉考古学会
- 関 義則1983「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10
- 田中広明他1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 中島 宏1984『池守・池上』 埼玉県教育委員会
- 橋本 勉他1985『ささら（Ⅱ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集
- 橋本 勉他1990『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 早川智明他1972「宮岡氷川神社前遺跡発掘調査報告」『北本市の埋蔵文化財』北本市文化財調査報告書第1集 北本
市教育委員会
- 蛭間真一他1978『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市教育委員会
- 藤原高志他1983『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 細田 勝1991『在家』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第107集
- 増田逸朗他1980『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会
- 町田 信1973『浦和を下木崎前窪遺跡』浦和考古学会研究調査報告書第6集 浦和考古学会
- 山本 禎他1986『猿貝北・新町口』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第61集
- 吉川國男1983「埼玉県地方における弥生文化の始源について」『東日本における黎明期の弥生土器』第4回三県シン
ポジウム 北武蔵古代文化研究会他
- 吉田 稔他1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

在家(1/5)



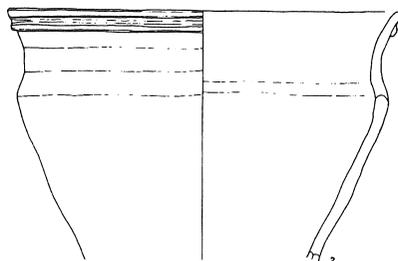
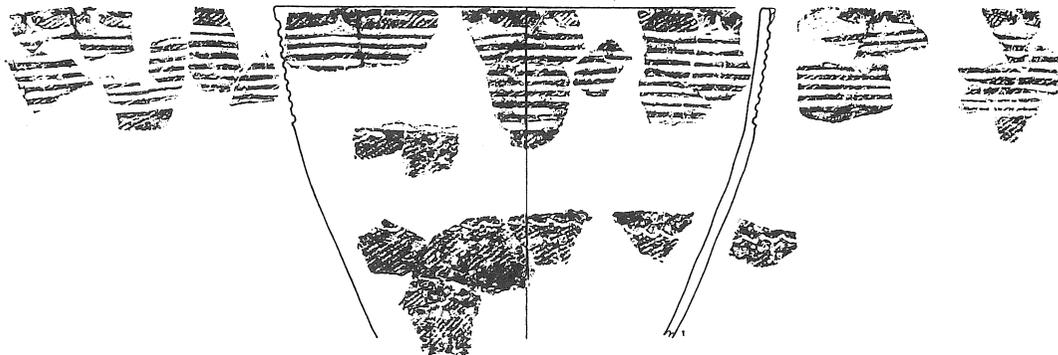
第93图 参考資料(1)

北宿西①(1/3)

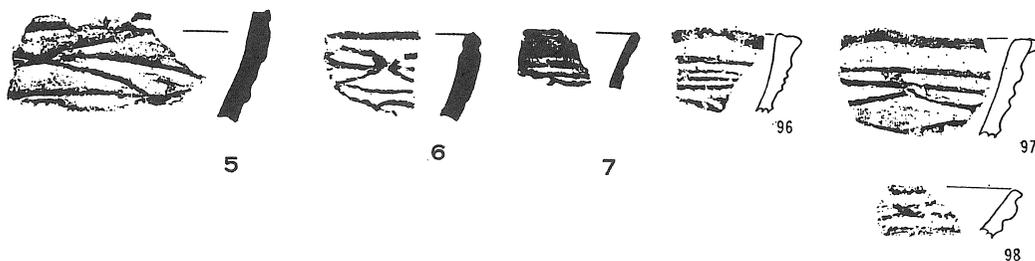


第94图 参考資料(2)

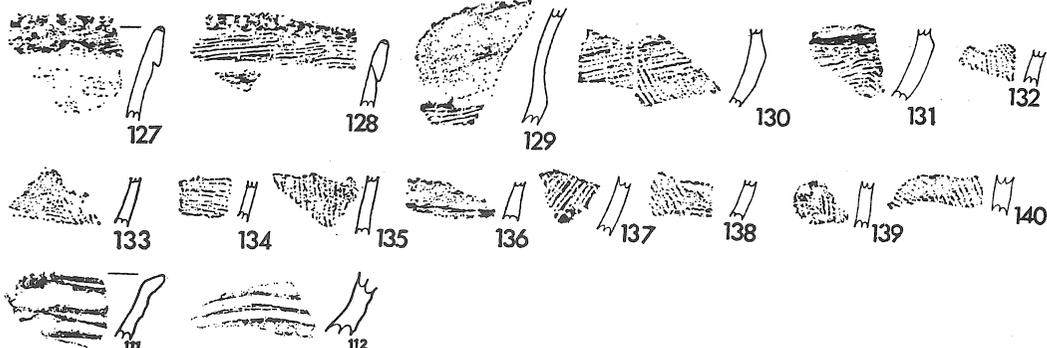
北宿西②(1/5)



前窪(1/3)



大間木内谷(1/3)

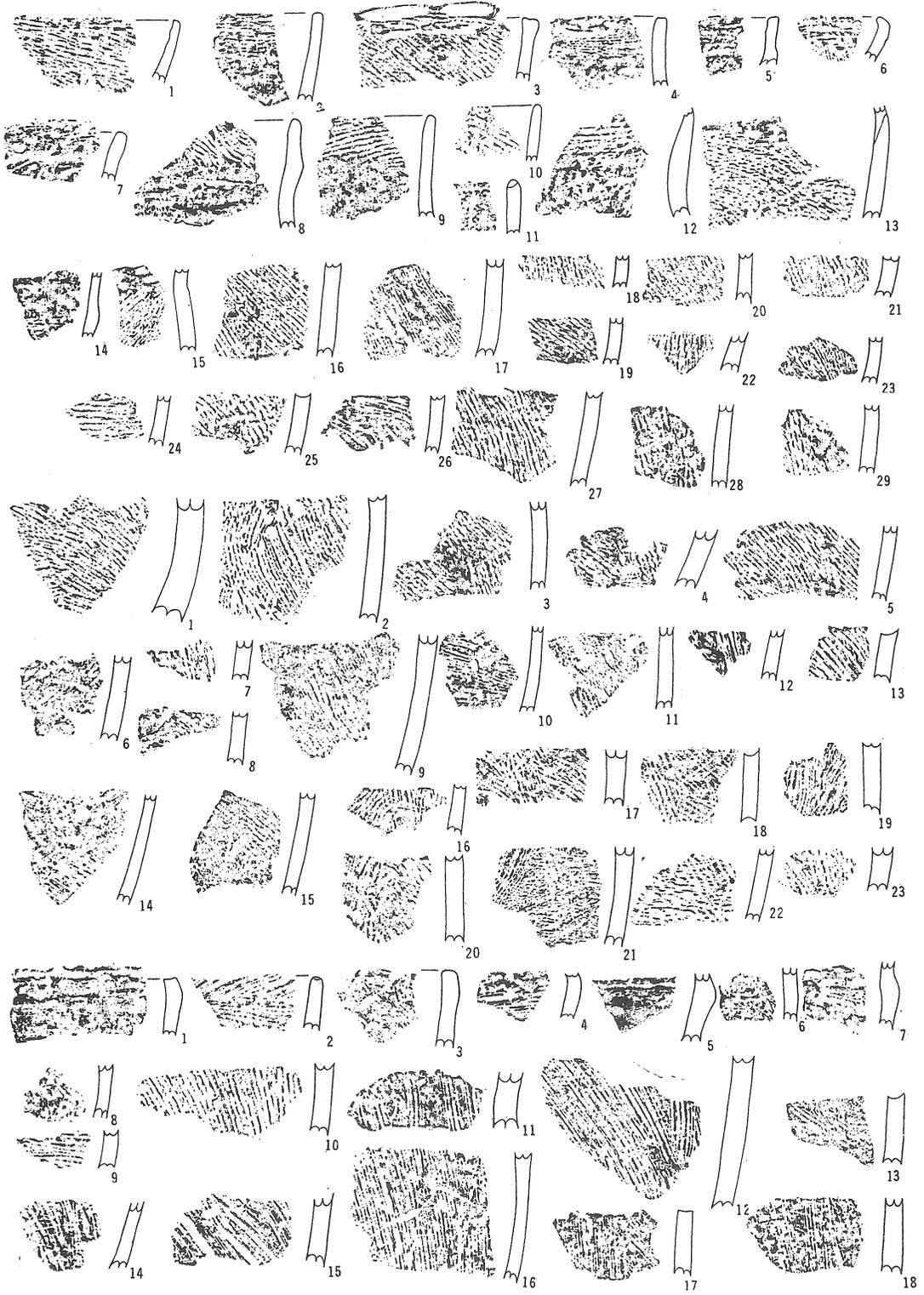


吉場(1/3)

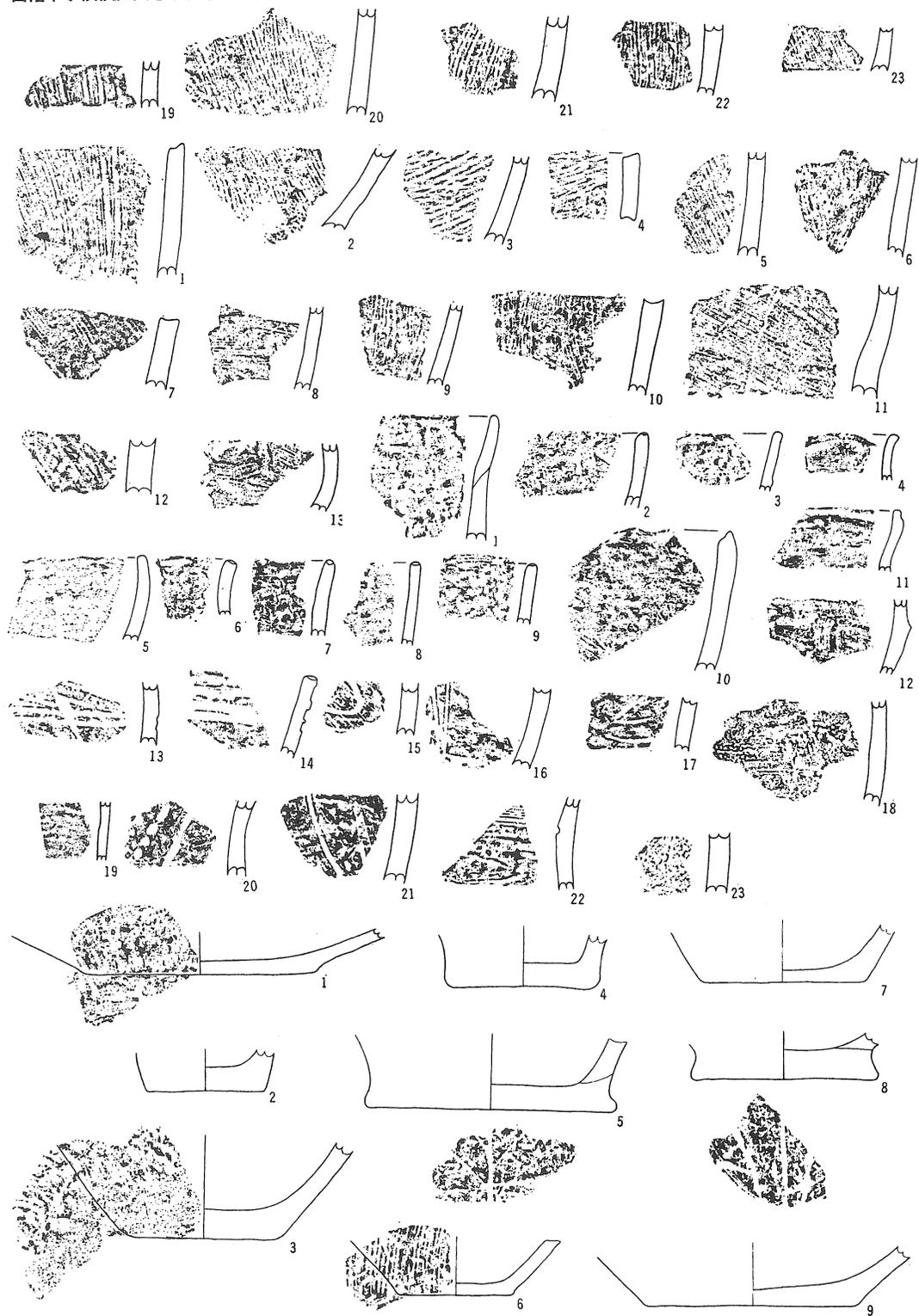


第95図 参考資料(3)

白幡中学校校庭内①(1/3)

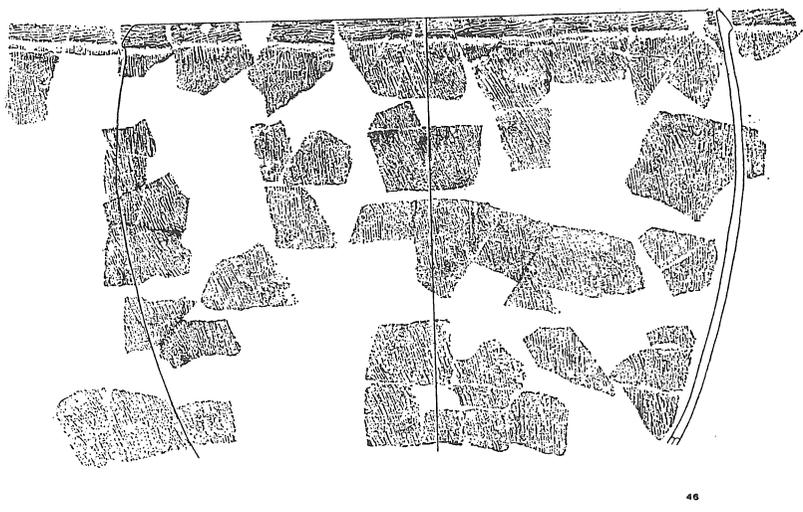
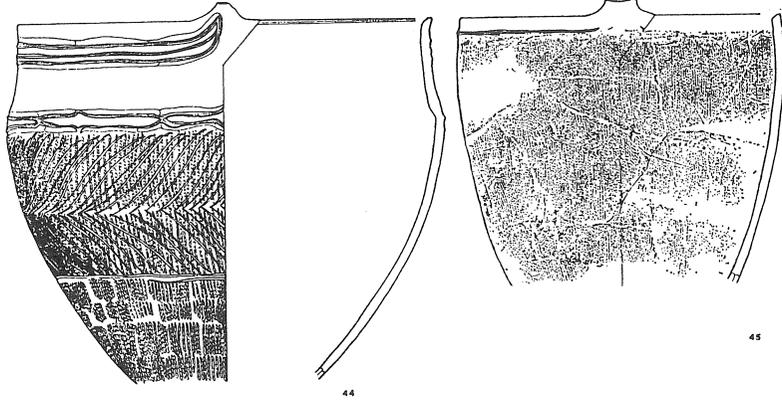


第96図 参考資料(4)

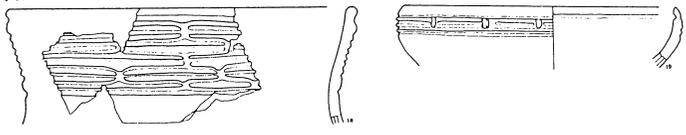


第97図 参考資料(5)

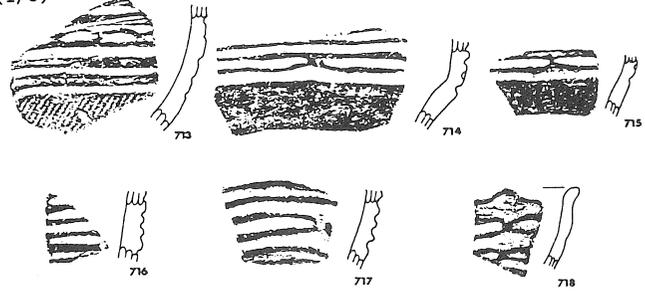
馬場小室山(1/5)



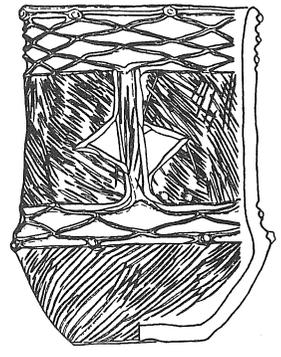
打越(1/5)



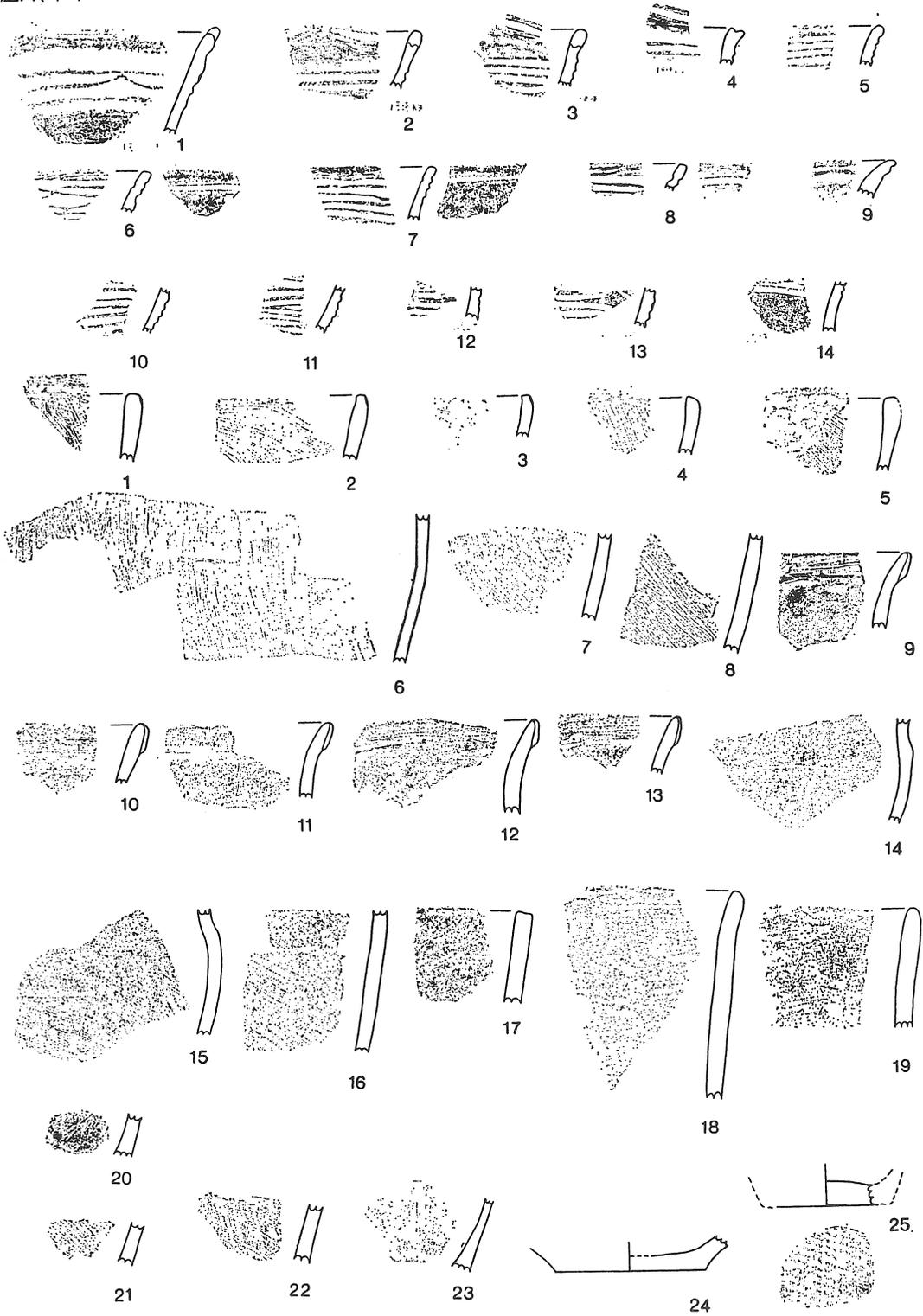
打越(1/3)



高麗(1/5)

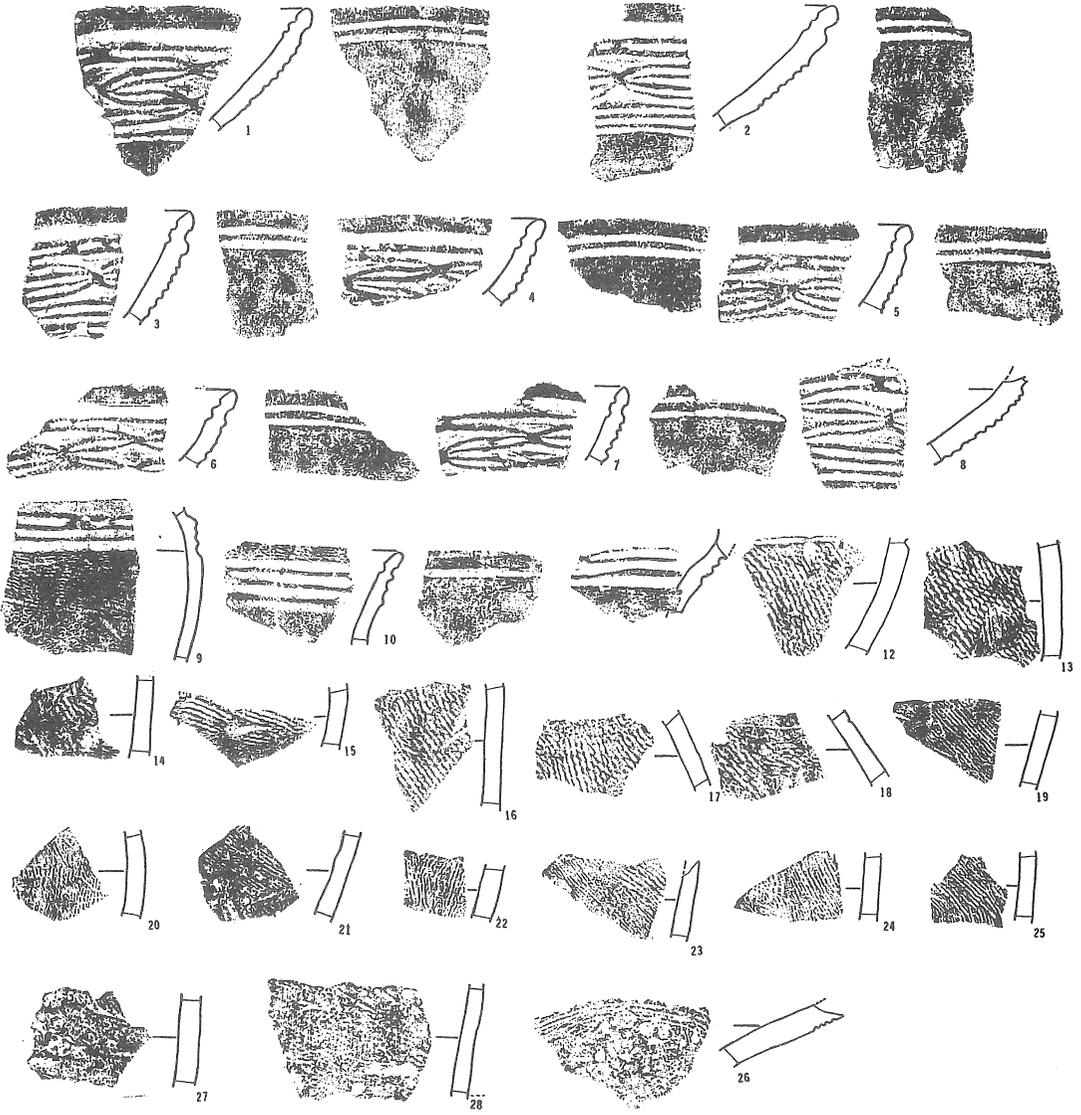


第98図 参考資料(6)

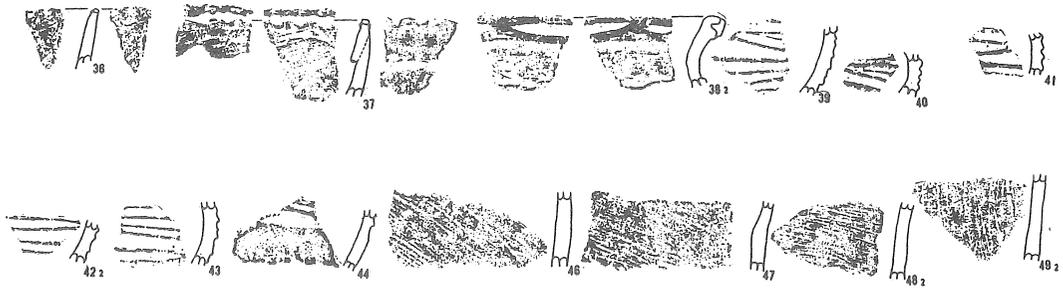


第99図 参考資料(7)

花見堂(1/3)

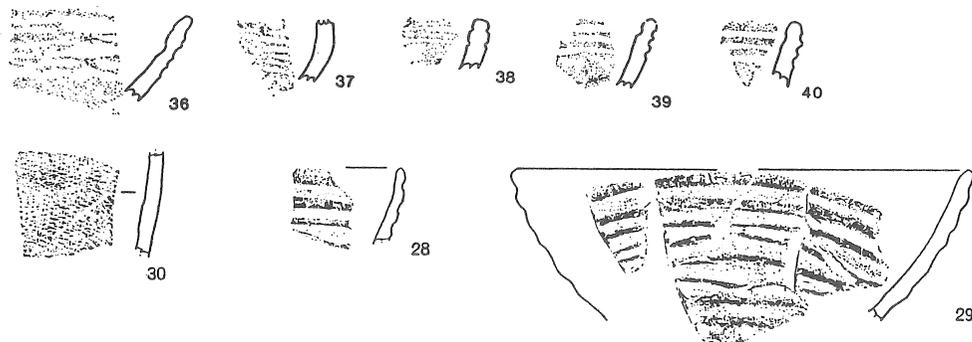


關山(1/3)



第100図 参考資料(8)

ささら(1/3)

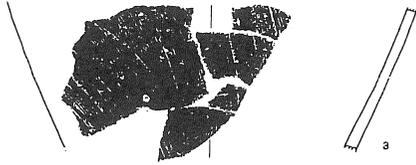
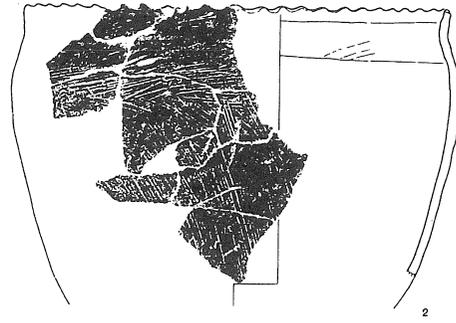
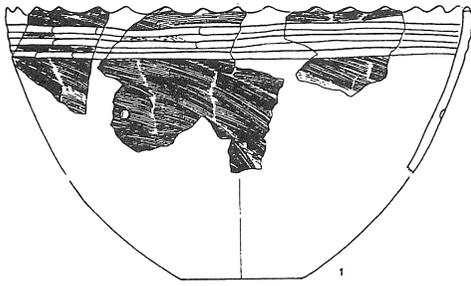


雅楽谷(1/3)



第101図 参考資料(9)

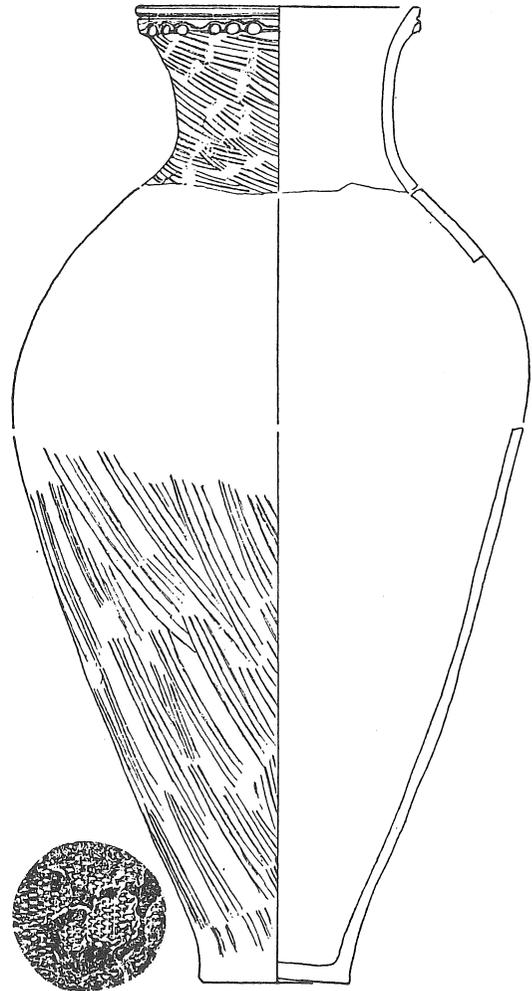
猿貝北(1/5)



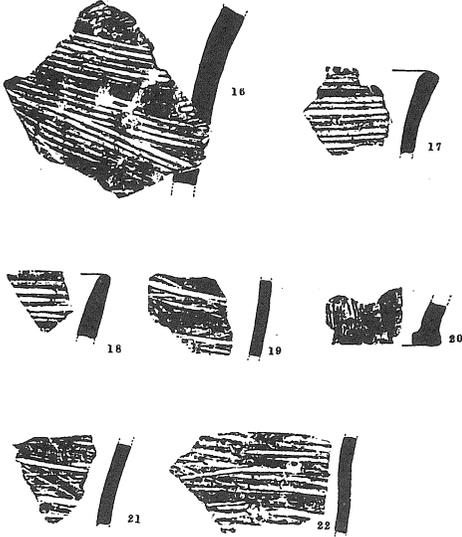
猿貝北(1/3)



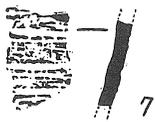
四十坂①(1/6)



岩合(1/3)

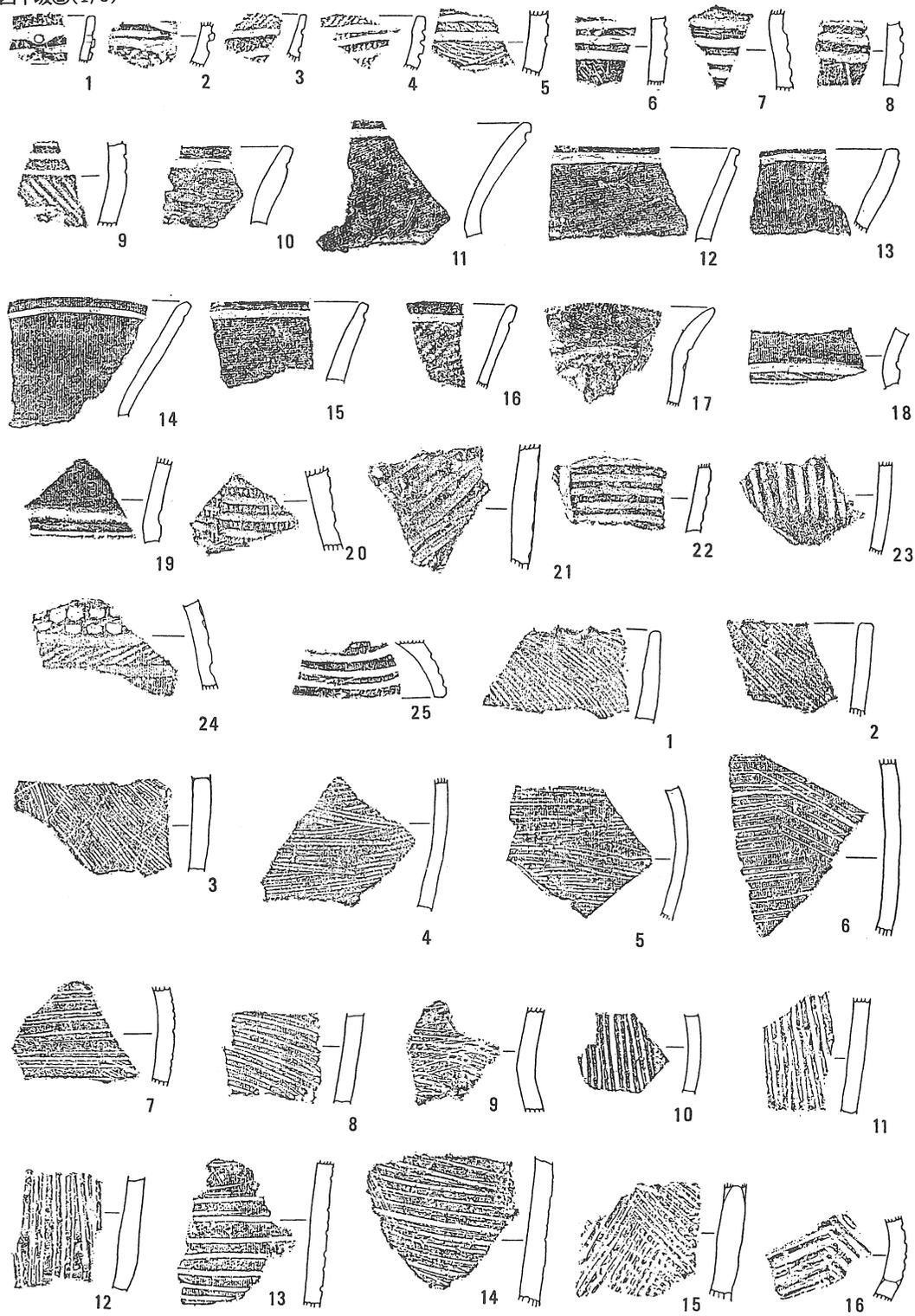


三角穴半洞窟(1/3)

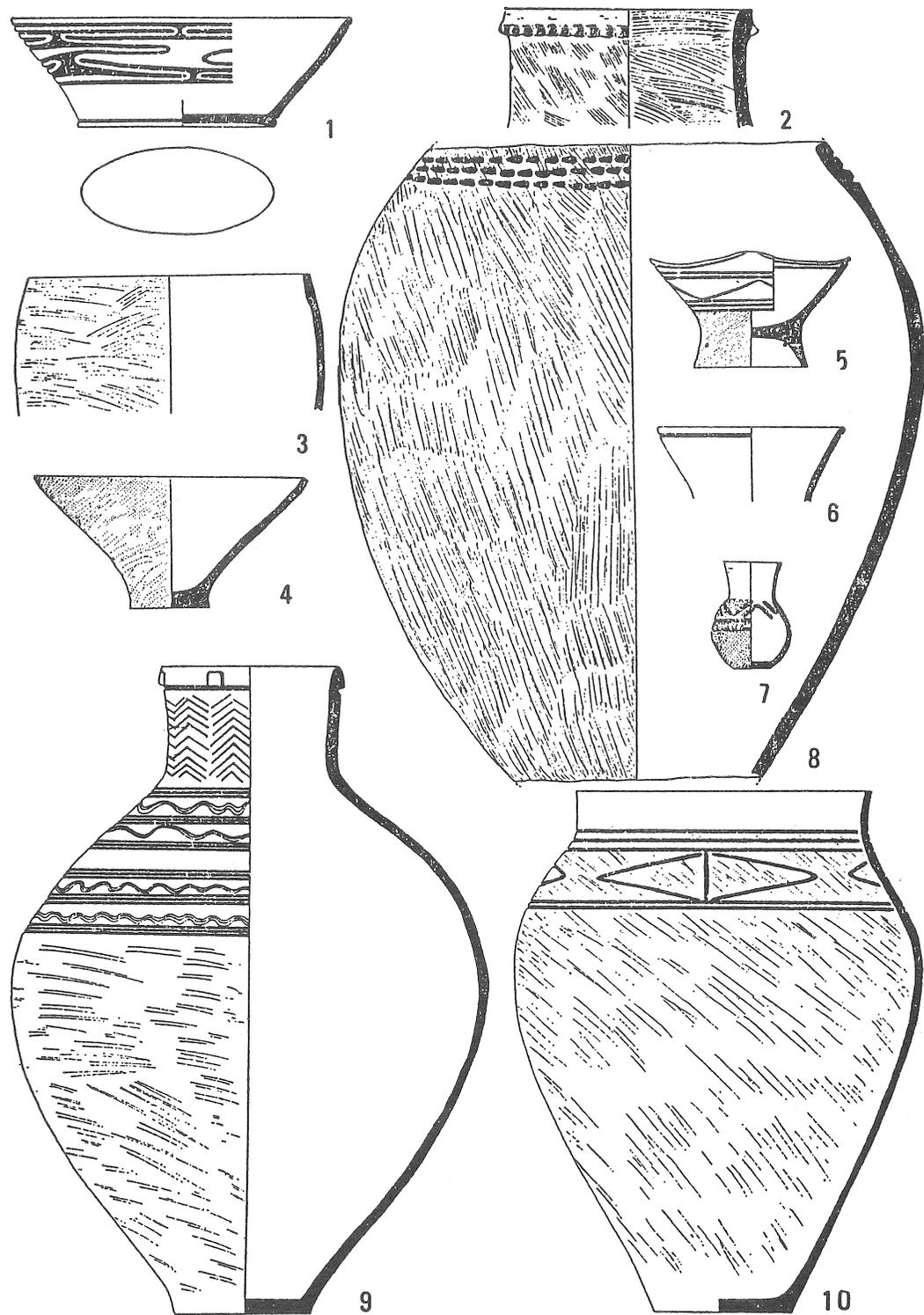


第102図 参考資料(10)

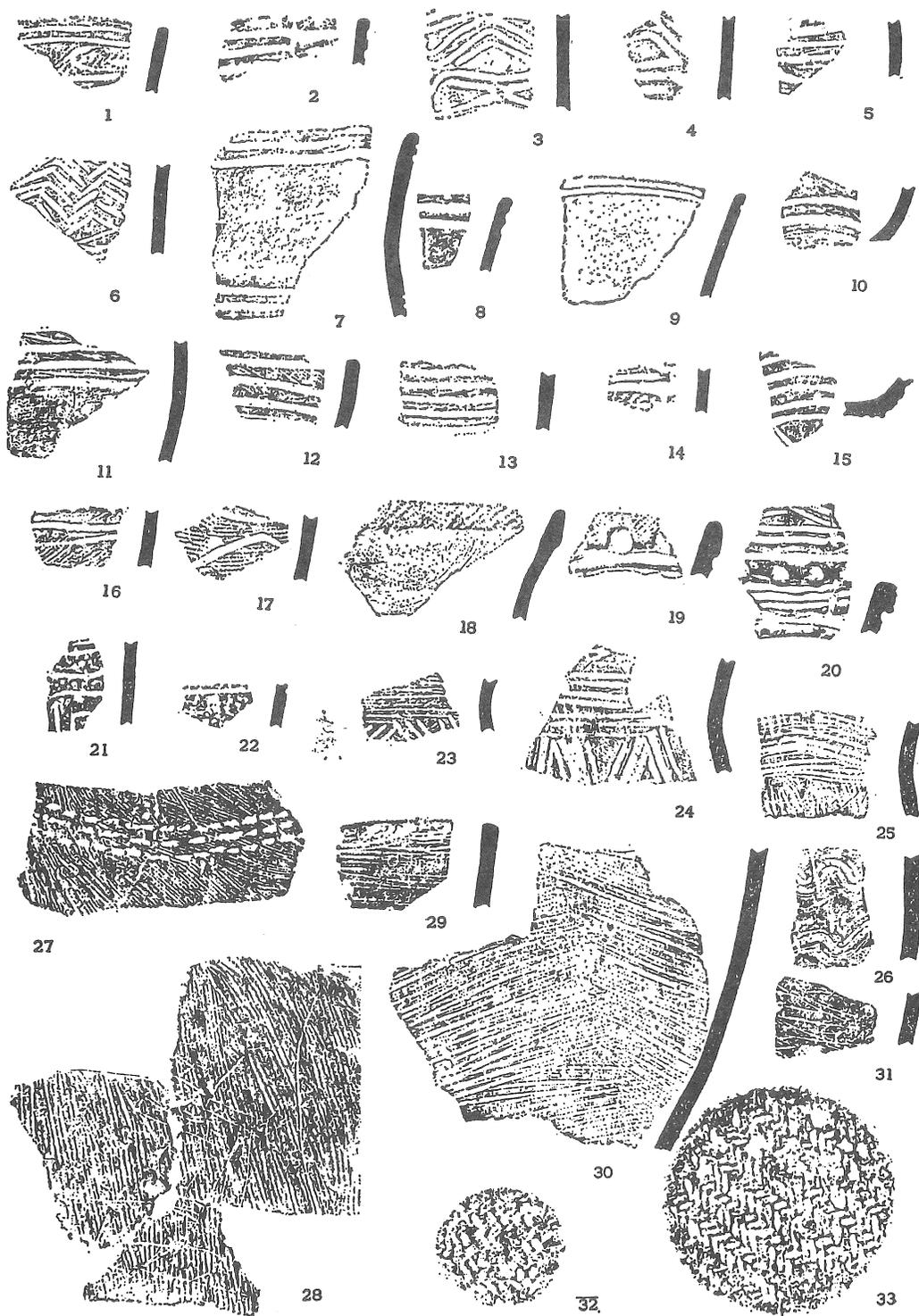
四十坂②(1/3)



第103図 参考資料(11)



第104图 参考資料(12)

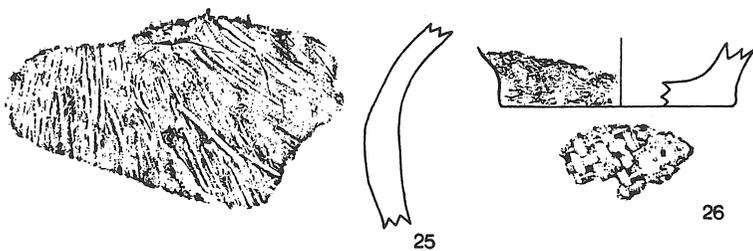
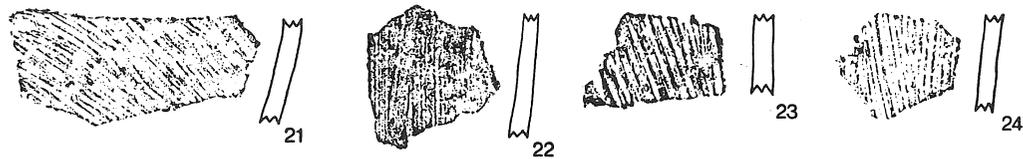
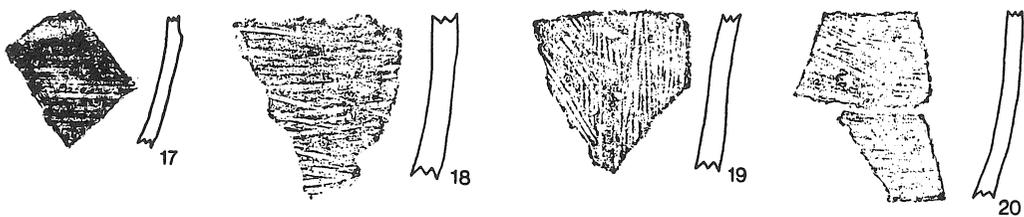
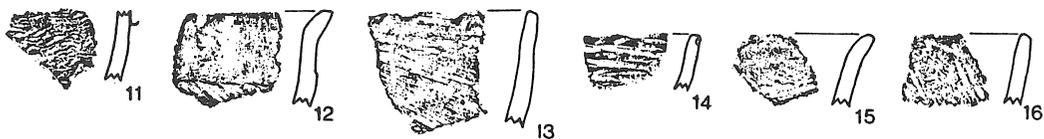


第105図 参考資料(13)

東山(1/3)



如来堂A(1/3)



如来堂B(1/3)



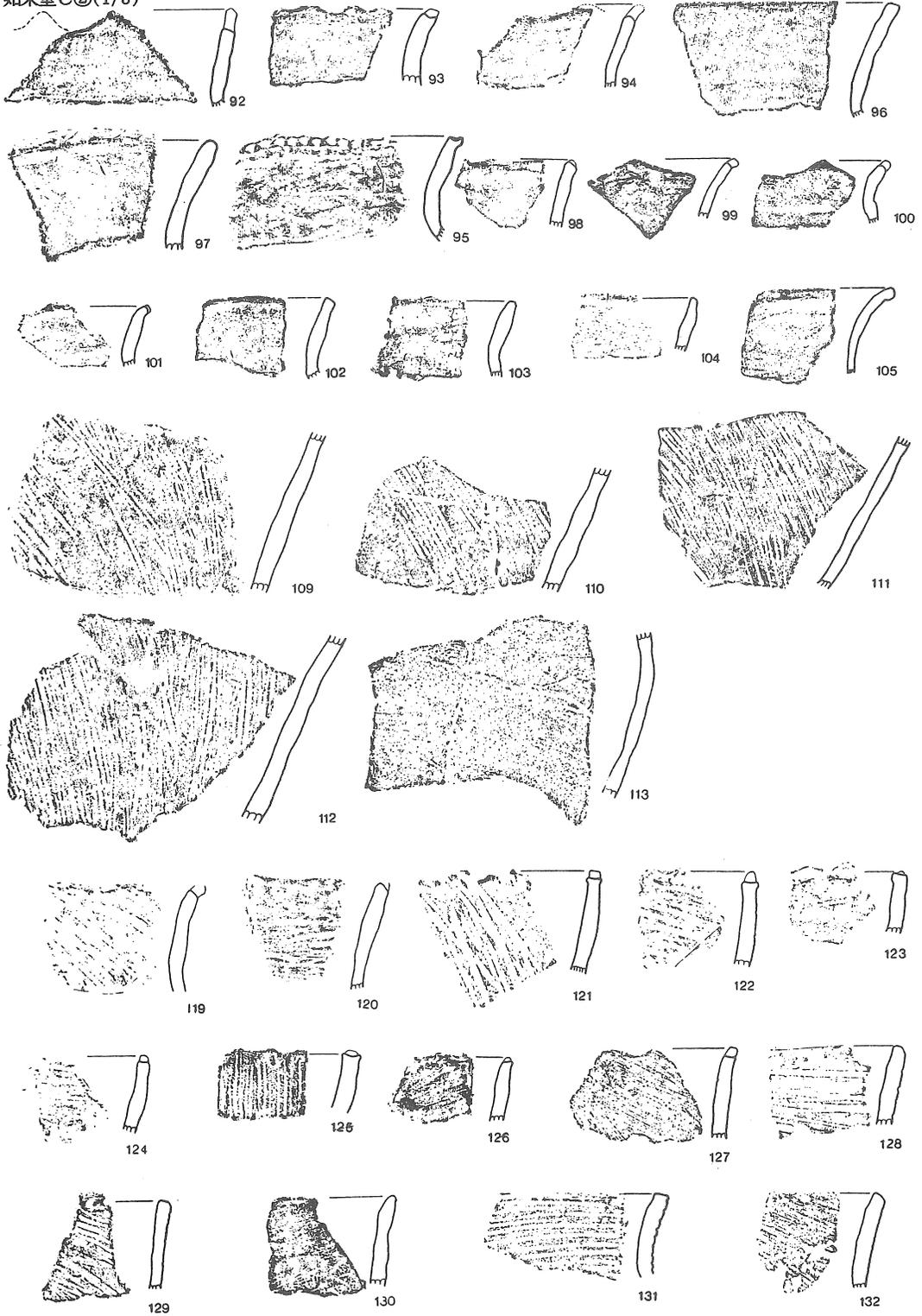
第106図 参考資料(14)

如来堂C①(1/3)



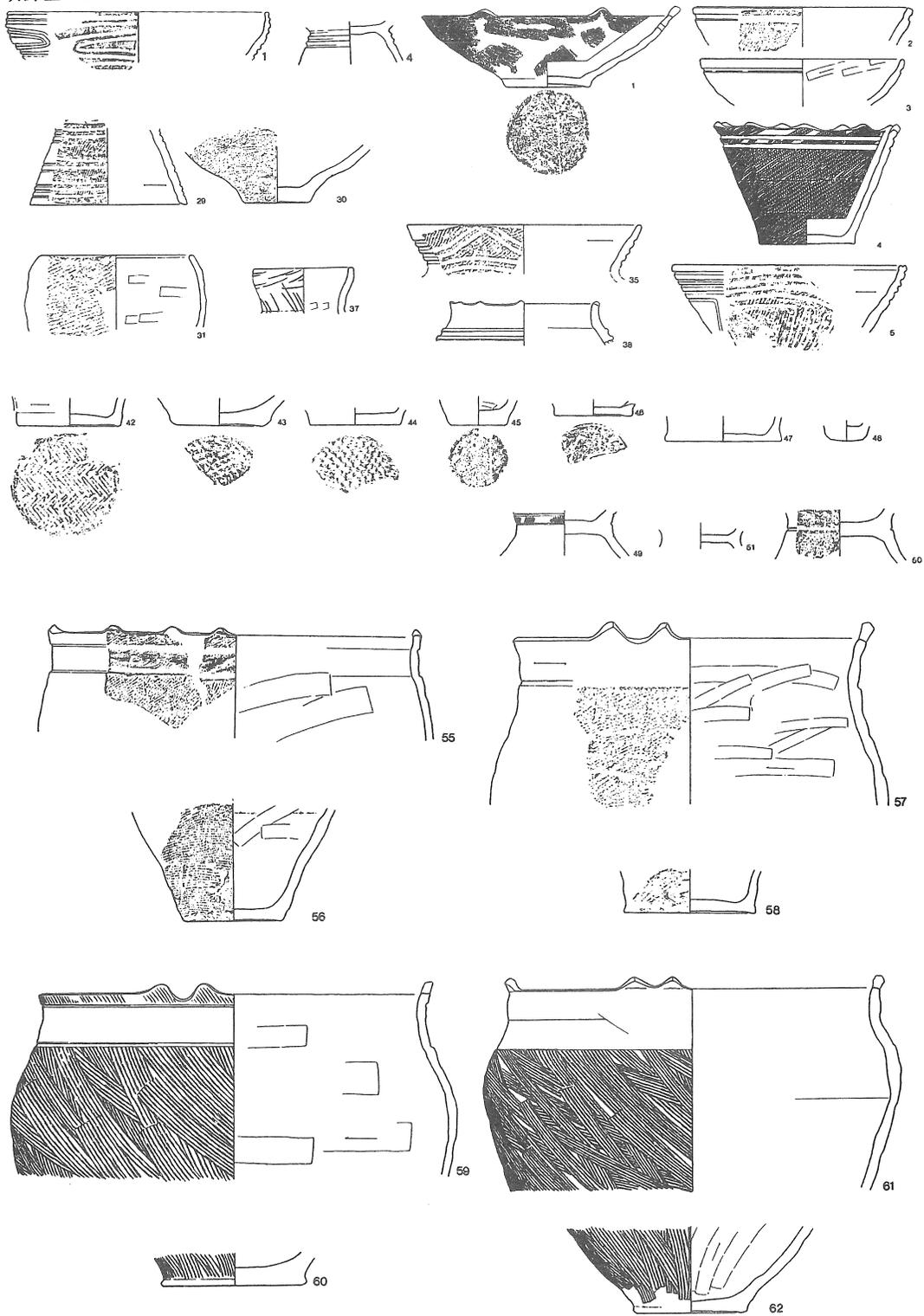
第107图 参考資料(15)

如来堂C②(1/3)



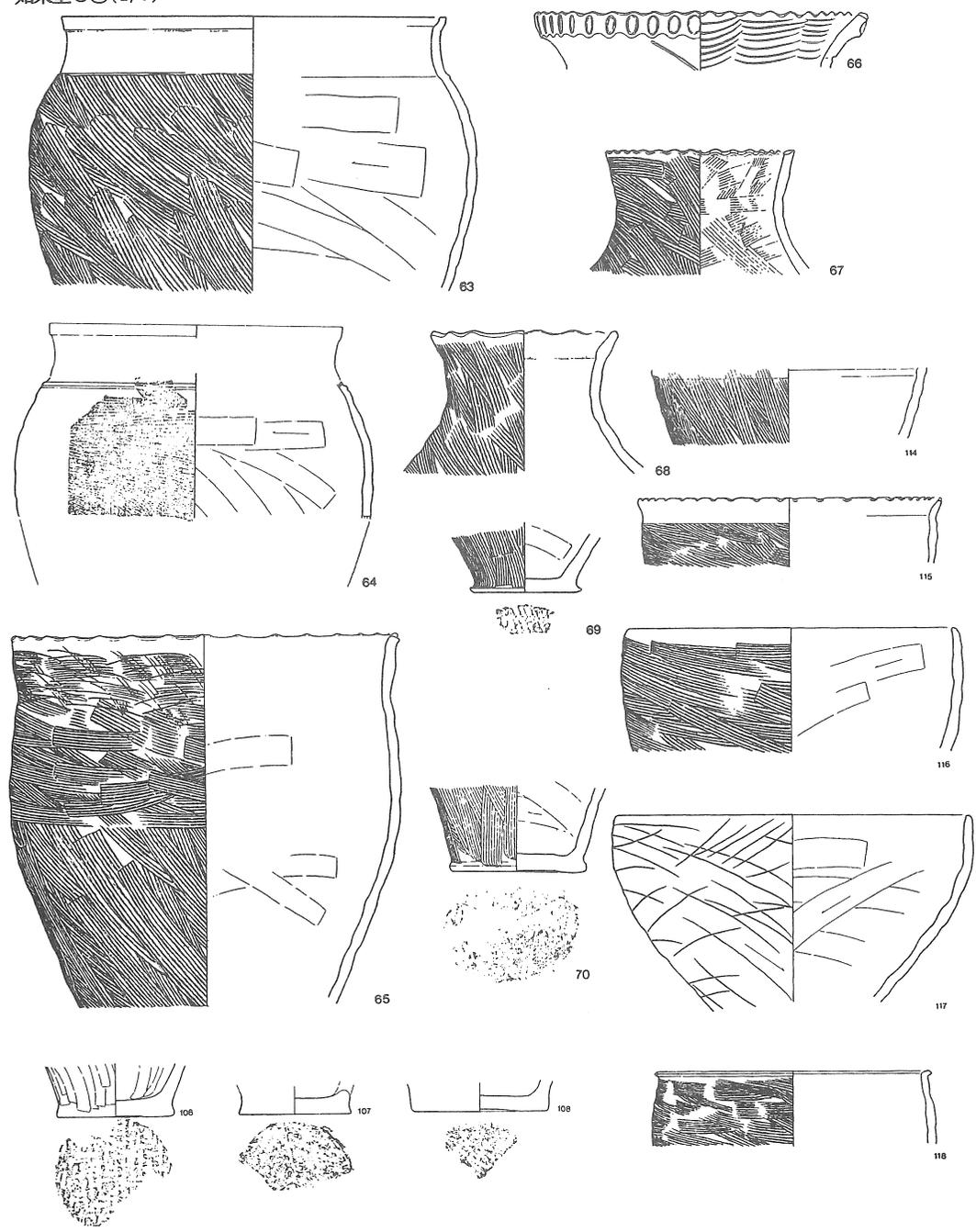
第108图 参考資料(16)

如来堂C③(1/5)



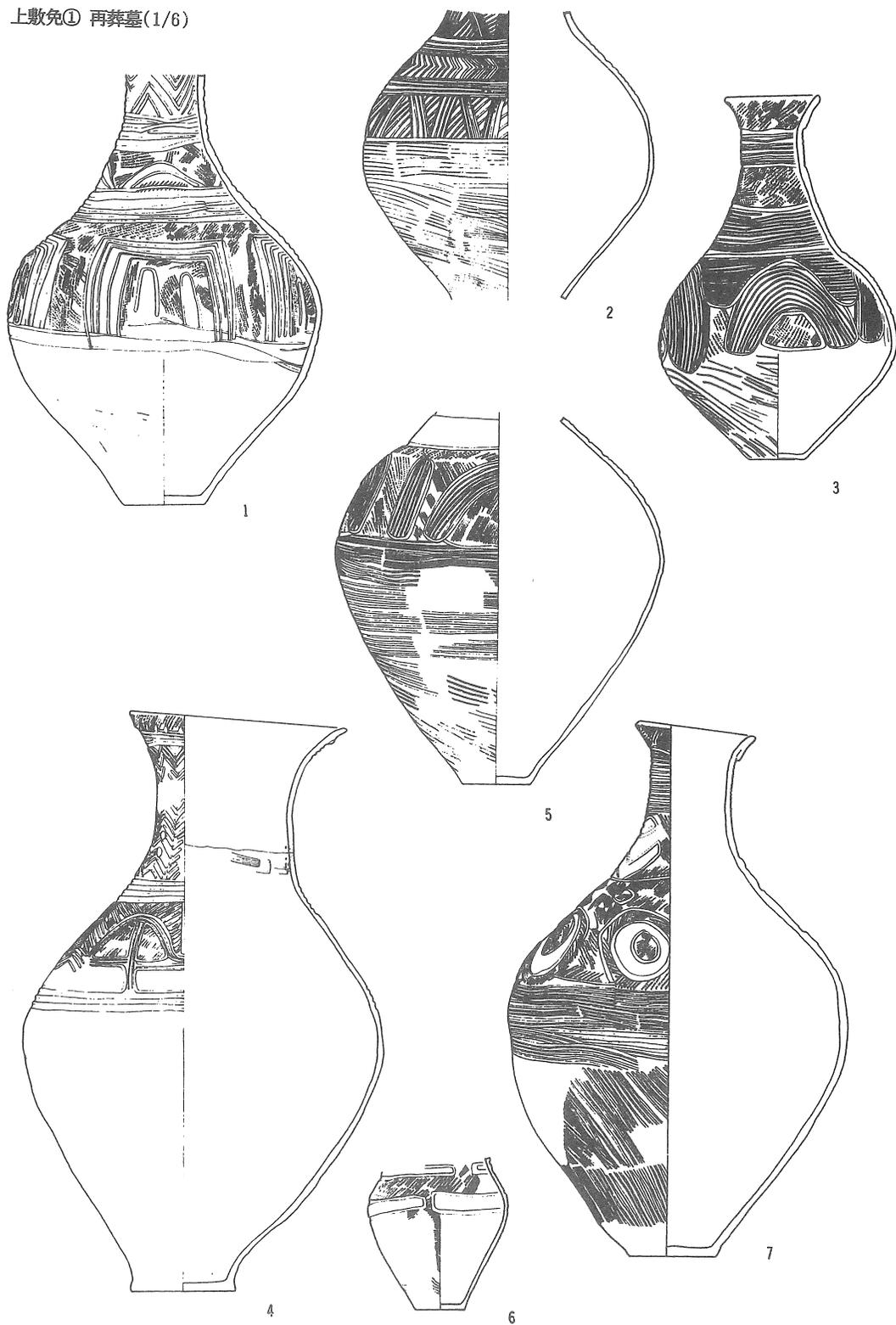
第109图 参考資料(17)

如来堂C④(1/5)



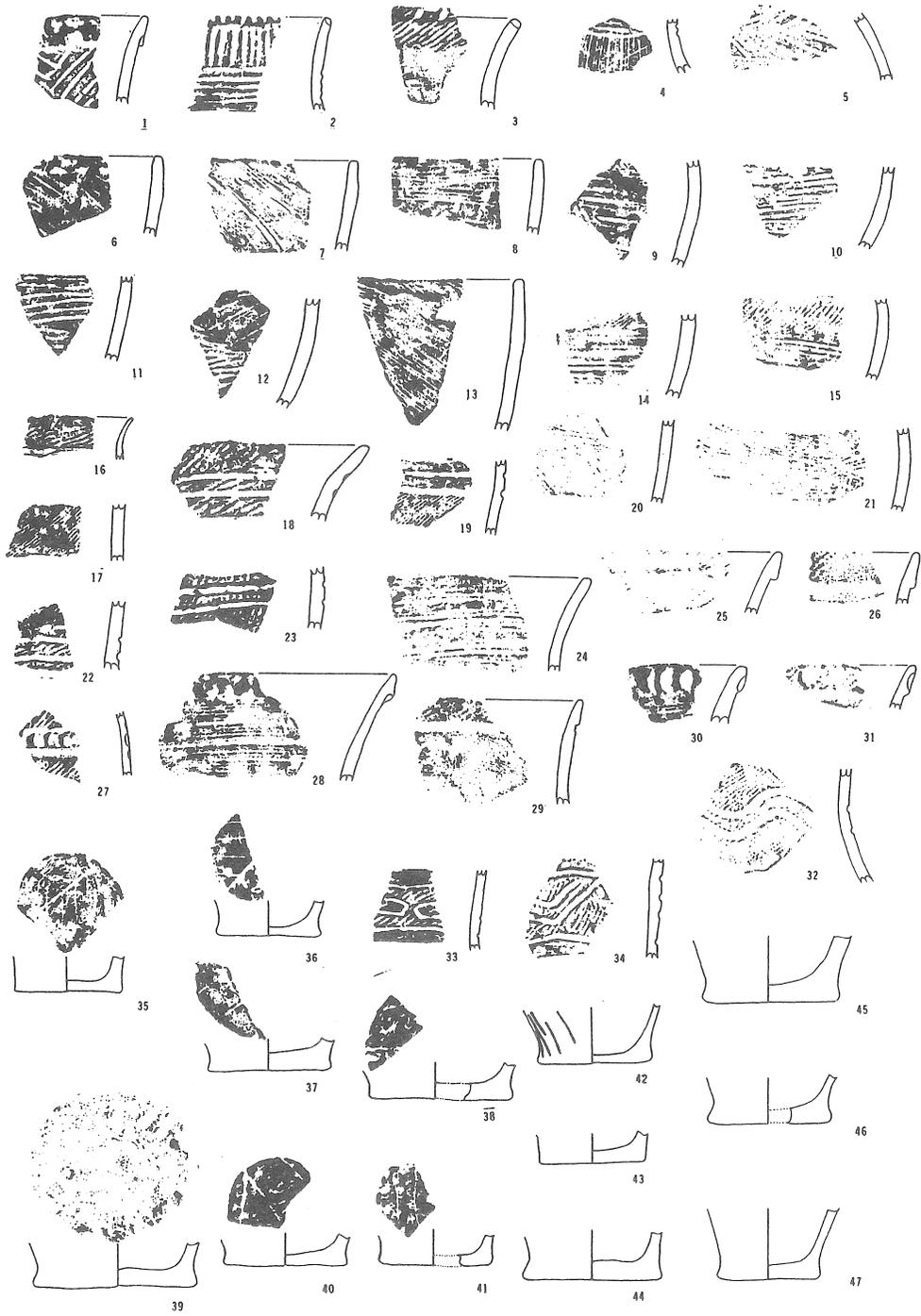
第110图 参考資料(18)

上敷免① 再葬墓(1/6)

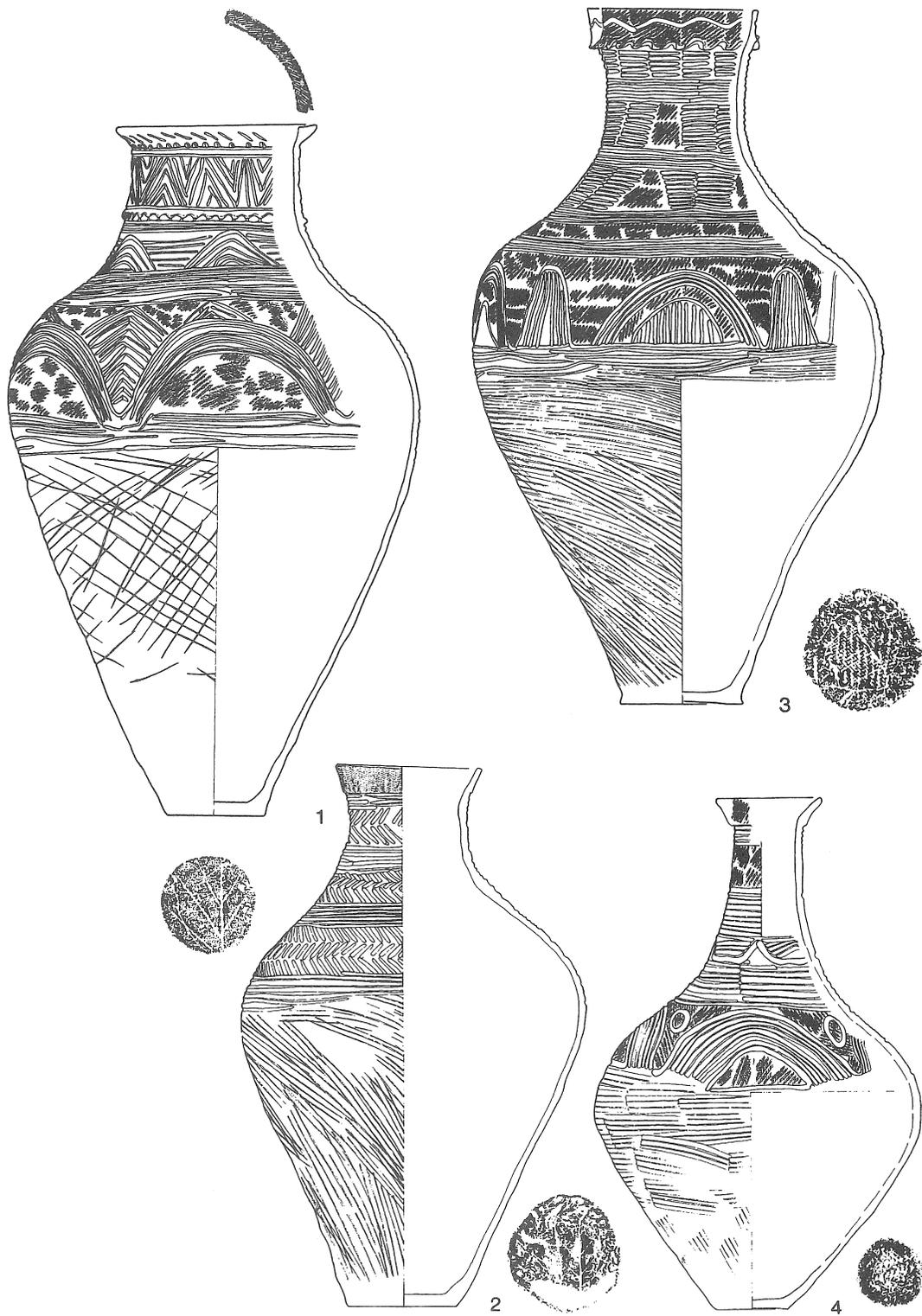


第111図 参考資料(19)

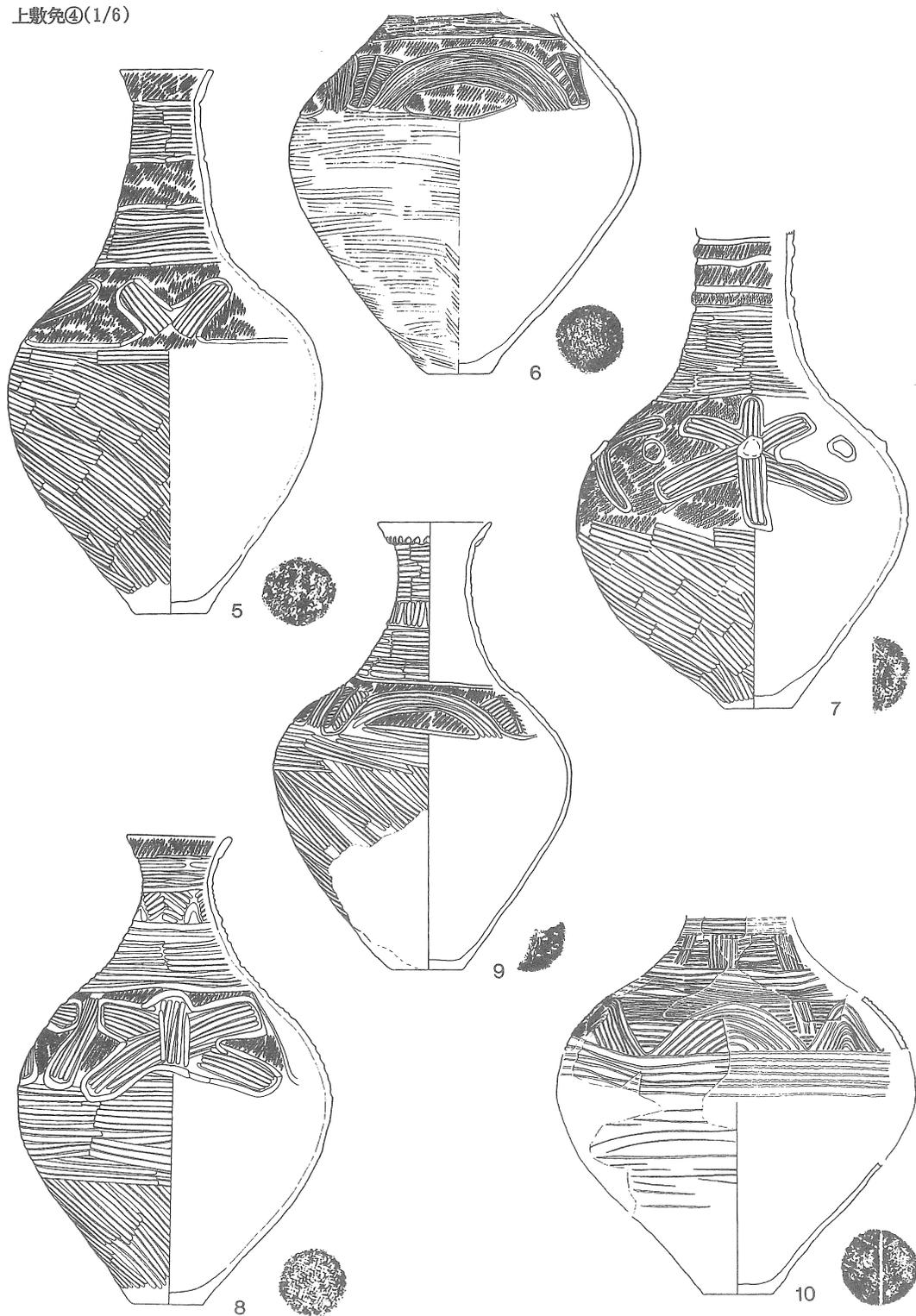
上敷免② 包含層(1/4)



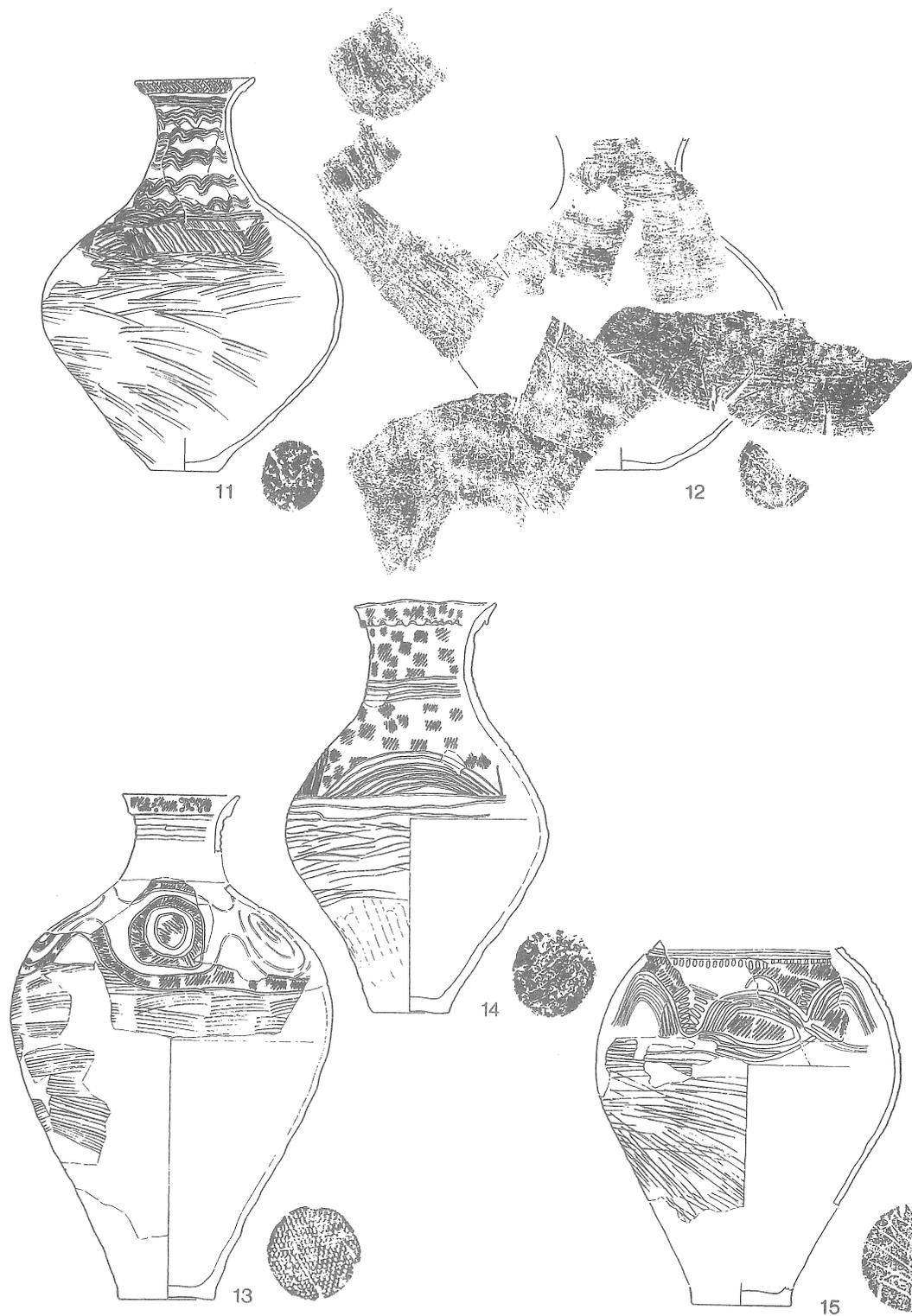
第112図 参考資料(20)



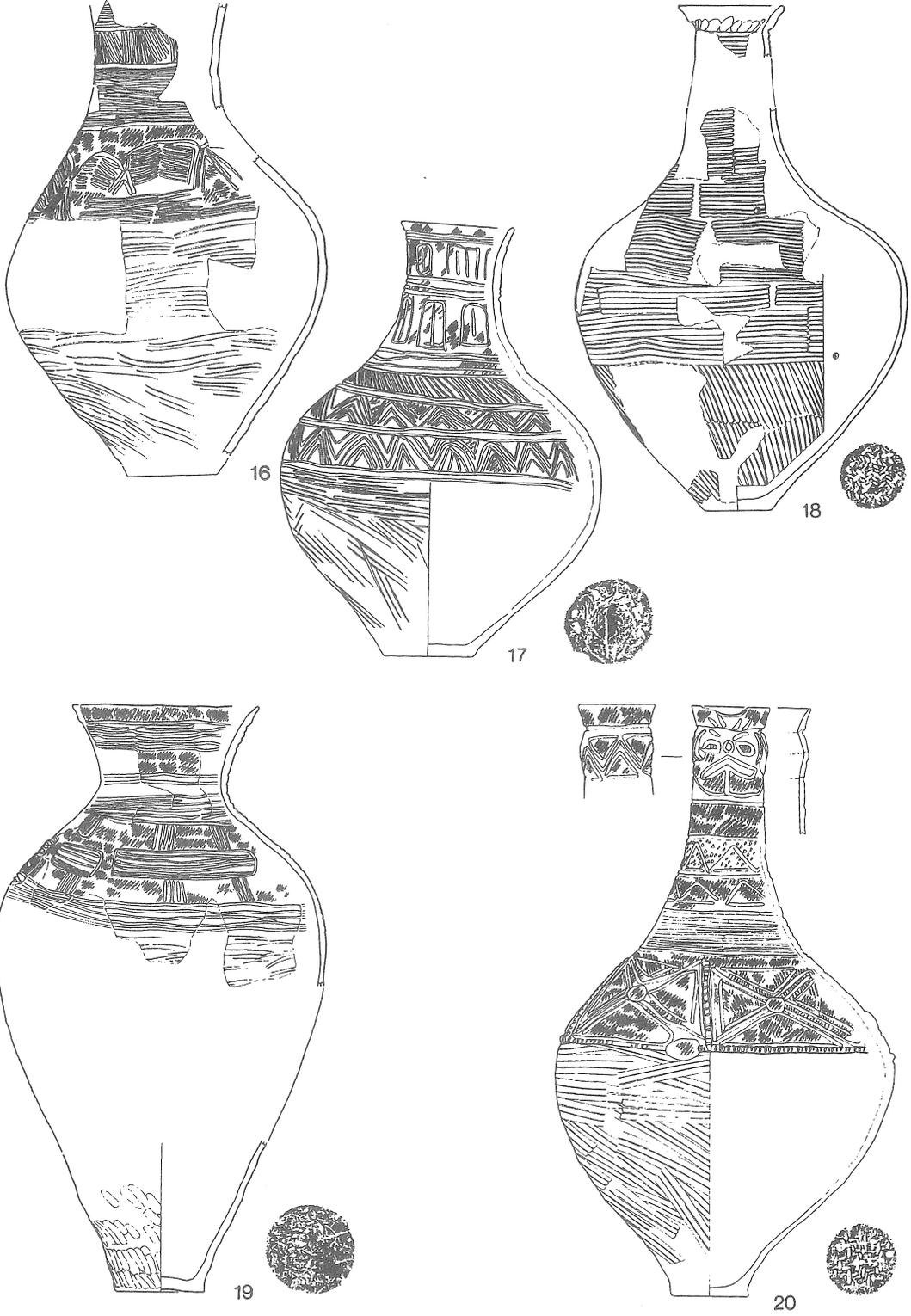
第113图 参考資料(21)



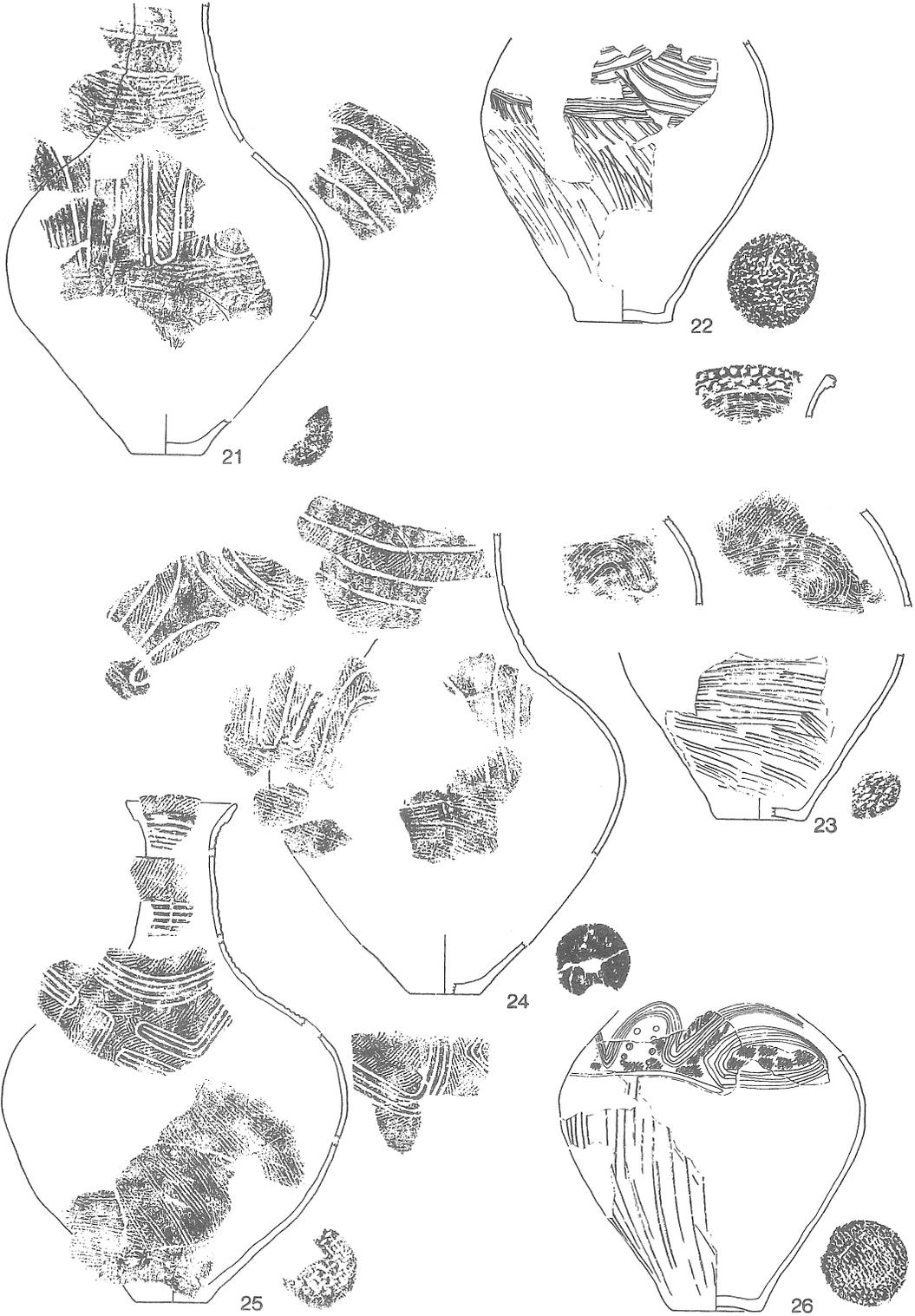
第114図 参考資料(22)



第115図 参考資料(23)

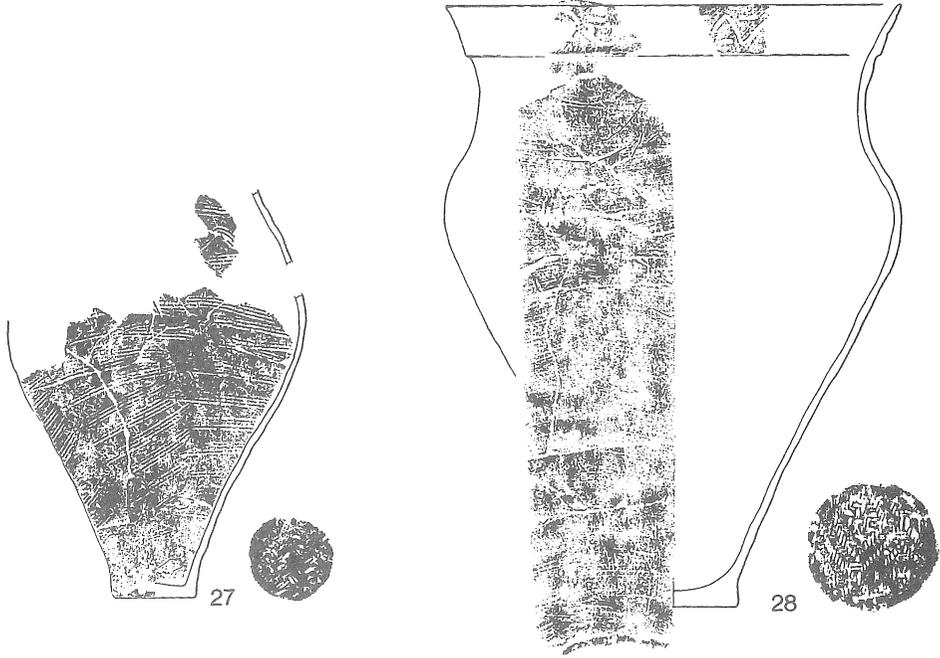


第116図 参考資料(24)

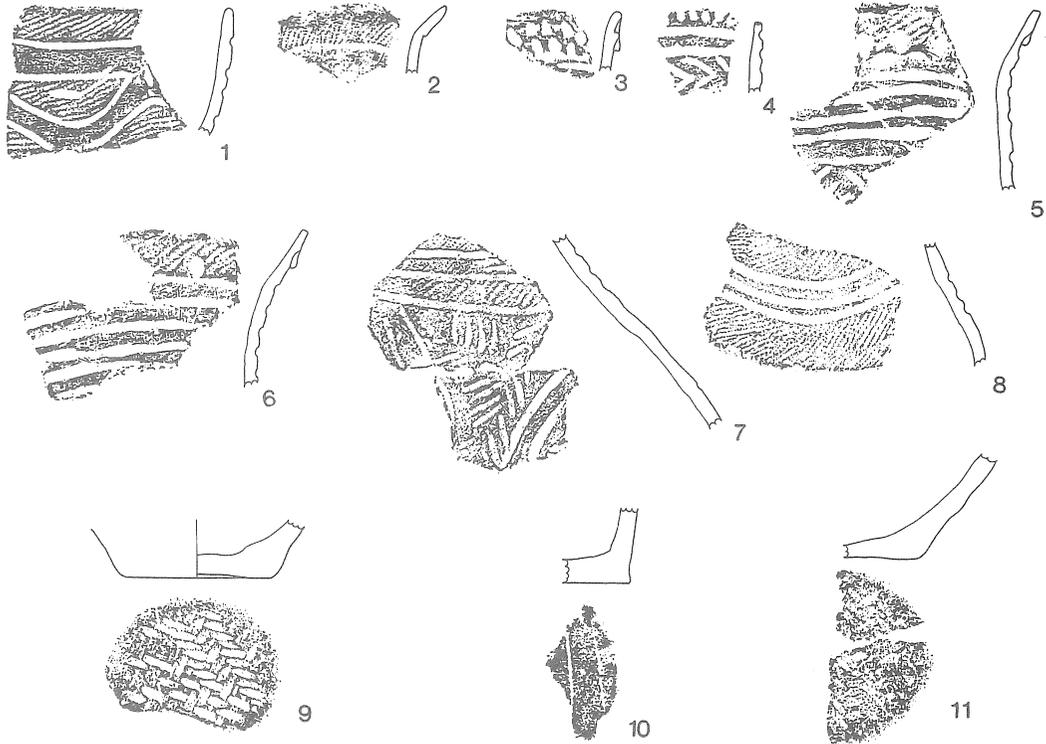


第117图 参考資料(25)

上敷免⑧(1/6)



上敷免(1/3)



第118図 参考資料(26)

2 底部圧痕について

上敷免遺跡の縄文土器の底部には網代編みやザル編み等の編物や、木の葉の圧痕を有するものかなりの割合で認められた。底部の編物圧痕は、縄文時代の後・晩期を中心に存在するが、埼玉県内でもこの時期には普遍的にみられるようである。大宮市寿能遺跡、桶川市高井東遺跡をはじめ蓮田市雅楽谷遺跡、川里村赤城遺跡など、また大集落に限らず後・晩期の土器には何らかの敷物の圧痕が多く認められ、これまで編み方の分類等が報告されている。

上敷免遺跡の縄文土器は包含層やグリッドからの出土であるため、無文の粗製土器においてはその詳細な時期を明確にし得ない。堀之内式土器から晩期終末期の条痕土器までが含まれているので、大きく後・晩期の土器というにとどめておく。土器底部総数234個体を対象に分析を行なった。

(1) 編み方の種類

編物は編み方の手法により、網代編みやザル編み、モジリ編みなどに分類できる。上敷免遺跡では網代編みとザル編みの2種類が確認できた。網代編みは、径・緯ともに比較的幅広く薄手の材質のもので中央部から縦、横、或いは斜め方向に隙間なく密に編まれた編物である。これに対しザル編みは、固定された径条を緯条が超え潜りすることにより編まれる。概ね、径条と緯条は異なる材質のもので、径条は次の条と1条分程度の間隔をもつものに対し、緯条は隙間なく密接している。モジリ編みは東北・北陸地方に多くみられるが、関東地方には極めて少ない。当遺跡では残念ながらこの編み方の圧痕は確認できなかった。

A. 網代編み (第119図) 35例

A-1. 2本超え2本潜り1本送り

(2本1組) 5例

A-2. 2本超え2本潜り1本送り

5例

A-3. 4本超え4本潜り2本送り

1例

A-4. 1本超え2本潜り1本送り

1例

A-5. 3本超え3本潜り1本送り

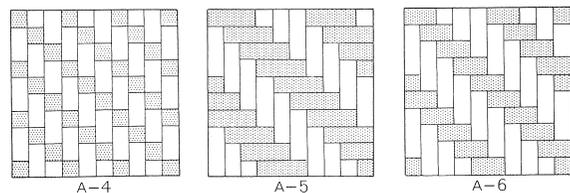
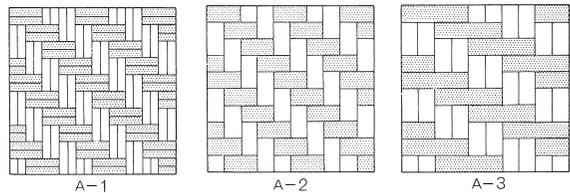
1例

A-6. 2本超え3本潜り1本送り

1例

A-7. 不明(資料の残存率が小さい、
あるいは圧痕が不明瞭なため、
編み方の判読不能なもの)

21例



□ …径条

■ …緯条

※このときの超え・潜りは、径条に対する緯条の移動の数値である。

第119図 網代編み模式図

B. ザル編み (第120図) 71例

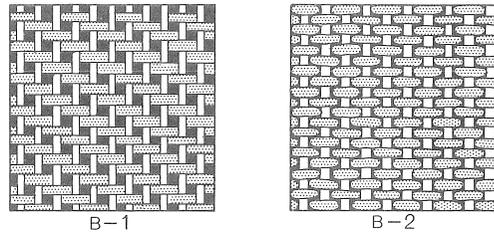
B-1. 1本超え2本潜り1本送り

38例

B-2. 1本超え1本潜り1本送り

1例

B-3. 不明 32例



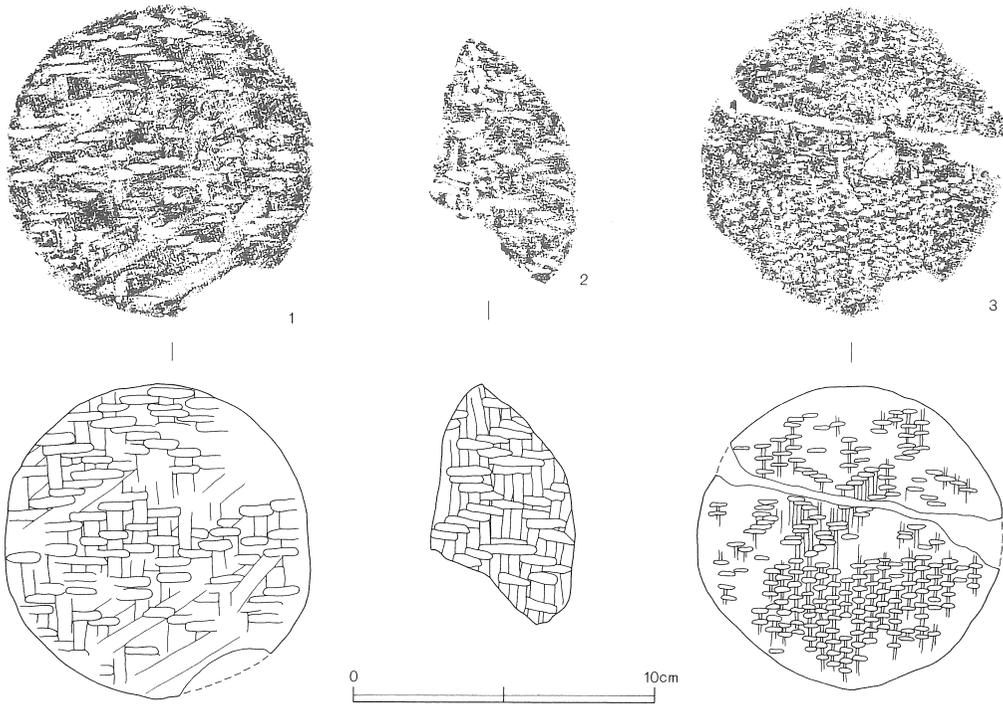
第120図 ザル編み模式図

このほか、模様を編みこんだような編み方の圧痕が3例 (第121図)、2種の編み方や、二重の圧痕がつくもの、補強 (補足) 材と思われる条が加わるものなどが7例あった (第122図)。

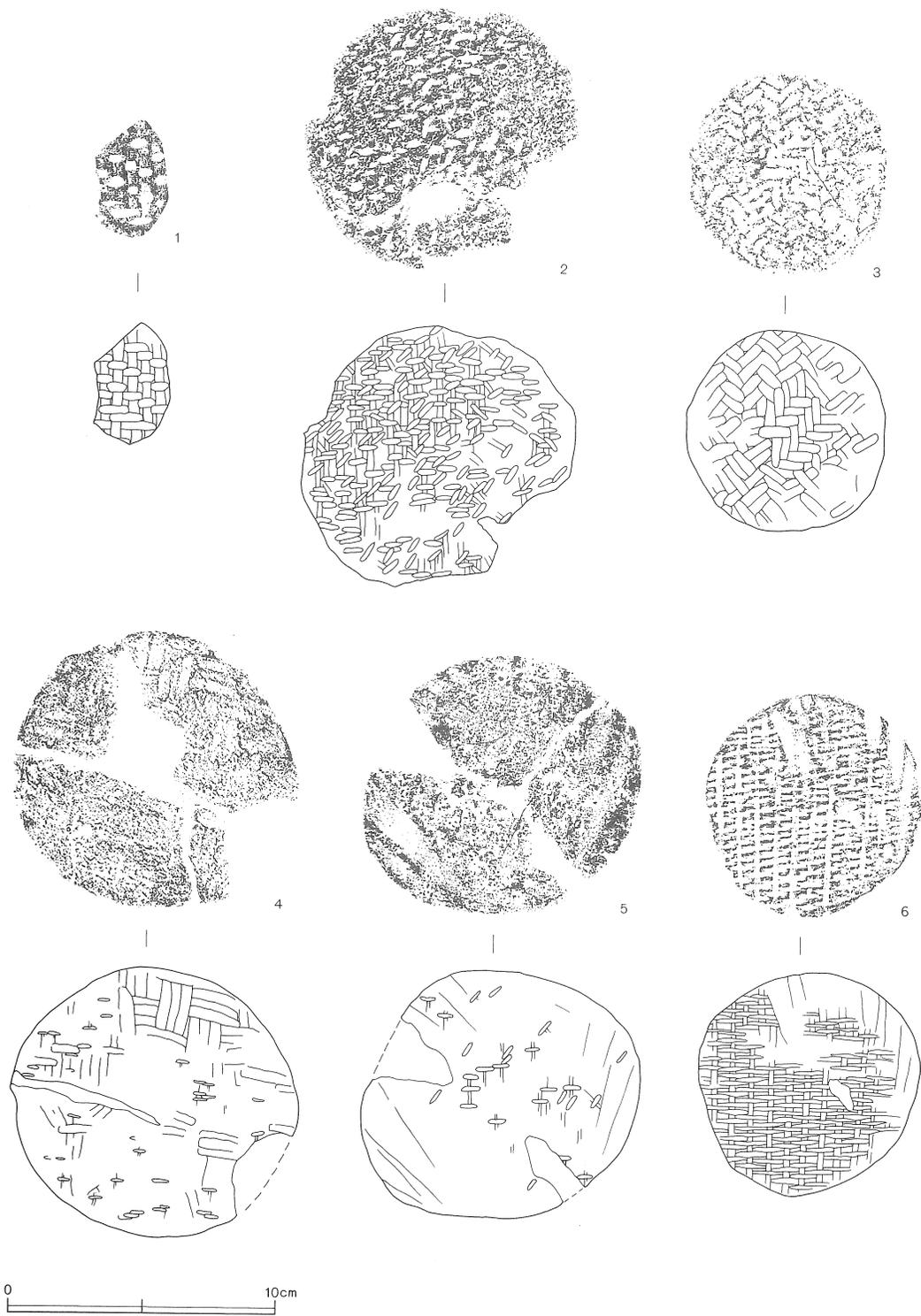
第121図1・2は部分的に送りの方向を換え、菱形に綾が広がるような模様を意図的に編み出している。1はほとんどの部分がB-1で編まれており、それに加えてやや太めの条が斜めに走っているのが見える。2は網代編みで、超え・潜りの数を調整して1よりも小さい菱形の模様を編み出している。

第121図3はB-1のザル編みが中央部分で網代編みに変わっている。網代の部分は、ザル編みの径条をそのまま径条として残しながら、さらにその間隔をうめるように途中から同じような条を組み込んでいると思われる。

第122図1は圧痕の上半分はA-4がついているが、残りの部分にはA-2の圧痕がわずかにみられる。これは同じ条を使って編まれており、異なる編物が重なったものではない。



第121図 模様編み



第122図 その他の編み方

第122図2は4方向の条が確認でき、二重の圧痕と思われる。やや太めの径条と軟質な感じの緯条で編まれたザル編みの他に、別の編物らしき斜め方向の条が所々見えている。前者の圧痕ほど明瞭なつき方ではなく、編み方は不明である。

第122図3は中央の部分がA-5で編まれ、周囲はほぼ45°の角度をもって同じくA-5の圧痕が部分的にみえている。しかしその変わり目は不規則な編み方で目をつめ、角度の変化に対応している。このような例は、カゴなどの立体的な部分をつぶして再利用したものではないか、と指摘されたこともあるが(植松1981・田中1984など)、この場合もその可能性は考えられる。

第122図4はザル編みと網代編みで、網代は3本組で編まれているが編み方は不明である。

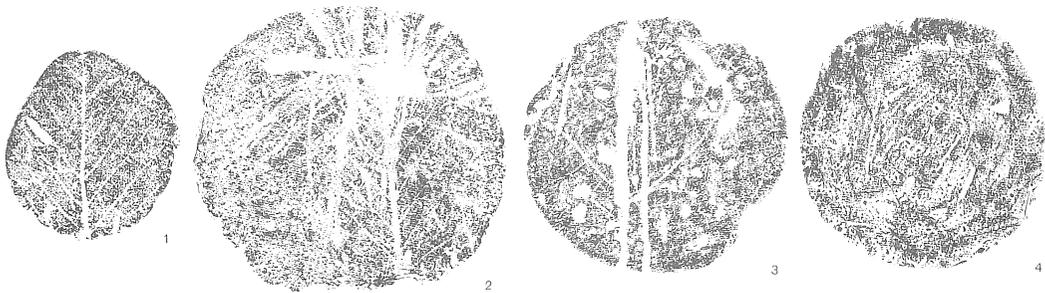
第122図5・6は、ザル編みと、編んであるかどうかは不明だが、網代編みに適当な幅広い条の圧痕も見られるものである。5はザル編みの圧痕も不鮮明で編み方はよくわからないが、6のザル編みはB-1である。

C. 木葉痕 (第123図1~3) 19例

木の葉を敷物に利用したもの。土器底部のほぼ全面に圧痕がついており、底径に応じて大小様々な葉が用いられると思われる。残存部が小さいもののがかなり含まれるため断定はできないが図3の1のように1枚の葉の圧痕がほぼ中央に軸をあわせるようにして残されるものが最も多いようである。また第123図の2のように異種の葉が重ねられたものや、3のように数枚の葉が重ねられたものも認められた。これは敷物としての役割を補強したり、底面全体をカバーするための工夫とみてよいだろう。

D. 草葉痕 (第123図4) 1例

編物とはいえないような、ただ藁状の植物の圧痕が数条みられるものである。果たしてこれで編物や木の葉と同様に敷物としての役割を十分果たすことが可能なものか疑わしい。偶然ついてしまった圧痕とみたほうが適当と思われる。しかし、このような圧痕例は他の遺跡でも稀に出土するようである。このほか偶然ついたと思われる1本の縄状の圧痕をもつものもあった(第44図3)。



第123図 木・草葉痕

底部総数234個体中、何らかの敷物の圧痕を有するものは142個体で全体の約61%となる。これは報告されている他遺跡の例と比較しても大きなほうである(註1)。残存率が小さく圧痕の有無が不明なものや、圧痕がついていても磨きによって磨り消されたもの、風化・摩滅により消されてしまったものなどの存在を考慮すると、この割合はもっと大きくなるものとみてよいだろう。

最も多い編み方は、B-1…ザル編みの1本超え2本潜り1本送りで、次に多いのがA-1…網代編みの2本超え2本潜り1本送り（2本1組）、次いでA-2の2本超え2本潜り1本送りで、この3種類で編み方のわかる圧痕の約90%を占める。東日本では1本超え2本潜り1本送り、西日本では2本超え2本潜り1本送りが最も普遍的な編み方であるという、従来の見解（註2）にそう結果となった。これがそのまま、東日本ではザル編み、西日本では網代編みの編物が多いといえるものかは今後の課題としたい。また、当遺跡では編み方の種類が9種類もあるのに前述の3種類以外は各々1～2例しかなく、これらが極稀な存在になっていることも特徴である。木葉痕はグリッドの第2集中区に比較的まとまって出土した。縄文時代には編物痕が多いが、弥生時代以降は木葉痕が目立つように、この遺跡でも編物痕と木葉痕の隆盛は若干ずれるのかもしれない。

(2) 原体の観察

つぎに圧痕をよく観察すると、原体の質感の硬軟や原体の幅によりおおよそ分類できる（第124図）。

A. 網代編み

質感…Ⅰ) 径・緯材ともに硬質な感じのもの。圧痕は角の明瞭な長方形を呈する。

Ⅱ) 径・緯材ともにやや軟質な感じのもの。圧痕はやや丸みを帯びる（隅丸方形）。

幅……イ) 径・緯材ともに3mm以下のもの。

ロ) 径・緯材ともに3～5mm前後のもの。

ハ) 径・緯材ともに5mmをこえるもの。

B. ザル編み

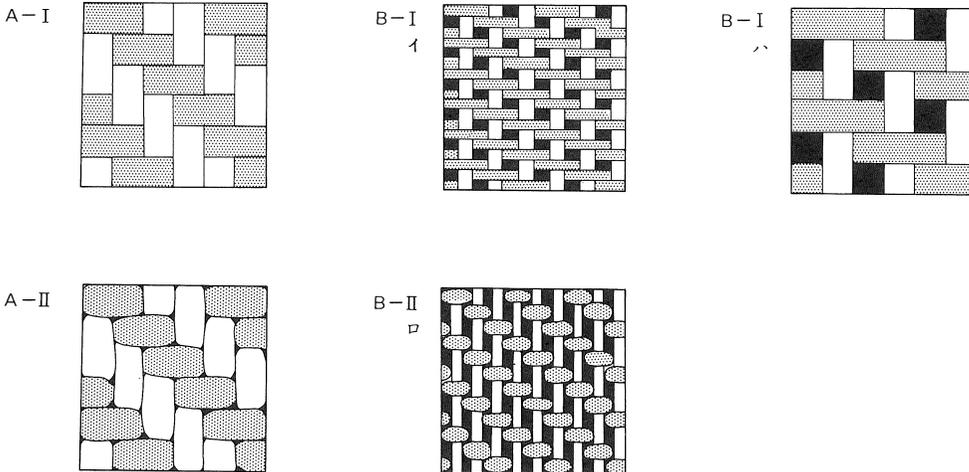
質感…Ⅰ) 径・緯材ともに硬質な感じのもの。

Ⅱ) 径材は硬質でいくらか厚みをもつが、緯材はそれよりやや軟質な感じのもの。

幅……イ) 径材が緯材よりもやや太いもの。

ロ) 緯材が径材よりもやや太いもの。

ハ) 径・緯材がほぼ同じ幅のもの。



第124図 圧痕の種類

網代編みでは3～5mmほどの、繊維の筋がよくわかり、硬質な感じの原体で編まれているものが目立つ。原体の幅が5mmを超えるものは大雑把に割いたようなものを適当に編みこんだだけであったり、編まずに重ねただけのようなものもある。ザル編みは2～3mmほどの細い原体で編まれたものがほとんどである。径条と緯条の太さは極端にはかわらないが、硬質な感じの直線的な圧痕を残す径条と、やや丸みを帯び、軟質な感じの緯条とで編まれたものが最も多い(表1)。またザル編みには原体の幅が比較的広く、一見網代編みのように見えるものもある(第124図B-I・ハ)。第29図1や第36図5などは原体幅が径・緯条ともに5mmを超え、ざっくり編んだ網代編みといったふうだが、やはり径条は間隔があいているので、ザル編みの範疇にはいるものとした。

底部の圧痕からは直接その原体がなんであるのかわからないが、質感=硬軟は製品としての編物を考えるうえで重要な問題である。つまり、網代の質感Ⅱ)のように比較的薄手で、かつ軟質なもので編まれた編物は柔軟性に長け、形状にもバラエティがもてるのに対し、ザル編みの質感Ⅱ)のような編物の場合はある程度しなることは可能でも、折り曲げるという行為はその編物の製品としての寿命を縮めてしまうことになりかねないからである。網代編みの圧痕は比較的幅が広く、また幅の狭いものが2本組で編まれているのは丈夫さを補うという意図が含まれているのだろう。

圧痕として残されている編物の原体が、本来的に土器製作用の敷物として作られたものならば硬質で編目の小さいザル編みよりも、太めの材料を使って網代編みで編んだほうがよほど能率的ではないかと思われるが、材料入手・製品の耐久性といった面からみれば、ザル編みのほうが有利なのだろうか。それとも単に、編物の主流がザル編みであったということだろうか。

(3) 土器製作技術と圧痕

底部圧痕の本体は、土器製作時の作業台との接着防止や塵芥からの保護、また回転台としての役割が提唱されてから久しい(荒木1971)。当遺跡では底部の形態と編み方の種類・圧痕の有無などとの関係は特にみいだされなかった。底径と圧痕の有無については、底径の大きいもののほうが圧

A. 網代編み

	I	II	不明	計
イ	6	2	1	9
ロ	13	9	0	22
ハ	2	1	5	8
計	21	12	6	39

B. ザル編み

	I	II	不明	計
イ	5	6	0	11
ロ	0	9	0	9
ハ	9	17	4	30
不明	0	11	13	24
計	14	43	17	74

表1 原体の幅と質感

底径 (cm)	圧痕をもつ	圧痕なし	小計
3.0～3.9	0	1	1
4.0～4.9	2	4	6
5.0～5.9	0	2	2
6.0～6.9	9	7	16
7.0～7.9	8	5	13
8.0～8.9	23	19	42
9.0～9.9	20	13	33
10.0～10.9	50	34	84
11.0～11.9	22	5	27
12.0～12.9	4	2	6
13.0～13.9	0	0	0
14.0～14.9	1	0	1
小計	139	92	231

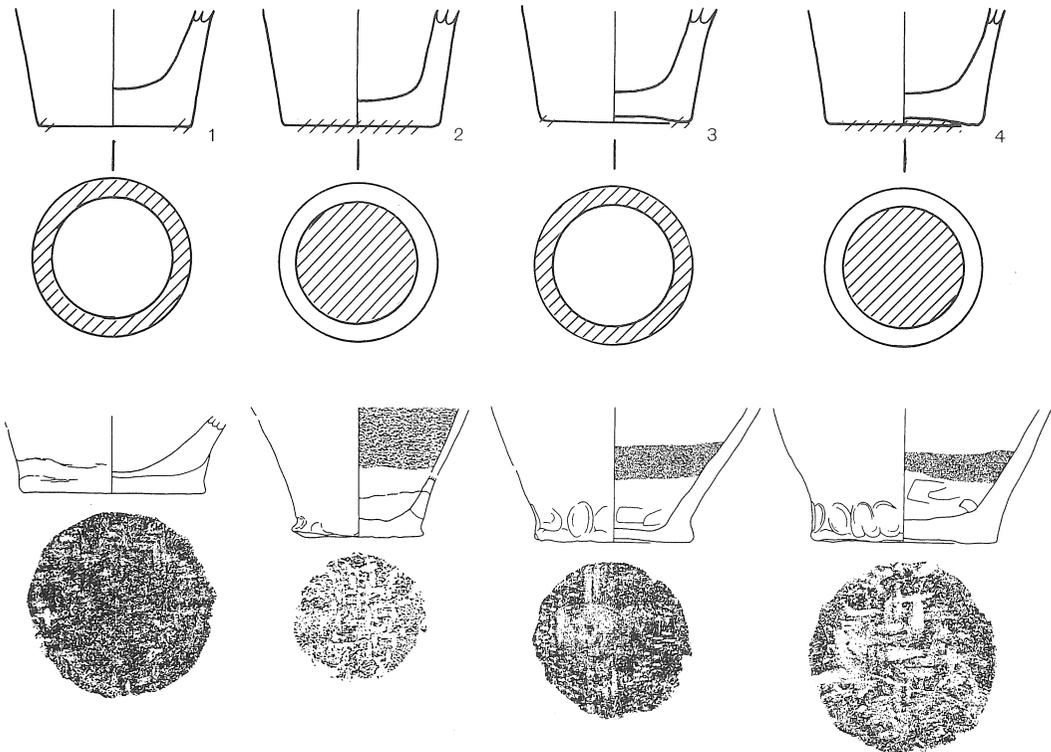
表2 底径と圧痕の関係

痕のつく割合はやや高いようである。しかし、圧痕のつく土器の割合が全体に高いにもかかわらず特に大きいものには必ず圧痕がつく、といったような決定的な結果は得られていない（表2）。

底部の圧痕は底部の形態や底径等の要素との関連でとらえるよりも、この時期、当遺跡で暮らした人々が使った粗製土器が製作されるときには、何らかの敷物を敷くのが一般的であったということがいえよう。

底部の作り方、成形と圧痕のつき方の関係から底部の‘中央埋め込み技法’が考察されているが（註3）これに関しては当遺跡でも注目すべき例がみられた。圧痕には平底の全面に一様につくもの他に以下の4パターンのつき方があった（第125図）。

- ①平底で周辺部にのみ圧痕がついている。
- ②平底で中央部にのみ圧痕がついている。
- ③底部中央がやや上げ底になっており、周辺部にのみ圧痕がついている。
- ④底部中央がやや上げ底になっており、中央部にのみ圧痕がついている。



第125図 圧痕のつき方

自然な圧痕のつき方は、平底で全面に圧痕がつくものや③の場合である。①・②の例は平底でありながらそれぞれ周辺部と中央部にのみしっかり圧痕がつくというものである。③・④はやや上げ底を呈するのだが、上敷免遺跡ではこのような上げ底気味の土器で圧痕を有するものは15例である。上げ底の土器は19個体あるので、約79%の割合である。上げ底の土器が作られるのは、平底の場合よりも安定するという利点が考えられるが、底の全面に圧痕がべったりつく例がみられないこ

とに注意したい。②・④のように周縁部分に圧痕がないのは磨り消しや磨滅によるものとしても、中央の上げ底部分に圧痕がつく④はやはり不自然である。これは秋田氏が考察された‘埋め込み技法’の原理で説明すると、周縁部分がドーナツ状に作られた後に、網代の上で成形された中央の上げ底になる円板がそれにまたがるようなかたちで接合されたためと考えられる。しかしこの底部は断面観察ができないため、明言はできない。第38図6は②に該当するが、これは断面の様子から考察すると、敷物の大きさに合わせて中央部分の円板を作った後、その上にもう1枚粘土をかぶせ下へ折りこんだためか、或いは立ち上がりの補強に粘土をつけ足したため、圧痕のつかない周円部分が生じたものだろうか。底径の小さい深鉢土器に安定性をもたせるには、上げ底に作る他にも、底部の厚みを大きくするなど土器製作時において必然的に工夫がなされたと思われる。底部断面を観察すると底部の円板が2段構成になっていて厚みをつけたり、立ち上がりの部分を補強するための粘土かぶせや指頭痕が並ぶものなど、多くの土器に苦勞の痕が窺える。

以上、土器底部の観察を行ってきたが、おもに編物圧痕についてその編み方の種類、原体の種類と編み方の関係、底部製作技法との関連を着眼点としてみてきた。上敷免遺跡の後・晩期の縄文土器の底部についてまとめてみると、次のようになる。

1. 底部に圧痕がつく例は全体の約61%で比較的大きな割合である。
2. 底部に圧痕のつく土器は粗製の深鉢である。ごく一般的な煮炊き用の土器らしく内面にすずの跡が明瞭につくものが多い。
3. 編み方は8種類あるが、1本超え2本潜り1本送りのザル編みが最も多い。その他、2本超え2本潜り1本送りの網代編みが多く、編み方のわかるものの90%はこの編み方である。
4. 底部の形態や底径と圧痕の有無には特別な関連はなく、土器は編物や木の葉等の敷物の上で作るのが一般的であった。
5. 底部の作り方は多種多様だが、底部成形時の‘埋め込み技法’を考察できる資料として上げ底の部分にのみ圧痕をもつものがある。

註

- (1) 東北・関東・中部地方の他遺跡の例では、時期・資料数に各々差はあるものの、20～40%前後の数値が報告されているものが多い。しかし他の報告書等で不明・無文として扱われている底部にも、何らかの圧痕がついているものが含まれている可能性がある。ここで当遺跡の底部の圧痕がつく割合が比較的大きいというのは、あくまで報告された数値と比較してである。
- (2) 縄文時代には2本超え2本潜り1本送りの網代が最も広く分布し(坪井1899)、またこの編み方が最も多く、基本的である(小林1964)という見解が出されたが、その後、資料の増加により、2本超え2本潜り1本送りが西日本、2本超え1本潜り1本送りが東日本の網代の編み方の基本であるという意見が出された(我孫子1971)。この2本超え1本潜り1本送りと筆者の分類した1本超え2本潜り1本送りは径・緯を逆にみた同じ編み方である。網代の編み方の地方性という視点にたったの重要な考察である。しかし更に資料が増加し、各遺跡の出土例にその地方性を追求していくと、我孫子氏の見解とは異なる結果となったり、またさらに地域・時期ともに限定された編み方の網代もある。(松岡1981など)。
- (3) 底部の作り方は、底部中央部分の埋め込み技法の他にも種々あると思われるが、上敷免遺跡の底部の断面形態を観察したところ、厚めの円板(底部)の上にもう1枚粘土が乗せられ、そのまま胴部の立ち上がりへ続く形態のも

の(第40図8など)や、1枚の円盤(底部)に輪積みで胴部の立ち上がりを形成したもの(第40図6など)等、幾つかあげられる。しかし本文でもふれたように、底部の形態と圧痕の有無、また圧痕のつき方等の関連については深く検討できなかった。

【引用・参考文献】

- 秋田かな子1990「土器底部の輪積み技法」『東海大学校地内遺跡発掘調査報告1』
- 我孫子昭二1971「平尾No.9遺跡 網代痕について」『平尾遺跡調査報告I』 南多摩郡平尾調査会
- 新井司郎1973『縄文土器の技術』
- 荒木ヨシ1968「縄文式時代の網代編み」『物質文化』12号
- 荒木ヨシ1970「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』15号
- 荒木ヨシ1971「縄文式時代の網代編み」『物質文化』19号
- 植松なおみ1981「東北型網代圧痕について—鳥取県桂見遺跡出土資料の再検討を中心に—」『古代文化』33
- 小笠原好彦1983「編物・布」『縄文時代の研究7』
- 小林行雄1964『続 古代の技術』
- 坪井正五郎1899「日本石器時代の網代型編み」『人類学雑誌』14—161
- 松岡敦子1981「六反田遺跡出土縄文土器の底部」『六反田遺跡発掘調査報告書』
- 田中敦子1984「山口遺跡出土縄文土器の底部」『山口遺跡II』 仙台市教育委員会
- 吉川國男他1979『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第5集
- 吉川國男1984「編み物遺存体」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』 埼玉県教育委員会

番号	底径(cm)	編み方	胴径(mm)	質感
28-2	8.5	B-1	$\frac{0}{1} \frac{5}{1}^{-1}$	II
29-1	11.2	B-1	$\frac{1}{1} -6-$	I
32-5	8.5	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	I
35-1	9.1	B-1	$\frac{1}{1} \frac{1}{2} \frac{5}{5}$	II
35-2	10.0	A-7	$\frac{1}{1} 5-10$	I
35-3	11.0	B-3	$\frac{1}{1} -\bar{2}-$	II
35-4	11.5	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	II
35-5	11.2	B-1	$\frac{1}{1} -3-$	II
36-4	9.9	B-1	$\frac{1}{1} \frac{1}{1} \frac{3}{3} \frac{2}{2}$	II
36-5	10.9	B-3	$\frac{1}{1} 5-7$	I
36-6	10.8	模様	$\frac{1}{1} \frac{4}{2} \frac{5}{3}$	II
37-6	10.0	A-2	$\frac{1}{1} 4-5$	I
38-1	8.0	A-1	$\frac{1}{1} (-3-) \times 2$	I
38-2	8.0	A-1	$\frac{1}{1} (2-3) \times 2$	I
38-3	11.0	A-1	$\frac{1}{1} (2-3) \times 2$	I
38-4	10.6	A-1	$\frac{1}{1} (-5-) \times 2$	I
38-5	9.0	A-2	$\frac{1}{1} 4-5$	II
38-6	12.0	A-2	$\frac{1}{1} -3-$	II
38-7	9.4	A-3	$\frac{1}{1} (\frac{3}{3} \frac{4}{4}) \times 2$	II
38-8	7.5	A-5.7	$\frac{1}{1} 3-4$	II
38-9	11.0	A-5	$\frac{1}{1} 4-5$	II
39-1	11.0	A-6	$\frac{1}{1} 4-5$	I
39-2	10.7	A-2	$\frac{1}{1} -4-$	I
39-3	6.4	A-7	$\frac{1}{1} 5-6$?
39-4	10.0	A-7	$\frac{1}{1} 3-4$	I
39-5	6.6	A-7	$\frac{1}{1} -3-$	I
39-6	10.0	A-7	$\frac{1}{1} (3-4) \times 2$	I
39-7	11.0	A-7	$\frac{1}{1} 6-8$	I
39-8	10.0	A-7	$\frac{1}{1} -5-$?
39-9	11.0	A-7	$\frac{1}{1} 5-6$	I
39-10	11.0	A-7	$\frac{1}{1} -3-$	I
39-11	12.0	A-7	$\frac{1}{1} 3-4$	I
40-1	9.0	A-7	$\frac{1}{1} 3-4$	I
40-2	11.0	A-7	$\frac{1}{1} -4-$	II
40-3	10.0	B-1	$\frac{1}{1} 4-5$	II
40-4	11.0	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	II
40-5	11.0	B-1	$\frac{1}{1} 1-2$	II
40-6	8.0	B-1	$\frac{1}{1} \frac{3}{3} \frac{4}{4}$	II
40-7	10.0	B-1	$\frac{1}{1} -4-$	I

番号	底径(cm)	編み方	胴径(mm)	質感
40-8	10.0	B-1	$\frac{1}{1} 2-3$	I
40-9	8.0	B-1	$\frac{1}{1} -3-$	II
40-10	10.0	B-1	$\frac{1}{1} -\bar{3}-$	II
40-11	8.2	B-1	$\frac{1}{1} -4-$	I
40-12	10.0	B-1	$\frac{1}{1} \frac{2}{1} \frac{2}{2}$	I
41-1	8.4	B-1	$\frac{1}{1} \frac{3}{2} \frac{2}{2}$	II
41-2	10.0	B-1	$\frac{1}{1} 2-3$	II
41-3	10.2	B-1	$\frac{1}{1} \frac{3}{2} \frac{2}{2}$	I
41-4	8.9	A-2	$\frac{1}{1} 2-3$	I
41-5	11.1	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	II
41-6	9.7	B-1	$\frac{1}{1} \frac{3}{2} \frac{2}{2}$	II
41-7	10.5	B-1	$\frac{1}{1} \frac{3}{2} \frac{2}{2}$	I
42-1	9.0	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	I
42-2	10.0	B-1	$\frac{1}{1} -3-$	II
42-3	9.0	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	II
42-4	10.0	B-2	$\frac{1}{1} -2-$	II
42-5	10.0	B-3	$\frac{1}{1} 2 \frac{2}{2} \frac{3}{3}$	II
42-6	8.6	B-3	$\frac{1}{1} 1 \frac{2}{2}$?
42-7	10.0	B-3	$\frac{1}{1} -\bar{2}-$?
42-8	7.5	B-3	$\frac{1}{1} 2 \frac{2}{2} \frac{3}{3}$	II
42-9	6.4	B-3	$\frac{1}{1} 2-3$	II
43-1	11.6	B-3	$\frac{1}{1} -3-$	II
43-2	8.7	B-3	$\frac{1}{1} -\bar{1}-$?
43-3	10.0	B-3	$\frac{1}{1} 2 \frac{2}{2} \frac{3}{3}$	II
43-4	10.0	模様	$\frac{1}{1} -2-$	II
43-5	10.5	A-7. B-3	$\frac{A}{B} \frac{1}{1} \frac{4}{2} \frac{3}{3}$	II
43-6	9.8	B-3	$\frac{1}{1} -\bar{2}-$	II
43-7	10.5	B-3.3	$\frac{1}{1} 3-4$	I
43-8	9.8	A-7	$\frac{1}{1} (-3-) \times 2$	I
43-9	9.0	B-3	$\frac{1}{1} -3-$?
43-10	8.0	不明	$\frac{1}{1} 2 \frac{2}{2} \frac{3}{3}$?
44-1	10.4	不明	$\frac{1}{1} -\bar{2}-$?
44-2	10.5	不明	$\frac{1}{1} 6-7$?
44-3	10.5	ナ	$\frac{1}{1} -$	
44-4	11.0	不明	$\frac{1}{1} -\bar{2}-$?
44-5	9.6	B-1	$\frac{1}{1} -2-$	II
44-6	10.0	A-7	$\frac{1}{1} -4-$	I
44-7	7.6	不明	$\frac{1}{1} 4-5$?
44-8	10.0	B-3	$\frac{1}{1} -3-$?

番 号	底径(cm)	編み方	胴径(mm)	質感
44-9	9.0	A-7	ケ 2-3	I
45-1	10.0	B-3	ケ -3-	II
45-2	8.0	A-7	ケ -5-	?
45-3	6.6	B-3	ケ -4-	?
45-4	10.0	B-3	ケ 2-3	?
45-5	9.0	B-3	ケ -1-5-	?
45-6	6.0	B-3	ケ -3-	?
45-7	11.0	A-7	ケ 2-3	?
45-8	11.0	B-3	ケ -2-	?
45-9	8.0	B-3	ケ -3-5-	?
45-10	12.0	B-3	ケ -5-	I
45-11	10.4	B-3	ケ -3-	?
46-1	11.0	B-3	ケ -3-	?
46-2	6.2	B-3	ケ 1-2	II
46-3	10.5	草葉痕	—	—
46-4	10.4	木葉痕	—	—
46-5	8.0	木葉痕	—	—
46-6	10.0	木葉痕	—	—
46-7	10.6	木葉痕	—	—
46-8	4.8	木葉痕	—	—
51-1	10.0	A-3	ケ -4-	II
51-2	10.0	A-1	ケ(-4-)×2	I
51-3	10.6	模様	ケ -3-	II
51-4	10.0	B-1	ケ(-2-)×2	I
51-5	10.0	B-1	ケ 1-2-2	II
51-6	10.0	B-1	ケ 2-3	II
51-7	8.0	A-7	ケ 2.5-3	I
51-12	12.5	木葉痕	—	—
52-2	7.4	木葉痕	—	—
79-1	10.0	A-7	ケ 4-5	I
79-2	9.0	A-7	ケ 4-5	II
79-3	9.8	A-7	ケ -4-	I
79-4	10.0	B-1	ケ -2-	II
79-5	7.0	B-1	ケ 2-3	II
79-6	9.0	B-1	ケ -3-	II
79-7	10.0	B-1	ケ 3-4	II
79-8	6.0	B-1	ケ 2-3	II
79-9	—	B-1	ケ -2-	I
79-10	—	A-2・A-4	ケ 3-4	II

番 号	底径(cm)	編み方	胴径(mm)	質感
79-11	9.8	B-3	ケ -3-	II
79-12	8.0	B-3	ケ -2-	?
79-13	9.2	B-3	ケ -1-5-	?
79-14	6.0	B-3	ケ 2-3	?
79-15	6.0	B-3	ケ -2-	II
79-16	10.0	B-3	ケ 2-3	?
80-1	10.0	B-3	ケ -1-	II
80-2	10.0	B-3	ケ -2-	II
80-3	14.0	B-3	ケ -2-	II
80-4	8.0	木葉痕	—	—
80-5	8.0	木葉痕	—	—
80-6	8.0	木葉痕	—	—
80-7	8.0	木葉痕	—	—
80-8	11.0	木葉痕	—	—
80-9	7.8	木葉痕	—	—
80-10	7.4	木葉痕	—	—
80-11	11.0	木葉痕	—	—
80-12	11.0	木葉痕	—	—
80-13	—	木葉痕	—	—
81-2	8.0	不明	ケ -2-	?
81-3	7.6	不明	ケ -1-	?
81-5	9.0	木葉痕	—	—
81-6	8.0	B-1	ケ -2-	II
81-7	10.0	木葉痕	—	—
81-8	10.2	B-1	ケ 1-2	II
81-10	4.4	ヘラ	—	—
81-11	4.0	不明	ケ -1-	?

※原体幅のケは径条、イは緯条の省略である。
また () × 2 は () 幅の原体が 2 本 1 組
であることを表す。

3 石器について

はじめに

本県において当該期の資料は近年急増し、多くの成果を挙げている。それに基づいた「安行式土器」「安行期の土偶」のシンポジウムが1992年12月に埼玉考古学会及び「土偶とその情報」研究会の主催で行なわれた。しかし、当該期石器群の研究は土器等の研究から比べ必ずしも進展しているとはいえない状況である。包含層からの出土が主体を占め、遺構を単位とした検討が困難であるため、石器群の組成及び変遷の分析は難しく、まず器種のカタログの作成（註1）と個別石器群の分析の必要性が高いと考える。本項においては、遺跡内の石器分布と、出土石器の主体をなす石斧の検討を行なうこととする。

I) 石器分布（第126図）

石器の分布は1～3区東側部と4～6区西側部に大きく分れる。組成としては、東側部で凹石が目に付く点と、西側部谷に磨製石斧・敲石・砥石といった単品のものが出土していることが注目される。次に各器種を単位に詳しく観察する。

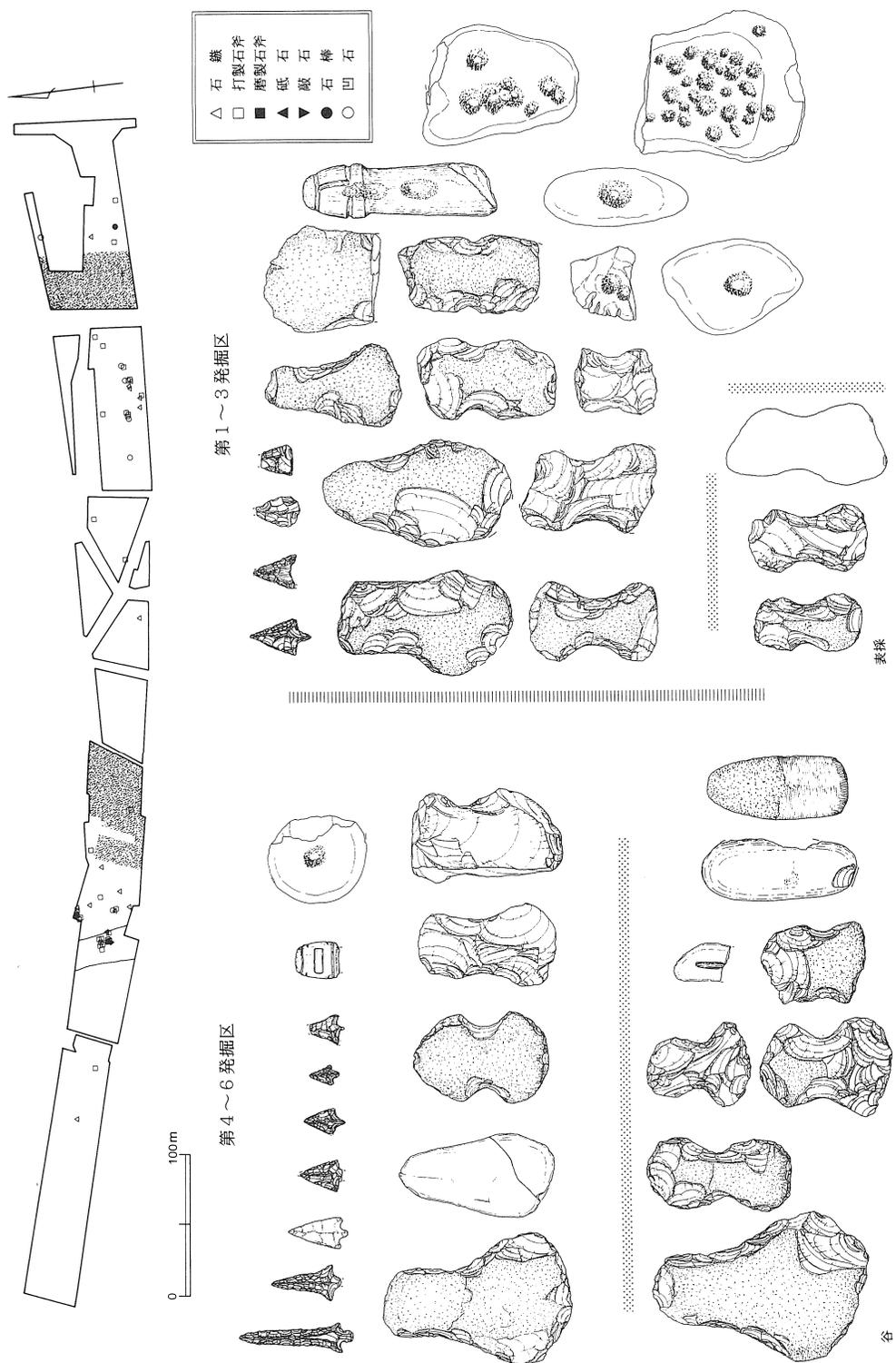
a) 石鏃

石鏃11点の内、東側部から4点、西側部から7点が検出され、西側部谷及び東側部表採からは出土していない。両各区出土の石鏃を比較すると、西側部のもの全てが有茎石鏃であるのに対し、東側部は4点の内3点が無茎石鏃であり、基部の形態はばらつき対照的な在り方を示している。

更に細く観ると、各区画を単位に特徴が窺える。

- 1区：局部磨製石鏃（10）が単独出土。
- 2区：無茎石鏃2点（9・11）が近接して検出されている。
- 3区：有茎石鏃が1点（4）が出土。
- 5区：有茎石鏃6点（2・3・5～8）が出土。
- 6区：有茎石鏃1点（1）が出土。

以上5区画からの検出を観たわけだが、ある程度のまとまりを有するのは2区の2点、5区の6点だけで他は単独である。調査範囲の広さと資料数の少なさから、解釈をくわえるのは甚だ危険を伴うが、一つの傾向は掴めると思う。1区の局部磨製石鏃と2区の無茎石鏃（2点）が東側部にまとまり、本遺跡で量的に主導的である有茎石鏃と分布で大きく分れる。局部磨製石鏃を複数点出土した赤城遺跡では、無茎石鏃と有茎石鏃の比率はほぼ同じである。この違いが即座に時期差を表しているのか、地域に依る傾向の差か問題となる。当該期の資料には遺構を単位とした共伴関係のデータが少ないため、細かい時期単位での分析は今後の検討に譲るとして、本遺跡の土器群の分布偏在の所見と重ねてみる。1区は縄文後期の土器が多く観られ、局部磨製石鏃の所属時期が後期まで遡る可能性も高い（註2）。2区は土器の項で第2集中区と呼称され、後期より晩期の土器がより多いとされているが、2点の無茎石鏃の所属時期を判別できない。5区は第1集中区と呼称され、縄文時代晩期～弥生時代初頭の土器がまとまっているとされる。石鏃は有茎のものに限られ、2区



第126图 石器分布图 9

との対比から、本遺跡ではより新しい時期に有茎石鏃が卓越する可能性が高い。なお、3区の石鏃1点は形態から5区と同一のまとまりと考えられる。6区の鏃身の非常に長い石鏃は、五角形鏃の鏃身部が長大化したものと考えられ、東海地方の弥生時代中期にしばしば観られるものと近似している。本区に弥生時代中期の住居跡がある点、また上記の点と鑑み、5区の石鏃のまとまりとは分離でき、弥生時代中期に伴う石鏃の可能性が高い。また、5区2の石鏃に関しても逆刺の作り等に共通性が観られ、同じく弥生時代中期の石鏃の可能性を指摘できる。

次に、遺跡間での石鏃の形態の差異を観ると、雅楽谷遺跡・赤城遺跡では無茎石鏃と有茎石鏃の比率が近似するのに対し、新屋敷東遺跡と上敷免遺跡では有茎石鏃が圧倒的に多い。一見、県南側部分と県北部での様相の違いとしても捉えられそうであるが、遺跡での主体をなす時期が雅楽谷遺跡・赤城遺跡と上敷免遺跡・新屋敷東遺跡ではより後者の方が新しい傾向があり、また、遺構での共伴関係の明確な新屋敷東遺跡の有茎石鏃2点は、縄文時代晩期前葉の土器が主体をなす4号住居跡から検出されている。遺跡間での時期差からも、より新しい時期になると有茎石鏃が主導的になる傾向が捉えられそうである。

b) 打製石斧

打製石斧22点の内訳は、東側部12点内表採3点、西側部10点内谷部5点となっている。次に各形態の偏在を観ると、Ⅰ類の大形のものは西側部に12・13、東側部に14・28。中形のものはそれぞれ1点出土している。Ⅱ類は東側部1区に18、2区に15・17・34、3区に16。西側部は5区から19・25、谷部から20・24・26・32がそれぞれ出土している。形態と分布の偏在は石鏃ほど明確ではないが、Ⅰ類大形と分類し形態的に近似した12・13が西側部に、一方14・28が東側部となる。Ⅱ類で両側縁が平行し基部中央に小さい抉りが入る15・16が共に東側部から出土している。最大幅が刃部側に偏る24・26が谷部から出土するなど以上幾つかの点が指摘できる。しかし、細かく地域区分して観察すると形態のばらつきの方が目立つようである。

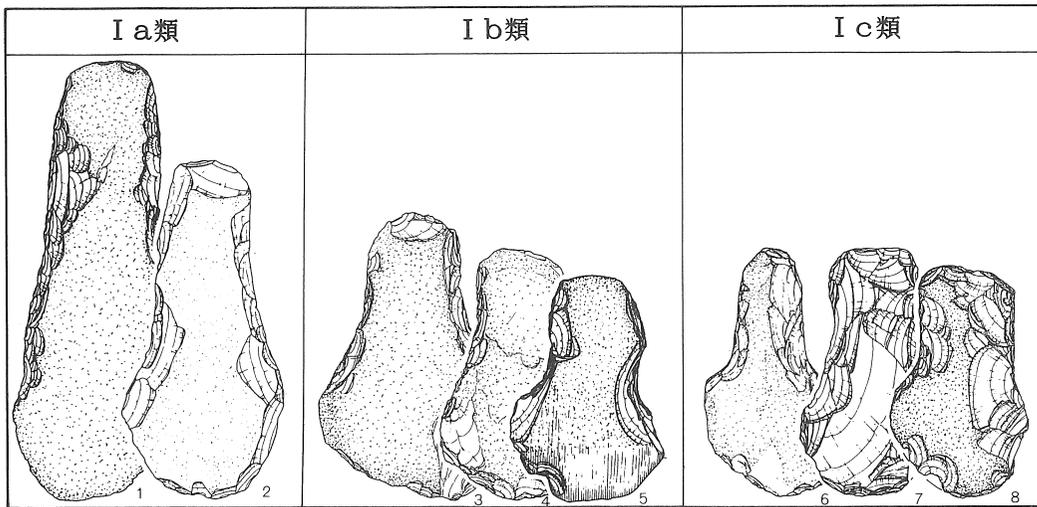
c) 凹石

凹石は5点の内4点が東側部にまとまっている。43は1区と離れるが、39・40の大形で複数の凹を有する2点（持ち運んで使用されたとは考えにくい）がともに2区から出土している。凹石が検出されたのは、いずれも歴史時代の住居跡からで、後世の再利用（転用）のファクターが入るため、出土傾向が使用当時（縄文時代）の状況をどこまで反映しているかは問題である。しかし、本遺跡の様に当該期の遺構の検出されていない場合でも、大形の凹石等持ち運んで使用しない石器と住居地域等を関連付けて考える意味はあると思う。

d) その他

磨製石斧は西側谷部から検出されており、敲石・砥石等の単品資料と一緒にある。

石棒類2点は1区と5区から、それぞれ1点検出されている。



1・5～7 赤城遺跡
2 新屋敷東遺跡

3・4・8 上敷免遺跡

第127図 打製石斧Ⅰ類

Ⅱ) 石斧 (第127～129図)

上敷免遺跡で検出された石斧は、打製石斧22点、磨製石斧1点と全体の52%を占めており、質量ともに本遺跡の主体的石器である。本項では他遺跡出土の資料を含め当該期の石斧カタログ化を試みる。

使用した資料は本遺跡の他、川里村赤城遺跡・蓮田市雅楽谷遺跡・深谷市新屋敷東遺跡を中心に蓮田市ささら遺跡・岡部町原ヶ谷戸遺跡(註3)・桶川市高井東遺跡を検討材料とした。

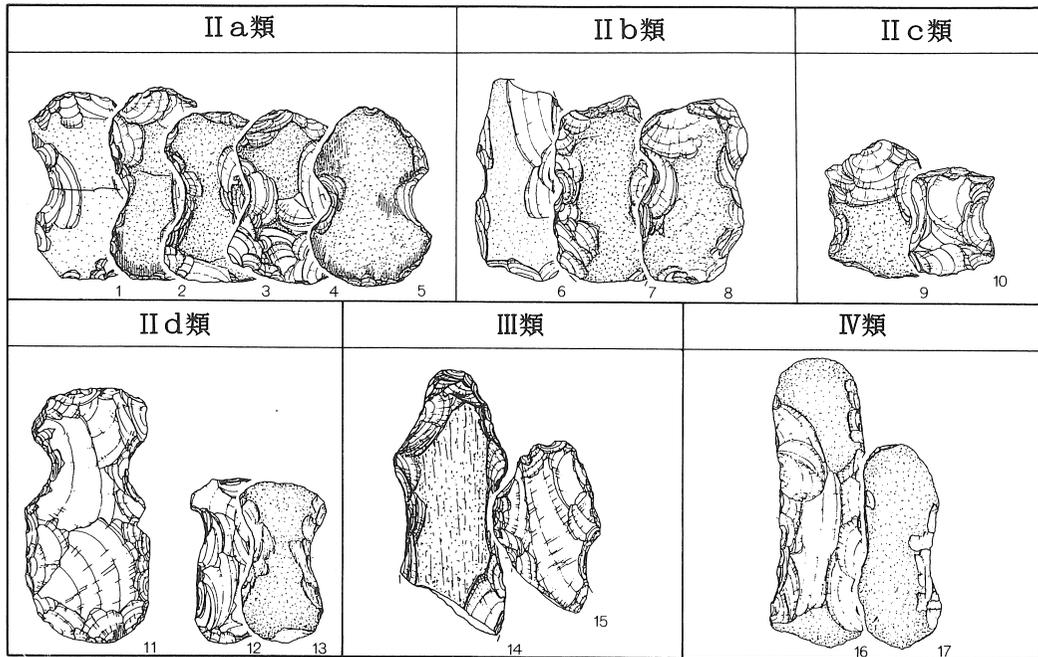
打製石斧 (第127・128図)

打製石斧は基部の形状によって。基部の抉りは明確ではなく、基端部に比べ刃部の幅が大きいものをⅠ類。基部に抉りが入り、基端部と刃部の幅がほぼ同じものをⅡ類。基端部が尖り外形が「人形」を呈するものをⅢ類。基部が平行し著しく細長いものをⅣ類と分けた。

Ⅰ類 (第127図)

基部の形状等によってa・b・cの三つに分けられる。

Ⅰ a類：細身で長さ：幅の比が1対2以上となる。外形は基部両側縁は直線的で刃部に向い緩く「ハ」字状に広がり、最大幅は刃部との接点にあり、そこから大きな弧を描き円刃となる。正面に自然面、裏面に分割面を残す。調整加工は主に裏面は平坦剝離、正面は周縁剝離である。ここでは特徴的な大形品(長さは20cmを上回るもの、1は30cm近い)を記載した。上敷免遺跡においては本タイプに似た中形品27・29(12～14cm)が出土しているが、長さ：幅の比が1対2に満たず、作りも粗雑であるため同一グループには含めないこととした。本タイプは一見、中期(勝坂式期～



1・11・15 雅楽谷遺跡 6・12 新屋敷東遺跡
 2～5・7～10 上敷免遺跡 13・14・16・17 赤城遺跡

第128図 打製石斧Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類

加曾利E式期前半)の打製石斧に近似しているが、長さ：幅の比及び大きさの点で異なる。

I b類：外形は基部側縁が緩く内湾し、刃部に向かって大きく広がる。最大幅は刃縁と側縁の交点に位置し、刃部は円刃を呈する。I aの長さ：幅の比が1対2以上であるのに比べ、長さ19.25～15cm、幅は13.2～10cmと1対1.5前後となり著しく幅広となる。正面に自然面、裏面に分割面を残し、調整加工が両側縁から周縁的に施されるのはI aと共通する。上敷免遺跡で2点、赤城遺跡から1点が出土している。

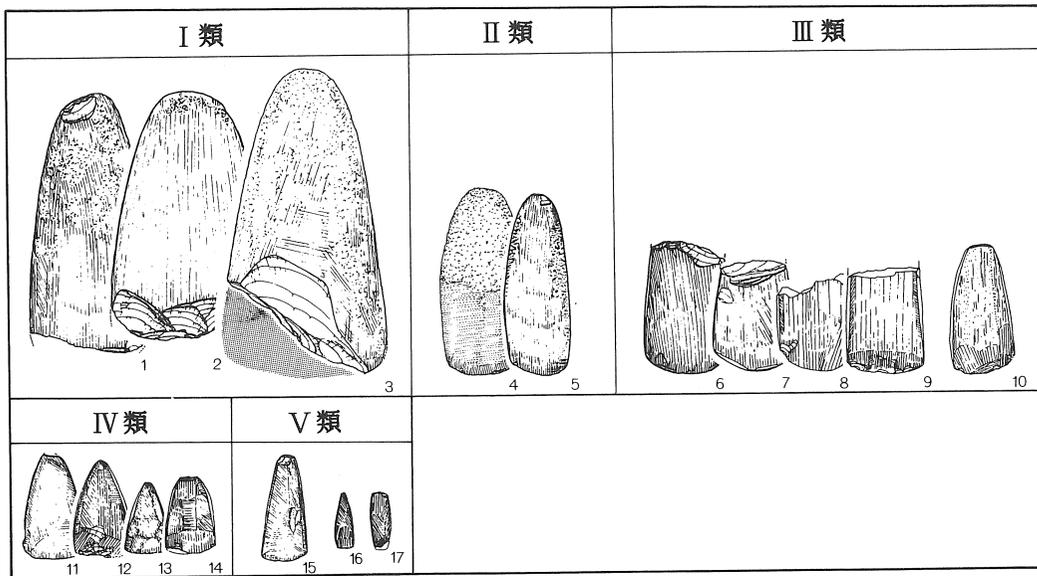
I c類：基部両側縁が平行し「コ」字状を呈し、ほぼ中ほどで屈曲し円形に膨らみ刃部となる。鍵穴を逆さにしたような形状を呈する。正面に自然面を残すもの(6・8)と全面に剝離を施すもの(7)が観られる。基部の調整加工はI a・I bと比較して剝離は面的で入念である。本タイプは弥生時代に有肩形石鋏(註4)と呼ばれているものと共通する。

Ⅱ類 (第128図)

基部に抉りが入るものを一括した。抉りに入る位置及び基部の形状によってa・b・c・dの4つに分けられた。

Ⅱ a類：基部の中央部に抉りが入るもので、本タイプの検討は後で述べる。

Ⅱ b類：基部側縁が平行で直線状をなし、幅狭の抉りが入る。外形は長方形状を呈し長さ：幅の比は1対1.8前後となる。



1 ~ 3 · 5 ~ 7 · 11 · 15 赤城遺跡 4 上敷免遺跡
 8 ~ 10 · 12 ~ 14 · 16 · 17 雅楽谷遺跡

第129図 磨製石斧

II c 類：小形のもので、基部側縁は抉りとするより、全体に緩く内湾すると云える。外形は正方形に近い。本タイプは上敷免遺跡からのみ出土している。

II d 類：基部側縁は直線的で平行となり、抉りは上部に偏る。基端部は方形、刃部は円刃となっている。中形のもの（11）と比較的小形のもの（12・13）が観られる。大きさ及び形状等から別類に細分すべきかもしれないが、資料数が少ないため分離は後の課題とする。11に非常に近いものは原ヶ谷戸遺跡から検出されている。

III 類（第128図）

刃部を欠損するため全体の形状は不明であるが、基端部が尖り、浅い抉りが入るもので、「人形」を呈するものである。赤城遺跡と雅楽谷遺跡から出土している。

IV 類（第128図）

両側縁が僅かに内側に内湾しているが外形は棒状を呈する。赤城遺跡でまとまって出土しているが、他遺跡で類例は観られない。

以上、打製石斧は形態から4大別9細分した。主体をなすのはI類とII類の二つのタイプで、それぞれ3細分、4細分が可能である。また、長さから大形（15cm以上）と中形（10~12.3cm）のグループに分られる。

①大形のものI類に多く観られる。この一群の石器は弥生時代の石鋤に共通する形態のものが

多く、特にⅠc類と有肩形は共通の形態を示している。縄文時代から弥生時代に連続して辿れる石器群として注目される。

②中形のものⅡ類の分析は後述するとして、基部中ほどに抉りを有する分銅形打製石斧は、縄文時代後期前葉から卓越する石器群で、当該期まで主導的役割をなしている一群である。しかし、Ⅰ類が弥生時代まで連綿と繋がるのに対し、Ⅱ類は小敷田遺跡等で観ることができず、その形態的使命は縄文時代において、ほぼを失ってしまうものと考えられる。

磨製石斧（第129図）

磨製石斧は側面を有するもの（Ⅲ類・Ⅳ類・Ⅴ類）と、側面をもたず横断面形がレンズ状を呈するもの（Ⅰ類・Ⅱ類）に大別できる。前者はいわゆる定角式磨製石斧と呼ばれている一群である。

Ⅰ類：大形幅広偏平磨製石斧、横断面はそれほど厚くないレンズ状を呈するが重量感はある。外形は側縁が緩く外湾し、基端部から刃部に広がる。完形品は無く刃部形状は3等から推測する限り僅かに円刃となる。赤城遺跡からまとまって検出されているが、他に原ヶ谷戸遺跡・高井東遺跡に類例が観られる。

Ⅱ類：中形偏平磨製石斧、横断面はレンズ状を呈する。Ⅰ類と比べ側縁は平行し、最大幅は基部中央に位置する。刃部は直刃に近く、片刃となる。4は基部に敲打痕を残し刃部周縁に入念な研磨が施されている。比較的厚手で一見東海地方に観られる磨製石斧に似ているが、かなり幅広な感じである。5の刃部は「刃こぼれ」の研ぎ直しによって若干偏刃ぎみである。

Ⅲ類：側面を有し横断面形は厚く方形となる中形（一部大形のものが含まれるかもしれない）の定角式磨製石斧である。ほとんどが欠損品であるため計測値は不明だが、外形は両側縁が直線的で平行し、長さと同幅に近い近く、刃部は直刃的である。刃部縦断面は両刃（両凸刃）で、7・8は刃縁が研磨によって潰されている。雅楽谷遺跡・赤城遺跡に多く観られる。

Ⅳ類：側面を有する小形幅広磨製石斧。横断面形は比較的薄くなる。外形は側縁が直線又は外湾し、基端部に向いすぼまる12・13では基端が尖る。長さと同幅の比は1対1.5前後とⅢ類に比べて寸詰りで幅広である。刃部は直刃ぎみで片刃（強凸弱凸）となる。赤城遺跡・雅楽谷遺跡で多く出土している。

Ⅴ類：側面を有する小形幅狭磨製石斧。横断面形は比較的薄くなる。外形は側縁が直線的で方形を呈する。刃部は直刃の両刃のもの16と方刃に近い15・17がある。雅楽谷遺跡出土の16・17は非常に小形で鑿的な機能が想定される。

以上、磨製石斧を幾つかに類型化し説明を行った。今回取り挙げた4遺跡で大形定角式磨製石斧

は観られなかったが、原ヶ谷戸遺跡からは大形の完形品がまとまって検出されている。

磨製石斧は大きさから大中小に細分できる。下記では形態との関係で概観する。

①大形の磨製石斧：幅広偏平磨製石斧（Ⅰ類）と定角式磨製石斧の二つのタイプが観られる。Ⅰ類は赤城遺跡・原ヶ谷戸遺跡等関東地方に独特に観られるタイプである。定角式磨製石斧は関東地方から北陸地方に多く観られるタイプで、原ヶ谷戸遺跡では2者が検出されている。

②中形の磨製石斧：Ⅱ類とⅢ類の二つのタイプ。側面を持つものと横断面がレンズ状を呈するものの組み合わせは中形のものと同じである。Ⅱ類に関しては資料的に少なく細かい分析は今後の課題としたい。

③小形の磨製石斧：Ⅳ類とⅤ類の二つのタイプ。何れも側面を持つ。

Ⅲ) 打製石斧Ⅱ類 (第130・131図)

石斧のなかで最もまとまっているのは、打製石斧Ⅱ類とした一群である。ここで県内の雅楽谷遺跡・赤城遺跡・新屋敷東遺跡と比較を行なう。

検討する要素としては、長さ：幅：厚さ：重さの各数値を基にした。

○散布グラフは長さ：幅と長さ：厚さを作成し、重さの軽い→重い方向にトレースした。

○石器の外形線を重ねた図は、最大長の1/2ラインと最大幅の1/2ラインの交点を中心とした。

a) 上敷免遺跡 (第130図)

分析対象とした石器は12点である。

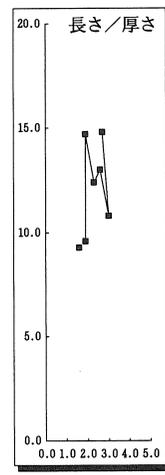
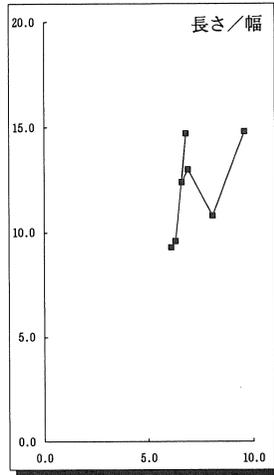
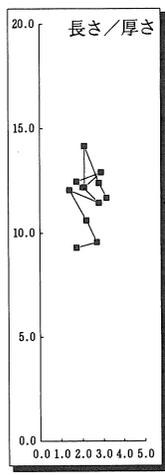
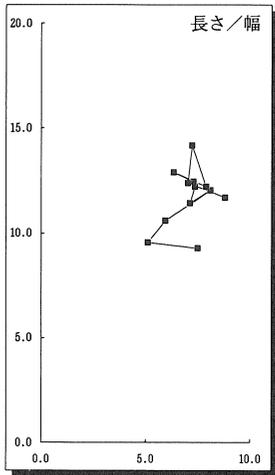
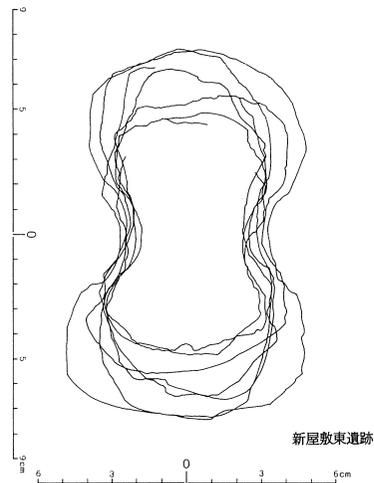
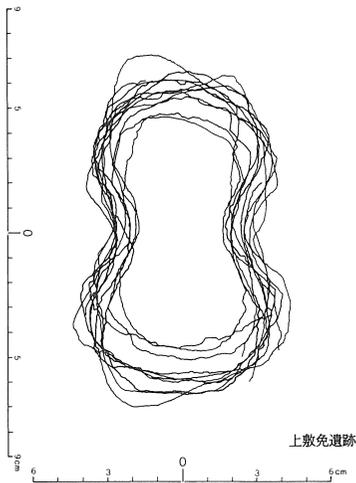
〈方量〉長さは最大14.15cm、最小9.30cm、平均12.21cm。幅は最大8.80cm、最小5.10cm、平均7.31cm。厚さは最大3.20cm、最小1.40cm、平均2.33cm。重さは最大363.50g、最小118.44g、平均228.88gである。

次に散布グラフを基に、数値間の関係を概観する。長さは10cm前後の3点を除くと比較的まとまる。これを数値で観ると最大値と平均の差が小さいことから窺える。幅もその3点を除くと同様な傾向を示す。厚さは長さに影響されず2cmの幅で散布し、最小と最大の幅が1/2以上で平均がその中間にあることから、変動幅の大きいことが指摘できる。重さは4要素のうち数値の幅が最も大きいもので、最小のものは最大の1/3、平均の1/2（最大と最小のほぼ中間）となっている。重さを決めるのは長さ：幅：厚さ：石質の関係によるもので、うちどの要素が最も指導的要因をなしているかを観察する。石質は下記に示したとおりホルンフェルスが主体をなすことから検討から除外し大きさの3要素に限った。

散布グラフのなかで重さの順にトレースして観ると、基本的には長さが短→長方向に向かうが12cmにまとまるグループ内は迷走に近くなる。この傾向は幅においても変わらず、どちらかと云うと、長さ・幅よりも厚さに引っ張られているようであるが明瞭ではない。

〈石材〉使用されている石材は、ホルンフェルス（7点）が主体をなし、砂岩（3点）・粘板岩（2点）が観られる。

〈外形〉外形線の重ねトレースは非常にまとまりを示す。刃部付近では上記の3点（長さの短いグ



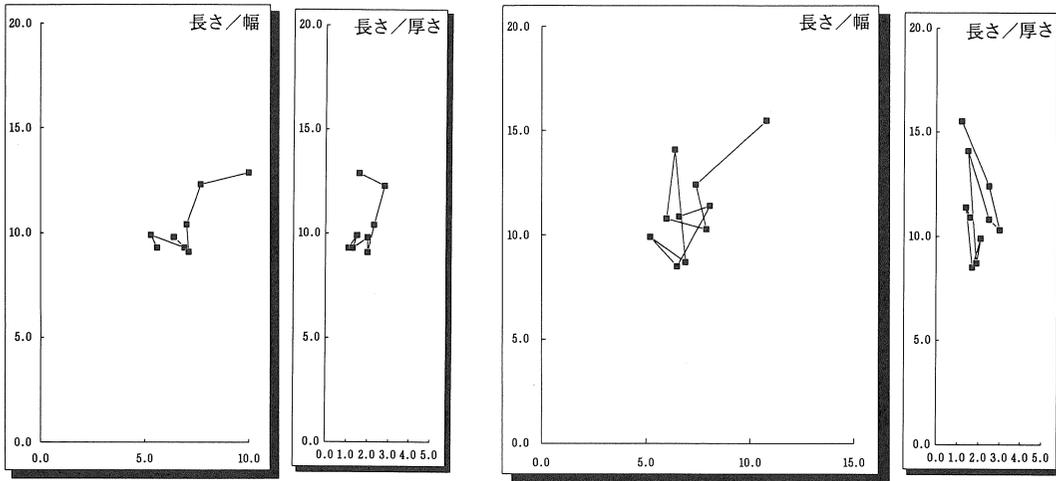
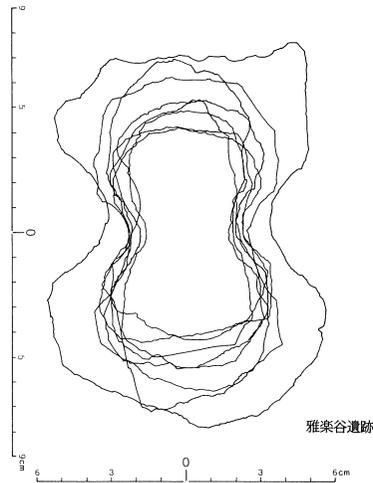
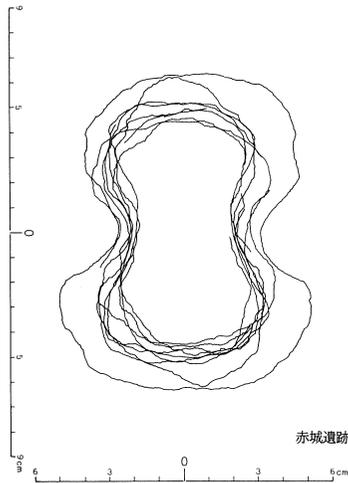
第130図 打製石斧Ⅱ類（上敷免遺跡・新屋敷東遺跡）

ループ) と他のグループに分れそうである。それに対し基端部のラインはランダムに交差しており、刃部ラインをより意識的に円刃として規格化していたことが窺える。基部挟り部は4 cm以下になるものは少なく、6 cmを越えるものは無い。この傾向は他の遺跡とでも共通するようである。着丙（棒状の柄に結わり付ける等）を想定するとき、この幅が適しているのかもしれない。

b) 新屋敷東遺跡（第130図）

分析対象とした石器は7点である。

〈方量〉 長さは最大14.8cm、最小9.3cm、平均12.09cm。幅は最大9.60cm、最小6.10cm、平均7.20cm。厚さは最大3.00cm、最小1.60cm、平均2.29cm、重さは最大413.00g、最小126.56g、平均248.83gである。



第131図 打製石斧Ⅱ類 (赤城遺跡・雅楽谷遺跡)

上敷免遺跡と比較すると散布グラフのばらつきが大きいようであるが、各数値で見る限り分布の範囲(広がり)はあまり変わらない。しかし、要素の関係を観ると、幅：厚さの比率が上敷免遺跡で最大が5.79、最小が1.89、平均は3.34であるのに対し、新屋敷東遺跡では最大が3.81、最小が2.65、平均は3.21とそのばらつきは少なく平均値に近い。上敷免遺跡が長さとは別に、幅広薄手から幅狭厚手までバラエティーに富んでいるのに対し、新屋敷東遺跡では幅が広くなるのに伴い厚さが増す傾向が明確である。これを散布グラフで観ると重さのトレースが左から右に向かうラインを描いている。長さより幅、長さより厚さに重量が左右されることがより明確である。

〈石材〉用いられている石材は、ホルンフェルス(2点)・砂岩(2点)・凝灰岩(2点)・安山岩(1点)と多様である。

〈外形〉最も大形の1点のラインが目立つが、それを除くと上敷免遺跡と共通した外形線を描いて

いる。刃部ラインのばらつきが大きく円刃としての規格性は若干損なっているが、上敷免遺跡の短いグループと他のグループの範囲と共通する。基端部のラインのばらつきは大きく傾向はつかめない。基部挟り部は4～6cmの範囲に上敷免遺跡以上によくまとまっている。

c) 赤城遺跡 (第131図)

分析対象とした石器はA・E・F区の8点である。

〈方量〉 長さは最大12.9cm、最小9.10cm、平均10.38cm。幅は最大10.00cm、最小5.30cm、平均7.00cm。厚さは最大2.80cm、最小1.00cm、平均1.83cm。重さは最大293.42g、最小82.15g、平均169.46gである。

赤城遺跡は長さ10cm前後のものに集中している、これは上記2遺跡の短いグループの範囲と共通する。それに対し幅の平均は7cmと他遺跡とほぼ同じ数値を出し、最大幅では上記2遺跡を上回っている。重さは最大が他遺跡の平均に近く、一回り軽いと云える。これを要素間の比率で観ると、長さ：幅の関係が他遺跡では最大2を上回るのに対し1.87と小さい。また、幅：厚さの比率が平均4.09と上記2遺跡の3.34と3.21と比べ低い値である。これはまさに小形幅広薄手傾向と云えそうである。

重さのトレースは長さ：幅の散布グラフでは左から右方向へと横に連なり、幅：厚さの散布グラフでは10cmのまとまりを抜けると下から上に向かって繋がる。重量の要因は厚さより幅に左右されていることが窺える。

〈石材〉 使用されている石材は、ホルンフェルス（5点）を主体に、粘板岩（2点）・凝灰岩（1点）が観られる。

〈外形〉 外形線は大形幅広の1点を除くと小形のものとよくまとまる。刃部は非常に整っており、中心点からコンパスで半径4.5～5cmの円を描くとほぼそれに平行する円刃である。基部挟り部は4～5cmの範囲と他遺跡と同じ数値を示し、挟り部の幅は長さや最大幅にあまり影響されていないことが窺える。

d) 雅楽谷遺跡 (第131図)

分析対象とした石器は8点である。

〈方量〉 長さは最大15.5cm、最小8.5cm、平均11.25cm。幅は最大10.8cm、最小5.2cm、平均7.18cm。厚さは最大3cm、最小1.26cm、平均1.59cm。重さは最大310.26g、最小103.64g、平均174.85gである。

雅楽谷遺跡の各要素は数値は一見ばらつきが大きくまとまりが悪く感じる。しかし、幅10cmを越えるもの1点を除くと、散布範囲は他遺跡とあまり変わらず、長さでは他遺跡に観られない8cm台（2点）と10cm前後（4点）の小形のグループによくまとまり、他のグループと分けられる。厚さは平均が1.95cmと2cmを割り込み、赤城遺跡の数値1.83cmに続いて低い値である。これを、幅：厚さの関係で観ると、平均が4.11と4遺跡の中で最も低い値である。幅広薄手の傾向は赤城遺跡以上と云えそうである。結果として、重さは上敷免遺跡・新屋敷東遺跡と比べると一回り軽い値

を示している。重量によるトレースは迷走する。

〈石材〉使用されている石材は、ホルンフェルス（3点）・緑泥片岩（2点）・粘板岩（2点）・砂岩（2点）・片岩（1点）と多様である。

〈外形〉外形線は幅10cmを越える1点を除くと比較的まとまりは良い。しかし、刃部のラインは非常に交差しており、整った円刃を成すものは少ないと云える。基部抉り部の幅は4cm前後にまとまっている。

以上、4遺跡から検出された打製石斧Ⅱ類を、最大長：最大幅：最大厚：重量と云った単純な数値と、技術的要素を全て排除した外形線という要素で比較検討した。今後より厳密で細かいデータから分析すべき多くの課題は残されるが、今回明らかになった点を幾つか整理しておく。

①長さは10cm前後の小形のグループと15cm未満のグループに分かれ、遺跡によってはほとんどが小形のグループで占められる（赤城遺跡）場合がある。

②各要素のうち重さの値のばらつきが最も大きく、軽いものと重いものでは3倍以上の差が観られる。また、重さを左右する要因は、長さよりも厚さ→幅の順で決る様である。

③基部抉り部は4～5cmの幅にまとまり、他の数値に影響されないようである。これは着丙（棒状の柄に結わい付ける等）の際に最も有利な数値であるかもしれない。また、長さが刃部再生等で短くなるなかで、柄に結え付けられる部分を変えないがための可能性もある。この問題は場を改めて検討することとする。

④遺跡単位で観ると、上敷免遺跡・新屋敷東遺跡に近い様相であるのに対し、赤城遺跡・雅楽谷遺跡では幅広薄手軽量の傾向を示し、特に赤城遺跡では小形のものが主体をなしている。

おわりに

以上、上敷免遺跡から検出された石器群について、遺跡内における分布の問題、石斧の問題について考えてみた。本地域における当該期石器群の実体把握は、土器研究と比較して立ち遅れているようである。まずは、研究の出発点としてどの様な形態の石器が在るのかカタログを作成することを目的とした。

最後に、上敷免遺跡で石錘の出土がないため触れずにおいたが、石錘は当該期のほとんどの遺跡で出土しており、組成のうえで重要な意味を持つと考えられる石器である。今後は組成を加味した検討を行なうよう考えている。

※本文脱稿後、5区出土の磨製石斧が見つかった。形状はⅣ類に分類される。

註

- (1) 竹岡氏は器種名(分類概念)の先行が石器の具体的分析の障害になるとし、「関東パラダイム」(竹岡1992)の矛盾点を指摘している。しかし、現状としてはどのような形の石器が有るのかを、一覧しまとめて観るのも研究の出発点としては有効であると考えられる。
- (2) 大工原氏は「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義」の文中、所属時期の項で「後期前半段階(堀之内期)までさかのぼることは確実」と述べている。この所見と、本遺跡における出土状況を鑑みると、後期に伴う可能性は高いと思われる。
- (3) 原ヶ谷戸遺跡の内容に関しては、整理途中での所見を村田章人氏から御教示を受けた。
- (4) 本石器群を縄文時代に「打製石斧」、弥生時代になると「石鏃」と呼称するのは、分析する際に障害となりかねない。『弥生時代の石器』の文中に「石鏃とは、・・中略・・。縄文時代から認められ、従来は打製石斧ないし扁平打製石斧と呼ばれていた」「縄文農耕との係わりでとりあげられている」と説明されている。打製石斧と石鏃の違いは石器そのものにあるのではなく、農耕を前提とした事によって、存在する機能に基づいていると考えられる。物の分析で機能の検討が重要な意味をもつのは確かであるが、時期によって同一の石器の呼び方を変えるのは問題が多い。

参考文献

- 市川 修他 1974 『高井東遺跡調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第25集
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集』
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房
- 佐原 真 1982 「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 中島 宏 1984 『池守・池上』 埼玉県教育委員会
- 橋本 勉・町田勝則 1985 『ささら(Ⅱ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集
- 神村 透 1985 「石製耕作具」『弥生文化の研究』5
- 佐原 真 1985 「石斧」『弥生文化の研究』5
- 斎藤基生 1986 「縄文時代晩期の部分磨製石鏃について」『古代文化』第38巻第3号
- 大工原 豊 1988 『注連引原Ⅱ遺跡』 群馬県安中市教育委員会
- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社
- 松木武彦 1989 「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻第4号
- 麻生敏隆 1990 「弥生時代の石器農具—石鏃と石包丁—」『研究紀要』7 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原 豊 1990 「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義—縄文時代における石器研究の一試論—」『青山考古』第8号
- 橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集
- 吉田 稔・中村倉司 1991 『小敷田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 平井 勝 1991 『弥生時代の石器』考古学ライブラリー-64 ニュー・サイエンス社
- 町田勝則 1991 「福井県における縄文後・晩期石器研究の現状と課題」『福井考古学会会誌』第9号
- 田中広明・新屋雅明 1992 『新屋敷東・本郷前東』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 竹岡俊樹 1992 「石器研究の目的と方法—丹生遺跡群1-B地点の斧状石器の分析を例として—」『大分県丹生遺跡群の研究』 古代学研究会研究報告書第3輯

分析結果

上敷免遺跡出土縄文土器、弥生土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1) はじめに

縄文土器や弥生土器のように窯跡が残っていない土器の産地推定は難しい。しかし、須恵器の場合と同様に、主として、K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、クラスター分析法で土器を分類することから胎土分析の研究ははじまる。現在、次のような考え方で胎土分析の研究は進展している。同一地域内の、同時期の多数の遺跡から出土する土器を分析し、同質の胎土の土器を探す。もし、同質の胎土の土器がいくつかの遺跡で検出されれば、これらは遺跡間交流によって、いずれかの遺跡から伝播・流通して来た可能性をもつ。こうして、縄文、弥生土器の遺跡間交流の研究へと発展させることができよう。この基礎データを十分集積するまでは、これらの土器の遠隔地への伝播・流通の結論を出す訳にはいかない。もう一つの観点は胎土の分類結果と考古学的形式との対応である。従来、考古学領域では土器の形式論により、土器の伝播・流通を論じて来た。ただし、この議論の根底には、土器作りは移動しないという仮定が入る。もし、土器作りが広域にわたって移動したとすると、形式論でその伝播・流通を解くことは難しくなる。土器形式が拡散するからである。この点を究明するためには、胎土分析による分類結果と形式分類の対応に関する基礎データが必要である。

以上のような観点で、縄文土器、弥生土器、土師器などの窯跡が残っていない土器類の胎土分析の研究が全国各地で展開されはじめています。

本報告では上敷免遺跡から出土した縄文土器、弥生土器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析法と分析結果

試料片はすべて表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3-5mmの錠剤試料を作成した。波長分散型の蛍光X線分析装置を使い、岩石標準試料JG-1を標準試料として定量分析を行った。

表1に分析値がまとめられている。分析値はすべて、JG-1による標準化値で示されている。

はじめに、クラスター分析の結果から示す。K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、最短距離法で類似度を計算した。図1にデンドログラムを示す。No1、2をA群、No3、6、8、9をB群、No4、10をC群と分類した。そして、No5とNo7はどの枝にも結び付かず、分類されなかった。図1よりみて、このような分類が一応、可能かと思われる。この分類結果は何らかの方法でチェックしておく必要がある。ここではRb-Sr分布図上で、分類されたもの同志がまとまって分布するかどうかをみてみた。その結果を図2に示す。予想どおり、デンドログラムに対応してよくまとまっ

資料番号	類別	挿図番号	クラスター番	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
1	XII群1類	第52図8	1	0.359	0.486	2.31	0.379	0.581	0.214	A
2	IV群2類	第32図2	2	0.310	0.519	4.36	0.277	0.472	0.254	A
3	VIII群1類	第64図6	3	0.166	0.551	1.55	0.184	0.638	0.211	B
4	V群4類	第52図1	4	0.231	0.765	1.79	0.178	0.958	0.336	C
5	VI群1類	第70図45	5	0.484	0.698	2.68	0.471	0.848	0.207	/
6	II群3類	第54図6	6	0.256	0.530	2.64	0.223	0.704	0.347	B
7	II群5類	第55図3	7	0.205	1.40	2.98	0.134	1.13	0.314	/
8	III群3類	第55図21	8	0.243	0.600	2.64	0.180	0.682	0.296	B
9	VIII群2類	第75図10	9	0.219	0.503	2.00	0.249	0.780	0.159	B
10	XIII群1類	第82図1	10	0.168	0.800	2.09	0.166	1.01	0.291	C

表1 上敷免遺跡出土土器の分析値

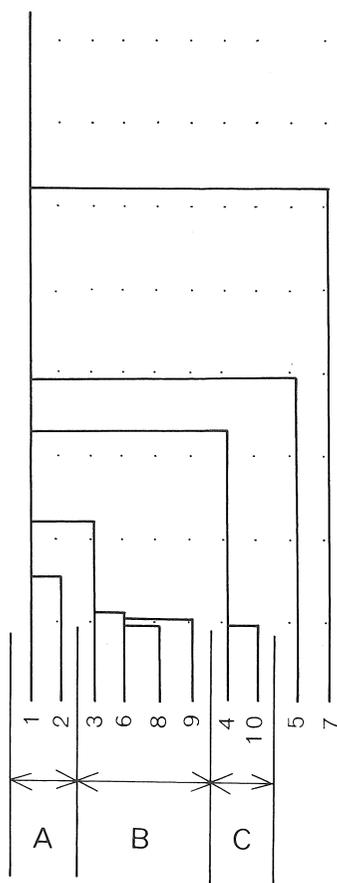


図1 クラスタ分析 (K、Ca、Rb、Sr因子使用)

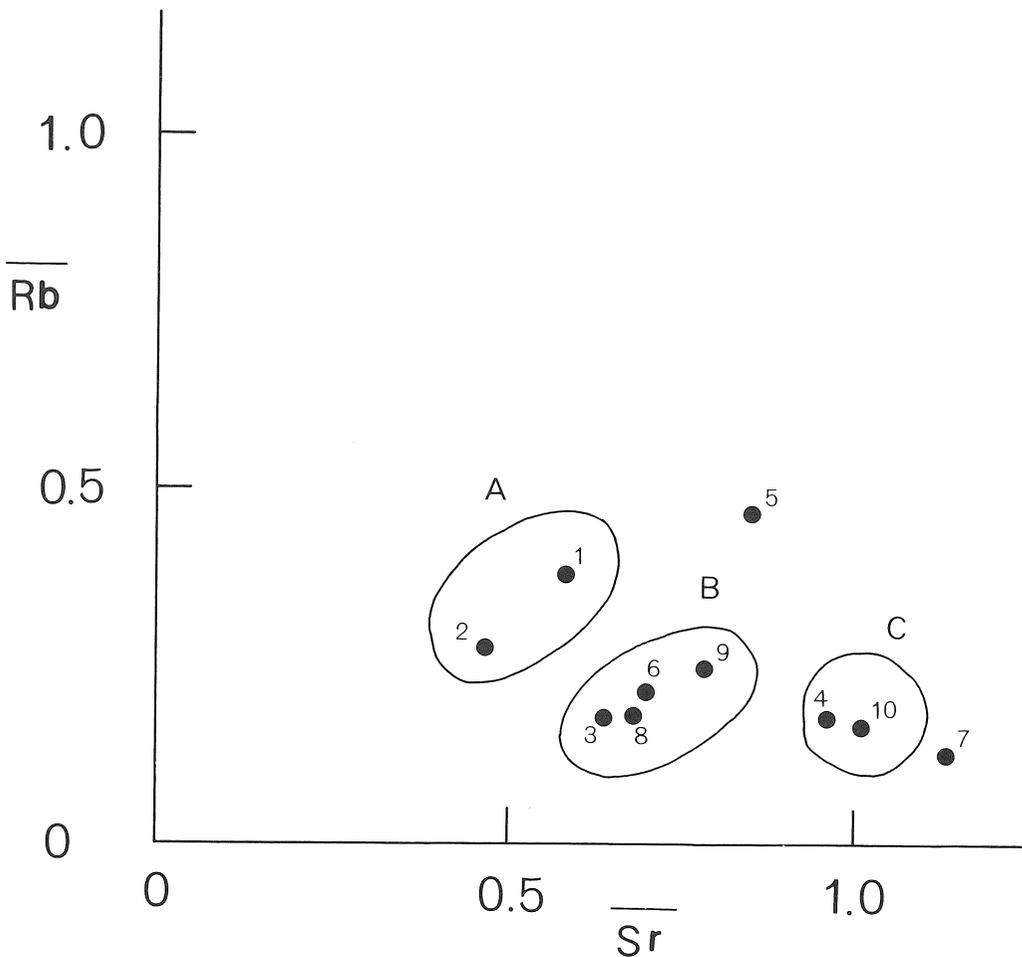


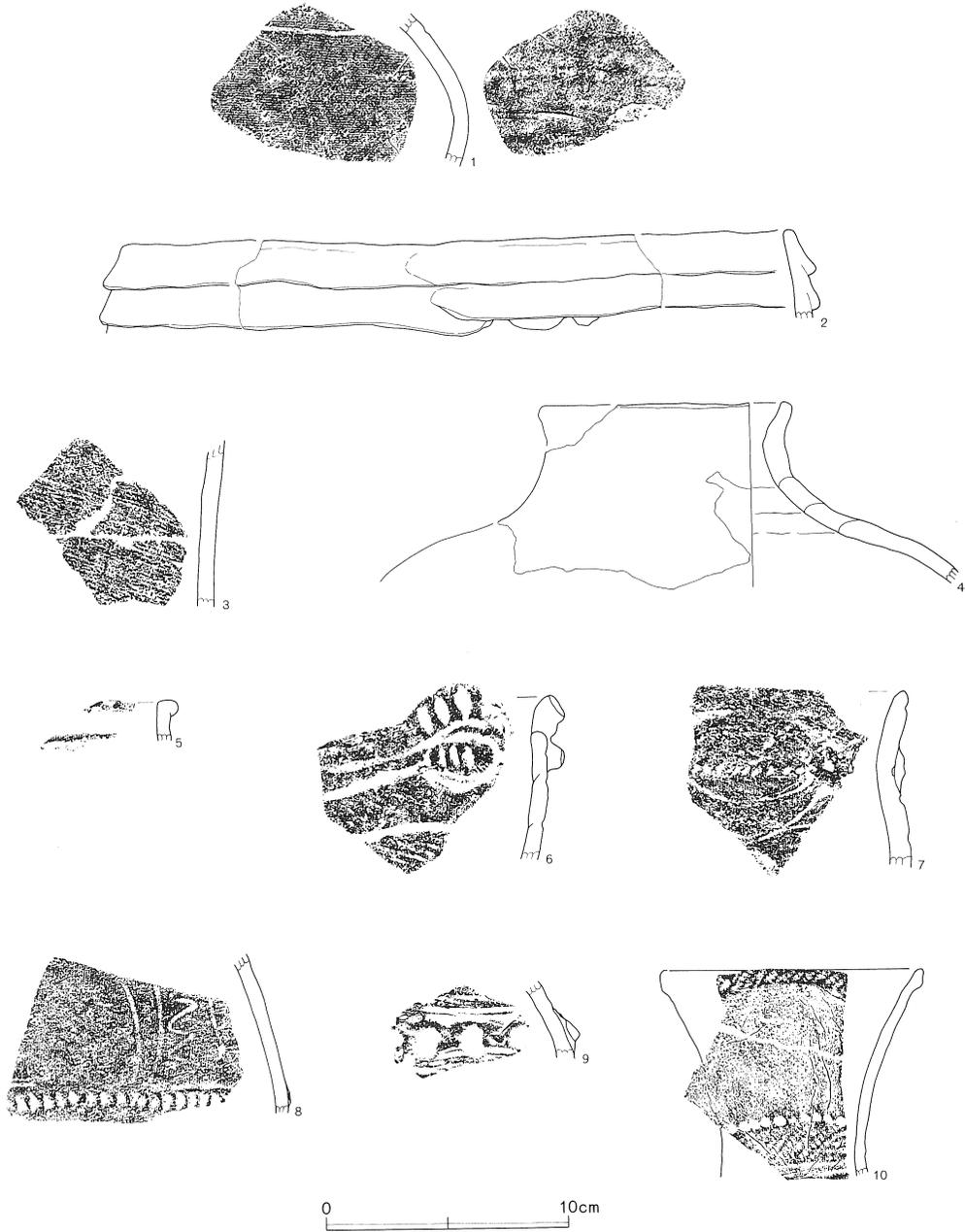
図2 上敷免遺跡出土縄文土器、および、弥生土器のRb-Sr分布図

て分布していることがわかる。A、B、C群の土器はそれぞれ、別産地の土器とみられる。そして、分類されなかったNo 5、No 7もそれぞれ、別の産地で作られたものと考え、少なくとも、5ヶ所の産地の土器があることになる。ただ、No 5を除いて、いずれの試料にもK、Rb量が少ないという特徴がある。この特徴は東日本の土器胎土の特徴である。地元を優先させれば、これらはほとんどが関東地域内で作られた土器とみられる。同じ関東地域内の別々の場所で作られ、地域内の遺跡間交流で伝播した土器であろう。ただ、どれが、上敷免遺跡内で作られ、どれが遺跡外から持ち込まれたかについては目下のところ、推察できる根拠はない。近辺の、さらに多くの遺跡出土の土器の胎土分析のデータが必要である。

No 5には、K、Rb量が比較的多い。この特徴をもつ土器胎土は北陸地方や西日本の多くの地域にみられる。関東地域では、奥深く、群馬県辺りまで入るとみられる。いずれにしても、上敷免遺跡にとっては外部からの搬入品とみられる。

なお、No 1は形式的には外来系とみられる弥生土器である。クラスター分析ではNo 2と同じグループに分類されたが、サンプル数が少ないので、同質の胎土であると判断してよいかどうか迷

う。したがって、K、Rb因子からみて、No1も他の縄文土器の胎土とは異なる。少なくとも、No10の弥生中期の須和田式土器の胎土とは異なると判断される。この土器が搬入品か否か、もし、搬入品とすると、どの辺りからの搬入品かについては同じ土器形式の弥生土器の分析データをもう少し集積しない限り、比較は難しい。ここでは、上敷免遺跡にとっては搬入品の可能性をもつ土器としておく。



胎土分析試料